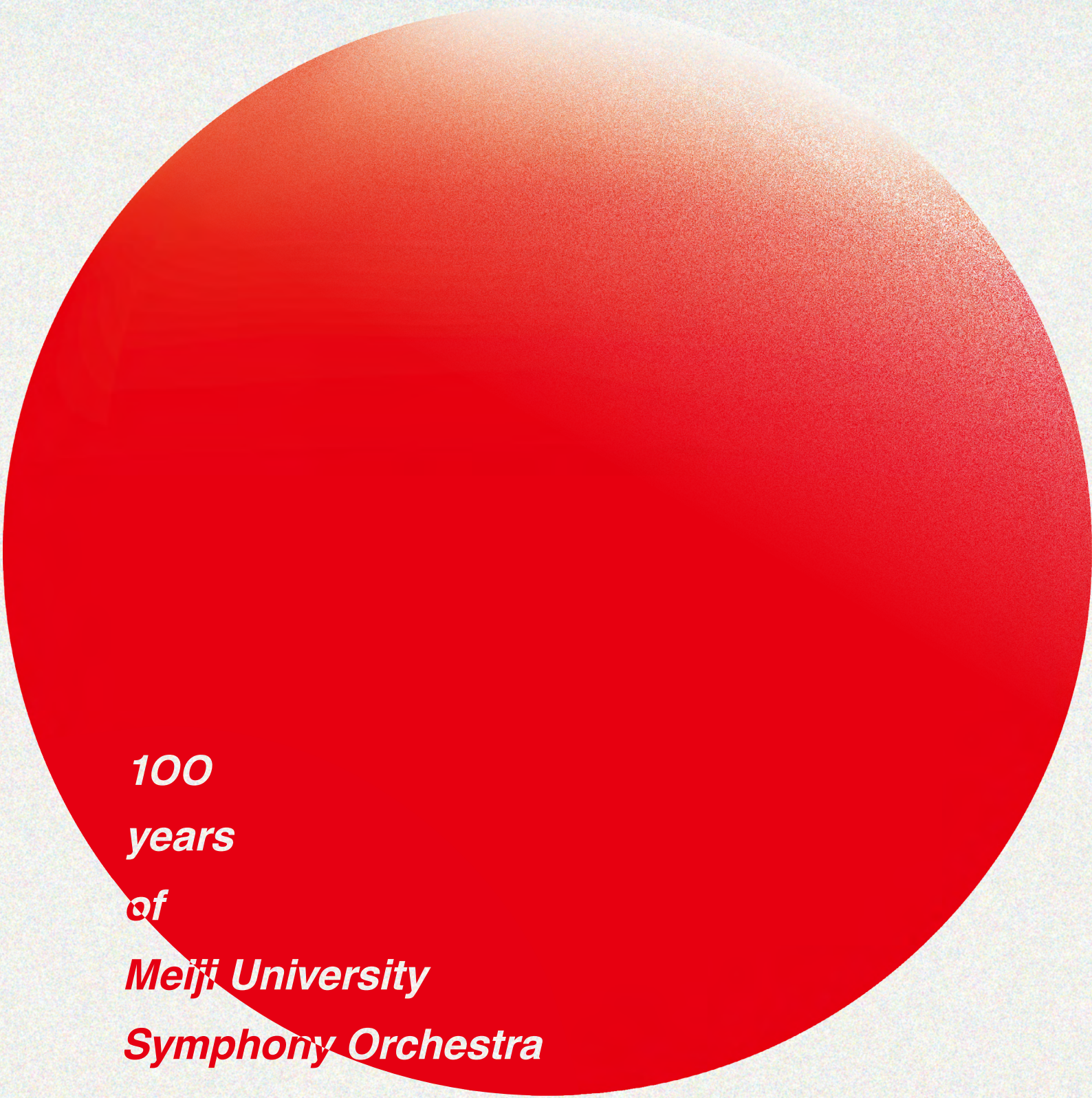


明治大学交響楽団
100年史



**100
years
of
Meiji University
Symphony Orchestra**

校歌

作詞 児玉花外

作曲 山田耕筰

白雲なびく駿河台
眉秀でたる若人が
撞くや時代の暁の鐘
文化の潮みちびきて
遂げし維新の栄になふ
明治その名ぞ吾等が母校
明治その名ぞ吾等が母校

権利自由の揺籃の
歴史は古く今もなほ
強き光に輝けり
独立自治の旗翳し
高き理想の道を行く
我等が健児の意気をば知るや
我等が健児の意気をば知るや

霊峰不二を仰ぎつつ
刻苦研鑽他念なき
我等に燃ゆる希望あり
いでや東亜の一角に
時代の夢を破るべく
正義の鐘を打ちて鳴らさむ
正義の鐘を打ちて鳴らさむ



明治大学交響楽団 100年史

100 years
of
Meiji University
Symphony
Orchestra





目 次

1. 挨拶／祝辞
 2. 特集：座談会「明オケを語る」
 3. 特集：記念館おわかれコンサート
 4. 特集：第 100 回記念定期演奏会
 5. 特集：全明治大学交響楽団 100 周年祝賀演奏会
 6. 特集：明治大学交響楽団創立 100 周年記念演奏会
 7. 各学年報告
 8. 各パート・セクションコンサート紹介
 9. 派生団体紹介
 10. プロとして活躍の OB 紹介
 11. 記録／資料
 12. 寄付
-

明治大学交響楽団



創立

1923 年(大正12年) 4 月



創立者

尾原勝吉

菊地雙三郎 中川 亮

塚田道三郎 林 慶旺

他

挨拶／祝辞

明治大学交響楽団 100 年史発刊にあたって

明治大学交響楽団 OB 会 理事長

明治大学交響楽団創立 100 周年を祝う会 世話人代表

杉山 茂



明治大学交響楽団創立 100 周年を記念して、「明治大学交響楽団 100 年史」の編纂が計画され、全 OB・OG や現役学生達が協力して編纂にあたり、この度発刊の運びとなりました。編集を担当された役員の方々や、資料集めなどに御尽力いただいた皆様、その他編纂に携わった多くの関係者の皆様に、心から感謝を申し上げます。

私は 30 年前、「明治大学交響楽団 70 年史」の編纂に携わり、全国にお住まいの OB 達へ 70 年分の資料集めを呼びかけ、編集にあたった思い出があります。当時は現在のように豊富な IT 機器もなく、ようやく普及し始めたワードプロセッサを駆使して、原稿を作成し、発刊した記憶があります。

70 年史は紙による冊子で編纂しましたが、現代はデジタルの時代で、利用価値や保存にも優れた「デジタル書籍」が一般にも利用されています。すでに冊子の 70 年史もデジタル化しいつでも・どこでも自由に見られる状況下にあります。

この度編纂された 100 年史についても、今後の利用価値や永続性を考慮して、「電子書籍版明治大学交響楽団 100 年史」として作成しました。検索先は「明治大学交響楽団」のホームページ上の「[70 年史/100 年史](#)」で御覧になることが出来ます。

今後永続する「明治大学交響楽団」に所属される、幾多の団員諸君にとりましても、100 年間積み上げた OB・OG 達の時代時代の交響楽団の栄光の姿を垣間見ることが出来、脈々と続く伝統と精神を受け継ぎ、次世代へ橋渡しをする一助となると確信しています。

「明治大学交響楽団 100 年史」発刊にあたり、創設者であります尾原勝吉先生はじめ、当時のメンバーに心から感謝を申し上げ、その後続いた 2,000 余名の団員達の努力に、深く敬意を表するものです。

明治大学交響楽団は、新たな一世紀に向けて活動が始まりました。現在の団員諸君に加え、未来の団員諸君の手によって、益々輝かしい歴史が刻まれることを確信し、記念誌発刊のご挨拶とさせていただきます。

「明治大学交響楽団 70 年史 /100 年史」公開ページはこちら

<https://meioke.com/commemorative/>

明治大学交響楽団 100 年史発刊にあたって

明治大学交響楽団 100 年史編纂委員会 委員長
明治大学交響楽団 第 74 代幹事長

遠藤 智史



僭越ながら明治大学交響楽団 100 周年を記念した、「明治大学交響楽団 100 周年史」の編纂委員長の大役を仰せつかりました。100 年という大正から昭和、平成、令和と 4 つの時代を経た当団の長い歴史に思いをはせると共に、それらを記録として残すことで改めて明治大学交響楽団の実績や理念、すなわち明オケらしさを明らかにして、我々のレゾナントルを後世へと伝えていきたいと思います。

凡そ 30 年ほど前に 70 年史が編纂されておりますので、本誌は主に 70 年から 100 年の 30 年に焦点を当てていますが、改めてこの 100 年の演奏曲や作曲家の記録もデジタル化したデータをもとに分析して再編集しておりますので、お楽しみいただければと思います。

70 年以降では、大正の創成期や戦前・戦後の激動の時代とは比べられませんが、我々のシンボリック的存在であった明治大学記念館の解体からリバティタワーの竣工にかかる練習環境の大きな変化や、いわゆる失われた 30 年という日本経済が世界の中で相対的に悪化する中での団運営、コロナ禍での演奏会中止やオンライン配信、など様々な出来事がありました。各代がその時々で思い悩みながら最善をつくしてきたこと、音楽に真摯に向き合い若い情熱を注いだこと、時にはぶつかり合いながらも互いに切磋琢磨し生涯の友を得たこと、などが本誌の中でも各代の報告で垣間見えると思います。ぜひ諸先輩方にもこの我々なりの激動の 30 年を感じていただければ幸いです。

100 周年の各記念行事も全て大成功のもとに終わり、明治大学交響楽団は次の 100 年に向けて新たな旅路に出ています。100 周年記念行事や本誌発刊を機に演奏会を聞きに行ったり、旧交を温めたりした諸氏も多いと存じます。同期や先輩・後輩に声を掛け合って、ぜひ現役学生へのご支援・ご寄付を継続していただけると幸いです。明治大学交響楽団の更なる発展のため、そのような章も用意しておりますのでご協力よろしくお願いします。

最後に、本誌発刊にあたり明治大学理事長・学長はじめ教職員の皆様、これまでご指導いただいた指揮者・トレーナーの皆様、明治大学交響楽団 OB・OG 及び現役生の皆様、編纂委員の皆様、多くの方々に大変お世話になりましたこと、この場を借りて御礼申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

創立 100 周年記念にあたって

明治大学交響楽団 100 年史編纂委員会 編集長
明治大学交響楽団 第 100 代幹事長

潮田 駿



明治大学交響楽団は、2023 年に創立 100 周年という大きな節目を迎えました。これを記念し、OB・OG の皆様が築いてこられた明治大学交響楽団の 100 年という長い歴史を後世に受け継ぐべく、「明治大学交響楽団 100 年史」の編纂が始まり、このたび発刊の運びとなりました。記念すべき 100 年史にこうして携わる機会を頂けましたことを、大変光栄に思います。

私はこの 100 周年の年に、第 100 代幹事長を務めていました。創立 100 年目の幹事長として明オケを過ごしていく中で、「1 世紀」という言葉に向き合い、2,000 人近くの OB・OG の皆様から脈々と受け継がれてきた伝統の重み、そしてこれからも受け継がれていくであろう明オケの未来への責任を、勝手ながら強く感じておりました。そうした想いは、今回の 100 年史の編纂においても大きな糧となりました。

創立 100 周年を迎えた 2023 年は、私自身多くの OB・OG の皆様とお話しする機会に恵まれました。どの OB・OG の皆様も明オケで過ごした日々を本当に楽しそうに語ってくださったことが、今でも心に残っています。年代が違っても、思い出のエピソードや同期・先輩・後輩との絆が共通していて、「明オケ」という場所がいかに多くの人の人生に深く関わってきたかを改めて実感しました。

創立から 100 年もの間、戦争や社会情勢の激動、環境の変化、そして近年では新型コロナウイルス感染症の影響による活動制限など、さまざまな困難がありました。しかし、そのような中でも常に団員一人ひとりがその時の「明オケ」という青春の 1 ページを過ごしました。この 100 年史には、そうした多くの団員たちの思い出が色濃く綴られています。この 100 年史が、今読んでいる現役団員にとっては自分たちの立っている「今」を見つめ直す機会となり、OB・OG の皆様にとっては懐かしい記憶を呼び起こす機会に少しでもなっていれば幸いです。

最後に、本誌の発刊にあたり、多くの資料をご提供くださった OB・OG の皆様、情報協力・編集協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。また、これまでご指導くださった指揮者・トレーナーの先生方、日々団の活動を支えてくださっている大学関係者の皆様にも、厚く御礼申し上げます。

明治大学交響楽団の次なる 100 年が、ますます輝かしいものとなることを心より願いながら、ご挨拶とさせていただきます。

明治大学交響楽団 100 年史発刊によせて

学校法人明治大学 理事長



柳谷 孝

明治大学交響楽団が創部 100 周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。これもひとえに、鈴木賢志部長をはじめ、日頃より団員をご指導いただいております指揮者、トレーナーの先生方、そして歴代関係諸氏の情熱とご尽力の賜物と存じます。

1923 年、尾原勝吉先生を中心として創設された明治大学交響楽団は、本学唯一のオーケストラサークルとして、大正から令和へと脈々と受け継がれる伝統を紡いでまいりました。入学式や卒業式における厳かな音色、校友会や父母会行事での演奏会など、その活動は全国各地に及び、世代を超えて多くの聴衆を魅了し続けております。とりわけ、重厚な響きと繊細な表現力を兼ね備えた演奏は、聴く者の心に深い余韻を残すものとして高い評価を得ております。

昨年来、記念式典や学内外における記念演奏会など、創部 100 周年を祝う様々な行事を重ねてまいりましたが、その集大成となった「明治大学交響楽団創立 100 周年記念オーケストラ」では、現役学生と OB・OG が心をついに演奏を披露し、100 年の歴史の重みと未来への希望を力強く表現する感動的な公演となりました。音楽は、まさに世界の共通言語として、言葉や文化の壁を超えて人々の心に直接訴えかける力を持っています。明治大学交響楽団は、この普遍的な力を通じて、国内外の多くの人々に豊かな情操と喜びをもたらし、文化交流の架け橋としての重要な役割を果たしてまいりましたが、価値観が多様化する現代において、その存在意義はより一層大きくなっていくものと確信しております。

結びにあたり、このたびの創部 100 周年を改めてお慶び申し上げますとともに、次なる 110 周年、さらにその先へと歩みを進めてゆく明治大学交響楽団の益々のご発展を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝辞

明治大学 学長



上野 正雄

このたび、明治大学交響楽団が創立 100 周年を迎えられましたこと、誠に慶賀の至りに存じます。この記念すべき慶事を迎えるにあたり、明治大学を代表し、関係者の皆様に対して心よりお祝いを申し上げます。

「明オケ」の愛称で親しまれている明治大学交響楽団は、1923 年に永久指揮者の尾原勝吉先生等により、本学唯一の公認オーケストラサークルとして創設されました。これまでに様々な指揮者やソリストを招いての演奏会や、複数の都道府県への演奏旅行、入学式や卒業式での演奏など、学内外問わず活動を行ってきました。さらには、テレビやラジオ等のメディアを通じた活動など、活躍の場は幅広く、たくさんの方々に魅了し続けています。また、OB・OG は総勢 2000 名を超えており、OB 交響楽団などの複数の OB 団体を通じて、卒業後も仲間との交流が行われていると伺っています。このような多岐にわたる演奏や交流を行い、100 年にわたる栄光の歴史を歩むに至るまで、多くの先達様がご尽力くださいましたことに深甚なる敬意と謝意を表します。今後も伝統の音色を継承し、次の 200 年、300 年に向けて、大いに励んでいただきたいと思います。

現役団員の皆さん、この歴史ある明オケで活動ができるのは、創設以来、営々と団を支えてこられた先輩方や、苦楽を共にする仲間、そしてご指導いただいているトレーナーの先生方あってこそことです。常に感謝の気持ちを忘れず、日々の活動に全力で取り組むとともに、学業との両立による「文武両道」を成し遂げて欲しいと思います。

結びになりますが、創立 100 周年を迎えるにあたり、これまでの明治大学交響楽団の発展に貢献された歴代関係者の皆様のご尽力に改めて敬意を表しますとともに、益々の発展を祈念申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。

祝辞

明治大学 顧問 名誉教授 前学長



大六野 耕作

『明治大学交響楽団 100 年史』の発刊を、現役生、OB・OG の皆様と共に祝いいたしたいと思います。明治大学交響楽団 100 年の歴史は、正に本学の大学としての歴史と共にあったと言っても言い過ぎではありません。明治大学交響楽団は、法律専門学校として創立された明治大学（1881 年）が、「大学令」（大正 7 年 12 月 6 日勅令第 388 号）によって帝国大学と並ぶ正式な大学に昇格した 3 年後の 1923 年 4 月に、新交響楽団（現 NHK 交響楽団）創設時メンバーであった故尾原勝吉先生を中心に創設されました。

しかし、そのわずか 5 ヶ月後には、関東地域を襲った「関東大震災」による未曾有の被害のため、大学、その大学を拠点とする明治大学交響楽団もその存立の危機に直面したのでした。『明治大学 100 年史』（第 3 巻、通史編 1、797 頁）によれば、「この大震災による被害は、『校舎二十四棟、総坪数二千九百六十六坪（略）図書館蔵書は約六万冊・・・』（『明治大学六十年史』）に及んだ。東京の私学のなかでは、最高の被害であった。」とあるように、校舎も図書館もほぼ灰塵に帰したのです。しかし、「在京の学生たちは、早くも 1 週間後には自主的に集まり、復興の歌を自作、唱和して、瓦礫と化した大学焼跡の整理にあたった。彼らの活躍は、時の学長富谷銈太郎をして『此の意気ある以上、学校の復興は多少の困難はあろうが、さう六ヶしいことはない』とさえ」言わしめるほどだったといえます。この学生のなかには、交響楽団のメンバーもおられたのかもしれません。

この明治大学の変わらぬ意気と精神が、明治大学交響楽団の支えている文化の底流にあるのではないかと考えています。先日も、明治大学交響楽団の創立 100 周年を記念して現役生、OB・OG によって特別に構成された「100 周年記念オーケストラ」による記念演奏会（2024 年 8 月 17 日、ミューザ川崎シンフォニーホール）にお邪魔し、その演奏に満ち溢れた「圧倒的熱量」に感激しました。また、Orchestre Victor Hugo Franche-Comté 音楽監督の Jean-François Verdier 氏を指揮者に、ダブリン国際ピアノコンクール優勝をはじめ数多くの国際的コンクールで受賞しておられる黒木雪音さんをピアノソリストとして招聘し、George Gershwin の Rhapsody in Blue や Debussy の La Mer, trois esquisses symphoniques pour orchestre 等々、多様な楽曲にも果敢に挑戦していく姿勢に頼もしく感じた次第です。

現在、駿河台キャンパス・和泉キャンパス・生田キャンパス・中野キャンパス合わせて、200 名を超える団員がおられると聞いております。どうぞ、これからも明治大学交響楽団の伝統を引き継ぐと同時に、次の 100 年に向かって新たな挑戦をしていただきたいと思います。また、OB・OG の皆様には現役生を陰に日向にご支援いただき、時には、現役生の皆様と一緒に素晴らしい演奏を聞かせていただけることをお願いして、私の祝辞とさせていただきます。

お祝いのことば

明治大学校友会 会長



北野 大

明治大学交響楽団 100 年史の刊行、誠におめでとうございます。

100 年もの長い間、幾多の困難を乗り越え活動されてきた団員及び関係者の皆様のご努力に心から敬意を表します。

申し訳ないことに、私と交響楽団の接点は大学の入学式、卒業式での演奏を聴く程度でしかありません。特に印象に残っているのが卒業年次の女子学生が、晴れ着を着て演奏している姿です。心から卒業おめでとう、よく頑張ったねという感情がわいてきます。団員の皆様、本当にありがとうございます。

音楽には種々のジャンルがあり、それぞれが私たちの心を和ませてくれています。中でもクラシック音楽は私にとって恥ずかしい思い出があります。私の卒業した高校はそれなりの進学校でした。ある時音楽の話になり、好きなジャンルはと聞かれ歌謡曲、好きな歌手は三橋美智也と答えたところ、級友から大きく馬鹿にされました。確かに職人の父の我が家ではクラシック音楽を聴くような環境ではなかったためです。

それ以来、私自身の文化的レベルを友人に誇示すべく、意図的にクラシック音楽を聞いていました。成人式の記念にチャイコフスキーとメンデルスゾーンのバイオリン協奏曲の LP レコードを買い、ボンではベートーヴェンハウスを訪問し、またカラヤン指揮のベルリンフィルハーモニー交響楽団演奏のベートーヴェンの全交響曲の CD を買ったりと、ある意味では不純な動機からスタートのクラシックファンでした。今では、ただ素直にクラシック音楽を楽しんでいます。

素人の考えですが、クラシック音楽は聞けば聞くほど、良さが分かってくるという特徴を感じています。これはほかのジャンルの音楽にない特徴と思います。

私はどんなに音響機器が発達しても、コンサート会場で生の演奏を聴くことにはかなわないと思っています。これはただ単に音質の再生の問題ではなく、趣味を同じくする人が集まり、音楽の楽しみを分かち合う雰囲気がある事によると考えています。

今は多忙でなかなかコンサートにお伺いできませんが、なんとか時間を作って明治大学交響楽団の演奏会に参加し、演奏者も含め会場の皆さんと喜び、楽しみを共有したいと思っています。

創立 100 周年誠におめでとうございます。

祝辞

明治大学交響楽団 部長
明治大学 教授

鈴木 賢志



このたび明治大学交響楽団が100年史を刊行されるとのこと、誠におめでとうございます。100年前といえば日本の人口は現在の半数以下、約6,000万人であり、それから4年前の1920年に大学に昇格したばかりで、当時は法学部と商学部のみ2学部しかありませんでした。そのような時分に明治大学交響楽団が発足し、以後、今日まで脈々とその歴史を受け継いできたことは、大変素晴らしいことです。そしてまた、その最近の10年間の歴史に部長として関わりを持つことができたことを、心より誇りに思います。

ところで、以前どこかで書いたことがあったかもしれませんが、私自身は何の楽器も演奏できず、歌も下手なので、音楽の面から交響楽団をサポートしたことは一度もありません。そのため私がこの10年間、交響楽団の部長として行ってきたことは、責任者としてハンコを押すことと、年2回、定期演奏会のパンフレットにご挨拶の原稿をつづることのみであったと言わざるを得ません。しかし塵も積もれば何とやらで、1回数百字の原稿ながら、これまでもすでに20回も「連載」を続けているのは、私なりの歴史の積み重ねであり、密かな誇りにもなっています。

そんなことを思いつつ、私が部長として初めて書いた2014年の定期演奏会のパンフレット原稿を読み返してみたところ、その100年前にクラシック音楽の発展に重要な役割を果たしたハプスブルク帝国が崩壊した歴史にふれつつ「音楽の歴史は人類の歴史とともに続いていきます。明治大学交響楽団による本日の演奏会も、その1ページを刻むことになります。もちろん、本日演奏する学生諸君にとっては、彼らの大学生活、ひいては人生における、大変意味のある1ページです。」などつつづっているのを発見しました。明治大学交響楽団の100年がこのような人生の1ページ1ページの積み重ねで成り立っていると思うと、その歴史がより一層尊く感じられます。

100年史発刊を祝す

明治大学交響楽団 元部長
明治大学 顧問 名誉教授 校友会名誉会長

向殿 政男



明治大学交響楽団（明オケ）活動の100年にわたる歴史を編纂した記念すべき100年史の発刊、誠にお目度とうございます。

私が明オケの部長を仰せつかったのは、1997年から定年の2013年までの16年間である。私が学生だった頃、記念館で多くの団員が、思い思いに練習をしながら大きな音を奏でているのを、まぶしく眺めていたのをよく覚えている（私のゼミの研究室は、記念館の2階にあった）。あこがれの的であった明オケの部長を仰せつかったのは、私が理工学部の教員の時であり、明治高・中学校吹奏楽班出身で明オケの団員から依頼されたことによる（私は、明治高・中学校吹奏楽班創設メンバーの一人であった）。

短い16年間であったが、演奏会には、時々、密かに聴衆として後ろの方で聞いていた。いつも二つの感動をうけるのが常であった。聴衆の心に染み込む演奏（実に上手い）から受ける感動と共に、日々の練習の成果として、真剣に演奏に打ち込む若い学生の姿から受ける感動である。学生にとっても、明オケでの経験と思い出は、人生を前向きに生きる誇りとして心に根付くに違いない。正しく、明オケの活動は、大学の誇るべき教育・文化活動に相応しい。

聴衆に元気と感動を与え、オーケストラを通じて学生たちを育ててきた明オケは、これまで演奏を続けて100年の歴史を紡いできた。この長い間には、いろいろな困難なことがあったに違いない。これらの困難を乗り越えてこられたのは、これまでの指導者、指揮者、OB会等の関係者の皆様のご尽力とご努力によるものであり、深く感謝を申し上げたい。また、明オケを暖かく見守り続け、各種式典で演奏の機会を与えて頂き、育てて頂いた大学関係者の心の深さに感謝を申し上げたい。

いつまでも、いつまでも、明オケが明治大学と共に、永遠に音楽好きの活動の場であり続けることを願っている。

明治大学交響楽団 100 周年史祝辞

指揮者 **本名 徹次**



明治大学交響楽団が今年創立 100 周年を迎えるとのことおめでとうございます。思い起こせば、共演した交響曲を数えただけでもベートーヴェン、ショスタコヴィチ、チャイコフスキー、ドヴォルザーク、ブルックナー、プロコフィエフなど 8 曲。加えてマイスタージンガー、リエンツィ、死と変容、ロメオとジュリエット、フィンランディア、禿山の一夜など、まだまだたくさん。僕のデビュー当時にたくさんの経験をさせていただきました。今でもそれらを指揮するときに明治大学交響楽団との演奏の瞬間をよく思い出します。また明治大学記念講堂のあの温もりは忘れることのできない大切なものです。この歴史あるオーケストラの一時期に深いご縁を頂いたことに感謝申し上げます。そしてこれからも素晴らしい歴史を重ねますよう祈念してお祝いの言葉にかえさせていただきます。

明治大学交響楽団の皆さまへ

指揮者 **中田 延亮**



100 年前という日本ではプロのオーケストラがようやく始まったかどうか、という頃です、それからこんなにも長く明オケの伝統の灯が絶えることなく受け継がれてきたのですね。

創設以来今日まで明オケが乗り越えてきたであろう大小様々な困難に思いが至ります、その中でも新型コロナウイルス感染症が流行したこの数年間はオケにとってこれまで経験したことがないような厳しい時期ではなかったでしょうか。2019 年の演奏会以来 4 年ぶりに明オケに関わることになった 2023 年の秋、最初のリハーサルで音を出した時に「よくぞここまでオケを無くさず続けてくれた…」と心の中で学生の皆さんに感謝しながら指揮したことを思い出します。

とはいえ明オケが続いていく限りこれからもきっと新たな難題が降りかかってくるでしょう。そもそもこれだけ大きな規模のオーケストラを毎年無事に運営していくことだけでも並大抵の苦労ではありませんね。しかし、これまでの 100 年間の先輩方が皆そうだったようにこれからの明オケもきっとどんな荒波にも耐えて、一層たくましく歴史を積み重ねていかれるのだと確信しています。

時代と共に変えるべきは変え守るべきは守り、次に 200 年史が編まれる頃にも明オケが唯一無二のオーケストラとして輝き続けていますように。

明オケ、万歳！

100 年史発刊を祝す

明治大学交響楽団 金管トレーナー

榊原 徹



電話口（家電）で「危ないから来ないで！」と学生が叫ぶので訊ねると、合宿現地が酷い台風に見舞われ、就任日となる合宿には行けなかったのがおよそ 40 年前。当時は、1 人だけの金管トレーナー制度で、故榊原栄さん（高校・藝大共にバストロの先輩：奇遇）が多忙になり、縁があった私がトレーナーを引き継ぎました。明オケは全員で 70 名ほどの団員で、Tutti では夕方になると総動員で記念館 5 階部室から打楽器を降ろして汗をかき、足場を組み上げた狭小舞台で演奏する日々でしたが、石造りの講堂がそもそも響き過ぎるという練習環境もまた凄まじかった。それぞれの個人練習、パート練習は部室に数人、廊下に 10 数人、そして屋上では爆音でショスタコを吹きまくる大勢の金管諸氏。通りの向こうの今は無き優美な音色が売りものの＜カザルス・ホール＞から、毎回うるさいと怒鳴られていた。運搬と演奏で充実した時間を過ごす、レッスン後の金管は、喉の渇きを有名店「アミ」で癒すことが多かった。お酒が美味しくなる歌を熱唱して手拍子も欠かさず、深夜まで演奏にも増して充実した時間を過ごす彼らと、私も毎回過ごさせて頂いた。定期演奏会の公演当日は、粹な楽屋見舞いを贈ろうと思案し、一升瓶の日本酒にノシをかけて諸氏の楽屋を訊ねれば、早々に気合を入れるが如く、全員が天を仰ぎ日本酒を浴び、拍手の中登場する諸氏の顔は自信に満ち満ちて赤かった。現在ベトナムに在住し、ベトナム国立交響楽団の首席指揮者としてクラシック音楽文化を担っている本名徹次さんが当時は続けて振りに来てくれており、彼の熱演に応えようとさらに真っ赤になって奮闘するが、本番中にオケの音が途絶えることもなかったとは言えず、それでも終演すると日頃の充実した成果を満喫して笑顔で客席に挨拶をする諸氏であった。打ち上げはもちろん新宿サンパーク！40 年前の当時から年季の入った場所でやるものだと感じて参加したが、宴の最後は、部屋いっぱい肩を組み輪になり校歌を熱唱するという昭和のイケオケの姿であった。昔だけが良かったのではなく、学生は今も一所懸命で頗る良い。酒量が減った分が少し上手くなった気がする。人が会わずに仕事をし、話さなくとも事が進む世の中で、変わらずに 100 人が集まり、音を出しオケをする。こんなにも音楽を愛する楽器と人が好きな皆さんを、僕はこれからも変わらずに愛する。

明オケ 100 年万歳。

創立 100 周年おめでとうございます

明治大学交響楽団 金管トレーナー

大橋 晃一



気が付けば明オケのホルンと金管を指導して 37 年という月日が経ってしまいました。その間、ホルンにとっての難曲である「英雄の生涯」「マーラー交響曲第 1 番・5 番」「ブルックナー交響曲第 4 番」等にチャレンジし、アマチュアとは思えない完成度の高さの演奏を立派に披露し、指導者冥利に尽きる思いを私に「与えて」くれました。

37 年間明オケの学生と接してきて思うのは「これをやりたいので、先生、協力してください！」という、先生を巻き込む力が強いのである。その思いに応えてこちらは「与える」のだが、最終的には想定以上のものが実現されるので彼らの底力に感心し、こちらが「与えられた」という感じに収まるのが常である。

「この曲どうしてもやりたいです！」から始まり「毎年金管コンサートをやりたいです！」「明オケ内で吹奏楽を編成してコンクール出たいので指揮をお願いします！」等々、細かいところでは「合宿では最高の出し物を用意しているので来てください！」とか、出し物ではなく酒の種類だったり、、、。

私が作編曲の仕事をやっているのを知り「金管コンサートで我々だけのための曲を作曲してください！」というのがあり、毎年演奏される“Oh-o!Meiji ～金管打楽器のためのラブソディー”が生まれ、「明治大学校歌のオケ編曲を書いてください！」にに応じて編曲を書き、武道館での入学式・卒業式で毎年演奏されており、編曲者として私の名前が大スクリーンに映し出されている。

私事でも「大橋先生の生誕 50 周年記念パーティーやりたいです！」という巻き込み案件を OB が作り大宴会を催し、最近「還暦記念パーティー」まで主催して盛り上げてくれた。いやはや「与えられて」ばかりである。これからも先生方を巻き込み明オケが発展していくことを願うばかりである。

最後に、私からはこの言葉に尽きる。「明オケありがとう！」

明治大学交響楽団 100 年史発刊にあたって

明治大学交響楽団 木管トレーナー

井上 俊次



明治大学交響楽団と僕とのつながりはもう 30 年にもなります。NHK 交響楽団に入りたての 20 代後半に木管楽器の分奏を指導するところから始まりました。当時アマチュアオーケストラを指導すること自体が初めてだったので、僕は指揮棒を持っていなかったのもボールペンを右手に持って振り回して指導していました。

良く覚えているのが、指導するために自分が初めてオーケストラスコアをちゃんとじっくりと見たことです。普段オーケストラの仕事ではスコアの使い方と言えば、自分のパートと同じ動きのパートを探したり、和音の構成を調べたりする程度でした。教える側に立って初めてスコアを最初から最後までじっくりとみて、音楽の作りを理解できたことを今でもはっきりと覚えています。教えることが一番勉強になるとはよく言われますが、「こういうことなんだ」と腑に落ちた思いです。そういう意味でも僕は明治大学の学生たちと一緒に成長してきたとも思っているのも明治大学と関わってこられたことを今でも感謝しています。

創立 100 周年を祝して

明治大学交響楽団 打楽器トレーナー

定成 誠一郎



明治大学交響楽団創立 100 周年おめでとうございます！長い歴史のある明治大学のオーケストラの 100 周年を迎えるこの時を、トレーナーという立場で関わったことは大変嬉しく感じています！1994 年からトレーナーとして携わり、80 歳になる年に明オケとの関係が 30 年になることにも特別な縁を感じています。100 年にもなる長い間オーケストラのために学生が集まり、音楽に向き合い、仲間と共にサークル活動を築き上げ、受け継いできたことは大変立派なことだと思っています。今後も活気のある明オケが続いていくことを期待しています。

改めて 100 周年おめでとうございます！

明治大学交響楽団 100 年史発刊にあたって

明治大学交響楽団 木管トレーナー

野田 祐介



明治大学交響楽団が 100 周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

私は 1996 年からクラリネット及び木管トレーナーとして携わっておりますが、100 年のうちの 4 分の 1 以上の年月を一緒に過ごしていることに誇りを感じています。

明治大学交響楽団の強みは現役のパワフルな活動もそうですが、OB の「明オケ」愛も特筆すべき強みだと思います。28 年間途切れることなく、今でも交流があるのは、自分にとっても人生を豊かにしてくれている時間となっています。

その OB たちが企画した 2024 年 8 月の 100 周年記念演奏会。現役、OB、そしてトレーナーの先生方と共演できたのはこの上ない喜びでした。そして私のフランス留学時代の学友で、Orchestre Victor Hugo Franche-Comté（ブザンソン）の音楽監督であるジャン＝フランソワ・ヴェルディエ氏を指揮者として招聘していただいたことに感謝申し上げます。

明治大学交響楽団の益々の発展をお祈り申し上げます。

祝辞

明治大学交響楽団 木管トレーナー

和久井 仁



明治大学交響楽団、創立 100 周年を迎えられ心よりお祝い申しあげます。

私は 1997 年当時、酒量六大学 No.1 を自負する明オケのトレーナーとして選考されてから、現在までトレーナーを務めさせて頂いております。就任当初は学生との歳の差も僅かで毎回のレッスン後は、夜更けまで杯を交わした事を懐かしく思います。

時代は進み、なんと言ってもコロナ禍を経て明オケの様も大きく変わり、酒量はさておき技量に重きをシフトチェンジして、新しい明オケの歴史を刻み始めているように思います。

しかしなんと言っても伝統の明治、OB の先輩方にも恵まれ過去の栄光と現在を繋ぐイベントが多々行われ、消えかけた伝統の継承も着実に行われたことは本当に素晴らしい事と思います。

私も今まで同様、明オケの為にお手伝い出来ればとの思いで、引き続き頑張って参りたいと思います。

今の私があるのは…

セントラル愛知交響楽団 コンサートマスター
明治大学交響楽団 第 74 代コンサートマスター

寺田 史人



明治大学交響楽団（以下明オケ）創立 100 周年を記念し、心よりお祝い申し上げます。

二十数年前に自分もこの伝統ある明オケに在籍していたこと、そして今や団員数 200 名を超える人気のサークルに成長していることを誇らしく思います。これまで大切に受け継いでくださった団員の皆様、そして支えてくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

現在リバティータワーが建っている場所にはかつて記念館という歴史を感じる建物があり、バンカラな立て看板がいくつも並んでいました。

ヴァイオリンの経験は多少あったもののオケのことなどほとんど知らなかった私は、和泉祭での先輩の演奏を聴いて入団を決めて記念館へ行った入団初日のことや、大学の講義が終わると記念館の広い廊下で、仲良くしていただいていた先輩や同期らと夜遅く守衛さんが回ってくるまで個人練習をしていたことなどが思い出されます。

私達の代は万遍なくどのパートにも同期がおりオケに熱いメンバーが多く、既にあった木管、金管コンサートに加え、新しく弦楽コンサートと、飲み会のコールをもじって名前に冠した吹奏楽団を立ち上げました。それらが今も続いていると聞き嬉しいです。

温かくご指導しつつ見守ってくださった先輩、信頼してついてきてくれた後輩に恵まれ、ろくにオケの経験もなく色々迷惑をかけたにもかかわらず助けてもり立ててくれた同期達の中、私は貴重な経験を積むことができました。

定期演奏会を始めとする各種演奏会や合宿など思い出を書き出すとキリがありませんが、私が音楽の道に進むことになった原点は明オケでの経験に抛るところが大きいですし、職業になった今も音楽に向かう気持ちは当時と変わらず持ち続けようと心掛けています。

私が現役の頃も代ごとに様々なカラーがありましたが、おそらく今に至るまでそれぞれのカラーを持ちながらも、受け継いで託されてきた明オケらしさというものが発展をしながら今後も 110 年 120 年…と続いていき、明オケ人気と共にクラシックファンも増えていくことを願っております。

特集：座談会「明オケを語る」

座談会「明オケを語る」

約30年間にわたる「失われた30年」と呼ばれる日本経済の長期停滞の時代－1995年から2025年まで、明治大学交響楽団もこの激動の社会と共に歩んできました。この期間、日本は景気低迷、就職氷河期、少子化といった多くの課題に直面しましたが、団員たちは音楽への情熱を絶やすことなく、それぞれの時代の制約や変化に応じた工夫を凝らしながら活動を続けてきました。

1995年の記念館取り壊し、1999年のリパティタワー完成、そして2006年に放送されたドラマ「のだめカンタービレ」によるクラシック音楽ブームは、団の活動にさまざまな影響を与えました。また、2020年以降の新型コロナウイルス感染症の流行では、未曾有の制約が課され、思うように演奏活動ができない時期も経験しました。しかし、どの時代においても団員たちは新しい挑戦を重ね、音楽を通じて仲間との絆を深めてきました。

この座談会では、70代から102代までの各年代のOB・OGや現役学生が集まり、音楽活動を取り巻く社会の変化や、自身が経験した出来事を語り合います。明治大学交響楽団がそれぞれの時代をどう乗り越え、伝統を紡いできたのか－過去30年間で立ち返り、100年の歴史を紡いできた明治大学交響楽団の歩みを振り返ります。



OB 座談会「明オケを語る」

(期 日) 令和 6 年 8 月 31 日 (土)

(会 場) 明治大学リバティタワー

(出席者) 本間 次郎 (S.40 年卒)

杉山 茂 (S.45 年卒)

河野 大輔 (H.10 年卒)

遠藤 智史 (H.11 年卒)

菅野 安澄 (H.11 年卒)

石井 誉 (H.14 年卒)

児玉 恵純 (H.14 年卒)

大野 皓市 (H.19 年卒)

小山田 智紀 (H.19 年卒)

堀 創介 (H.25 年卒)

青木 祥幸 (H.27 年卒)

谷 蒼一郎 (H.30 年卒)

神尾 晃二郎 (H.31 年卒)

鈴木 優有 (R.3 年卒)

伊藤 美月 (R.5 年卒)

山路 武瑠 (R.6 年卒)

潮田 駿 (学生 4 年)

原野 桂樹 (学生 3 年)

遠藤 史織 (学生 1 年)

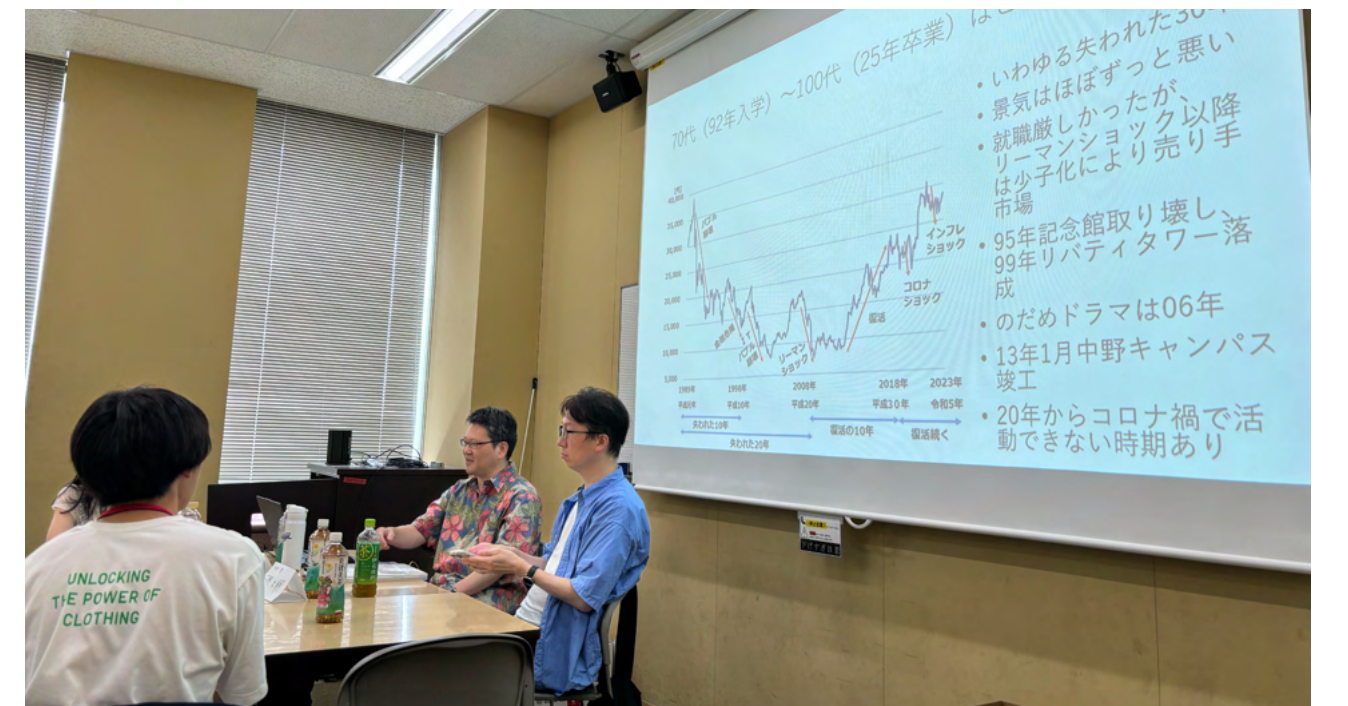


70 代 (1992 年入学) ～ 100 代 (2025 年卒業) はどんな時代？

遠藤 智史

今日、座談会に参加の皆様は 1994 年入学の 73 代から 2026 年卒となる 101 代まで (本間次郎さん・杉山茂さんはアドバイザー、遠藤史織さんはスタッフとして参加) という事なので、少しだけごく簡単にこの 30 年くらいを振り返ってみます。日本はこの間ずっといわゆる「失われた 30 年」の時代でして、景気はずっと悪いです。我々 70 代から 80 何代くらいの世代は就職氷河期と言われる時代で就職が相当厳しかったんですよ。リーマンショック以降の方々って少子化のおかげで売り手市場になったから就職活動はそんなに苦労されてないと思うのですが、それでも景気はずっと悪いよね、という時代ですね。

この間にあったことと言えば、1995 年、これは私の入学の年ですが、記念館が秋に取り壊しになりました。なので私は記念館で練習した最後の学年であり、記念館さよならコンサートも聴いていました。練習しやすいという意味では外部練と比べると良かったです。その後、1999 年にリバティタワーが竣工して、明大の新しい時代が始まりましたね。練習場所は結局リバティタワーの中にはできずしばらく外部練時代が続いて、その後 10 号館の音練を使うようになりました。あと関係あるか不明ですが、のだめのドラマが 2006 年にあってそれから数年間はだいぶブームで明オケも人が増えたって話も聞いたような気がします。2011 年には東日本大震災があり活動も少し影響を受けたようですね。あと 2013 年に中野キャンパスができて新しい拠点ができたのと、徐々に明大の女子学生の割合も増えていったというのもこの 30 年の特筆すべきことでしょうか。それから 2020 年からですけれども、コロナ禍で活動できない時代が続いたというのがありますね。95 代から 99 代までがかなり影響を受けたと思います。そんな時代でした。これはただ単に振り返りだけなので、「こういう時代でしたね」ということにはなりますが、今日参加の皆様こんな時代だったということも踏まえて自分たちの頃はどうかだったかいろいろなテーマで振り返ってもらいたいです。



明オケに入った時の第一印象は？

河 野 大 輔	私は団友なのですが、第一印象は「上手だな、特に弦楽器と金管が凄いな」と思ったので、ここで音楽できるのは嬉しいな、という印象でした。
遠 藤 智 史	私は明高だったのですが、当時ホルンパートの人が少なかったそうで、まだ3月の入学前から1つ上の小林先輩に呼ばれて練習出ていました。その時思ったのは木管の先輩方がうますぎる、特にClの大谷先輩やFgの大部先輩など、当時ブラームス4番に乗っていた方が凄いなと思ったのが第一印象でした。
堀 創 介	明オケか吹奏楽かどちらにするか迷ったのですが、吹奏楽は応援団でバンカラすぎて無理だなと思ったのと、明オケのトロンボーンの1つ先輩に凄いイケメンがいたのでこちらは綺麗な感じだろうと思って入りました。ところが新歓コンパでそんな先輩方が一気にしまくりで、これは凄い（笑）と思ったのが第一印象ですね。
大 野 皓 市	飲み会のコールと死人部屋の印象が強いですね。現役世代は引いてしまうかもしれませんが、あれがやはり一生忘れられない思い出です。
青 木 祥 幸	飲み会はかなり印象に残っています。新歓のときに金打の女性の先輩がいきなり派手に飲み始めて、やっぱり凄いなっていうのとか（笑）。あとは割と忙しいというか、いろんなイベントをやる団体だなんていう印象がありました。
谷 蒼 一 郎	イベントが多いから楽しそうだなと思ったのは本当にそうでした。入団のきっかけが明オケやトランペットコンサートのYouTubeを見たというのもあって、そういうところを凄く魅力に感じていたのと、個人的な話で恐縮ですが、うちの家系は凄い酒の飲む家系なので、「あ、これは合うな」というところで決めたのを覚えています（笑）。一方で同期の女子2名はそんなオケの状態を見て「いつ辞めるか」をずっと話していたのですが、これも結局時とともに慣れに変わっていったって最後まで一緒にやりました（笑）。
神 尾 晃 二 郎	僕は明中の先輩が明オケ入って色々やっていたのを知っていたので、悪い意味でのギャップみたいなのは特になかったなと思っています。第一印象は高校生の時に演奏会聴きに行ったけど実はあまり覚えてなくて、でも入学式の時に武道館で明オケが大橋晃一アレンジの校歌を演奏していて、聴いた時はかなり感動したなっていうのを覚えています。凄くゴージャスな演奏していて、「オーケストラの感動ってこういうものか」っていうのを思った記憶があります。
鈴 木 優 有	私は付属ではないのですが、高校の時からずっと演奏会聴きに行っていました。だからそれこそ「英雄の生涯」を客席で聴いていて良いなと思って、入ろうって決めました。

COLUMN「新歓と合宿」

太郎：新歓荒らしという、新歓コンパだけタダで飲もうという輩が毎年来ていたね。
花子：でも飲まされすぎて「来なきゃよかった」と言って後悔していたらしい（笑）。
太郎：あと、合宿で酒に潰れてしまった人を収容するのは以前は「死人部屋」と言っていたけど、90代ころから「黒部屋」に変わったんだって。
花子：誰が収容されているかは「Death Note」に記載されて管理されてたんだって。
太郎：そこは「死人」が残ったんだ（笑）。

伊 藤 美 月	皆さんが言っているようにお酒の印象が強いですが、最初私は結構酒アンチ派って感じでした。そんなにたくさんお酒飲んでるのちょっと嫌だなみたいな感じで思ってたのですけど、まあ半年ぐらいて洗脳されていってみたいな（笑）。
山 路 武 瑠	僕の代（99代）の時はちょうどコロナ禍に入ってから初めての新入生の代だったので、最初の印象と言うと本当に「無」というか何もありませんでした。明オケのイメージだんだん持つようになったのは、先輩と関わるのが後々増えて、その先輩たちの話の中で「明オケって実はやばい（酒）サークルだ」みたいなイメージを固めつつ過ごしてみたけどまあ意外と大したことないなということでした。コロナ禍で酒の文化・宴会の文化がかなり衰退してしまったこともあり、聞いていたイメージよりはおとなしい、平和なサークルだったなと思います。

練習はどこでやっていた？

遠 藤 智 史	以前は記念館があったのでそこで練習していたけど、今はどうしていますか？
原 野 桂 樹	音練が基本なのですが、他サークルとの兼ね合いもあり、割と外部練も多いです。大体江東区や神田でやっています。セク練も外部練の場合があります。
遠 藤 智 史	我々の頃（74代）は生田でセク練やることが多くて、セク練で外部練というのはなかったなあ。あと以前は10号館で自由に個人練できていたと思うのだけど、今はそれもダメになったと聞きました。
伊 藤 美 月	コロナ前はまだ廊下で音出しはまだ割と自由にできていたのですが、コロナのタイミングでそもそも10号館に集まることもなくなり、それからなんとなく部屋の中だけは音出し可能だけど、ということに。
青 木 祥 幸	そもそも我々の代くらいから10号館の廊下で音出ししていることに対して近隣から苦情が大学にあり、それで大学からも廊下での練習は控えるようになっていましたね。
神 尾 晃 二 郎	和泉は部室も廊下も全て音出し大丈夫なので自由でした。
小 山 田 智 紀	生田も廊下での音出しはダメでしたね。 （編集注：吹奏楽部は普通に練習しているそうなので、あまり規制されていないのではないかという説もありました。）
潮 田 駿	中野は部室もなくて、練習するなら和泉か駿河台に行ってました。
河 野 大 輔	記念館があった頃はそれはもう全て自由で、よく屋上に出て練習してました。
潮 田 駿	ようやく去年からアカデミーコモンのホールが使用日の10日前で空いていれば文化系サークルでも使えるようになりまして、ホールで合奏練習できるような環境が戻ってきました。

COLUMN「初の女性幹事長」

太郎：明オケの長い歴史の中でも幹事長は97代までは全員男性が務めていたのだけど、98代で初めて女性が就任なんだって。
花子：これからは女性幹事長も増えてくるかもしれないね。

指揮者・トレーナーとの思い出

河野大輔	私の代（73代）は当時若手の新通先生でしたが、まあ怖い先生でした（笑）。でも数か月にわたる練習をずっと見ていただけたのは本当に恵まれた環境だったなと思っています。
新堂浩一郎	75回定期を振っていただいた本名先生に、卒業旅行で行ったウィーンで偶然お会いしま（代読：遠藤智史）して、ものすごい縁を感じました。また75回定期は本名先生は大変お忙しくて、下振りで横島先生に来ていただいたのですが、横島先生の当時のお住まいのマンション名が「サンパークXX」でレセプション会場のサンパークの話しに非常に敏感だったという思い出がありました。（笑）
児玉恵純	指揮者の方はどちらかというと若手の方が多くて、トレーナーの先生の方が力関係で言うとなることが多くて、合宿で凄く飲まされてしまって、ということはよくありましたね。
潮田駿	100回定期は有名な指揮者を呼ぼうということで、トレーナーの榊原先生に相談していろいろな方をご紹介いただいたのですが、予定が合わなかったり事務所NGだったりとなかなか決まらず、最後の最後で以前にも振ってくださっている中田先生にお願いすることになりました。
遠藤智史	トレーナーの先生だとやはりHrの大橋先生との思い出がたくさんあります。練習後必ず飲み会なのですが、そのあと先生の家に行って2次会。大橋セレクション（プッチーニとかワーグナーとかヴェルディのオペラを聴くことが多かった）を聴きながら飲んで、翌日そのまま学校行くなることがよくありました。新年会も豪快でみんな日本酒1升瓶買っていくから10升くらい集まってしまい、先生の手料理食べながら大酒飲んでいました（笑）。Tbの榊原先生も同じく練習後必ず飲み会なのですが、先生はご家庭あるのでその先は無かったですね（笑）。
児玉恵純	Perc定成先生は門下生が皆さん集まる飲み会があったり、都響の方が参加する飲み会があったり、かなり豪華だった思い出があります。あとレッスンで上野の東京文化会館の練習場で普段都響が使っている（つまり定成先生が使っている）ティンパニで練習見てもらったこともあって、それは良い思い出です。
原野桂樹	Vn宮里先生は合宿でフルーツポンチ作ってくれたり、お酒のつまみを持ってきてくれたりするのでセクションコンパの前にはみんなが並ぶ、というのがよくありました（笑）。
遠藤智史	そういえばObの和久井先生が明オケトレーナーになったばかりのときの合宿の全体コンパで、大学の先輩である大橋先生と榊原先生から逃れるため、全体コンパの会場から匍匐前進で出ていこうとしているのを見つけて「遠：先生何やってるんですか？」「和：バレないように出ていこうと思って（大真面目）」「遠：バレバレですよ（笑）」、という会話をしたことを思い出しました（笑）。
堀創介	残念ながらすでにお亡くなりになっていますがTp平林先生のことについて、たくさんトランペットコンサート用に編曲の譜面も作っていただいたり、大変優しく指導いただいたり、二日酔いは楽器を吹けば治る説を実証したり、など多くの思い出がありました。

演奏会・演奏旅行の思い出

潮田駿	私たちの代（100代）はコロナの影響もあったので、100回定期は、まずは今まで通りの普通の演奏会をやろうというのに全力でした。当日はOB会の杉山さんを始めトレーナーの方からもたくさんお花をいただいて、ロビーをとて豪華なものに仕上げてくださってとても嬉しかったです。何より通常通りの演奏会ができて本当に良かったです。
伊藤美月	97代と98代はコロナのため6月演奏会は開催できませんでした。97代は定期演奏会も無観客の配信のみ、とかなり時代に翻弄されました。98代は6月演を9月に延期しても開催したいという話しを大学と続けていましたが結局認められず、泣く泣く6月演は中止となりました。その後11月に大学から明治大学の創立140周年記念演奏会の依頼があり、12月の定期演奏会を開催しても良いという条件のもと受けることにしました。そうすることで定期演奏会は開催ができました。6月演はパンフもチラシもあり、チャイ6「悲愴」をやるつもりだったのですが本当に残念でした。
遠藤智史	せっかく練習もしてパンフ・チラシも用意して、でも開催が許されないというのは本当に辛かったですね。明オケの長い歴史でも演奏会ができないというのは、関東大震災後の大正13年と戦争のときの数年間（昭和19年・20年）だけだったはずなので如何にコロナ禍の時代が大変だったかというのが分かりますね。
谷蒼一郎	演奏会というか演奏会の準備で大変だったのは我々の頃ですね。未納金が多すぎて明オケの口座に残金数千円というときもあり。指揮者の先生に謝礼払えないので練習を中止にしたり（事務所のマネージャーに酷く叱られた）、と大変な時期を過ごしていました。
遠藤智史	演奏旅行については76代が長野演奏旅行を開催したのが最後になりますか？
児玉恵純	76代の長野演奏旅行は集客がうまくいかず、且つ出資金も非常に高くなってしまい、その結果78代にはもうやらない方が良いと引き継ぎました。大ホールで100人も観客がいないというのは辛かったです。
遠藤智史	我々がC年のときは長野・富山演奏旅行（更埴市・富山市・入善町で3公演4泊5日）。このときも集客という意味では入善町以外は厳しかった印象があったが、何しろ合宿と演奏会が同時にくるというのが楽しすぎた（身体は辛いが笑）ので、E年のときも福島演奏旅行（いわき市・福島市で2公演3泊4日）を開催することにしました。福島県の校友会や福島県のメディア各社、明オケOBの渡部先輩にもご協力いただき、広告・チケット収入も数百万円集められて、どちらもホール収容の70%程度の客入りで、移動日は福島県の観光地を巡り（猪苗代湖・五色沼・吾妻小富士・飯坂温泉など）大変楽しかった思い出があります。今は演奏旅行がないのは非常に残念ですが、校友会からの依頼演奏などは79代でも福島県富岡町に行っていたこともあるようですし、今後もチャンスがあれば企画してもらいたいなと思いました。

選曲会議はどうだった？

神尾晃二郎	選曲会議はコンマス・インペク・セクリー・パーリーで構成された会議で演奏会曲を決めるのですが、もう D 年のときから事前の話し合いを繰り返して、なのでそこまで揉めたという印象はなかったです。
河野大輔	とはいえ木管がやりたがる曲と金管がやりたがる曲で少し傾向が違って多少揉めたりとかはあったかな。あとはとにかく乗り番を作らないといけないので、かなりの大曲選ぶしかない、というのもありましたね。
菅野安澄	我々の代（74 代）は「英雄の生涯」を選曲会議で選んだのだけど、団員総会でこんな難しい曲できない、と一度否決されてしまったことがありました。それを耳にした先輩から「選曲会議で何をやってたんだお前ら !! 団員総会で否決なんて前代未聞だ !!」なんて怒られてしまったり。。
谷 蒼一郎	選曲会議で決まったらそれで決まりではないのですか？ 我々の頃はインスペクターの専権事項でした。
小山田智紀	84 代は選曲会議で全部決めるのではなく、3 つくらいに絞ってあとは団員全員の投票で決めていました。次の代からは今と同じようになったのかなと思います。
児玉恵純	選曲では F 年と C 年の乗り番をどうするか、というも当時大きな問題でして、私の代は選んだ曲の乗り番が少なくて F 年の先輩が演奏会に出られず少し揉めました。
鈴木優有	私の代（96 代）から明オケ卒業年を E 年にしましたので、その辺り今は少し緩和できているかもしれません。

お金の話をしようか

遠藤智史	これは私の頃もそうだったのですが、未納金はかなりの問題で、私の妻は明オケで会計だったのですが集金に本当に苦労していました。多分どの学年もそうだと思うのですが、未納金の対応はどのようにしていましたか？
小山田智紀	私の代（82 代）の会計はかなり頑張っていて、卒業してどこかに行ってしまう前にかなり強めに回収していました。
大野皓市	私の代（82 代）のときに 74 代遠藤洋一先輩が OB に声かけして、軽自動車買えるくらいの未納金を集めていただいて、サンパークで納付式をやったというのがありました。
潮田 駿	現役生の未納金も数百万円単位であって、OBOG 含めるとこれがさらに増える状態になっています。未納金リストはあるのですが、適切に更新されていなかった場合もあるようで、なかなか督促も難しいようです。
遠藤智史	もう未納金あるのかどうか分からない人もいると思うので、心当たりがある人は皆さん寄付金をするしかないと思いますよ。現役学生が OBOG に未納金の回収をするのはかなりハードルの高い話しというかほぼ不可能なことだと思うので、なので OBOG が自主的に動くようにならないといけないと思います。なので寄付がやりやすくなる仕掛けは継続検討必要ですね。

オーケストラの演奏活動以外で印象に残っていること

堀 創介	スマブラですね。和泉のボックスに行ってスマブラやって、授業にも行けなくなったりして。。ボックス行く前のほんとに 30m ぐらい先から叫び声が聞こえて、「わーーーー！しねーーーー！」とか（笑）。そして落とした単位が和泉ノートに積みあがっていく。。
小山田智紀	生田もマリオカート随分やってましたね。
遠藤智史	我々の頃は部室は音楽を聴くのがメインだったかな。そもそもゲーム機がなかったの。あとはたまに麻雀やったり和泉ノートとか生田ノート書いたりということだったと記憶してます。イベント系だと何がありますか？
青木祥幸	Hey! Say! JUMP の PV は明オケが演奏の絵面（撮影時は本当に演奏しているのだけど音はプロの別撮りを被せてる）で指揮が私です。目の前で実際にジャニーズが踊っていて一緒に撮影しました。今でも YouTube で見ることができます。 (YouTube： https://www.youtube.com/watch?v=-ZAnK_DIkDI)
遠藤智史	音楽教室で江東区の小学校に毎年のように呼ばれていたのがありましたね。
杉山 茂	その小学校が改築するのを機に他のことをやることになり、今ではなくなりました。
堀 創介	学園祭では今川焼売っていました。今でもそうですね。
菅野安澄	以前は生田は磯辺焼き売ったり、和泉は名曲喫茶やっていましたね。
河野大輔	我々が現役の頃は明大のマンドリン倶楽部からお声がかかって、地方公演にエキストラして出ていました。演奏旅行にも同行して、北は北海道から南は九州まで日本全国で公演して、1 公演あたり 5000 円のギャラも出たのでかなり良い経験ができました。これも今は無いようですね。
遠藤智史	あとは私が E 年のときに作った楽団内吹奏楽団の「SayNoYesYes 吹奏楽チーム」ですね。これも乗り番が少ない人たちの救済のためでしたね。1 回コンクールに出て終わりのつもりが、まさか今まで続くとは驚いています。ちなみに「SayNoYesYes」は飲み会の掛け声の「せーの・・・はいはい」からですが、これは私が付けました。
堀 創介	私の代から運動会を始めました。この頃は本当にイベントが少なくて、たまにはみんなでそういうイベントやった方がいいじゃないかということで運動会が始まりました。実際には陸上競技場って全然なくて一生懸命調べたら成田に 1 ヶ所だけ空いているところがあり、頑張って行きました。それから毎年やっているそうです。結構元運動部出身がいてセクション対抗リレーとかかなり盛り上がります。セクションの T シャツを木管が青、金打が黄色、高弦が赤、中低弦が緑で作りました。また納涼船のイベントも私のときからですね。
遠藤智史	あとは杉山紙文具店のバイト。短時間で稼げてご飯もたくさん食べられるのでかなりお世話になりました。今でも続いているそうです。未納金の多い代は会計と一緒に来てその場で回収されるとか（笑）。

こんな凄い人いたね

遠藤 智 史	私の代（74代）だとやはりコンマスの寺田史人が最も有名人ですね。彼がいたから「英雄の生涯」やろうよということになったのですが、彼は曲のこと全然知らなくて最初はかなり乗り気でなかったのを覚えています。この曲やったらパンフやチラシにもソリストとして名前載るよ、と言うとだんだん乗り気になってきて、まあそれで最終的にはソロをやることになりました。
堀 創 介	私の代（88代）だと Perc の馬場翔太郎がいました。実家が医者なので普通に医大に入って医者になる道なのですが、医大3年のときに明オケに入団して、そのときから超絶上手で。そのまま医者になるのかと思ったら、卒業後に首席で武蔵野音大に入って首席卒業で、さらにやっぱり医者にもなって、というちょっと考えられない経歴なのです。
石 井 誉	あと山根という凄い（変わった）奴がいて。彼はリコーダーが本当に上手で、台湾や国内のコンクールでも金賞取っていたり、めざましテレビに出演していたりいろいろなところで目立っていますね。明オケ時代は合宿に楽器を持ってこないオーボエパートだったのですが（笑）。
遠藤 智 史	以前に大橋先生のかなフィル引退パーティーで、かなフィルのプロの方が3組くらいアンサンブルをやって、なぜか山根が最後の出番だったのだけど、これが本当に上手で、かなフィルの方々も「あのリコーダー上手だけど誰なの？」と言われてました（笑）。

（編集者注：他にも多くの方の話題が上がったのですが、書けない内容も多々あり、これくらいの記載でご容赦ください。）

COLUMN「SayNoYesYesの由来」

よーいち：吹奏楽の名前なんだけど「よーいちと愉快的仲間たち」とか「ドリフトキングよーいち」とか良いだろう、どうだ？

さとし：（ダメだこいつ何とかしないと・・・）

それだと明オケの団体なのか何なのか分からないので、

そうだ「せーの、はいはい」を文字って、「SayNoYesYes」はどうだ？

よーいち：なんか変な名前だけどまあしょうがないか。

「吹奏楽団」だと普通なので「吹奏楽チーム」にしたいな。

チーマーということで。

・・・という経緯で「SayNoYesYes 吹奏楽チーム」が発足しました。



飲み会どうだった？

小 山 田 智 紀	合宿の飲み会は以前は「コンパ」だったので、それを仕切るのは「コンパマスター」と呼ばれていたのだけど、今は「セレモニーマスター」と言うそうですね。いつから変わりましたか？
鈴 木 優 有	これはコロナのタイミングですね。あまり飲み会自体がよろしくないという風潮だったので、「コンパ」から「セレモニー」に変更したそうです。
神 尾 晃 二 郎	一応コロナ前までは普通に飲み会やってたので、いろいろ受け継がれているとは思いますが、一部知らないのもあったりしますね。
遠藤 智 史	以前は縦割り・セクション・全体、とやっていたけど今はそうでないこともあるみたいね。
堀 創 介	最近は毎晩コンパが行われなようなこともあるようです。
河 野 大 輔	掛け声の「3拍子」や「せーの」は今でもありますか？
堀 創 介	50代Tp石塚先輩が「3拍子」知っているそうなのでかなり以前から続いているようです。最近はなぜか曲が長調になってしまって、野田先生に怒られました。野田先生にSayNoYesYesの練習のときにOBだけで歌ってとやったら短調で、「これだよ、これ。」と野田先生から言われてしまいました（笑）。
谷 蒼 一 郎	「せーの」もテンポがものすごく早くなっちゃい、「今日もこうして飲めるのは〇〇先生のおかげです」とかは省略してしまって最後の「はいはい」だけ、しかも表拍でやるので、それを榊原先生に5回に1回くらい怒られます（笑）。定成先生にも「もっとゆっくりやりなさい」と指導されています（笑）。
青 木 祥 幸	「わんこビール」は存在は知っているのですが、私の時代もうやっていませんでした。

座談会を振り返って明オケの印象を改めて

遠藤 智 史	今日は皆さん長時間にわたり本当にありがとうございました。やはり30年も経つといろんなことが変わるのだなということがよく分かりました。それでも音楽に対する姿勢は以前と変わらず真面目だし、飲み会は変わらず楽しくやっているようだし、根底に残っているものは同じ、明オケはいつまで経っても明オケだなと感じました。同じ釜の飯を食った仲間ということで、同じような記憶がいっぱいあるのがとても面白いと思いました。また次の100年に向けて明オケが続いていきますように祈念して本日はお開きにします。ではこの後は打ち上げ!!（笑）
--------	--

COLUMN「明オケ御用達のお店」

これまで明オケがお世話になったお店の話題が多数上がりましたが、書きにくいことも多々あり、お店の名前のみ記載させていただきます。

- ・駿河台：ニュー浅草、さくら水産、すずめのおやど、タコス・デル・アミーゴ、てけてけ、香港、源ちゃん
- ・和泉：宮古
- ・生田：鈴乃屋、庄や

特集：記念館おわかれコンサート

記念館への思い

第 72 代幹事長 白木 信一郎



1928 年の創建以来、明治大学のシンボルとして親しまれてきた「明治大学記念館」が、1995 年 11 月を持って 67 年の歴史に幕をおろした。緑色のドーム型屋根と鳳凰の翼にも似た姿が特徴的で、昭和初期の面影を残す貴重な建物であった。我々、交響楽団も長い間、この記念館を活動の拠点としてきた。

1995 年 11 月 11 日、記念館さよなら DAY。講堂内での「継承の集い」、記念館をライトアップしてのセレモニーに私は参加した。そして、最後は記念館前で校歌斉唱。いつの間にか隣の人と肩を組み「白雲なびく駿河台 ……」と 3 番まで高らかに歌い上げた。これで記念館とはお別れか、と思うと何か胸に込み上げてくるものがあった。

明治に入学し、オケに入ってから、毎日のように足を運んだ記念館。それは私の生活の中でなくてはならない存在となっていた。そして、いつだったか、記念館が駿河台再開発に伴い取り壊されるという話を聞いた。まだ、正式な発表はなかったし、まさか大学のシンボルが壊されることはないだろうと思っていた。しかし、話が徐々に具体的になってきて、ついに 1995 年秋に取り壊しが発表されたー。

我々、交響楽団は、長い間この記念館を拠点として活動してきた。定期演奏会も昭和 3 年の第 5 回から昭和 36 年の第 38 回まで、ほとんど記念館行動で開催してきた。戦時中も演奏会は続けられ、昼夜 2 回行われた演奏会では、生のクラシックにふれたいという多数の聴衆が押し寄せ記念館があふれた、と当時の OB は伝えている。近年は専ら練習場として利用してきた。夏は蒸し暑く、冬は凍えるように寒く、決して良い条件の練習場とは言えないが、明オケの団員にとってはかけがえのない練習場であった。また、記念館 5 階に部室があったため、団員の語らいの場となっていた。授業に出なくても、この部室には顔を出すという団員は数限りなくいた。

1995 年 7 月 2 日には OB と共に「記念館おわかれコンサート」を開催した。今一度青春の炎を燃やした記念館講堂のステージで最後のコンサートを開き記念館と別れを告げたいという OB が全国から集まった。昭和 3 年の記念館落成祝賀コンサートと同じプログラムで、演奏者も記念館を埋め尽くした満員の聴衆も汗だらだら、まさに“熱演”で記念館に別れを告げた。

このような記念館。夏は汗だらだらになって、冬は手がかじかみながらもベースを弾いたこと、5 階からティンパニを持って狭い階段を昇り降りしたこと、屋上で飲んだビール、触れればはげる壁、ネズミやゴキブリが走り回っていた廊下 …… と、今、目を閉じるといろいろなことが思い出される。私が記念館で過ごした 2 年半は、記念館の 67 年の歴史からすればわずかな期間である。しかし、記念館の最後に立ち会えたことは幸せなことかもしれない。しかも、幹事長としてさまざまな催しに参加し、記念館について考えさせられたことで、私の記念館への思いがさらに強くなったことは間違いない。また、記念館が私の大学生活に活気を与えてくれたのも間違いない。

1995 年 11 月 11 日、記念館の扉は閉じられた。もう永久に記念館の中に入ることはできない。しかし、記念館が私の心の中から消え去ることはない。



※第 72 回定期演奏会パンフレット内の記事を一部編集しました。

記念館さよならコンサート

本間 次郎（Va 昭和 40 年卒）

梅雨空の毎日だが、今日はなんとか降らないでほしい。そんな願いが通じたのか朝から雨は降っていない、そのかわり凄い蒸し暑さだ。70 年程前に建てられた記念館には空調設備があるはずがない、窓を開けるにも窓枠ごと固定されていて、なお黒い布で覆われている。風も通らない、陽の光も射さない、おまけにビデオ撮影の為に照明灯が 2 階席の両サイド、天井の何か所に新たに設置された。リハーサルが始まるころに照明の係りも同時進行でついたり、消したりしている。ステージにすべての照明が集中するときは、まるでサウナのようなのである。〔サウナ記念館〕へようこそ。

リハーサルも後半にはいつから、突然オーケストラの配置換えが行われた。ヴィオラとチェロが入れ替わるようになった。要するにヴィオラを外にだしてチェロを指揮者の正面にしてチェロの響きをもっとだそうというねらいであろう。暑い上に狭いステージでの移動は少々手間取ったがスムーズにいった。

ソロがある 2 曲は私は降番で客席で楽しむことにした。ロマンスの杉山は幾分顔色が青ざめて見えた。今日まで苦勞を考えると疲れもピークに達していることだろう。しかし彼の愛器サンクトゥス・セラフィンが奏でる音には微塵の不安も感じられない、のびやかに人の心を震わせる。西 明美さんのカルメンの 2 曲はベテランの落ち着きのなかにラテンの情熱的な輝きを十分に盛り込み、たからかに歌いあげていた。七部程度でリハーサルをと指揮者は言ってもやはり力がいってしまう。本番を前にして少々バテ気味なのもある。

弁当 150 食に飲み物が 01 番教室に用意されたが、飲み物は全く冷えてなくて文句の一つもでそうだったが、流れた汗の量を考えると脱水状態寸前では何でも飲み込んでしまう。1 Kg や 2 Kg は減量しているはずである。まるで湯上がりのように汗をふき、ステージ衣装に着替えている。湯上がりは薄着になって涼しむものだが、我々男子はダークスーツを着込んで〔サウナ記念館〕に向かわなければならない。

カナダから帰国したて今朝の電話で司会の役を引受てもらった NHK の小沼さんとの打ち合わせ、2 人の指揮者、2 人のソリストへの花束の用意、2 階席上部の椅子の修理、演奏メンバーの上着とネクタイの紛失、楽譜の最終確認、等々、本番までのわずかな時間になんとも忙しいこと。

お客さんはどんどん増えてきているが中は暑いので、ロビーや通路で少しでも外の空気を欲しがっている。司会の小沼さんが挨拶。場内は一瞬静まりかえり、メンバーの顔に緊張が走る。さすがは NHK のアナウンサー巧いものである。

明治大学交響楽団 OB 会長の木本 尚男の挨拶は 70 年にわたる記念館の歴史の重みと学生達はぐくみ育ててくれた感謝の言葉で結ばれた。

指揮者の堀越 隆一は指揮台に上がると既に汗をかいている。指揮台の後ろは 10 cm で客席に落ちる、危険な足場である。演奏でもひや汗をかかなくてはならないから、汗はとまらない。

「詩人と農夫」序奏の管楽器は見事なハーモニーであった。久保寺のチェロのソロも完璧であった。記念館さよならコンサートの成功を成功に導いてくれた序曲となった。

「ロマンス」OB 会理事長として誰よりも精神的にも肉体的にも疲れは極限に達しているのに、杉山 茂のヴァイオリンは人々にやすらぎとよろこびをあたえてくれた。

「カルメン」客演の西 明美さんのベテランの味を堪能することができた。気取ることも、力むこともなくサラリと歌ってくれた。

オーケストラと独奏者との呼吸を合わせることは指揮者の堀越 隆一の卓越した技量がそれを証明してくれた。

休憩の間はまさに息抜きで、酸欠と脱水症状の回復につとめるべく、演奏者もお客様も廊下や中庭に逃げていった。

「運命」は全く力をセーブすることが出来ない曲である。リハーサルでも 7 分程度といわれてもだんだん熱くなってしまった。まして本番となればオーバーヒート寸前である。2 楽章で少し心を落ち着かせるも、3 楽章の後半からは燃え上がる炎は消すことはできない。切れ目なく 4 楽章へ火砕流となって驀進いていった。

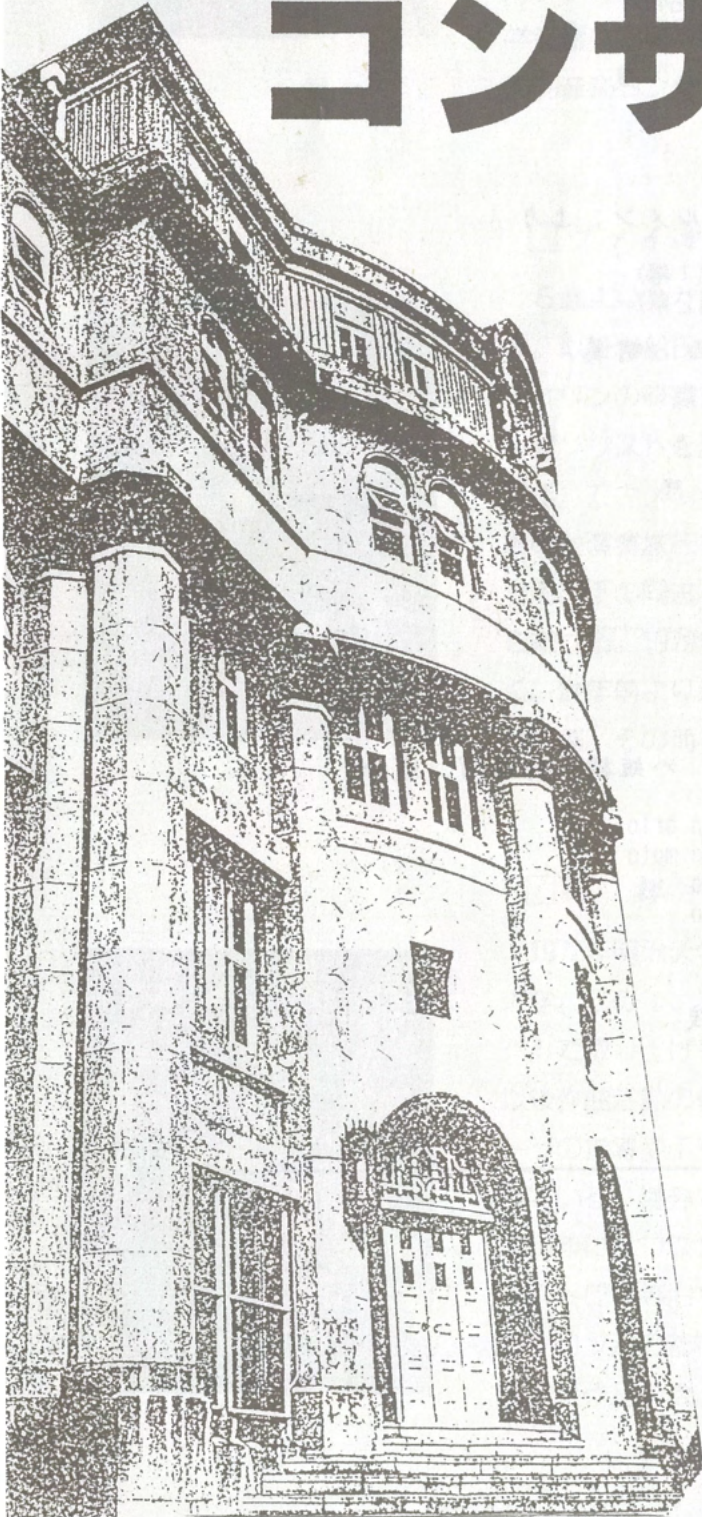
「運命」が終わってホッとしていられない。アンコールの曲にブラームスの「大学祝典序曲」控えている。この曲の方が難しいのである。でも難くこなしてしまう。

ワルツ「美しき青きドナウ」はややコシイくりかえし無事クリアー

バッハ「G 線上のアリア」をととても美しくまとめると、目の前にビール泡がちらつきはじめた。生きている喜びを喉で感じる瞬間はもう直ぐに来る。汗よ好きなだけながれろ。それだけビールはおいしいのだ。

演奏が総て終わってカーテンコール（カーテンなんて無いけど）で 2 人の指揮者と共に万雷の拍手をうけた。こちらからもお客様に拍手を贈りたい。私ごときに大きな花束が来た。

明治大学 記念館 おわかれ コンサート



明治大学交響楽団 & OB

昭和 3 年記念館落成祝賀コンサートの曲による

1995 年 7 月 2 日／明治大学記念館講堂

主催：明治大学交響楽団／明治大学交響楽団 OB 会

プ ロ グ ラ ム

□ スッペ作曲 喜歌劇「詩人と農夫」序曲

□ ベートーヴェン作曲 ヴァイオリンと管弦楽のためのロマンス

第1番 ト長調 作品40
第2番 ヘ長調 作品50

ヴァイオリン：杉山 茂

□ ビゼー作曲 歌劇「カルメン」より

「ハバネラ」(第1幕)
「ジプシーの歌」(第2幕)

メゾ・ソプラノ：西 明美

以上 指揮：堀越隆一

…………… 休 憩 ……………

□ ベートーヴェン作曲 交響曲第5番 ハ短調 作品67「運命」

第1楽章：Allegro con brio
第2楽章：Andante con moto
第3楽章：Allegro
第4楽章：Allegro

指揮：杉山 茂



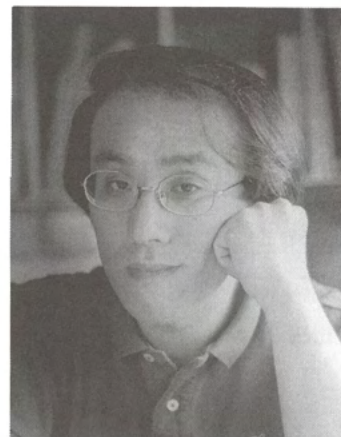
□ メゾ・ソプラノ …… 西 明美

アルトからドラマティックソプラノまでの、3オクターブにたらんとする広い音域を持つ天性の美しい声は、豊麗多彩、蠱惑的で魅惑に溢れる音色を持ち、どの音域も輝かしく力強く響く。「サロメ」のヘロディアスでオペラデビュー。続いて二期会で「ローエングリン」のオルトルートを歌い衝撃的なデビューを果たす。オペラ公演の少ない日本で、メゾ・ソプラノの重要かつ難役を次々歌い、一作毎に、歌唱、演技共に大きさを増し、日本のオペラ界で高い評価を確立している。最近では、斉藤記念フェスティバルで、小沢征爾指揮のオペラ「火刑台のジャンヌダルク」に参加する他、リサイタルやコンサートに大活躍である。明治大学交響楽団第47回定期でマーラー作曲「さすらう若人の歌」を共演。第39回音楽コンクール第3位。第19回ジロー・オペラ賞受賞。二期会会員。



□ ヴァイオリン／指揮 …… 杉 山 茂

5歳よりわが国ヴァイオリン界の重鎮であった(故)岩船雅一氏に師事。以後岩船氏が他界されるまでの25年間にわたって師のもとでヴァイオリンの研鑽を積む。1968年明治大学交響楽団のポピュラーコンサートでソリストを務める。同団第46回定期(1969年)及び第48回定期(1971年)で、メンデルスゾーンとブルッフのヴァイオリン協奏曲を共演。その他演奏旅行等でも度々共演する。1970年明治大学法学部を卒業後、岩船門下の同志と弦楽合奏団「パブロ合奏団」を組織し、定期的な活動が続ける。1979年初のリサイタルを開催、これまで度々リサイタルを開く。数年前より江東区の委嘱を受け、青少年のための演奏会を毎年十数回開催。その他1991年から指揮活動も始める。日本弦楽指導者協会会員。



□ 指 揮 …… 堀 越 隆 一

1972年明治大学政治経済学部を卒業後、1975年東京芸術大学作曲科に入学。この年、ピアノ曲“CORROSION-by Pianist”が『高橋アキのタペ』で取り上げられ、これがデビューとなる。1983年同大学院を修了。以後作曲活動の傍ら様々なジャンルへの編曲、またアマチュアオーケストラの指導やTVドラマ、映画、劇音楽の指揮等その活動は多岐にわたっている。海外では'93年のタタール国際現代室内楽フェスティバル、'94年にはコストロマ国際現代音楽祭に招かれ、カザン、ウクライナ、コストロマ等旧ソ連邦の各都市で作品が演奏。また、アムステルダム等ヨーロッパの都市でも作品が放送、演奏されている。モノドラマ『リア王』等作品多数。(社)日本作曲家協議会、日本現代音楽協会会員。

□明治大学交響楽団OB会

会長 木元尚男



明治大学の、また神田駿河台の街のシンボルでもあります、明治大学記念館講堂は、幾多の役割を終え、この秋、新しく生まれ変わることになりました。

記念館が竣工した昭和3年は、大戦から次なる大戦へ向かう、束の間の平和な時期であり、この会場で、尾原勝吉先生をはじめとする有志の方々は、オーケストラ演奏活動の未来に、限らない夢と希望を膨らませ、初舞台を迎えられたことと思います。その後、三浦環、巖本真理、江藤俊哉、外山滋、渡辺暁雄の各氏をはじめ、多くの著名な音楽家が客演して下さった、昭和史を語る舞台でもありました。

記念館講堂は、われわれ明治大学交響楽団にとりましては、定期演奏会の会場でありましたし、舞台の屋根裏に部室を持つ、部活動の拠点そのものでありました。

この思い出深い明治大学記念館講堂の取り壊しを聞きつけた、全国800余名のOBから、もう一度青春の炎を燃やしたあの舞台で演奏出来ないかと、熱い希望が寄せられました。幸い大学側のご理解とご支援をいただき、今おわかれコンサート開催の日を迎えます。これまでご協力賜りましたご関係の皆様方に、心より厚く御礼申し上げます。

本日、一堂に会した私たちは、一つの時代を締めくくる幕を下ろします。しかしそれは、次なる時代への始まりでもあります。新しい時代の幕開けを、皆様方と共に迎えることを期待し、ご挨拶いたします。

□明治大学交響楽団

大正12年（1923年）4月、尾原勝吉、菊地雙三郎等により明治大学交響楽団は創設されました。同年6月に和田小太郎氏の指揮により、第1回定期演奏会を開催して以来、昨年12月には第71回定期演奏会を迎えました。発足以来、定期演奏会の他、春の演奏会、夏の全国各地への演奏旅行、音楽教室等大変意欲的な活動を続け、学生オーケストラ界屈指の伝統と実力を受

け継いでおります。また、平成5年には創立70周年を迎え、その記念定期演奏会がオーチャードホールで盛大に開催されました。

【OB：約950名 現団員：約160名】
尚、昭和3年に行なわれた記念館落成祝賀コンサートでは、本日と同じ曲目を、ヴァイオリンと指揮を尾原勝吉が、メゾ・ソプラノを佐藤美子で演奏しています。

□明治大学理事長 岡村 了一



「記念館おわかれコンサート」を明治大学交響楽団・同OB会共同で開催されること、70年に近い記念館の歴史を振り返り、その間に目まぐるしく存在した邦家の隆替、人の去来というものを本学に結びつけて顧みればまことに感無量なものがあります。

遠い昭和3年（1928年）、記念館落成祝賀コンサートで演奏した曲を再現して、老いて去り行く記念館への餞とすると云うのです。朝の紅顔忽ち夕べの白髪となる。

社会の諸文化現象の中で極めて高い次元に位置する音楽のその中でも、交響楽はその最高形式に位置するものです。心して演奏に魅了され、心を奮って明治大学の新しき飛躍を誓い合いたいと存じます。

□明治大学総長 宮崎 繁樹



大学の久しくシンボルだった明治大学記念館がいよいよ本年11月に解体され、新たな建物が建てられますが、この解体に先立ち明治大学交響楽団OB会が別れを惜しんで「明治大学記念館おわかれコンサート」を開催されますことは、意義あることと存じます。

この記念館は、関東大震災により一挙に明大校舎が廃墟と化した後、苦境の中で大正15年に着工され、教職員、学生、校友一体となって建設されたもので、以来本学の中心校地となり、長年に亘って学生、卒業生、大学関係者に大変親しまれ愛され続けてきました。このような事情で記念館との別れに際しては、格別な惜別の情があると思います。本日のこの演奏会で、明治大学交響楽団OB会が、長年の伝統と磨き上げられた技術を駆使して、音楽を愛する人々の心に、寂しくも名残りの尽きぬ良い思い出を与えて頂けるものと確信し、ご挨拶と致します。

□明治大学学長 岡野 加穂留

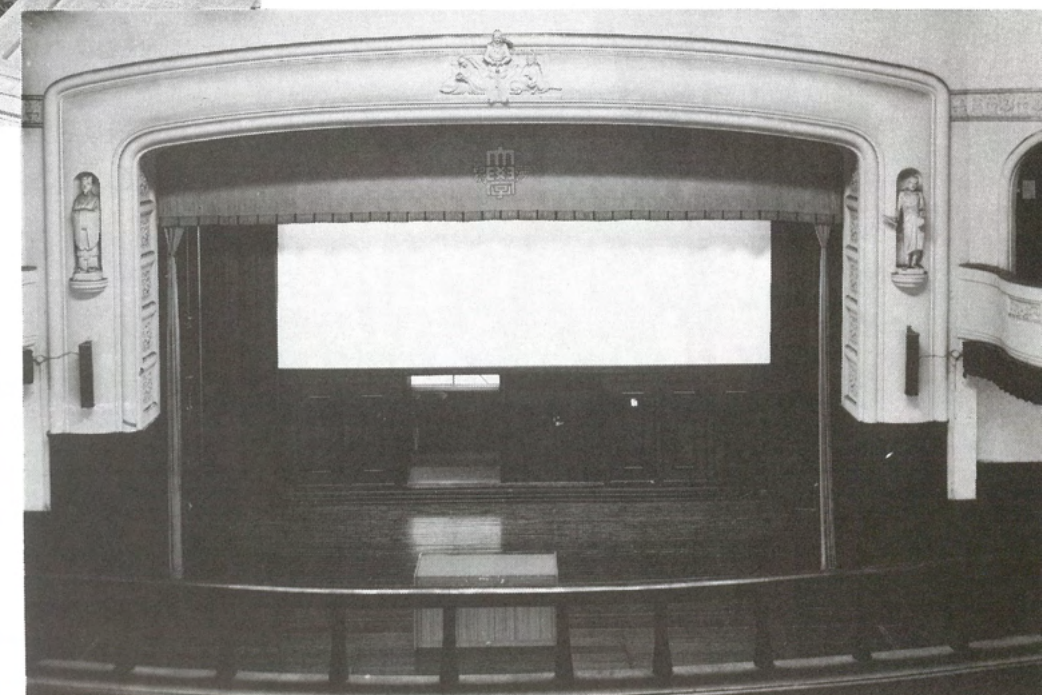
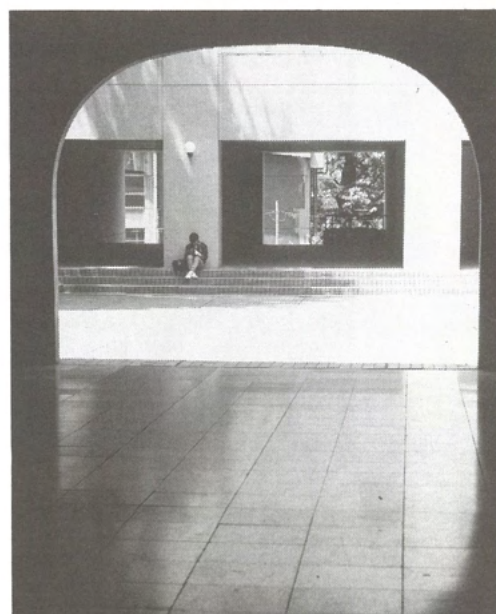
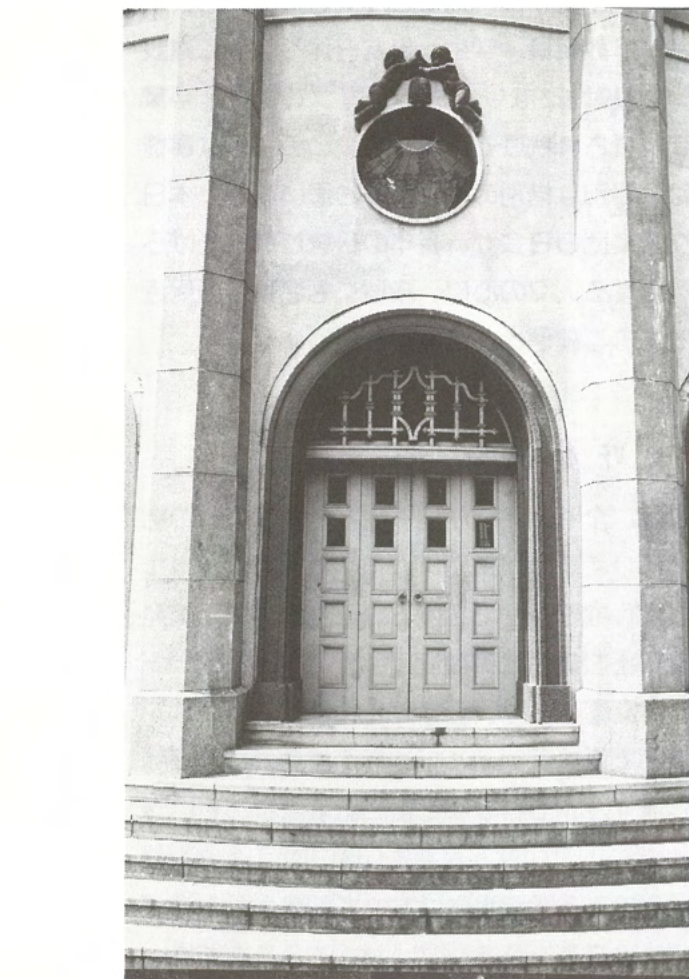
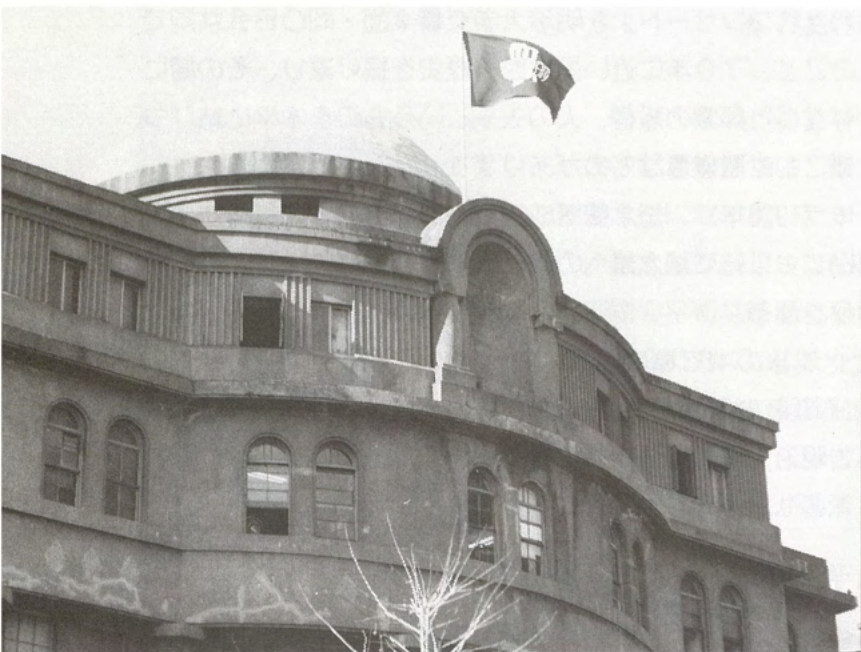


明治大学記念館は、昭和3年、全明大人（学生・校友・教職員）の結集によって再建されたものであります。以来70年近く、本学のシンボルとして存在してきました。しかしながら、この度、駿河台地区の再開発に伴って残念ながら取り壊しの止む無きにいたりしました。

この期にあたって、明治大学交響楽団が、記念館への惜別のコンサートを取りおこなうことは、極めて意義深いことだと考えます。交響楽団は、創立70年余の歴史を有しますが、それはまた正に記念館とともに歩んできた歴史でもあります。

今後とも、精神のハイマートである明治大学において、豊かなキャンパスライフのために、素晴らしい音楽を創造していかれることを期待いたします。

永遠なり記念館



明治大学のシンボル・記念館は昭和3年（1928年）に完成しました。『グレコ・ローマン・奈良平安式』という、和洋折衷式の鉄筋コンクリート6階建ての、鳳凰の翼にも似たその姿は、我々明大に学んだ全学生にとって、さまざまな青春のドラマを刻んで来た、思い出の建物です。

交響楽団と、この記念館のつきあいは古く、900有余ほとんど全ての楽団員は、この記念館と共に過ごしたといっても過言ではありません。

大正12年に創立された当団は、昭和3年、記念館の落成祝賀コンサートとして、第5回定期演奏会を本日より同じ曲で開催しています。以後幾度となく、この記念館講堂で演奏会が開催され、ヴァイオリニスト巖本真理や、外山滋、指揮の渡辺暁雄の各氏をはじめ、多くの音楽家がこの記念館の舞台上、我々交響楽団と共に演じました。

戦時中も演奏会は続けられ、昼夜二回行なわれた演奏会では、生のクラシック音楽に接したいと、押し寄せた多数の聴衆で、記念館があふれかえったと、当時のOBは伝えています。

現在この記念館の5階に、我々交響楽団の部室があります。講義に出ない日はあっても、この部室に顔を出さない日はない、そんな学園生活を送った団員は数限りなくいます。

□記念館と明治大学交響楽団の歩み

1923年4月	明治大学交響楽団創立
1923年6月	第1回定期演奏会（帝大基督教青年会館）
1928年6月	第4回定期演奏会（記念館）
1928年12月	第5回定期演奏会（記念館落成記念）
1929年6月	第6回定期演奏会（記念館）
1932年6月	第8回定期演奏会（記念館）
1940年12月	第18回定期演奏会（記念館）
1941年6月	第19回定期演奏会（記念館）
1941年11月	第20回定期演奏会（記念館）
1942年6月	第21回定期演奏会（記念館）
1942年12月	第22回定期演奏会（記念館）
1943年6月	第23回定期演奏会（記念館）
1943年9月	第24回定期演奏会（記念館）
1946年12月	第25回定期演奏会（記念館）
1948年11月	第26回定期演奏会（記念館）
1951年12月	第27回定期演奏会（記念館）
1952年12月	第28回定期演奏会（記念館）
1953年11月	第29回定期演奏会（記念館）
1954年11月	第30回定期演奏会（記念館）
1955年11月	第31回定期演奏会（記念館）
1956年12月	第32回定期演奏会（記念館）
1957年12月	第33回定期演奏会（記念館）
1958年5月	第34回定期演奏会（記念館）
1958年12月	第35回定期演奏会（記念館）
1959年11月	第36回定期演奏会（記念館）
1960年12月	第37回定期演奏会（記念館）
1961年11月	第38回定期演奏会（記念館）
⋮	⋮
1993年12月	第70回定期演奏会（オーチャードホール）



〔記念館の演奏会／1940年第18回定期演奏会〕

■昭和17年、記念館で17歳の青二才が、突如生まれて初めて、ピアノ伴奏でフルートのソロを吹く事になりました。と申しますのは、ハーモニカ合奏部の定期演奏会で、客演のピアニストが突然キャンセルとなり、その穴埋めに先輩から命令が下ったのです。当然結果は……御想像にお任せします。記念館の思い出では、その数年後に、私の弟がオーケストラの定期演奏会で、「ロマンス」に参加して居ますが、今回計らずも半世紀を経て、私も同じ曲で参加させて頂き、感慨も一入です。感謝しています。 — 川見 禎洪 (S. 19)

■現役時代最も多くの時間を過ごし、最も多くの人々と出会い、語り、そして別れた場所、それが記念館。あまりの思い出の多さに個々の例はここでは語れない。しかし、あの時の舞台、あの時の顔、激論、そして燃るような思い、それら全てが染み付いた記念館が今、永久に姿を消そうとしている。まさにシラーが語るように「美しきもの（思い出）は滅びねばならない」のだろうか。

— 江野 弘幸 (H. 1)

■明大記念館はいつも、私達の学生時代の思い出の中心にあります。この5階にあるオケの部室までの古びた階段を、私達はいったい何度登り降りした事でしょう。また、当時の入学式もこの記念館で、学部毎に分かれて行なわれたものでした。私達の青春のシンボルそのものであるこの記念館が、取り壊される事となり、本当に残念で仕方ありません。沢山の思い出をありがとう。そしてさようなら……。 — 増永 浩司 (S. 43)

■オケと言えば「明オケ」、指揮者と言えば「勝ちゃん（チャン勝とも言ったけど）」、練習場と言えば「記念館」と、思い出深い場所でした。その記念館がなくなるのは、大変残念なことです。記念館の練習で思い出すのは、ステージが狭くてヴァイオリンの最後尾に座って練習していた時、思わずちょっと下がって落っこち、そのままヴァイオリンをほうり投げてしまったことです。幸い楽器は無キズでした。 — 小沢 弘 (S. 47)

■かつて明大と東京工業大学は共に（故）尾原勝吉先生の指揮の元に活動する兄弟オーケストラでした。明大オケには、ファゴット吹きが少なかったこともあって、殆どの演奏活動に参加させてもらっており、自分の学校のように出入りしていました。記念館については、それらの活動を通して数々の思い出がありますが、何よりも明大オケの友人達と知り合うこととなった場を与えてくれたことに対して改めて感謝いたします。

— 東京工業大学卒 小平 雅紀 (S. 50)

■記念館……その中にいるだけで思い出される数々の出来事は、同時代を生きた、掛け替えのない仲間との絆の証。新入生のお腹を触ってやめさせてしまった彼のこと、汚物を踏んだ靴を泣きながら洗っていた彼のこと、いつも決まって「ピーターと狼」の1フレーズを弾き続けた彼女のこと、そして、勇猛果敢にも痴漢に平手打ちを食らわした彼女のこと。懐いは驚ることがない……。 — 清水 孝 (S. 61)

代表委員

木元 尚男 (S. 29)

会 計

成川 涉 (S. 44)

松本 美奈 (H. 3)

委 員

岡野 弘志 (S. 35)

本間 次郎 (S. 40)

成川 涉 (S. 44)

岡崎 義典 (S. 44)

杉山 茂 (S. 45)

中村 徳之 (S. 50)

坂部 重敬 (S. 54)

菅野 真 (S. 56)

白川 悟志 (S. 62)

白木信一郎 (甞3年)

備 品

松井 靖彦 (H. 1)

広 報

吉岡 洋作 (S. 41)

堀澄 浩 (S. 61)

ライブラリアン

川見 禎洪 (S. 19)

松田 一夫 (S. 44)

持丸 賢一 (S. 47)

前田 実 (S. 48)

綿貫 静子 (S. 50)

司 会

小沼 俊男 (S. 36)

コンサートマスター

増永 浩司 (S. 43)

坂部 重敬 (S. 54)

舞台／照明協力

綿貫 裕介 (明大生)

他 有 志

運 営

岡崎 義典 (S. 44)

杉山 茂 (S. 45)

内 務

本間 次郎 (S. 40)

岩田 一弥 (S. 45)

穴吹 文乃 (H. 7)

Violin

福井 康祐 (S. 33)

松島 一匡 (S. 38)

進藤 正毅 (S. 39)

☆増永 浩司 (S. 43)

杉山 茂 (S. 45)

河合 文夫 (S. 46)

☆佐竹ますみ (S. 46)

市川 徹 (S. 47)

小澤 弘 (S. 47)

片山 永子 (S. 47)

佐藤 裕嗣 (S. 47)

高松 邦子 (S. 47)

青山 博 (S. 48)

前田 実 (S. 48)

佐藤 盟 (S. 51)

坂部 重敬 (S. 54)

亀井 玲子 (S. 56)

大貫 健治 (S. 59)

川真田隆志 (S. 60)

浦口奈雅子 (S. 61)

松岡 茂治 (S. 62)

篠塚 義弘 (S. 63)

石原 竹彦 (H. 5)

小野 弘達 (H. 5)

杉山 巧 (甞4年)

大江摩弥子 (甞3年)

橋浦のぞみ (甞3年)

三上 泰史 (甞3年)

寺田 史人 (甞1年)

Viola

木元 尚男 (S. 29)

海江田 勉 (S. 36)

☆本間 次郎 (S. 40)

田代 正志 (S. 46)

原 光郎 (S. 48)

綿貫 静子 (S. 50)

鈴木 健一 (S. 52)

森 克美 (S. 55)

山本 祥子 (S. 57)

北川 英恵 (S. 62)

江野 弘幸 (H. 1)

岸田 尚子 (H. 2)

末崎 綾子 (H. 6)

菅原まき子 (H. 7)

土井 貴由 (甞3年)

Cello

久保寺敏郎 (S. 43)

☆岩田 一弥 (S. 45)

北嶋 健児 (S. 52)

手島 俊明 (S. 52)

山本 敦子 (S. 55)

清水 聡子 (S. 62)

岡本弥基子 (H. 2)

杉本 雄一 (H. 4)

中村 洋一 (H. 6)

平原 陽子 (H. 7)

Contrabass

松田 朗 (S. 57)

☆長谷川嘉彦 (S. 59)

清水 孝 (S. 62)

片桐 浩司 (H. 6)

安井 里子 (H. 6)

上原 学 (H. 7)

蒲田 明 (甞3年)

白木信一郎 (甞3年)

Flute

川見 禎洪 (S. 19)

根橋 徹郎 (S. 37)

山本 悟人 (S. 48)

五十嵐孝信 (S. 50)

宮重 春美 (H. 2)

☆松本 美奈 (H. 3)

山口 圭子 (H. 4)

江間 郁 (H. 6)

後藤 活代 (H. 7)

森 千春 (H. 7)

Oboe

小林 和夫 (S. 44)

☆持丸 賢一 (S. 47)

市川 智 (S. 52)

梅津 公一 (S. 56)

徳武 康子 (H. 2)

八代 慎 (H. 6)

Clarinet

牛尾 尚義 (S. 37)

岡崎 義典 (S. 44)

☆松井 靖彦 (H. 1)

雨宮ひろみ (H. 4)

宇佐美佳代子 (H4)

野口 朝子 (H. 4)

石井 浩一 (H. 5)

Faggote

五十嵐 功 (S. 52)

☆福村 寛史 (H. 4)

大部 裕次 (甞3年)

小平 雅紀 (甞1年)

Contrafaggote

大部 裕次 (甞3年)

Horn

☆松田 一夫 (S. 44)

渡部 敏雄 (S. 47)

中嶋 美佳 (S. 63)

高橋 康介 (H. 4)

鈴木 瑞枝 (甞3年)

小林賢一郎 (甞2年)

Trumpet

☆成川 涉 (S. 44)

石塚 昌実 (S. 50)

富張 省三 (S. 55)

白川 悟志 (S. 62)

井村 京子 (H. 5)

Percussion

内田 栄一 (S. 31)

☆久保田 弘 (S. 43)

小熊早千香 (S. 62)

浦辺 靖子 (H. 6)

桜沢あや子 (甞3年)

中臺 一博 (甞3年)

木村 友 (甞2年)

Trombone

☆天明 昭男 (S. 52)

松本 良平 (H. 6)

田原 亜紀 (H. 7)

篠田 昌克 (甞1年)

Tuba

赤田 良治 (S. 59)

Harp

矢澤みさ子 (賛助出演)

☆…パートリーダー
() 数字は卒業年
学生は現学年



よもやま話「記念館の解体」

記念館が壊されること自体を知った時期はよく覚えていませんが、大学2年（1994年）の頃にはすでに団として考えなければならなかったと記憶しています。実際には1995年秋に閉鎖、敷地内の武家屋敷跡の発掘調査後、1996年2月頃から解体が始まりました。私たちの代にとって1995年は、ちょうど運営学年である大学3年にあたりました。記念館が無くなるということは、校内で合奏する場所を失うということであり、合奏のたびに外部の練習場所で行うことを意味していました（当時大学側から代替のスペースを準備することは未定との通達）。

金銭的にも楽器運搬作業も負担であり、これらの負担で活動が縮小していくのではないかと懸念していましたが、次の学年は、記念館が無くなっても次の代の演奏会でシンフォニックダンスやマーラー5番という大曲を選曲するなど、引き続き大曲にチャレンジし続け、合奏場所など関係ないということを示してくれました。4年生、卒団の追い出し合宿時、記念館が無くなっていろいろ心配していたけれど、大丈夫そうだ（偉そうですが）というような話をしたのを覚えています。記念館解体を知った1995年6月演奏会時の指揮者である小林幸人氏の合奏中の言葉が非常に印象的なので引用します。

「君たちのオケの音は、この記念館の響きが作り上げた音がする。
だから、無くなってもこの響きをよく覚えておいてほしい。」

中台 一博（Perc 平成9年卒）



特集：第 100 回記念定期演奏会

明治大学交響楽団

第100
定期演奏会

明治大学交響楽団
第100回記念定期演奏会

2023年12月28日(木)

開場 17:30 / 開演 18:15

すみだトリフォニーホール 大ホール

第 100 回記念定期演奏会

第 100 代幹事長 潮田 駿



2023 年 12 月 28 日、すみだトリフォニーホールにて「第 100 回記念定期演奏会」を開催しました。

中田延亮先生の指揮で以下の曲目を演奏しました。

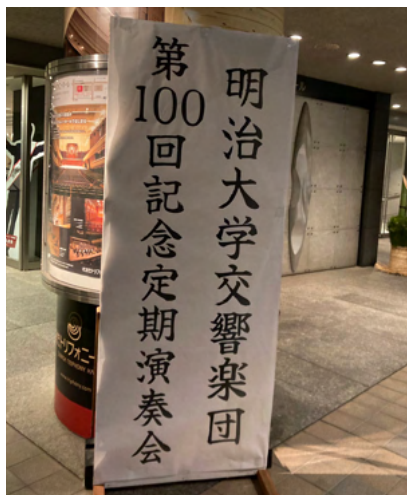
- ・D. ショスタコーヴィチ / 祝典序曲 Op.96
- ・P. チャイコフスキー / バレエ組曲「白鳥の湖」より抜粋
- ・S. ラフマニノフ / 交響曲第 2 番

すみだトリフォニーホールはほぼ満席近くで、当日は 1400 人のお客様にお越しいただきました。ご来場いただいた皆さま、大変ありがとうございました。

第 100 回定期演奏会の開催にあたり、約 1 年前からトレーナーの先生方、OBOG、そして 100 代の同期とともに、話し合いを重ねていました。当初は、「大阪への演奏旅行」、「東京芸術劇場やサントリーホールといった、普段ではなかなか演奏することのできないコンサートホールでの開催」、「ベートーヴェン《交響曲第 9 番》の演奏」など、100 回周年という節目ということで、なざまざまな案が挙がりました。そうした中で、100 代のパートリーダー・セクションリーダー・インスペクター・内務を中心に何度も話し合いを重ねた結果、「第 100 回定期演奏会は、今まで通りの定期演奏会として開催しよう」という方針に落ち着きました。

第 100 回記念定期演奏会で指揮をしてくださったのは、中田延亮先生でした。大変ご多忙の中で指揮をお引き受けいただき、誠にありがとうございました。先生と本格的な合奏ができたのは、12 月 25 日から 27 日までのわずか 3 日間ほどでした。本番直前の限られた 3 日間の中で仕上げなければならないという不安や焦りは、きっと多くの団員が感じていたことと思います。しかし、日頃のトレーナーの先生方による丁寧なご指導、そして当時インスペクターを務めていた妹尾を中心とした練習計画のもと、団員一同は本番に向けて日々練習を重ねてきました。特に本番直前の 3 日間は、朝から晩までオーケストラに没頭する“明オケ漬け”の 3 日間となりました。授業やバイトなど、他のことに気を取られず、音楽・明オケだけに向き合うことができたこの時間は、非常に贅沢で、かけがえのない経験となりました。

そして迎えた本番当日。会場には大変多くのお客様が足を運んでくださりました。ロビーにはたくさんのフラワースタンドが設置され、明治大学交響楽団 100 周年として記念すべき定期演奏会となりました。



青春そのもの

第 100 代コンサートミストレス 安達 由愛生

第 100 回記念定期演奏会は、私にとって青春そのものでした。

入団当初は自分たちが 100 代であるということを特段意識しておりませんでした。OBOG の皆様やトレーナーの先生方から大きなご期待をお寄せいただいていることを知るうちに、この演奏会を成功させたいという気持ちが私どものなかで徐々に強くなっていったように感じております。

ただ、1 世紀も前から連綿と続いてきた当団の歴史を意識すればするほど、それに固執してしまう場面も時にはありました。選曲会議では 100 周年に相応しい曲を選ぶとするあまり、自分たちのやりたいことが見えなくなり会議が難航しました。しかし結局は、この演奏会はもちろん当団にとって大切な節目ではありますが、例年と変わらない E 年の引退の演奏会であるという点に立ち返り、良い意味で地に足を付けた曲選びができたと思っています。

8 月からは練習がはじまりましたが、私どもにとって不安なことが 1 つありました。それは、指揮者の中田先生に練習に来ていただける回数が、本番までに前中・メインを合わせて 5 回しかなかったことでした。しかもその初回練習は 11 月で、最後の 3 回は演奏会の直前に固まっていた。しかし、その焦りを 100 代のみならず 101 代・102 代の後輩たちも感じてくれていました。中田先生の初回練習までに、自分たちが目指せる最高点に到達していなければ演奏会に間に合わないという気持ちを現役生全員で共有し、1 回 1 回の練習に真剣に取り組むことができました。

何か 1 つのことに對して、あれだけの大人数で、あれほどの情熱を持って取り組むという経験は、人生で一度あるかないかの貴重なものであったと思っています。本当に仲間に恵まれました。徐々に上手になっていく喜びと皆と一緒に演奏できる楽しさを実感する毎日で、今振り返っても、本当に幸せであったと心から思います。

この演奏会は、それぞれの役職を十二分に全うしてくれた 100 代の同期、毎日のようにある練習に欠かさず来てくれた後輩たち、引退後にも関わらず支えてくださった 99 代の先輩方、そして、多くのご支援を賜りました OBOG の皆様のおかげをもちまして、成功することができたと思っています。この場をお借りして、深く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



明治大学交響楽団は創立100周年を迎えました

明治大学交響楽団 創立100周年 記念フェスティバル
Meiji University Symphony Orchestra 100th Anniversary Festival Week

明治大学交響楽団 第100回定期演奏会
指揮者 中田延亮氏を迎え 100周年を記念する 定期演奏会

2023年12月28日(木)
【開場】17:30 【開演】18:15
■【会 場】すみだトリフォニーホール
■【入場料】¥1,000(完全予約制)
■【指 揮】中田延亮
■【曲 目】ショスタコヴィチ…「祝典序曲」
チャイコフスキー…「白鳥の湖」抜粋
ラフマニノフ…交響曲第2番

各コンサートホールへのアクセスはホームページに掲載しています

【主催】明治大学交響楽団創立100周年を祝う会 【TEL】090-2249-6847 (杉山)
【共催】明治大学交響楽団 【協賛】明治大学交響楽団OB会 【Mail】obmeloke100@gmail.com

全明治大学交響楽団 100周年祝賀演奏会
各地から集まったOBと学生が世代を超え 舞台上でひとつになる

2024年1月21日(日)
【開場】13:30 【開演】14:00
■【会場】明治大学アカデミーホール
■【入場】無料・直接会場へお越し下さい
■【指揮】杉山 茂
ワーグナー…ニルンベルクの名歌手第1幕への前奏曲
チャイコフスキー…スラブ行進曲
シベリウス…交響詩フィンランディア
ベートーヴェン…交響曲第5番ハ短調「運命」

明治大学交響楽団創立100周年祝賀会
明治大学交響楽団OB・OGの皆様へ
創立100周年を記念して祝賀会を開催致します。
大学関係者・歴代指揮者・トレーナーや同窓の仲間達と 旧交を温めませんか？ 奮ってお集まり下さい。
■【会場】明治大学リハビリテーション学院附属ホール
■【開場】2024.1.21(日)17:00 ■【観覧】Webを掲載下さい

100 周年記念事業チラシ表面

創立 100 周年の記念品

白雲石素材のコースターを作成し、ご支援 いただいた方々に感謝のしるしとして配布し ました。



創立 100 周年記念特性コースター

100 周年を祝う会では、OB 皆様のご支援を機 会あるごとにお願ひし、多くの皆様から多大のご 支援を賜りました。お陰様で企画した各事業を盛 大に開催する事ができました。OB・OG の皆様 のご協力に心から御礼を申し上げます。

また、明治大学理事長・学長・校友会長・連合 父母会など、学校関連の皆様にも多大のご支援を 賜りまして、心から感謝を申し上げます。



2023 年 6 月演奏会ロビーにて

明治大学交響楽団 創立100周年 記念フェスティバル
Meiji University Symphony Orchestra 100th Anniversary Festival Week

明治大学交響楽団
明治大学交響楽団は、大正12年(1923年)に新交響楽団(現NHK交響楽団)創設時のメンバーであった故尾原勝吉先生(当団本 久指揮者)等の手によって創設されました。関東大震災や太平 洋戦争をはじめとする幾多の困難を乗り越えて、2023年創立 100周年を迎えました。これまで著名かつさまざまな指揮者や ソリストを招いての演奏会や、北海道・東北から関西・中国地 方への演奏旅行、さらにはテレビやラジオなどのメディアを 通じた活動も行ってきました。千代田区駿河台校舎・杉並区和 泉校舎・川崎市生田校舎にそれぞれ部室を設け、団員数は200 名を超えます。演奏会は前期に6月演奏会、後期に定期演奏会、 年コンサート、そして3月には各セクションによるコンサートを開催しています。このような演 奏会に向け、トレーナーの先生の御指導のもと、団員一丸となって練習に励んでいます。演奏会以 外の活動としては、年3回の合演、入学式・卒業式での式典演奏、学園祭への参加、明治大学父母 会への依頼演奏など多岐にわたります。

永久指揮者 尾原勝吉
明治50年島根県生まれ。大正13年明治 大学卒業。在学中ヴァイオリンを習得。 卒業後は近衛秀麿・山田耕仲氏らとN 日大交響楽団の前身・新交響楽団を結 成。ヴァイオリン奏者また指揮者とし て活躍。昭和29年退任まで、N響草創期の原動力と なる。以後は母校明大をはじめ学生オーケストラ の育成に専心。明治大学交響楽団、東京工業大学管弦 楽団、お茶の水音楽学院、一橋大学管弦楽団、華心 女子大学オーケストラクラブを総力的に指導。昭和 59年に引退するまで、各大学ジョイントによる演奏 会も数回重ねた。長年の学生オケ指導に対し勲五等 双光旭日章を受賞。昭和59年3月6日逝去。享年81歳。

明治大学交響楽団創立100周年を祝う会
世話人代表…杉山 茂 世話人副代表…本間次郎
監事…長藤 通 会 計…清水 孝・鈴木 隆有
世話人…成川 淳・若田 一弥・御所隆幸・白木信一郎
梅野 野・尾玉真純・森科学也・堀 徹介
[学生]山崎武雄(99代幹事長)・栗田 聡(100代幹事長)
[Webアシスト]伊藤美月 [記念オーケストラアシスト]堀中 聡
■事務局:東京都江東区大島2-20-15
■E-mail: obmeloke100@gmail.com
■URL: https://sites.google.com/view/meicke100

各コンサートホールへのアクセスについては上記ホームページに掲載しています

100 周年記念事業チラシ裏面

全明治大学交響楽団 100 周年祝賀演奏会

明治大学交響楽団創立 100 周年を祝し、全 OB・OG 及び現役学生による「全明治大学交響楽団 100 周年 祝賀オーケストラ」を編成して、祝賀コンサートを開催しました。

遠方にお住まいのOB・OGの皆様にも参加していただけるよう配慮し、2023年8月11日から月一回のペー スで練習が行なわれ、現役団員や、1961 年卒の OB を筆頭に、東北や関西・九州にお住まいの多くの OB が、 和気あいあいの練習を続けました。

演奏会は 2024 年 1 月 21 日母校アカデミーホールにおいて、理事長・学長・校友会長・歴代部長・父母 会役員など多くの御来賓や、演奏会には出演いただけなかった、たくさんの OB・OG や、お客様のご来場 のもと、盛大に開催されました。

演奏会の終わりに、出演者全員及びご来場の来賓やお客様が一体となって「明治大学校歌」を斉唱し、感 動の中、幕を閉じました。



全明治大学交響楽団 100 周年祝賀演奏会



明治大学交響楽団創立 100 周年記念祝賀会

明治大学交響楽団創立 100 周年を祝して、2024 年 1 月 21 日、祝賀演奏会終了後、明治大学リバティータワーの「岸本・宮城ホール」に会場を移して、多くの大学関係者、OB・OG、現役学生が集うなか、記念祝賀会を開催しました。

令和五年度
明治大学交響楽団創立一〇〇周年記念祝賀会

式次第

一、開式の辞
学長 大六野 耕作 様

一、来賓祝辞
学長 大六野 耕作 様
理事長 柳谷 孝 様
学長 大六野 耕作 様
会長 北野 大 様
明治大学交響楽団創立一〇〇周年を祝う会
会長 萩村 隆幸 様

一、乾杯
明治大学交響楽団
部長 鈴木 賢志 様

一、懇談
世話人代表挨拶
明治大学交響楽団創立一〇〇周年を祝う会
世話人代表 杉山 茂 様

一、中締め
明治大学交響楽団
名誉会長 向殿 政男 様

一、閉式の辞
以上



明治大学理事長 柳谷 孝



明治大学学長 大六野 耕作



明治大学校友会会長 北野 大



明治大学連合父母会会長 萩村 隆幸



明治大学交響楽団部長 鈴木 賢志



100 周年を祝う会世話人代表 杉山 茂



ご来賓の皆様



明治大学交響楽団前部長 向殿 政男



久しぶりの再会を喜ぶ OB 達



司会を務めた
河合 智紀 (学生 3 年)



全明治大学交響楽団
100周年
祝賀演奏会

全明治大学交響楽団100周年祝賀演奏会



Program

楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』第一幕への前奏曲

R. ワグナー

スラブ行進曲 作品31

P. I. チャイコフスキー

交響詩『フィンランディア』作品26

J. シベリウス

— 休憩 —

交響曲第5番 ハ短調 作品67「運命」

L. V. ベートーヴェン

第1楽章 Allegro con brio

第2楽章 Andante con moto

第3楽章 Allegro. attacca

第4楽章 Allegro - Presto

指揮：杉山 茂（昭和45年卒）

2024年1月21日（日） 開場 13:30 開演 14:00

明治大学アカデミーホール



明治大学理事長 柳谷 孝

明治大学交響楽団が創部100周年を迎えられ、記念演奏会となる「全明治大学交響楽団100周年祝賀演奏会」が盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。これもひとえに、鈴木賢志部長や、日頃より団員をご指導いただいております指揮者、トレーナーの先生方をはじめとする、歴代関係諸氏の熱意とご尽力の賜物と存じます。

さて、1923年に尾原勝吉先生を中心として創設された明治大学交響楽団は、明治大学唯一のオーケストラサークルとして長い歴史と伝統を誇り、音楽をこよなく愛する学生、OB・OGの皆さん方の手により発展を遂げております。入学式、卒業式における荘厳な演奏をはじめ、校友会、父母会行事における演奏会など、全国各地で精力的に活動を展開しており、聴く人の心を揺り動かす、重厚な響きを奏でる音色は、世代を問わず多くのファンを魅了し続けております。

本日の演奏会が、ご来場の皆様方に多くの感動をもたらす会となることをご期待申し上げますとともに、創部100周年を機に新たな歩みを進めてゆく明治大学交響楽団の今後ますますの発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

明治大学長 大六野 耕作

本日は、全明治大学交響楽団100周年祝賀演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。また、祝賀演奏会が盛大に開催されますこと、心よりお慶び申し上げます。

明治大学交響楽団は、1923年（大正12年）に明治大学管弦楽団として創立されて以来、本学唯一の公認オーケストラサークルとして1世紀の伝統を築いてまいりました。毎年の入学式・卒業式での演奏や定期演奏会などでは、本学学生・ご父母・校友をはじめとした多くの聴衆の皆さまにオーケストラの素晴らしさ、音楽の奥深さ、そして本学の伝統の音色を伝えてまいりました。

本日の演奏会は、100周年を祝し現役学生と交響楽団 OB・OG が合同で演奏されると伺っております。長い歴史と伝統を受け継いできた「明オケ」だからこそ創りあげることのできるハーモニーが、本日会場にお越しの皆さまを非日常の至福のひと時にお連れすることでしょう。

結びにあたり、日頃から学生の指導にあたられているご関係者の皆さまに心から敬意と感謝を申し上げますとともに、明治大学交響楽団が益々発展することを祈念申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。



明治大学交響楽団部長 鈴木 賢志

この度は、100周年祝賀演奏会を開催されますこと、誠にありがとうございます。本演奏会の実施に当たっては、OBOGの皆様より多大なるご支援を賜ったことがっております。おかげさまでこのような盛大な演奏会を執り行うことができましたことに深く感謝いたしますとともに、この開催に向けて集まった力こそが、明治大学交響楽団が持つ歴史の長さ、その重みを示しているのだなとつくづく感じます。

ここ数年は、特にコロナ禍によって、団員諸君は非常に大変な時を過ごされ、私も心の痛い思いをして参りました。それだけに、この100年目という節目を無事に迎えられることを心からうれしく思います。これからも上級生は後輩にタスキをつなぎ、私もいつか後任にバトンを渡す時が参りますが、明治大学交響楽団はこれからも永く発展の道を歩んでいくことと思います。ご関係の皆様におかれましては、引き続きのご支援、ご指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

明治大学交響楽団創立100周年を祝う会 世話人代表 杉山 茂

明治大学交響楽団創立100周年を迎え、日頃より当団の演奏会にご来場頂いている多くの皆様を始め、ご支援を頂いている大学関係者、指揮者、その他関係各位に、心より御礼申し上げます。

本日の100周年祝賀演奏会は、祝賀記念行事の一環として、OBと学生が合同でオーケストラを編成し、演奏会を開催するものです。昭和37年卒のOBを筆頭に、東北や九州など各地から集まったOB・OGが、和気あいの練習を続けて来ました。髪の毛が少し薄くなったOB達が、自分の孫や子供のような世代の、若い現役学生と一緒に、舞台上で演奏する様は、100年という歴史の重みを感じられ、大変感慨深いものです。

一世紀という長い道のりは、所属した1966名すべてのOB・OGの情熱や、芸術音楽に真摯に向き合う姿勢が、受け継がれてきた証であります。全団員に深く敬意を表し、自分もその一員でいたことを誇りに思い、祝賀演奏会の舞台に立ちたいと思っています。

今後、新たな100年を目指して明治大学交響楽団が、ますます隆盛を続けることを祈念して、ご挨拶とさせていただきます。



100回の定期演奏会

回数	西暦	開催日	会場	指揮者	曲目
1	1923年	6月24日	帝大基督教青年会館	和田 小太郎	シューベルト作曲軍隊行進曲、ベルグソン作曲アリア(クラリネット独奏堀田慶喜)、マスネ作曲タイスの瞑想曲(ヴァイオリン独奏尾原勝吉)、その他
2	1925年	5月17日	上野自治会館	和田 小太郎	ワーグナー作曲「タンホイザー」より行進曲、ボワエルデュー作曲「バクダットの太守」、その他
3	1926年	12月4日	明治大学第40番教室	山口 常光	ボワエルデュー作曲「バクダットの太守」、ベートーヴェン作曲交響曲第6番「田園」、その他
4	1928年	6月9日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	シューベルト作曲「ロザムンデ」序曲、スッペ作曲「詩人と農夫」、ハイドン作曲交響曲第6番その他
5	1928年	12月2日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	スッペ作曲「詩人と農夫」序曲、ベートーヴェン作曲「ロマンス」(独奏尾原勝吉)、ビゼー作曲「カルメン」ハバネラ(独唱佐藤美子)、ベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」、その他
6	1929年	6月30日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲、グリーグ作曲「ペールギュント」、ビゼー作曲「アルルの女」、シューベルト作曲交響曲第8番「未完成」
7	1931年	10月16日	日本青年館	井田 富之	シューベルト作曲「ロザムンデ」、イヴァノヴィッチ作曲「ドナウ河の漣」、ハイドン作曲交響曲第100番「軍隊」、その他
8	1932年	6月17日	明治大学記念館講堂	井田 富之	トマ作曲「レーモン」序曲、マスカーニ作曲「アヴェマリア」他(ソプラノ独唱松原操)、ハイドン作曲交響曲第100番「軍隊」、その他
9	1932年	11月4日	日比谷公会堂	尾原 勝吉	シューベルト作曲交響曲第5番(本初初演)、ベートーヴェン作曲「ロマンス」(ヴァイオリン独奏尾原勝吉)、ヴェルディ作曲「椿姫」乾杯の歌(ソプラノ独唱平井美奈子)、その他
10	1933年	6月2日	日本青年館	尾原 勝吉	シベリウス作曲交響詩「フィンランディア」、ベートーヴェン作曲ピアノ協奏曲第3番(ピアノ独奏井上信子)、シューベルト作曲交響曲第8番「未完成」、その他
11	1933年	10月26日	日本青年館	尾原 勝吉	チャイコフスキー「スラブ行進曲」、メンデルスゾーン作曲ヴァイオリン協奏曲(独奏高玉枝)、ビゼー作曲「カルメン」ハバネラ他(独唱松原操)、ベートーヴェン作曲交響曲第1番、その他
12	1934年	11月20日	日本青年館	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲ピアノ協奏曲第5番(ピアノ独奏遠見豊子)、グノー作曲作曲「ファウスト」宝石の歌(ソプラノ独唱中村淑子)、ドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」、その他
13	1935年	11月12日	日本青年館	尾原 勝吉	資料なく不明
14	1936年	12月1日	日本青年館	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲ヴァイオリン協奏曲(独奏ローベルト・ボラック)、モーツァルト作曲「フィガロの結婚」アリア(独唱岡種子)、ドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」、その他
15	1937年	11月25日	日本青年館	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲、レハール作曲「メリー・ウィドー」ヴィリアの歌(ソプラノ独唱松原操)、ビゼー作曲「アルルの女」第1・第2組曲、その他
16	1938年	11月14日	日本青年館	尾原 勝吉	ロッシーニ作曲「セビリアの理髪師」序曲、ブルッフ作曲ヴァイオリン協奏曲第1番(ヴァイオリン独奏巖本真理)、ベートーヴェン作曲交響曲第7番、その他
17	1939年	11月20日	日本青年館	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲、モーツァルト作曲ヴァイオリン協奏曲第5番(ヴァイオリン独奏田中富貴子)、ベートーヴェン作曲交響曲第3番「英雄」、その他
18	1940年	12月1日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲、ベートーヴェン作曲ピアノ協奏曲第5番(ピアノ独奏藤田晴子)、ベートーヴェン作曲交響曲第8番、その他
19	1941年	6月14日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	シベリウス作曲交響詩「フィンランディア」、トマ作曲「ミニヨン」君を知るや南の国(ソプラノ独唱井口小夜子)、シューベルト作曲交響曲第8番「未完成」、その他
20	1941年	11月9日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン独奏巖本真理)、ビゼー作曲「カルメン」第1・第2組曲、管弦楽団男性合唱団による日本民謡・ニグロ民謡、その他
21	1942年	6月14日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ヨハン・シュトラウス作曲「皇帝円舞曲」、ヴェルディ作曲「椿姫」より乾杯の歌他(ソプラノ独唱長門美保)、ベートーヴェン作曲交響曲第7番、その他
22	1942年	12月6日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲、ヨハン・シュトラウス作曲「美しき青きドナウ」、ビゼー作曲「アルルの女」第1・第2組曲、その他
23	1943年	6月13日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ヨハン・シュトラウス作曲「ウィーンの森の物語」、ヴェルディ作曲「リゴレット」より女心の歌他(ソプラノ独唱長門美保)、ベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」、その他
24	1943年	9月	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ヨハン・シュトラウス作曲「皇帝円舞曲」、スッペ作曲「輕騎兵」序曲、ベートーヴェン作曲交響曲第8番、その他
25	1946年	11月7日・8日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ヨハン・シュトラウス作曲「皇帝円舞曲」、メンデルスゾーン作曲ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン独奏江藤俊哉)、シューベルト作曲交響曲第8番「未完成」、その他
26	1948年	11月13日	明治大学記念館講堂	渡辺 義雄	ヨハン・シュトラウス作曲「ウィーンの森の物語」、シューベルト作曲交響曲第8番「未完成」、ベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」、その他
27	1951年	12月7日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	シベリウス作曲交響詩「フィンランディア」、ヨハン・シュトラウス作曲「芸術家の生涯」、ドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」、その他
28	1952年	12月13日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲、ベートーヴェン作曲「ロマンス」(ヴァイオリン独奏岩瀬龍太郎)、ベートーヴェン作曲交響曲第7番、その他
29	1953年	11月20日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ロッシーニ作曲「セビリアの理髪師」序曲、ブルッフ作曲ヴァイオリン協奏曲第1番(ヴァイオリン独奏植野豊子)、ベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」、その他
30	1954年	11月22日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ヨハン・シュトラウス作曲「ウィーンの森の物語」、ラロ作曲スペイン交響曲(ヴァイオリン独奏植野豊子)、ハイドン作曲交響曲第92番「オックスフォード」、その他
31	1955年	11月29日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	モーツァルト作曲「後宮からの逃走」序曲、ベートーヴェン作曲ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン独奏浦川宜也)、モーツァルト作曲交響曲第41番「ジュピター」、その他
32	1956年	12月4日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	グリンカ作曲「ルスランとリュドミラ」序曲、メンデルスゾーン作曲ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン独奏外山滋)、ドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」、その他
33	1957年	12月2日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ボロディン作曲「イーゴリ公」ダッタン人の踊り、ベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」、ベートーヴェン作曲交響曲第8番
34	1958年	5月22日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ロッシーニ作曲「セビリアの理髪師」序曲、チャイコフスキー「白鳥の湖」組曲、シューベルト作曲交響曲第8番「未完成」、その他
35	1958年	12月9日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	モーツァルト作曲「偽の女庭師」序曲、モーツァルト作曲フルート協奏曲第2番(フルート独奏菅井源太郎)、チャイコフスキー作曲交響曲第6番「悲愴」、その他
36	1959年	11月24日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	プロコフィエフ作曲「ピーターと狼」、ブルッフ作曲ヴァイオリン協奏曲第1番(ヴァイオリン独奏外山滋)、ベートーヴェン作曲交響曲第7番、その他
37	1960年	12月6日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	リスト作曲「前奏曲」ベートーヴェン作曲、ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン独奏二宮久美)、ドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」
38	1961年	11月28日	明治大学記念館講堂	尾原 勝吉	ベルリオーズ作曲「ローマの謝肉祭」、序曲メンデルスゾーン作曲ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン独奏久保陽子)、ベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」、その他
39	1962年	11月26日	日本青年館	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲、チャイコフスキー「スラブ行進曲」、グリーグ作曲ピアノ協奏曲(ピアノ独奏野島稔)、ベートーヴェン作曲交響曲第8番
40	1963年	12月4日	杉並公会堂	尾原 勝吉	シベリウス作曲交響詩「フィンランディア」、ベートーヴェン作曲ピアノ協奏曲第5番(ピアノ独奏池本純子)、ドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」
41	1964年	11月20日	杉並公会堂	尾原 勝吉	シベリウス作曲「カレリア組曲」、モーツァルト作曲ヴァイオリン協奏曲第5番(ヴァイオリン独奏徳永二男)、ベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」、その他
42	1965年	12月20日	杉並公会堂	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「プロメテウスの創造物」序曲、ラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲第2番(ピアノ独奏神谷郁代)、ベートーヴェン作曲交響曲第7番、その他
43	1966年	11月20日	虎ノ門ホール	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「フィデリオ」序曲、ベートーヴェン作曲ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン独奏森ゆう子)、チャイコフスキー作曲交響曲第5番、その他
44	1967年	11月29日	杉並公会堂	尾原 勝吉	ロッシーニ作曲「セビリアの理髪師」序曲、シベリウス作曲「カレリア組曲」行進曲、ベートーヴェン作曲ピアノ協奏曲第5番(独奏前田信吉)、ベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」
45	1968年	11月11日	虎ノ門ホール	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲、J.S.バッハ作曲管弦楽組曲代3番、ドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」、その他
46	1969年	11月24日	虎ノ門ホール	尾原 勝吉	ウェーバー作曲「オベロン」序曲、メンデルスゾーン作曲ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン独奏杉山茂)、ブラームス作曲交響曲第1番、その他
47	1970年	12月6日	虎ノ門ホール	尾原 勝吉	ブラームス作曲「悲劇的序曲」、マーラー作曲「さすらう若人の歌」(メゾソプラノ独唱西明美)、フランク作曲交響曲、その他
48	1971年	11月22日	杉並公会堂	尾原 勝吉	ベートーヴェン作曲「フィデリオ」序曲、ブルッフ作曲ヴァイオリン協奏曲第1番(ヴァイオリン独奏杉山茂)、チャイコフスキー作曲交響曲第6番「悲愴」
49	1972年	12月9日	杉並公会堂	尾原 勝吉	スメタナ作曲交響詩「モルダウ」、ハイドン作曲交響曲第100番「軍隊」、ブラームス作曲交響曲第4番
50	1973年	12月22日	杉並公会堂	尾原 勝吉	モーツァルト作曲交響曲第40番、小山清茂作曲「管弦楽の木挽歌」、ブラームス作曲交響曲第2番

回数	西暦	開催日	会場	指揮者	曲目
51	1974年	11月30日	杉並公会堂	尾原 勝吉	フンパーディンク「ヘンゼルとグレーテル」序曲、モーツァルト作曲交響曲第41番「ジュピター」、シベリウス作曲交響曲第2番
52	1975年	12月22日	郵便貯金ホール	尾原 勝吉	ブラームス作曲「悲劇的序曲」、ヴィヴァルディ作曲ファゴット協奏曲(ファゴット独奏前田信吉)、ブルックナー作曲交響曲第4番「ロマンティック」
53	1977年	1月14日	杉並公会堂	尾原 勝吉	リスト作曲「前奏曲」、シベリウス作曲「カレリア組曲」、チャイコフスキー作曲交響曲第5番
54	1977年	12月16日	杉並公会堂	久保田 孝	モーツァルト作曲「魔笛」序曲、マーラー作曲「さすらう若人の歌」(バリトン野中匡雄)、シベリウス作曲交響曲第2番
55	1978年	11月25日	杉並公会堂	久保田 孝	メンデルスゾーン作曲序曲、「フィンガルの洞窟」ストラヴィンスキー作曲舞踊組曲「火の鳥」、ブラームス作曲交響曲第3番
56	1979年	12月28日	新宿文化センター	白柳 昇二	ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲、プロコフィエフ作曲「ロメオとジュリエット」、ブラームス作曲交響曲第4番
57	1980年	12月24日	虎ノ門ホール	白柳 昇二	ワーグナー作曲「ローエングリン」第3幕への前奏曲、ワーグナー作曲「ジークフリート」森のささやき、ブルックナー作曲交響曲第5番
58	1981年	12月22日	荒川区民会館	白柳 昇二	ムソルグスキー作曲交響詩「禿山の一夜」、チャイコフスキー作曲ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン独奏徳永二男)、ムソルグスキー作曲「展覧会の絵」
59	1982年	12月8日	杉並公会堂	三石 精一	ショスタコーヴィチ作曲「祝典序曲」、ドビュッシー作曲「小組曲」、チャイコフスキー作曲交響曲第5番
60	1983年	12月14日	荒川区民会館	三石 精一	グノー作曲「ファウスト」よりバレエ音楽抜粋、マーラー作曲交響曲第1番「巨人」
61	1984年	12月19日	新宿文化センター	田代 俊文	コープランド作曲「エル・サロン・メヒコ」、フォーレ作曲組曲「ドリー」、シベリウス作曲交響曲第2番
62	1985年	12月9日	練馬文化センター	本名 徹二	ヴェルディー作曲「ナブッコ」序曲、ブーランク作曲バレエ音楽「牝鹿」、チャイコフスキー作曲交響曲第6番「悲愴」
63	1986年	12月15日	練馬文化センター	本名 徹二	ワーグナー作曲「リエンツィ」序曲、ウェーバー作曲ファゴット協奏曲(ファゴット独奏前田信吉)、ショスタコーヴィチ作曲交響曲第5番
64	1987年	12月14日	五反田慣習保険ホール	本名 徹二	ワーグナー作曲「ニュルンベルクのマイスター・ジンガー」第1幕の前奏曲、ベートーヴェン作曲交響曲第9番「合唱付き」
65	1988年	12月26日	新宿文化センター	本名 徹二	チャイコフスキー作曲序曲「ロメオとジュリエット」、ドビュッシー作曲「小組曲」、プロコフィエフ作曲交響曲第7番
66	1989年	12月10日	人見記念講堂	新通 英洋	ドビュッシー作曲「民謡を主題としたスコットランド風行進曲」、フォーレ作曲組曲「ドリー」、プロコフィエフ作曲「ロメオとジュリエット」
67	1990年	12月24日	新宿文化センター	新通 英洋	ベルリオーズ作曲「ローマの謝肉祭」序曲、ブーランク作曲ピアノとオーケストラのための協奏曲(ピアノ独奏佐藤美保子)、ブラーム作曲交響曲第2番
68	1991年	12月11日	川口リリアメインホール	渡邊 一正	オネゲル作曲交響的運動「バシフィック231」、ファリャ作曲バレエ音楽「三角帽子」、ブラームス作曲交響曲第4番
69	1992年	12月6日	人見記念講堂	長田 雅人	ヴェルディ作曲「運命の力」序曲、ワーグナー作曲「トリスタンとイゾルデ」第1幕前奏曲・愛の死、マーラー作曲交響曲第1番「巨人」、その他
70	1993年	12月10日	オーチャードホール	福田 一雄	サン＝サーンス作曲「死の舞踏」、チャイコフスキー作曲バレエ音楽「眠りの森の美女」、ブルックナー作曲交響曲第4番「ロマンティック」
71	1994年	12月26日	人見記念講堂	鎌田 由紀夫	モーツァルト作曲歌劇「魔笛」序曲、ダンディ作曲フランス山人の主題による交響曲、チャイコフスキー作曲交響曲第1番
72	1995年	12月26日	人見記念講堂	田代 潤生	ウェーバー作曲歌劇「魔弾の射手」序曲、チャイコフスキー作曲バレエ音楽「くるみ割り人形」、ベルリオーズ作曲幻想交響曲
73	1996年	12月21日	人見記念講堂	新通 英洋	バーンスタイン作曲キャンディード序曲、バーンスタイン作曲「ウェストサイドストーリー」より「シンフォニックダンス」、マーラー作曲交響曲第5番
74	1997年	12月26日	人見記念講堂	田代 潤生	ブラームス作曲悲劇的序曲、チャイコフスキー作曲バレエ音楽「白鳥の湖」、シュトラウス作曲交響詩「英雄の生涯」
75	1998年	12月12日	東京オペラシティ	本名 徹二	ワーグナー作曲歌劇「リエンツィ」序曲、シュトラウス作曲交響詩「死と変容」、ブルックナー作曲交響曲第3番
76	1999年	12月19日	すみだトリフォニーホール	小野田 宏之	デュカス作曲交響詩「魔法使いの弟子」作品92、シベリウス作曲バイオリン協奏曲、マーラー作曲交響曲第1番
77	2000年	12月16日	新宿文化センター	小野田 宏之	モーツァルト作曲歌劇「魔笛」序曲、リスト作曲交響詩「レ・プレリュード」、ブルックナー作曲交響曲第6番
78	2001年	12月16日	すみだトリフォニーホール	榊原 徹	ヴェルディ作曲歌劇「運命の力」序曲、J.シュトラウス作曲喜歌劇「こもりり」より抜粋、ベルリオーズ作曲幻想交響曲
79	2002年	12月22日	人見記念講堂	岡田 司	スメタナ作曲連作交響詩「我が祖国」より「モルダウ」、ハチャトゥリアン作曲バレエ組曲「仮面舞踏会」、チャイコフスキー作曲交響曲第5番
80	2003年	12月27日	すみだトリフォニーホール	岡田 司	ヴェルディ作曲歌劇「シチリア島のクペの祈り」序曲、ビゼー作曲「アルルの女」第一組曲、第二組曲より、ラフマニノフ作曲交響曲第2番
81	2004年	12月25日	人見記念講堂	岡田 司	ロッシーニ作曲 歌劇「セヴィリヤの理髪師」序曲、ムソルグスキー作曲交響詩「禿山の一夜」、マーラー作曲交響曲第1番
82	2005年	12月24日	すみだトリフォニーホール	小倉 輝彰	ブラームス作曲大学祝典序曲、デュカス作曲交響詩「魔法使いの弟子」、ブルックナー作曲交響曲第4番
83	2006年	12月25日	すみだトリフォニーホール	岡田 司	サン＝サーンス作曲歌劇「サムソンとデリラ」よりバツカナル、ファリャ作曲「三角帽子」第二組曲、ベルリオーズ作曲幻想交響曲
84	2007年	12月25日	人見記念講堂	岡田 司	シャブリエ作曲狂詩曲「スペイン」、コダーイ作曲組曲「孔雀」、チャイコフスキー作曲交響曲第6番「悲愴」
85	2008年	12月25日	すみだトリフォニーホール	岡田 司	ブラームス作曲悲劇的序曲、コープランド作曲「ビリー・ザ・キッド」、ブラームス作曲交響曲第2番
86	2009年	12月25日	新宿文化センター	増田 宏昭	ワーグナー作曲歌劇「タンホイザー」序曲、ドヴォルザーク作曲交響詩「真昼の魔女」op.108、ブラームス作曲交響曲第4番
87	2010年	12月23日	すみだトリフォニーホール	宮松 重紀	ドヴォルジャーク作曲「謝肉祭」序曲、チャイコフスキー作曲バレエ音楽「くるみ割り人形」、マーラー作曲交響曲第1番
88	2011年	12月26日	練馬文化センター	宮松 重紀	デュカス作曲交響詩「魔法使いの弟子」、M.ファリャ作曲組曲「三角帽子」より抜粋、ショスタコーヴィチ作曲交響曲第5番
89	2012年	12月27日	すみだトリフォニーホール	大勝 秀也	フンパーディンク作曲歌劇「ヘンゼルとグレーテル」より前奏曲、ハチャトゥリアン作曲バレエ音楽「スバルタス」、ベルリオーズ作曲幻想交響曲
90	2013年	12月25日	すみだトリフォニーホール	山下一史	ショスタコーヴィチ作曲祝典序曲、ビゼー作曲組曲「カルメン」より抜粋、ラフマニノフ作曲交響曲第2番
91	2014年	12月20日	すみだトリフォニーホール	中田 延亮	ブラームス作曲大学祝典序曲、チャイコフスキー作曲バレエ音楽「くるみ割り人形」、ブルックナー作曲交響曲第4番
92	2015年	12月25日	すみだトリフォニーホール	大勝 秀也	ドヴォルザーク作曲「謝肉祭」序曲、リスト作曲交響詩「レ・プレリュード」、マーラー作曲交響曲第5番
93	2016年	12月26日	すみだトリフォニーホール	中田 延亮	ヴェルディ作曲歌劇「運命の力」序曲、チャイコフスキー作曲幻想序曲「ロメオとジュリエット」、R.シュトラウス作曲交響詩「英雄の生涯」
94	2017年	12月25日	すみだトリフォニーホール	中田 延亮	ブラームス作曲悲劇的序曲、シューマン作曲「序曲、スケルツォと終曲」、マーラー作曲交響曲第1番
95	2018年	12月25日	すみだトリフォニーホール	中田 延亮	バーンスタイン作曲キャンディード序曲、R.シュトラウス作曲ばらの騎士組曲、ショスタコーヴィチ作曲交響曲第5番
96	2019年	12月24日	すみだトリフォニーホール	中田 延亮	グラズノフ作曲祝典序曲、チャイコフスキー作曲荘厳序曲「1812年」、ラフマニノフ作曲交響曲第2番
97	2020年	12月25日	すみだトリフォニーホール	和田 一樹	グリエール作曲バレエ組曲「青銅の騎士」より、芥川也寸志作曲弦楽のための三楽章、大橋堯一作曲Oh-o!Meiji明オケ金打のためのラプソディー、ドヴォルザーク作曲交響曲第8番
98	2021年	12月24日	すみだトリフォニーホール	和田 一樹	チャイコフスキー作曲スラブ行進曲、チャイコフスキー作曲バレエ組曲「眠れる森の美女」、チャイコフスキー作曲交響曲第5番
99	2022年	12月28日	すみだトリフォニーホール	和田 一樹	スッペ作曲「輕騎兵」序曲、ボロディン作曲歌劇「イーゴリ公」よりダッタン人の踊り、マーラー作曲交響曲第1番
100	2023年	12月28日	すみだトリフォニーホール	中田 延亮	ショスタコーヴィチ作曲祝典序曲、チャイコフスキー 作曲バレエ組曲「白鳥の湖」より抜粋、ラフマニノフ作曲交響曲第2番

※第97回は新型コロナウイルスの感染拡大のためオーケストラではなく各セクションの曲を披露

楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』第一幕への前奏曲 / R. ワーグナー

ワーグナー(1813年～1883年)はドイツ、ライプツィヒに生まれる。15歳の時にベートーヴェンの第九交響曲を聴き、作曲家になる決意をしたと伝えられている。第九交響曲は彼の理想の芸術となり、後に自分のオペラ作品は「第九交響曲」の継続だと主張するのが常であった。総合芸術としての楽劇を大成させた作曲家で、ワグネリアンといわれる崇拜者を生み、19世紀後半の音楽に多大の影響を残した。彼は自身の楽劇を上演するための専属劇場をドイツ、バイロイトに完成させ、今でも毎年夏に「バイロイト音楽祭」として公演が続けられている。

楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』は、1962年～1967年にかけて作曲された。実在した靴屋の親方「ハンス・ザックス」の物語がテーマで、ワーグナーの作品の中でも大変面白い雰囲気表現したオペラとなっている。その冒頭に演奏されるこの「前奏曲」は明るく力強い「親方歌手」の旋律や、劇中で使われている動機が次々と現れ盛り上がる中、壮麗で輝かしい響きで結ばれている。

スラブ行進曲 作品31 / P. I. チャイコフスキー

チャイコフスキー(1840年～1893年)はロシア、ウラル地方に生まれる。法律学を学び一等書記官として法務省に入省したが、21歳でペテルブルクの音楽教室(後のペテルブルク音楽院)で音楽理論を学ぶ。1866年に作曲家として初の作品、交響曲第1番「冬の日の幻想」を作曲。その後『ロメオとジュリエット』やピアノ協奏曲第1番等の作品が続いていく。彼は无尽蔵のメロディー、甘美で、官能的、独特のロシア的メロディー、そして、もの悲しく、内省的な音楽を表現した。有名な3大バレエ音楽『白鳥の湖』『眠りの森の美女』『くるみ割り人形』は現在でも世界中で演奏されている。

「スラブ行進曲」は1876年に作曲された。19世紀半ば、トルコに対してのセルビア独立運動の戦が続き、ロシアでも義勇軍が召集され、その負傷兵救援資金募金のための慈善演奏会で演奏するために作曲された。曲の冒頭は、戦争の犠牲者への挽歌となっているが、途中からロシア国歌が奏され、徐々に高まっていき、クライマックスには高らかにロシア国歌が鳴り響き、スラブ民族の勝利を確信して幕を閉じる。

交響詩『フィンランディア』作品26 / J. シベリウス

シベリウス(1865年～1957年)はフィンランド、ハメ州に生まれる。7歳のころからピアノやヴァイオリンを習う。姉と弟を交えて度々三重奏を行って、音楽に対する興味を培っていった。18歳の頃の手紙に「少々お粗末ですが三重奏曲を書きました」と記している。1885年からヘルシンキ音楽院で作曲などを学ぶ。当初はヴァイオリニストになる夢を抱いていたが、ヴィルトゥオーゾになるための訓練を始めるには遅すぎたとして、作曲家へと進む。フィンランドの最も偉大な作曲家として国民に愛され、シベリウスの誕生日である12月8日を「フィンランド音楽の日」として祝っている。

『フィンランディア』は1899年に作曲された。当時のフィンランドは、事実上帝政ロシアの圧制下にある状況であった。この『フィンランディア』は民族的歴史劇『いにしえからの情景』の付随音楽の中の一曲であったが、翌年独立した管弦楽曲として再発表したものである。美しい自然に囲まれた祖国への賛歌であり、民族の叫びがここには含まれていて、作曲当時からフィンランド国民の愛国心に強く訴え、熱狂的な歓迎を受けた。

交響曲第5番 ハ短調 作品67「運命」/ L. V. ベートーヴェン

ベートーヴェン(1770年～1827年)はドイツ、ボンに生まれる。クラシック音楽における最も重要な作曲家の一人である。クラシック音楽に興味のない人でも、「運命」や「第九交響曲」、ピアノの「エリーゼのために」などを耳にする機会はあったと思う。ベートーヴェンの音楽は、それまでの宮廷などで演奏されるための音楽から、庶民に向けて発表する音楽であり、一曲ずつが芸術作品として、作曲家の心の訴えを表現して、音楽の歴史の中でも全く革命的なものであった。

交響曲第5番「運命」は1805年～1808年にかけて作曲された。「運命」という副題は日本固有のもので、冒頭の4つの音符が「運命はかく扉をたたく」とベートーヴェン自身が語ったとされて付けられた。この冒頭の4つの音符は、この交響曲全楽章を通して用いられ、重要な「動機」となっている。全体は4つの楽章から出来ていて、第1楽章はこの冒頭の4つの音が全体を支配している。続く第2楽章はゆったりとした穏やかな旋律の美しい曲である。速めの3拍子で演奏される第3楽章は、楽章の中間で荒々しい低音による旋律が他の楽器へと重なった後、第3楽章冒頭の旋律に戻り、そのまま第4楽章へと繋がっていく。全楽器による絢爛たる主題から始まる第4楽章は人生の勝利を暗示し、曲は華麗で歓喜に満ちて幕を閉じる。

Violin	佐藤 優太郎 1年 尾島 好子 1年 亀岡 達之介 1年 河合 優里奈 1年 グレズ・アルマ 1年 後藤 大心 1年 澤山 駿 1年 師井 千鶴 1年 柴田 太郎 1年 下條 陽菜子 1年 内藤 脩平 1年 橋本 優 1年 福田 里帆 1年 細川 佳奈 1年 松嶋 希美 1年 吉田 理乃 1年 吉原 実那 1年 高橋 飛羽 2年 高橋 愛実 2年 武田 直人 2年 原野 桂樹 2年 山下 佑月 2年 荻原 和子 3年 丹原 杏菜 3年 島中 清吾 3年 早川 雅 3年 藤岡 秀至 3年 三上 湧太 3年 宮崎 萌子 3年 小川 健太 4年 藤間 くるみ 4年 吉田 樹 4年 前田 実 1973年卒 行方 敦子 1975年卒 坂部 重敏 1979年卒 笠松 秀臣 1980年卒 尾谷 晃生 1982年卒 浦口 拓也 1983年卒 浦口 奈雅子 1986年卒 西村 明宏 1992年卒 菅野 安澄 1999年卒 森田 俊一 2018年卒	Violoncello	谷口 悠沙 1年 中原 晴花 1年 山室 亮太郎 1年 山本 沙来 1年 チャニコーンブラディト・ナバツ 2年 貝原 里歩子 3年 細馬 朋樹 3年 松橋 月奈 3年 青木 正幸 4年 山路 武瑠 4年 岩立 一男 1976年卒 北嶋 健児 1977年卒 手島 俊明 1977年卒 青木 和厚 1978年卒 谷口 勲 1980年卒 岩崎 良亮 1年 星野 芽衣 1年 橋本 海音 3年 柳沢 毅 4年 大森 史郎 1986年卒 上原 学 1995年卒 高井 萌々子 2023年卒 日野 希美 1年 上野 桃太郎 2年 柳本 佳凜 2年 佐藤 琴 3年 諏訪 はな 3年 戸塚 雄貴 4年 山本 くに子 1980年卒 岡部 さおり 1993年卒 安西 里織 2年 豊田 瑠音 3年 渡邊 慧多郎 4年 持丸 賢一 1972年卒 市川 智 1977年卒 梅津 公一 1981年卒 杉村 康昭 1985年卒 新谷 留加 1年 関原 颯太 2年 小山田 智咲 2年 石川 佳奈美 2年 岡田 雄太 3年 荒田 夏寧 4年 津曲 萌花 4年 牛尾 尚義 1962年卒 巷岡 知行 1977年卒 小松 晃 1992年卒 新谷 留加 1年 関原 颯太 2年 小山田 智咲 2年 石川 佳奈美 2年 岡田 雄太 3年 荒田 夏寧 4年 津曲 萌花 4年 牛尾 尚義 1962年卒 巷岡 知行 1977年卒 小松 晃 1992年卒 竹野谷 愛美 1年 辻 結衣 1年 関井 汐織 2年 高橋 弦貴 2年 若林 夏希 3年 小長井 なずな 3年 小山田 智紀 2007年卒	Contra-Fagotto	高橋 弦貴 2年	Horn	佐藤 佳生子 1年 月館 勇太郎 1年 生田 真穂子 2年 榎本 隼之介 2年 山本 祐嗣 2年 山下 侑華 3年 石橋 優希 4年 兵藤 透 1977年卒 荒瀬 真 1985年卒 遠藤 智史 1999年卒	Trumpet	佐藤 陽 1年 上田 彩乃 3年 大久保 洗輝 4年 鈴木 駿平 4年 石塚 昌実 1975年卒 大須賀 厚子 1997年卒 堀 創介 2013年卒 金澤 亜衣子 2023年卒	Trombone	大槻 佳歩 1年 佐々木 知絃 1年 小林 威之 1994年卒 佐々木 智之 2008年卒 奥山 浩基 2021年卒 勝亦 弦輝 2023年卒	Tuba	赤田 良治 1984年卒	Percussion	中谷 惇之介 3年 金坂 義徳 1970年卒 御所脇 和幸 1985年卒 柴 萌南 2023年卒	Harp	本間 美貴子 賛助出演	ステージマネージャー	畑中 乾 2008年卒	スタッフ	安藤 玲 3年 貝原 里歩子 3年 近藤 彩葉 3年 相馬 来美 3年 松橋 月奈 3年 山岸 茉空 3年 石渡 美海 2年 大沼 夏美 2年 鈴木 詩音 2年 宮下 忠明 2年	パンフレット制作	宮脇 愛果 2023年卒
--------	---	-------------	---	----------------	----------	------	--	---------	---	----------	--	------	--------------	------------	---	------	-------------	------------	-------------	------	--	----------	--------------

■明治大学交響楽団の歴史

明治大学交響楽団は、1923(大正12)年4月末、尾原勝吉、菊地雙三郎、などの諸氏により創立され、陸軍戸山学校の学長補である和田小太郎氏の指揮で、ニコライ堂の一室を借りて練習を開始した。同年6月24日には、第1回定期演奏会が帝大基督教青年会館(現・東京YMCA)で開催された。和田小太郎氏の指揮により、シューベルト作曲ミタリマーチ、ヴァイオリン独奏尾原勝吉によるマスネ作曲タイスの瞑想曲など、全部で11曲が披露された。

創設当時のことを尾原勝吉は「慶應と早稲田にはオーケストラがあつてね。慶應はずいぶんと盛んで、その頃からワグネルと言っていたなあ。僕はそこの準部員みたくなつていて、演奏旅行でもなんでもくつついていったんだ。だけど、いつまでも他所へ行つてたつて仕方がないので、ひとつ明治にも作ろうと思つてね。人を集めて同じようなのを作つて演奏会も開いてね。」と述べている。

1928(昭和3)年の年末には、明治大学の公認となり「明治大学校友会音楽部管弦楽団」となる。1933(昭和8)年頃は、明オケにおいて戦前でいちばん華やかな時代だったと言う。当時映画の「未完成交響曲(1933年公開)」が全盛だったため、シューベルト作曲交響第7番「未完成」とベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」を演奏すれば、必ず超満員となった。

1932(昭和7)年9月には、おそらく明オケ初めての演奏旅行を信州地方へ実施している。1934(昭和9)年には名古屋方面への演奏旅行が行われ、JOCK(名古屋放送局、現・NHK名古屋放送局)よりスタジオ演奏が放送されている。1935(昭和10)年8月には、2週間にわたる東北・北海道演奏旅行が行われる。当時としては画期的な大演奏旅行であった。

1941(昭和16)年12月8日、第二次世界大戦が勃発し、全てが戦時一色になった。戦時下という厳しい状況のもとだったが、活動は活発で、昭和16～18年には、毎年2回の定期演奏会を開催していた。時代的背景からか音楽が少なく、特に交響曲は珍しかったため、演奏会は常に満員だった。1500枚のチケットが売れすぎるほど売れ、1回の演奏会では入場者が溢れてしまうので、昼夜2回のステージを行ったほどである。

終戦を挟んで明治大学交響楽団も厳しい状況下にあったが、そんな中1946(昭和21)年6月22日には芥川也寸志の指揮でNHKラジオより放送があり、同年9月29日には福島県三春町へ演奏旅行を、さらに同年12月7日と8日の2日間、第25回定期演奏会を開催している。

1951(昭和26)年に「明治大学交響楽団」と現在も使われている名称へと改称する。昭和30年代に入り、戦後の混乱もようやく落ち着き、明治大学交響楽団も徐々に活動が活発化し充実していく。団員も増え、それに伴って組織も固まってくる。昭和30～50年にかけては、当時の常任指揮者でもあった尾原勝吉先生の円熟期でもあり、団にとって発展と成長の時期でもあった。

1976(昭和51)年1月14日、明治大学交響楽団第53回定期演奏会が杉並公会堂にて開催された。この演奏会は明治大学交響楽団にとって、尾原勝吉先生との最後の演奏会でもあった。明治大学交響楽団の創立者でもあり、53年にわたって団の全ての面に拘つてきた尾原勝吉先生の引退は、明治大学交響楽団にとって大きな変革の時期を迎えることとなった。

その後、平成時代が訪れ、団は新たな時代とともに多くの挑戦と変化を経験した。そして現在、令和の時代に入り、2023年(令和5)年4月下旬、明治大学交響楽団は創立100周年という大きな節目を迎えた。

これまでの100年間、幾多の困難を乗り越え、変革を経験しながらも、明治大学交響楽団はその音楽活動を続け、現在に至っている。これからも明治大学交響楽団に加入する若人達によって、志が受け継がれ、更なる発展を遂げていくものと確信している。

■世話人名簿

世話人代表		世話人	
杉山 茂	(昭和45年卒)	成川 渉	(昭和44年卒)
		岩田 一弥	(昭和45年卒)
世話人副代表		御所脇 和幸	(昭和60年卒)
本間 次郎	(昭和40年卒)	白木 信一郎	(平成9年卒)
監 事		遠藤 智史	(平成11年卒)
兵藤 透	(昭和52年卒)	海野 亘	(平成13年卒)
		児玉 恵純	(平成14年卒)
		桑村 学択	(平成22年卒)
		堀 創介	(平成25年卒)
会 計		学 生	
清水 孝	(昭和62年卒)	山路 武瑠	(令和4年度幹事長)
鈴木 優有	(令和3年卒)	潮田 駿	(令和5年度幹事長)

Webアシスト：伊藤 美月 (令和3年度幹事長)

100 記念オーケストラアシスト：畑中 乾 (平成20年卒)



よもやま話「積み重なる明オケの歴史」

明治大学交響楽団創立 100 周年記念行事の一環として、杉山茂さん(昭和45年卒)の指揮のもと、現役学生とOB・OGが一堂に会してベートーヴェン「運命」などの演奏を行いました。練習はとても和やかな雰囲気、本番も含めてずっと楽しかった記憶があります。

演奏後には、リバティタワー 23 階にて祝賀会が開催され、柳谷理事長や大六野学長、交響楽団部長の鈴木先生(国際日本学部部長)など多くの大学関係者をお招きしました。祝賀会では、明治大学交響楽団の思い出や歴史を振り返り、100年の歴史の重み・伝統をあらためて感じました。

特に印象深かったのは、ヴィオラの本間さん(昭和50年卒)のお話です。本間さんが現役の頃は、記念館で練習をされていたとのこと。その記念館は1996年に解体されましたが、その造りを再現して造られたのが、私たちが祝賀会を行ったリバティタワー 23 階の記念ホールです。このように、歴史を積み重ねていくことで、未来へのバトンを確かに手渡していくことができるのだと実感しました。

これからも明治大学交響楽団が、150年、200年と、さらなる発展を遂げていくことを心から願っています。

河合 智紀 (Va 令和7年卒)



特集：明治大学交響楽団創立 100 周年記念演奏会

明治大学交響楽団
創立100周年記念オーケストラ

2024年8月17日(土)
ミューザ川崎 シンフォニーホール

明治大学交響楽団 創立 100 周年記念オーケストラ

—Program—

R.シュトラウス 交響詩『ドン・ファン』

R.Strauss Don Juan

G.ガーシュイン ラプソディ・イン・ブルー

G.Gershwin Rhapsody in Blue

Piano：黒木 雪音

休憩

Intermission

C.ドビュッシー 『海』 —管弦楽のための 3 つの交響的素描

C.Debussy La Mer, trois esquisses symphoniques pour orchestre

I.ストラヴィンスキー 組曲『火の鳥』(1919 年版)

I.Stravinsky The Firebird Suite (1919)

休憩

Intermission

M.ラヴェル ボレロ

M.Ravel Bolero

指揮：ジャン＝フランソワ・ヴェルディエ

2024 年 8 月 17 日(土) 16:00 開演

ミューザ川崎 シンフォニーホール

ご挨拶



明治大学交響楽団創立 100 周年記念オーケストラ 代表
明治大学 OB 交響楽団 代表

堀 創介

明オケ創立は 1923 年。これまで震災や戦争も含め様々な困難を乗り越えながら、先代から築き上げてきた「明オケ」という伝統。近年は感染症もあり、現役生は大変な苦労をしながらも、明オケの火を絶やさず活動を続け、無事に 100 周年を迎え、101 年目まで明オケの聖火を繋いでくれました。今回の記念オーケストラにおいては第 52 代～103 代まで幅広い世代の明オケが集結しています。今回の演奏会を起点に明オケ自体がより連携を強め、様々な活動に繋げていければと思います。本日はゲストを多く呼びし、演目も記念にふさわしい豪華なラインナップとなります。最後までどうぞお楽しみください。

尾原記念合奏団 代表 本間 次郎

明治大学交響楽団創立 100 周年記念オーケストラの特別演奏会の開催に、大きな賞讃を送りたいと思います。昨年には明治大学の現役学生による第 100 回記念定期演奏会、今年になり全明治大学交響楽団 100 周年祝賀演奏会も行われました。今回の特別演奏会は、過去の歴史の上立ち、尚かつ、この先の 100 年に向かっての力強いスタートを思わせるものかと心得ます。“前へ”たくましい、力強いエネルギーを感じざるを得ません。本日の演奏が、未来へ響き渡ることを信じております。



Say No Yes Yes 吹奏楽チーム 代表 遠藤 洋一

本日は、明治大学交響楽団創立 100 周年記念演奏会にお越し頂き、誠にありがとうございます。この貴重な機会を通じて各年代の OB・OG と交流することが出来、学生時代にこのような伝統あるサークルにて活動出来たことを誇りに思います。

最後になりますが、演奏会の開催にあたりましてご協力頂きました指揮者、練習指揮者、トレーナーの先生方、支援者の皆様方、関係者の皆様、そして会場にお越し頂きました皆様に重ねて御礼申し上げます。



Say No Yes Yes Youth Orchestra 代表 畑中 乾

昨年、明治大学交響楽団は 100 周年を迎え、新しい歴史の一步を踏み出しました。その門出を祝い、OB を中心に現役生とともに記念演奏会を開く運びとなりました。フランスからの指揮者や素晴らしいソリストの招へい、トレーナーの先生方との共演、チャレンジングなプログラムなど、普段の明オケでは体験できないような時間をお送りいたします。普段より少し長い演奏会になってしまいましたが、明オケサウンドを楽しんでいただければ幸いです。



明治大学交響楽団 幹事長 原野 桂樹

この度は明治大学交響楽団創立 100 周年記念演奏会にお越しいただき誠にありがとうございます。現役としてのわずか 3 年という期間の中でより良いオーケストラを作り上げ、それを引き継いでいくということは当たり前ではありません。100 年間先輩方が繋いでくださった結果、101 代となった今でもその歴史は次の 100 年に向けて続いています。100 周年という節目において、現役生として明オケの偉大な先輩方とこのような素晴らしい舞台で共演できることを大変嬉しく思います。

学校法人明治大学 理事長 柳谷 孝 様



明治大学交響楽団が創立 100 周年を迎えられ、記念演奏会となる「明治大学交響楽団創立 100 周年記念オーケストラ」が盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。これもひとえに、鈴木賢志部長をはじめとする、歴代関係諸氏の熱意とご尽力の賜物と存じます。

さて、1923 年に創設された明治大学交響楽団は、昨年 2023 年に 100 周年を迎え、記念式典や学内外における記念演奏会など、様々なイベントを執り行ってまいりました。本日の「記念オーケストラ」では、現役学生や OB・OG が中心となりオーケストラを結成し、100 周年を飾る集大成の演奏会として、重厚な響きを奏でる音色をお届けいたします。音楽をこよなく愛するご来場の皆様方にとって、多くの感動をもたらす会となりますことを心より願っております。

結びにあたり、創部 100 周年を機に新たな歩みを進めてゆく明治大学交響楽団の今後ますますの発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

明治大学 学長 上野 正雄 様



このたび、明治大学交響楽団創立 100 周年記念オーケストラが盛大に開催されますこと、心よりお祝いを申し上げます。また、多くの皆さま方にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

「明オケ」こと明治大学交響楽団は、本学唯一の公認オーケストラサークルとして、昨年で創立 100 周年を迎えました。活躍の場は幅広く、学外を会場とする演奏会をはじめ、学内行事の入学式や卒業式等でも伝統の音色を届け、たくさんの方々に魅了し続けています。

本日は、現役生と OB・OG を中心とした今回限りのオーケストラが結成されています。「明オケ」だけが奏でることのできる音色が、多くの人々に感動を与え、これまでの 100 年の集大成と、今後の 100 年に繋がる演奏会となりますことを期待しております。

結びになりますが、これまで明治大学交響楽団の発展に貢献された歴代関係者の皆様のご尽力に改めて敬意を表しますとともに、益々の発展を祈念申し上げます、私からの挨拶とさせていただきます。

明治大学 前学長 大六野 耕作 様



明治大学交響楽団（明オケ）創立 100 周年を記念して、現役生、OB・OG が結成した「100 周年記念オーケストラ」が、ミューザ川崎シンフォニーホールにおいて記念演奏会を開催されますこと、心よりお慶び申し上げます。

明オケは、1923 年、新交響楽団（現 NHK 交響楽団）創設時のメンバーであった故尾原勝吉先生を中心に創設され、同年に発生した関東大震災や太平洋戦争等の幾多の困難を大学と共に乗り越えてまいりました。

明オケの特徴は、圧倒的熱量・チャレンジ精神にあります。今回の演奏会でも Orchestre Victor Hugo Franche-Comté 音楽監督の Jean-François Verdier 氏を指揮者に、ダブリン国際ピアノコンクール優勝をはじめ数多くの国際的コンクールで受賞し、世界で活躍されている黒木雪音さんを招聘し、George Gershwin の Rhapsody in Blue（ピアノ独奏）、Debussy の La Mer, trois esquisses symphoniques pour orchestre を含む、5 つの作品に挑戦します。本日も来場の皆様には、熱量高い明オケの演奏をお楽しみ下さい。

明治大学校友会 会長 北野 大 様



明治大学交響楽団創立100周年、おめでとうございます。

100 年もの長きにわたり、脈々と活動が続けてこられた関係の皆様に心からの敬意を表します。

若いころの私にとってクラシック音楽は自分自身の教養の尺度でした。高校時代、全くクラシック音楽を知らず恥をかったのを今でも鮮明に覚えています。そこで成人式の記念にメンデルスゾーンとチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲の LP レコードを購入したり、ベートーヴェンのボンの生家を訪ねたり、またカラヤンが指揮するベートーヴェンの全交響曲の CD を入手するなりと、教養を意識したクラシックファンでした。

今ではそんな見栄でクラシック音楽に接するのではなく、もっと純粋に音楽自体を楽しんで聞いております。クラシック音楽の最大の特徴は聞けば聞くほどその良さがわかっていくことです。

終わりに明治大学交響楽団の更なる発展をお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。

明治大学連合父母会 会長 尾畑 彰一 様



明治大学交響楽団創立 100 周年を迎え、心よりお祝い申し上げます。

この 100 年もの間、交響楽団は多くの試練を乗り越え、数々の名演奏を通じ音楽の喜びを広めてきました。

この 100 年の歩みは、交響楽団を支えてくださった多くの方々の努力と情熱なしには成し遂げられません。現役の学生、OBOG、スタッフ、ご父母の皆様、そして何よりも交響楽団を愛する支援者の皆様に深い感謝の意を表します。皆様の支えがあってこそ、交響楽団はその使命を果たし続けることができます。

その歴史と未来への思いを共有できることを大変嬉しく思います。今後も変わらぬご支援とご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。これからの歩みも、皆様とともに新たな音楽の歴史を刻んでいく事でしょう。皆様のご多幸と、交響楽団のさらなる発展を心より祈念して、お祝いの言葉にかえさせていただきます。

明治大学交響楽団 部長 鈴木 賢志 様



この度は、創立 100 周年記念演奏会を開催されますこと、誠におめでとうございます。本演奏会の実施に当たっては、OBOG の皆様より多大なるご支援を賜ったとうかがっております。おかげさまでこのような盛大な演奏会を執り行うことができましたことに深く感謝いたしますとともに、この開催に向けて集まった力こそが、明治大学交響楽団が持つ歴史の長さ、その重みを示しているのだなとつくづく感じます。

ここ数年は、特にコロナ禍によって、団員諸君は非常に大変な時を過ごされ、私も心の痛い思いをして参りました。それだけに、この 100 年目という節目を無事に迎えられたことを心からうれしく思います。これからも上級生は後輩にタスキをつなぎ、私もいつか後任にバトンを渡す時が参りますが、明治大学交響楽団はこれからも永く発展の道を歩んでいくことと思います。ご関係の皆様におかれましては、引き続きのご支援、ご指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

指揮者紹介



ジャン=フランソワ・ヴェルディエ

Jean-François Verdier

2009 年、《ウェルテル》でパリ・オペラ座バスティーユへデビューを果たし大成功を納めたのに続き、オペラ・バスティーユとパリ・オペラ座から、オペラやバレエの指揮で招かれている。ミュンヘンのバイエルン州立歌劇場、モントリオール交響楽団、ローザンヌ室内管弦楽団、サレルノのヴェルディ劇場、ベネズエラのエル・システマのオーケストラ、名古屋フィルハーモニー交響楽団、パリ室内管弦楽団、フランス国立リヨン管弦楽団、トゥールーズ・キャピトル国立管弦楽団、ロレーヌ国立管弦楽団、イル・ド・フランス国立管弦楽団と共演し、ナントのラ・フォル・ジュルネへも出演している。2010 年からヴィクトル・ユーゴー・フランシュ=コンテ管弦楽団音楽監督。

一方クラリネット奏者として、レナード・バーンスタイン、小澤征爾、ピエール・ブーレーズ、ヴァレリー・ゲルギエフ、エサ=ペッカ・サロネン、リッカルド・ムーティら世界的な指揮者の元で演奏してきている。パリ・オペラ座管弦楽団の首席クラリネット奏者、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団の客演首席クラリネット奏者も務めた。

2001 年からパリ高等音楽院のクラリネット科教授を務めており、世界の名だたる音楽院からマスタークラス講師として招かれている。ブザンソン国際指揮者コンクールの常任審査員でもある。

ソリスト紹介



黒木 雪音

Yukine Kuroki

7 歳でオーケストラと共演し、日本はもとより国内外で演奏活動を行う。2022 年 5 月、ダブリン国際ピアノコンクールにおいて日本人として初めて優勝。9 月、リスト ユトレヒト 2022 第 1 位。2023 年 3 月、アルトゥール・ルービンシュタイン国際ピアノコンクール第 3 位。

これまでにショパン国際ピアノコンクール in ASIA プロフェッショナル部門金賞。ピティナ・ピアノコンペティション全国決勝大会特級銀賞、G 級金賞、福田靖子賞（第 1 位）。ドヴァリョーナス国際青少年コンクールグランプリ及び全部門総合優勝、ハノイ国際ピアノコンクール第 1 位、国際青少年フェスティバルコンクール“アスタナ・ピアノ・パッション”第 1 位、浜松国際ピアノアカデミーコンクールにてモスト・プロミッシング・アーティスト賞、岩谷時子賞 Foundation for Youth 受賞。令和 5（2023）年度川崎市アゼリア輝賞を受賞。

昭和音楽大学卒業、同大学院修士課程修了、同附属ピアノアートアカデミー在籍。江口文子氏に師事。

明治大学交響楽団 トレーナー



ヴァイオリン
宮里 親弘

東京生まれ。幼少の頃より父からヴァイオリンの指導を受け、その後二村英之、兎東龍夫、徳永二男各氏に師事。東京藝術大学を経て 1982 年 NHK 交響楽団に入団。2021 年退団。現在 N 響団友会所属。アンサンブルクラルテメンバー。複数の大学オーケストラ、社会人オーケストラを指導している。
2002 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



チェロ
市 寛也

東京藝術大学音楽学部を経て同大学院修士課程修了。2012 年 1 月より NHK 交響楽団チェロ奏者。東京・春・音楽祭、別府アルゲリッチ音楽祭などに出演。チェロクアルテット「Quartet Explloce」メンバーとして毎年全国ツアーを実施、キングレコードより CD をリリース。
2013 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



ヴィオラ
白木 麻弥

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京芸術大学を経て同大学大学院修士課程を終了。Alberi String Quartet、さくら弦楽四重奏団のメンバーとして室内楽にも力を入れている。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団首席奏者。
2007 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



コントラバス
岡本 潤

石川県金沢市生まれ。東京藝術大学を経て現在 NHK 交響楽団次席コントラバス奏者。いしかわコントラバスアカデミー講師、いしかわ弦楽器協会代表。
2016 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



フルート
小林 美香

国立音楽大学を首席で卒業。その後ウィーン国立音楽大学で故・W.シュルツ氏に師事。日本木管コンクールフルート部門第 1 位、日本管打楽器コンクールフルート部門入選。新日本フィル、神奈川フィル契約団員等を経て現在フリー。2016 年リリースの「Elegance」はレコード芸術準特選盤に選出。
2002 年から 2015 年まで明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



フルート
中村 淳二

1986 年京都市出身。幼少よりヴァイオリンを習い、13 歳からフルートを始める。2009 年に京都市立芸術大学管打楽専攻卒業。名古屋フィルハーモニー交響楽団首席ピッコロ奏者を経て、現在、NHK 交響楽団フルート・ピッコロ奏者。
2014 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



オーボエ
和久井 仁

東京藝術大学卒業。東京佼成ウインドオーケストラ、愛知県立芸術大学音楽学部の専任講師を経て、2004 年より NHK 交響楽団オーボエ&イングリッシュホルン奏者。東京藝術大学、桐朋音楽大学オーケストラアカデミーの非常勤講師。
1996 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



クラリネット
野田 祐介

バリ国立高等音楽院卒。群馬交響楽団にて 19 年間首席クラリネット奏者を務める。現在、東京音楽大学教授、また東京藝術大学、昭和音楽大学、桐朋学園大学の各非常勤講師。1996 年から明治大学交響楽団のトレーナーを務める。指揮者のヴェルディエとはバリ音楽院時代の同級生。



ファゴット 井上 俊次

東京芸術大学附属高校、東京芸術大学卒業。1986 年第 3 回日本管打楽器コンクールで入選。同年新星日本交響楽団を経て 1990 年 NHK 交響楽団に入団。1998 年より文化庁芸術家在外研修員としてミュンヘン音楽大学に留学。2006 年より読売日本交響楽団首席奏者。東京芸術大学、昭和音楽大学、桐朋学園オーケストラアカデミー各非常勤講師。1997 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



ホルン 大橋 晃一

東京藝術大学附属高校を経て東京藝術大学卒業後、神奈川フィルハーモニー管弦楽団にホルン奏者として入団。2015 年に 27 年間在籍した神奈川フィルを退団し編曲・作曲・指揮活動に専念。これまで主要プロオケのために 400 曲以上を提供するとともに、現在は神奈川フィル音楽参与として同楽団の企画運営に従事。1989 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



トロンボーン 榎原 徹

東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業後、ベルリン市に渡独。帰国後は演奏活動と共にオーケストラ、舞台芸術、現代邦楽の分野の指揮、プロデュースで活動する。邦楽創造集団オーラ J 指揮者、三木音楽舎代表、(公財)神奈川フィルハーモニー管弦楽団常務理事・音楽主幹。1986 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



トランペット 林 辰則

武蔵野音楽大学卒業、フランス国立リヨン高等音楽院修士修了。第 30、33 回日本管打楽器コンクール入選。武蔵野音楽大学、洗足学園音楽大学各非常勤講師。兵庫芸術文化センター管弦楽団、オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラを経て現在神奈川フィルハーモニー管弦楽団 首席トランペット奏者。2017 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



ホルン 井川 雄太

北海道帯広柏葉高校・東京藝術大学音楽学部卒業、同大学院修士課程・カールスルーエ音楽大学修了。島方晴康、西條貴人、伴野涼介、守山光三、松坂隼、Jaehyung Kim、Will Sanders らに師事。現在フリーランスのホルン奏者兼、日本体育大学音楽研究室助教。2022 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。



打楽器 定成 誠一郎

1944 年、東京生まれ。東京芸術大学を卒業。1969 年東京都交響楽団に入団。1981~82 年、文化庁在外研修員としてアメリカに留学。元東京都交響楽団首席ティンパニー奏者。1994 年より明治大学交響楽団のトレーナーを務める。

ハーピスト



堀野 稚菜

桐朋学園大学卒業、同大学研究科修了。J・モルナール氏、吉野篤子女史に師事。(財)仙台フィルの契約団員を 4 年間勤める。現在はフリーとして、幅広く演奏活動を行っている。2004 年から明治大学交響楽団に定期的に客演。



堀野 瀬奈

4 歳よりハーブを始める。吉野篤子女史に師事。現在桐朋音楽大学第 4 学年在学中。本演奏会では、いつもお世話になっている堀野先生のご息女にも共演いただきます。

明治大学交響楽団 OB・OG プロ奏者



ヴァイオリン 兒玉 京子

明治大学交響楽団第 95 代 OG。明治大学商学部卒業後、桐朋オーケストラ・アカデミー、兵庫芸術文化センター管弦楽団を経て 2024 年 5 月より大阪フィルハーモニー交響楽団に在籍。



ヴィオラ 横畠 俊介

明治大学交響楽団第 83 代 OB。東京音楽大学音楽学部器楽専攻(ヴィオラ)卒業。これまでに、ヴァイオリンを故藤澤一彦氏に、ヴィオラを兎束俊之、大野かおる、店村真積の各氏に師事。2019 年より THE ORCHESTRA JAPAN 正団員として毎年 Disney on CLASSIC の日本全国ツアーに参加する他、印田千裕弦楽四重奏団のメンバーとして MITTENWALD レーベルより CD をリリースしている。



ピアノ 馬場 翔太郎

明治大学交響楽団第 88 代 OB。順天堂大学医学部卒業後、武蔵野音楽大学入学。同大学音楽学部ヴィルトゥオーソ学科を首席で卒業。同大学大学院ピアノコラボレイティヴアーツコース修了。伴奏ピアニスト、オーケストラピアニストとして活動。イルミナートフィルハーモニーオーケストラ鍵盤楽器奏者。練馬区演奏家協会会員。

交響詩『ドン・ファン』 / R.シュトラウス



ドイツの作曲家、リヒャルト・シュトラウスによって 1888 年に作曲された交響詩『ドン・ファン』。数々の交響詩を作曲したシュトラウスの快進撃の始まりとも呼べる作品である。

曲名にもなっているドン・ファンは、ヨーロッパに伝説として語り継がれている、理想の女性を追い求めて、数々の遍歴を重ねる男性で、モーツァルトのオペラでも「ドン・ジョヴァンニ」としてモチーフにされた。ドン・ファン伝説には様々な種類があり、彼の描かれ方も一様ではないのだが、シュトラウスの表現する彼は、完璧主義・理想主義であるとされている。

弦楽器による激しい上行音階で華やかに幕を開ける冒頭部分を過ぎると、トランペットによる印象的な主題が登場する。木管楽器による理想の女性の主題と絡み合いながら嵐のように曲は進行していくが、突如曲想が変化すると、ヴァイオリンによる甘美な女性の主題が始まる。このモチーフを頂点に達したかと思われると虚ろな絶望感に変化してしまう。この楽曲は、彼の愉悦と絶望、そして彼を取り巻く女性たちのモチーフが目まぐるしく変化し、複雑に絡み合うのが大変印象的である。そして最後にはその絶望感に打ちひしがれ、自殺してしまう。

なお、明治大学交響楽団の 12 月の定期演奏会においては、(その演奏難易度の高さからか)一度も本曲が演奏されたという記録は残っていない。

明オケとしても新たな挑戦となる、歴史を創ってきた団員たちの紡ぐ複雑な旋律の絡み合いにご注目いただきたい。
(文責：第 100 代インスペクター 妹尾 匠真)

ラプソディ・イン・ブルー / G.ガーシュウィン (Piano: 黒木 雪音)



ラプソディ・イン・ブルーは今からちょうど 100 年前、1924 年にジョージ・ガーシュウィンによって作曲されたアメリカ音楽の傑作。クラシックとジャズの融合によりアメリカ固有の音楽表現を獲得した歴史上初めての作品とも評されている。

1924 年 2 月にニューヨークのエオリアンホールで開催された「現代音楽の実験」という音楽会において主催者の「ジャズ王」ポール・ホワイトマンが自身の楽団で演奏するために、当時天才ピアニストとして名を馳せたガーシュウィンに作曲を依頼したもの。実際には、事前相談も承諾も無く「音楽会に向けてガーシュウィンが『ジャズ・コンチェルト』を作曲中」という新聞記事を勝手に出されたことで強引に依頼を受けさせられ、たった 2 週間で曲を仕上げることになったという。

ガーシュウィンに管弦楽曲の作曲経験が無かったこと、作曲期間が短かったことなどから、ホワイトマン楽団の専属編曲者だったファーディ・グローフェがオーケストレーションを担当し小編成ジャズバンド向けのオリジナル版が作られた。ピアノのカデンツァは作曲が間に合わず未完成のまま「現代音楽の実験」当日を迎えたが、ガーシュウィンの圧倒的な即興演奏によって

初演は大成功を収めた。現在では後にグローフェが再編曲したオーケストラ版をベースに出版社のフランク・キャンベル＝ワトソンが改訂した稿が多く演奏されている。

華やかなピアノ独奏はもちろんのこと、それを彩る各楽器のソロにもご注目いただき、100 年に一度の記念にふさわしい熱演をお楽しみいただきたい。

(文責：第 90 代インスペクター 青木 祥幸)

『海』～管弦楽のための 3 つの交響的素描 / C.ドビュッシー



川崎にいる方が「海」の 1 単語から連想するのは湘南か逗子かアクアラインだろうか。しかし、今回演奏する『海』は荒涼とした人っ気の無い、厳しい様相である。小難しい楽曲解説は Wikipedia に任せるとして、演奏者の個人的雑感を書いていきたい。

その前にまず、素描“esquisses (エスキース)”とは。漫画『ブルーピリオド』によると「着想とか構図を描写する方法」「下絵」と解説されている。下絵だから自由度が高いのか、楽曲のほうは、写実も想像もインスピレーションも入り混じった印象を受ける。

I、夜明け前の暗闇、うっすらと海の姿と揺らめく波が見えはじめる。ところどころアジアンテイストな耳触りはドビュッシーあるある①ペンタトニック。その後のチェロのソリは有名。最後の金管のファンファーレのシーンこそ「日の出」感があるものの、「夜明けから真昼まで」と名付けられているので恐らくもう真昼。IIの「波の戯れ」という邦訳はナイスなもので、さざ波や潮騒、渦潮を連想させる音がする。するはず。ドビュッシーあるある②全音音階により無重力感が増し、ハープやチェレスタ・グロッケンがきらめきを添え、神秘的に漂う。途中、ボレロのリズムが高速で演奏されていて本日のプログラムを讀んでいる。IIIは嵐。もはや航海不能な灘。おまけにイントロは何度も聞いているとなんだかサメまで出てきそう。地鳴り（海鳴り？）のようなバスドラムが押しポイント。クラシックでは嵐が過ぎ去るまで描かれることが多いが、この曲は最大風速を記録したところで終結。

(文責：第 94 代インスペクター 神尾 晃二郎)

組曲「火の鳥」(1919 年版) / I.ストラヴィンスキー



大作曲家ストラヴィンスキーの出世作。若さ故か難解さはなく、美しい旋律に溢れる。

組曲は 7 つの曲から構成される。

1-3 は一続きで演奏されることが多い。最初の不気味な三連符は森を彷徨う魔王カスチェイ、そこに火の鳥が現れてイワン王子（主人公、たぶん馬鹿）と出会うシーンへと続く。神秘性を表現する弦の特殊技法や、跳ね回る火の鳥の様子を描く木管楽器が聴きどころ。

そして愛のシーン（4 曲目）、魔王に幽閉された美しい 13 人の王女が登

場し、うち1名と主人公が恋に落ちる。堕ちる。私は残り12人の行方が気になるけど。それはさておき、最初に旋律を提示するフルートをはじめ、情感たっぷりに奏でられる各楽器のフレーズが美しく、個人的には一番好き。

ラヴシーンの後は戦闘（5曲目）。このへんはハリウッド映画と一緒に。無心になって疾走感とリズムに身体を委ねて。

この戦いは、敵が火の鳥に眠らされて終わる。そして始まる子守唄（6曲目）。ここの旋律は来世は必ずダブルリードに生まれ変わりたいと思うくらい、いい。

最後は大団円。とある楽器がゆったりとした主題を提示し、華やかに幕。

大雑把にストーリーをなぞったけど、他にも聴きどころはたくさん。音楽はきれいに流れるものの（たぶん）、その裏側にはたくさんの特殊技法などの、えげつないテクニック。

100周年を迎え、新たな100年を飾るに相応しく、その難しさを感じさせない（たぶん）、美しい火の鳥をお愉しみいただきたい。

（文責：第73代インスペクター 小林 賢一郎）

ボレロ / M.ラヴェル



ラヴェルの作曲した中でも、もっとも広く愛好されていると言っても過言ではないであろう管弦楽の作品が、この《ボレロ》である。

幼少期からパリで育ち、典型的なパリジャンであったとされるラヴェルであるが、産まれはスペイン国境に近いシブールであり、バスク系の母を持つ彼がスペイン音楽へのある種の愛着を持っていたことは、必然とすら言えるであろう。

しかし、ラヴェルによる《ボレロ》はスペイン民俗舞曲としての「ボレロ」とはそのテンポや編成からして形式を異にし、そのスペイン情緒はあからさまに表されるのではなく、ラヴェルの巧妙且つ独創的な構成をもって描かれる。小太鼓を主軸とした、ややもすると一本調子と捉えられかねないリズムは、しかしそれぞれの楽器によるスペイン風の旋律の反復と一曲を通したひとつのクレッシェンドと調和し、淡彩な色あいから徐々に鮮烈な彩りを増してゆく中で、聴く者はあやしい陶酔へと誘われ、「今までにだれもそんなことをしなかった」ラヴェルの独創性に魅了されるのである。

と、ここで示した本曲の魅力は、アマチュアが表現するのには極めてハードルが高く、よもや現役時代の選曲で提案しようものなら非難轟轟である。しかし、明オケには、日々厳しくも真摯な指導にご尽力くださるトレーナーの先生方の存在がある。100周年記念としてのこの機会に、明オケの誇るトレーナー陣の魅力を発信するとともに、現役・OBを含めた「全明オケ」での特別企画として本曲をお届けしたい。

（文責：第88代インスペクター 上野 純也）

100 周年特集 明オケのあゆみ

明治大学交響楽団は、1923（大正12）年4月末に尾原勝吉先生（当団永久指揮者）らによって創立され、2023年4月で創立100年を迎えました！！今回は、明治大学交響楽団の100年を簡単に振り返りたいと思います。

明治大学交響楽団は、1923（大正12）年4月末、尾原勝吉、菊地雙三郎、中川（樋口）亮、塚田道三郎、林慶旺、島村などの諸氏により「明治大学管弦楽団」が創立され、陸軍戸山学校の学長補である和田小太郎氏の指揮で、ニコライ堂の一室を借りて練習を開始した。



同年6月24日には、第1回定期演奏会が帝大基督教青年会館（現・東京YMCA）で開催された。和田小太郎氏の指揮により、シューベルト作曲ミリタリーマーチ、ヴァイオリン独奏尾原勝吉によるマスネ作曲タイスの瞑想曲など、全部で11曲が披露された。

1928（昭和3）年の年末には、明治大学の公認となり「明治大学校友会音楽部管弦楽団」となる。



1932（昭和7）年9月には、おそらく明オケ初めての演奏旅行を信州地方へ実施した。1934（昭和9）年には名古屋方面への演奏旅行が行われ、JOCK（名古屋放送局、現・NHK名古屋放送局）よりスタジオ演奏が放送されている。1935（昭和10）年8月には、東北・北海道演奏旅行が2週間という、当時としては画期的な大演奏旅行が行われた。

1941（昭和16）年12月8日、第二次世界大戦が勃発し、日本は戦時体制下に入り、全てが戦時一色になった。戦時下という厳しい状況のもとだったが、活動は活発で、昭和16～18年には、毎年2回の定期演奏会を開催していた。時代的背景からか音楽が少なく、特に交響曲は珍しかったため、演奏会には常に満員だった。1500枚のチケットが売れすぎるほど売れ、1回の演奏会では入場者が溢れてしまうので、昼夜2回のステージを行ったほどである。



また、同じ頃に交響楽団と吹奏楽団とが合併し、「明治大学音楽研究会」と改名。交響楽団の部員もブラスバンドに参加し、1943（昭和18）年10月21日の学徒出陣壮行会（文部省主催）が明治神宮競技場で行われた時は、他大学の楽員と共同で行進曲等を演奏していた。

1945（昭和20）年8月の終戦を挟んで明治大学交響楽団も、他の全ての事と同様、厳しい状況下にあったと思うが、そんな条件の中、1946（昭和21）年6月22日には芥川也寸志の指揮でNHKラジオより放送があり、同年9月29日には福島県三春町へ演奏に出かけている。さらに、同年12月7日と8日の2日間、第25回定期演奏会を開催している。当時の団員の方の音楽に対する情熱には、ただただ敬服するのみである。

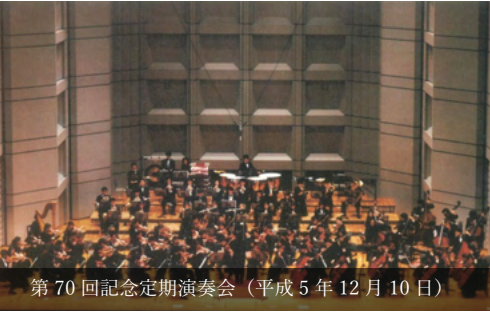
1951（昭和26）年に「明治大学交響楽団」と現在も使われている名称へと改称し、合唱団（現・明治大学グリークラブ）と分離独立した。

1976（昭和51）年1月14日、明治大学交響楽団第53回定期演奏会が杉並公会堂にて開催された。この演奏会は明治大学交響楽団にとって、尾原勝吉先生との最後の演奏会でもあった。明治大学交響楽団の創立者でもあり、53年にわたって団の全ての面に拘ってきた尾原勝吉先生の引退は、明治大学交響楽団にとって大きな変革の時期を迎えることとなった。

平成時代が訪れ、新たな時代とともに多くの挑戦と変化を経験した。

そして現在、令和の時代に入り、2023年（令和5）年4月下旬、明治大学交響楽団は創立100周年という大きな節目を迎えた。これまでの100年間、数多くの困難を乗り越え、変革を経験しながらも、明治大学交響楽団はその音楽活動を続け、新しい節目に立っている。この100周年は、過去の成果を讃え、そして未来への新たなスタートとしての重要な時点となっているだろう。

（文責：第100代幹事長 潮田 駿）



1 月	(定期試験期間)	
2 月	歓送合宿	3泊4日の合宿です。卒業する4年生を送り出します！ 主にセクションコンサートに向けた練習をしています。 現在は、河口湖の畔にある足和田ホテルに宿泊しています。
3 月	セクションコンサート（木管・弦楽・金管打楽器） 卒業式演奏	
4 月	新歓活動 入学式演奏	各セクションに分かれて演奏会を開催しています。 明オケでは小編成で演奏する機会が少ないので、 アンサンブル技術など演奏技術向上の良い機会となっています！
5 月	新歓合宿	志賀高原の蓮池湖畔に位置する志賀レークホテルにて、3泊4日の合宿を行っています。新しく入団した1年生の歓迎と6月演奏会の練習を目的としています！ 最終日には、新入生団員による団内コンサートも行っています。
6 月	6月演奏会	新入生が加わって初めての大きな演奏会です！
7 月	(定期試験期間)	
8 月	東京六大学オーケストラ連盟合同演奏会 東京湾納涼船 部内演奏会	
9 月	明オケ大運動会 引継合宿	明オケの夏は、演奏だけではなく！ 東京湾納涼船では、みんなで浴衣を着て、船上からの夜景やお食事を 楽しんでいます♪（明オケ大運動会も全力です！！） 部内演奏会では、各学年・各キャンパス・有志団体などに分かれて、 観客が団員だけの演奏会が行われています。編成の都合から普段では 演奏できない曲にもチャレンジできるので、団員からの人気イベント の1つにもなっています。
10 月	トランペットコンサート トロンボーンコンサート ホルンコンサート	トランペット・トロンボーン・ホルンでは、パートコンサート を開催しています。ホルンコンサートは2023年からスタート！
11 月	学園祭（明大祭・生明祭）	明オケは、明大祭・生明祭に参加しています。 今川焼きを作り販売しています（意外と作るのが難しい…） その他、アンサンブル演奏も披露しています。
12 月	定期演奏会	1年間の集大成として、年末に定期演奏会を開催しています。 この演奏会をもって、3年生は明オケを引退します。 2023年12月28日には、第100回記念定期演奏会が開催されました！

以上が明治大学交響楽団の1年間の紹介でした！

明オケの1年間は非常に充実しています。演奏だけではなく、東京湾納涼船や大運動会などの行事にも全力で取り組んでいるのが明オケの特徴です。その為、団員同士の仲は非常に良く、演奏会本番では息の合った演奏をすることができます！

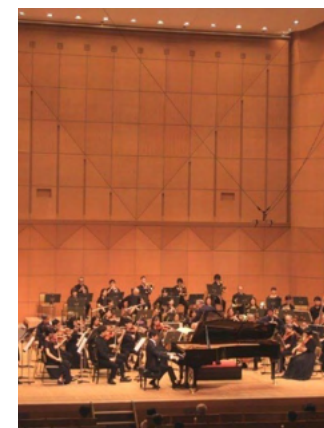
（文責：第100代幹事長 潮田 駿）



明治大学 OB 交響楽団

明治大学交響楽団のかつての活動拠点であった御茶ノ水の記念館講堂が取り壊されることが決まった際、現役生とOB・OGにより「明治大学記念館お別れコンサート」を開催いたしました。それ以後、「明治大学OB交響楽団」が設立され、それ以降年1回の定期演奏会を開催しています。

2020年の定期演奏会がコロナで延期されて以降、活動を休止していましたが、本演奏会を機に立て直しを行い、来年2025年5月に復活の演奏会を開催予定となります。運営や演奏者を募集致しますので、各所での告知をお待ちください。



尾原記念合奏団

明治大学交響楽団の創立者であり、N響の前身・新交響楽団創設メンバーでもある尾原勝吉氏のお名前を団の冠に戴き、尾原先生の薫陶を受けた明オケのOB・OGが中心となり活動を始めた合奏団です。現在は一般の市民オケとして20代～80代と幅広い世代が「楽しくなければ音楽ではない！」を合言葉に合奏を楽しんでいます。春と秋2回の定期演奏会を柱に活動、今は10月20日(日)、タワーホール船堀での第16回定期演奏会に向け練習を重ねています。曲目はチャイコフスキーの交響曲第5番、幻想序曲「ロメオとジュリエット」他です。お誘い合わせの上ご来聴ください。



Say No Yes Yes 吹奏楽チーム

SayNoは1997年私が明オケE年の時に明オケ同期を中心に立ち上げた東京都の一般吹奏楽団体です。主な活動は、年1回のコンクール出場、約10年に1度の演奏会開催です。なんと今年で28年を迎えました。コンクール実績は、代表金1回、ダメ金3回、銀賞17回、銅賞1回、失格1回、スキップ5回(コロナ3回)と失格含む全ての賞をコンプリートしました。毎年、明オケ現役にも参加して頂き明オケに迷惑？貢献！している団体です♪今回の100周年記念オケにもSayNoメンバーが多数参加しております。これからも明オケに貢献できる団体でいたいと思っています。

Say No Yes Yes Youth Orchestra

「学生時代の熱い体験を再度実感したい」という思いから2009年に明治大学交響楽団の卒団生によって結成された団体です。明治大学交響楽団トロンボーン・トレーナーの榊原徹先生を常任指揮者に迎え、「社会貢献・楽しさの追求・チャレンジ」を3つの軸にして、年に1回の不定期演奏会や地域からの依頼演奏など様々な活動をしています。

【次回不定期演奏会のお知らせ】

2024年11月23日(土) 昼公演 場所：文京シビックホール大ホール
指揮：榊原 徹

曲目：ベートーヴェン/交響曲第4番 ベルリオーズ/幻想交響曲

入場無料・全席自由



明オケメンバーを対象に「明オケを一言であらわすと？」というアンケートを実施しました！
回答結果を「ワードクラウド」という手法で表現しています！

自分は弦楽器ですが、ff（フォルティッシモ）になると、金管が「待ってましたー！」とアクセル全開で吹きまくるのを聴くのが一緒に演奏していて快感でした。（A.K さん）

明オケ仲間と酒を呑んでいる時間が長い人ほど、楽器が上手かった気がします。（M.M さん）

演奏にも酔える！
酒にも酔える！
いろんなものに酔える
明オケ！！（Y.F さん）

幾度となく口にし、耳にした明オケを象徴する言葉です。（R.Y さん）

色んな人がいるから、
面白い音楽ができるんですね。（S.S さん）

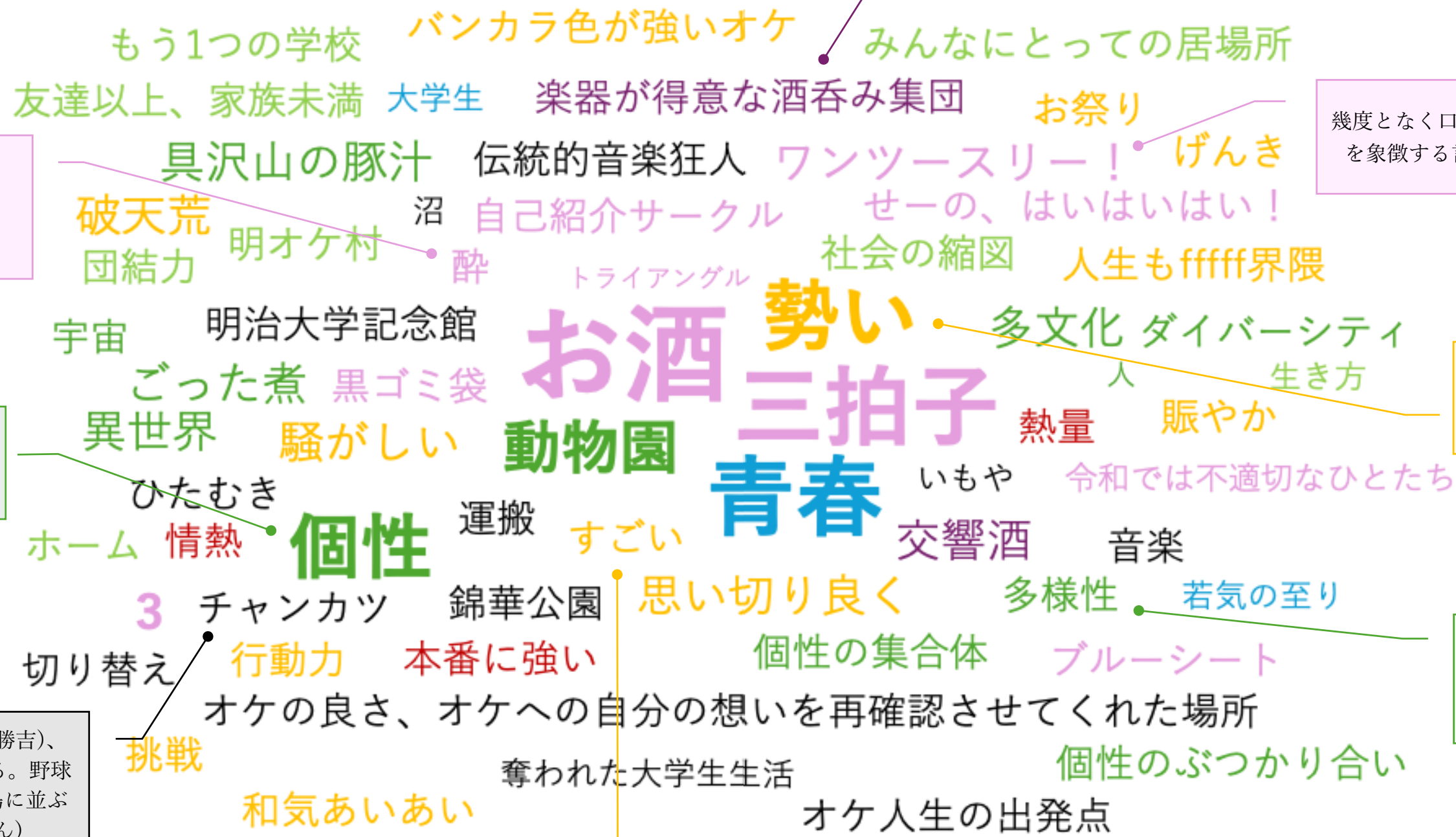
ノリと勢いで難しい曲やっ
ちゃうイメージ（K.K さん）

明大オケ創立者（尾原勝吉）、
50 年以上オケ指導する。野球
の島岡、ラグビー北島に並ぶ
功績者。（A.T さん）

強気のプログラムをやれちゃう感じ、
豪華トレーナー陣いちゃう感じ（K.G さん）

今に続くオケ生活（約 20 年）は
ここから始まった。（S.N さん）

※現役大学生から OBOG まで幅広い世代が回答。（現役：OBOG＝57：104）
※所々コンプラワードがありますが、現在は健全な公認サークルとして活動しているのでご安心ください



出演者紹介

Violin

西村明宏 (67)
菅野安澄 (74)
大西由紀野 (76)
吉田奈穂 (78)
大河真司 (84)
加々美優里子 (84)
久篠孝介 (84)
伊藤洋麻 (85)
小黒陽平 (88)
穂山嘉明 (92)
小庭屋太輔 (92)
森田俊一 (93)
兒玉京子 (95)
鈴木優有 (96)
高橋拓羽 (96)
加藤みゆ (97)
笹井はるか (97)
曽根百合奈 (97)
平井菜々子 (97)
山田治佳 (98)
小川健太 (99)
藤間くるみ (99)
安達由愛生 (100)
河合翔太 (100)
畠中清吾 (100)
三上湧太 (100)
鈴木詩音 (101)
高橋飛羽 (101)
高原野桂樹 (101)
亀岡達之介 (102)
佐藤優太郎 (102)
柴田太郎 (102)
内藤脩平 (102)
師井千鶴 (102)
飯田連一 (団友)
齋藤千尋 (団友)
柴田遥 (団友)
鄭宇理 (団友)
螺良浩一 (団友)
戸口菜月 (団友)
深井萌 (団友)
尹ハンギョル (団友)

川尻翔 (賛助)
宮里親弘 (先生)

Viola

横畠俊介 (83)
中野希美 (86)
石畑綜一 (89)
大作優理子 (92)
上村真珠 (95)
富沢百音 (99)
安藤玲 (100)
潮田駿 (100)
河合智紀 (100)
近藤彩菜 (100)
佐野由莉奈 (100)
高橋希綱 (101)
松野史延 (102)
大石将馬 (103)
直原亜紀 (団友)
田口仁 (団友)
保科光優 (団友)
臼木麻弥 (先生)

Violoncello

中川聡美 (80)
畑中乾 (83)
橋尾江美 (96)
酒井峻甫 (97)
白谷未桜 (98)
山路武瑠 (99)
細馬朋樹 (100)
松橋月奈 (100)
中原晴花 (102)
山中室亮太郎 (102)
中島祐陽 (103)
赤間恵 (団友)
市川潤一 (団友)
高井奏 (団友)
粒良琳 (賛助)
野瀬政彦 (賛助)

Contrabass

後藤祐摩 (93)
伊藤佳奈子 (95)
武田雄太 (95)
永浜諒一 (97)
高井萌々子 (98)
瀧一貴 (98)
橋本海音 (100)
中島珠希 (102)
石川煌 (103)
岡本潤 (先生)

Flute

逢坂禅哉 (68)
千石友明 (76)
林峻人 (89)
小林識央 (92)
植野果奈 (94)
中村圭吾 (97)
山田花月 (97)
戸塚雄貴 (99)
諏訪はな (100)
小林美香 (先生)
中村淳二 (先生)

Oboe

石井誉 (77)
武田聡一郎 (84)
進藤直人 (85)
神尾晃二郎 (94)
中野武 (97)
水嶋さやか (98)
渡邊慧多郎 (99)
豊田瑠音 (100)
安西里織 (101)
和久井仁 (先生)

Clarinet

小松晃 (67)
岩永滋宏 (76)
新海匡彦 (77)
山田聖子 (80)
興梠展明 (95)
岩谷修二 (98)

※()内の数字…所属代 団友…明オケ出身でない方 賛助…エキストラ 先生…トレーナー

Horn

鯨岡美音 (100)
松野美紀 (100)
石川佳奈実 (101)
小山田智咲 (101)
関原颯太 (101)
佐藤奏 (102)
木村博之 (団友)
陶山寛子 (団友)
野田祐介 (先生)

Bassoon

小山田智紀 (82)
菅谷康昭 (83)
関井汐織 (101)
高橋弦貴 (101)
辻結衣 (102)
井上俊次 (先生)

Saxophone

今村沙織 (団友)
野田みなみ (賛助)
野本由布子 (団友)

Trumpet

大西哲史 (69)
丸山康彦 (73)
小林憲生 (74)
山岸昌幸 (74)
山崎陽介 (78)
堀創介 (88)
青木祥幸 (90)
高野晃多 (90)
谷蒼一郎 (93)
前川倫輝 (94)
金澤亜衣子 (98)
渡辺果林 (98)
上田彩乃 (100)
妹尾匠真 (100)
大佐藤康陽 (101)
藤井陽 (102)
林辰則 (先生)

Percussion

栗屋翔太郎 (90)
堀口大地 (96)
坂本ちはる (97)
柴萌南 (98)
中谷惇之介 (100)
野澤海藍 (103)
定成誠一郎 (先生)

Piano / Celesta

加々美優里子 (84)
馬場翔太郎 (88)

Harp

堀野稚菜 (賛助)
堀野瀬奈 (賛助)

Staff

練習指揮者
鈴木睦

ステージマネージャー
廣上倫介 (77)

サブステージマネージャー
佐々木智之 (83)

受付責任者
北村まこ (71)
豊田美幸 (82)

カメラマン
伊藤大地

録音・録画
レコデザイン インク

明治大学交響楽団創立 100 周年記念オーケストラ 運営メンバー

代表	庶務	パートリーダー
堀 創介	畑中 乾	Vn. 久篠 孝介
	北村 まこ	鈴木 優有
内務	廣上 倫介	庭屋 太輔
鈴木 優有		Va. 潮田 駿
	インスペクター	Vc. 中川 聡美
会計	神尾 晃二郎	山路 武瑠
久篠 孝介	加々美 優里子	Cb. 伊藤 佳奈子
近藤 彩菜	徐 南希	Fl. 中村 圭吾
吉田 奈穂		Ob. 神尾 晃二郎
	練習場/運搬	Cl. 興梠 展明
会計監査	小山田 智紀	Fg. 小山田 智紀
宮沢 龍彦	石井 誉	Trp. 青木 祥幸
企画	小山田 智咲	Hr. 千葉 政繁
潮田 駿	北上 柊仁	Trb. 勝亦 弦揮
金澤 亜衣子	柴 萌南	Tub. 上野 純也
山室 亮太郎	中谷 惇之介	Perc. 柴 萌南
	原野 桂樹	
広報	ライブラリアン	
安藤 玲	小山田 智紀	
生田 真穂子	細馬 朋樹	
榎本 隼之介		
藤田 真以子	コンパマスター	
宮脇 愛果	遠藤 洋一	
松橋 月奈		
山岸 茉空		

御 礼

本日は私どもの演奏会にご来場賜り誠にありがとうございました。
今後ともよい活動ができるよう努力してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

令和 6 年 8 月 17 日 明治大学交響楽団創立 100 周年記念オーケストラ 一同



各学年報告

70 代（1995 年卒）

長嶺 賢自（幹事長）

入学した 1991 年、平成 3 年は年号が変わっても尚、昭和の雰囲気漂っておりバブルの余韻も残っている頃でした。またすぐに景気が盛り返すかも、とバブル崩壊を信じていない、信じたくない人も多い頃でしたが、就職活動は次第に苦しくなって、初めて就職氷河期と呼ばれるようになった時期でした。その後に金融破綻が相次ぐ等して負の何十年と呼ばれる程に落ち込んでいく事を当時は想像も出来ませんでした。後から振り返ると暗いニュースが多い時期に思えますが、1993 年には当時の皇太子殿下の御成婚があり盛大にパレードを行うなど、明るい出来事もありました。

歴史ある記念館と共に過ごした 4 年間でしたがその頃はまだ学生運動が活発な時期で、敷地を隔てる堀全面に木組みの看板が立てられて視界を遮られ独特のゲバ文字で書き連ねられたスローガンが常に掲げられており、和洋折衷で古色蒼然な記念館の外観とは全く趣の異なる景観となっていました。この見辛い看板は何とかならないものかと思ったものでした。私達が卒業するころに各キャンパスにガサ入れがあり、ほぼ一掃されて記念館の前の堀の看板も取り払われました。それから程なくして記念館は取り壊しとなりましたので、通り沿いから歴史ある記念館の外観が邪魔される事なく見られたのはほんの短い期間でした。

年々団員数が増加する中で、記念館での練習は制約が多いものとなっていました。舞台が狭くなり、トゥッティでは皆ひしめき合って弓が隣の人に当たらない様に工夫しながら取り組んでいました。制約があっても皆で考えながら音楽作りをしていく中で一体感が生まれていった様に思います。練習会場としての記念館は、学内各団体から引く手数多で、内務担当の小木曾さんが他の団体やサークル、学生課と調整して予約してくれたので外部でのトゥッティ練習は少なかった様に思います。特に応援団が使用した後の練習の場合は、準備の時にまず換気することが最優先事項でしたね。また、5 階の部室内やその付近にティンパニ等の打楽器や備品等が置いてあったので、練習のたびに階段をぐるぐる上り降りさせていました。個人練やパート練習は記念館の 1 ～ 5 階のどこかで空いているところを探して練習していましたが、冷暖房もなく夏は汗をかきながら、冬は寒さに震えながら練習したものです。屋上に出ることもできて夜景は東京タワーも見えて、そこで夜風にあたりながら楽器の音を出すととても気持ちよかったことを今でも思い出します。練習後は、安くて定番の居酒屋「ニュー浅草」で飲んだり、節約する為に記念館の裏の錦華公園で缶ビール片手に皆で演奏の反省や、くだらない話で盛り上がり終電まで飲んだものです。

私達が E 年・幹事学年の年も、他の代と同じく年 2 回の演奏会、年 3 回の合宿を執り行いました。その中でも特筆すべきは、12 月定期演奏会が 70 回目の節目の記念演奏会だったことです。入団当初からあなた達の代は 70 回記念なのだと言われて育ちましたので、皆そこを目指していい音楽を作り上げようということを目指して向かって行けた様に思います。だからと言って他の活動を抑えた守りの姿勢で進む事はしませんでした。外務担当の桐井さんの発案で富山県への演奏旅行を執り行い、3 公演と音楽教室を成功させることが出来ました。演奏旅行の準備段階から富山県在住の OB の方々に助けて頂けた事は本当にありがたい事で感謝を申し上げたいと思います。オケ出身ではない方も含めて大学 OB・OG の方々が宿舎に駆けつけて頂きお褒めの言葉を頂けた事は本当に嬉しく思いました。



明治大学交響楽団 富山演奏会 1993.9.5 於 富山県民会館
＜指揮＞小林幸人
＜プログラム＞リスト：ハンガリー狂詩曲 第2番/ハチャトゥリアン：舞踊組曲「ガイーネ」より/ドヴォルザーク：交響曲 第5番

[吉野元章さん卒団後経歴]

1996 年 3 月に卒団するも、明治大学文学部にもう 1 年留年。残る単位取得に励むものの後に方向転換し、翌年、東京音楽大学に入学（東京藝術大学入学も有望視されていたが、センター試験の願書を出し忘れて未受験…）。卒業後はイギリス王立音楽院に留学。帰国後に世界各国のオーディションによりメンバーが集まることで知られ、佐渡裕氏が音楽監督を務めた兵庫県立芸術文化センター管弦楽団に入団。2 年間限定の在団契約であったにも関わらず、ここでは良い意味での「留年」。NHK 交響楽団はじめ国内メジャーオーケストラへのエキストラ出演多数。将来を嘱望されていた矢先の 2017 年 6 月、国指定の難病によりご逝去。



白木 信一郎（幹事長）

72 代（1997 年卒）

今回の寄稿文を書くにあたって納戸の奥に眠っていた当時の写真を引っ張り出し 1 枚 1 枚眺めた。私は写真を残すのが好きであったので相当な枚数がある。もちろんデジカメもスマホもない時代であるのですので現像された写真である。楽しかったこと、大変だったこと、封印したほうがいいようなこと、ちょっと甘酸っぱい思い出などなど当時の思い出が蘇ってきた。若気の至りということも多々あったと思うが、青春を謳歌した 4 年間であったことを改めて実感した。

私たちが入学した 1993 年は非自民の細川連立内閣が発足し自民党による 55 年体制が崩壊した歴史的な年である。しかし、この時、明治大学にとっても明オケにとっても歴史的な出来事となる記念館の取り壊しが 2 年後に行われることを知る由もなかった。そして私たちは記念館の取り壊しという渦に巻き込まれていくことになるのである。

私たち「明オケ」は当時サークルの区分としては文化部連合会（文連）に所属していた。（大学のホームページを見ましたが、現在、文連は存在しないようですね。）文連の会議への出席は必須であったため、私は和泉支部長、幹事長として何度か出席した。文連は学生運動の名残のような部分もあり、会議はバリケードを乗り越えて教室に入り・・・という感じで独特の雰囲気があった。時にはヘルメットを被ることもあった。その会議の中で記念館取り壊しについての討議が行われたこともあったが「明治大学のシンボルの取り壊しには断固反対!!」といった感じであったため、私たちが在学中に取り壊されることはないだろうと思っていた。



しかし、大学から 1995 年秋の取り壊しが正式に発表された。よりによって私たちが幹事学年の時に・・・という思いが込み上げてきたのを記憶している。記念館がなくなるということは、これまで長い間使用してきた練習場、部室、楽器置き場がすべてなくなるということで、これから先の活動はどうなるのか不安で一杯であった。

1995 年 7 月 2 日に OB と共に「記念館おわかれコンサート」を開催したことは別枠で記載されるのでここでは記載しないが、私たちにとってまずは部室と楽器置き場の確保、これが死活問題であった。文連に所属するサークルとして当然部室は与えられるが、他のサークルと違うところは相当な広さの楽器置き場が必要なことである。学校側に要望し大型楽器を収納できる楽器倉庫を作ってもらった。現在の図書館のあたりは旧記念館の建物がしばらく残され、その一角に 1995 年 9 月、部室と楽器倉庫を移転した。個人練習、パート練習もこの一角で行うこととなった。この部室と楽器倉庫は 10 号館の部室に移るまでの仮住まいであったので存在を知る世代は少ないと思われる。10 月 3 日の合奏が記念館講堂での最後の合奏となった。合奏ができるスペースの確保も学校側に要望したが残念ながらその要望は通らなかった。つまり、それ以降の合奏練習はすべて外部練となった。



11 月 11 日の「記念館さよなら DAY」の後、ついに記念館の取り壊しが始まった。程なくして記念館一帯は更地となり、私たちが卒業するころにはリパティタワーの建築が始まっていた。

記念館の取り壊しに幹事学年として直面したことは大変だったが、この歴史的な 1 年に立ち会えたことは今となっては幸せなことだったと思っている。

記念館のことから一旦離れ 1995 年 8 月に実施した演奏旅行について記載する。

8 月 18 日長野県更埴市（現在の千曲市）、8 月 21 日富山県小杉町（現在の射水市）、8 月 22 日富山県入善町の 3 公演を「明治大学交響楽団 8 月演奏会」と題して行った。指揮は小林幸人先生。曲は 6 月演奏会で演奏した、ワーグナー：楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より第 1 幕への前奏曲、シューベルト：交響曲第 8 番「未完成」、ブラームス：交響曲第 4 番の 3 曲。

長野は新幹線の開通を 2 年後、オリンピックの開催を 3 年後に控え、道路工事や施設の建築が盛んであった。宿は善光寺の宿坊で広間に雑魚寝。

富山の小杉町では中学校で音楽教室も行った。入善町には 2 年前にも演奏旅行で訪れておりその時の公演が好評であったため再び呼んでいたと記憶している。

最終日は宇奈月温泉のニューオータニホテルに宿泊し地元の実行委員会の方々も交えて大宴会を行った。

怪我や物損もなく無事に演奏旅行を終えた、と私は記憶している。



次に公式な記録には残っていない公演について 2 つ記載する。

① 江東区立第二大島小学校での音楽教室。

1995 年 2 月に実施。先生方にも子供たちにも好評だったようで翌年度も依頼があり同年 11 月にも行った。定期ではやらないような曲を取り上げ、小学生も演奏する側も楽しい演奏会となった。小学生から見ればアマチュアの大学生でも礼服を着て演奏すれば格好良く見えたのだろう、「握手してください」「サインください」・・・と近寄ってくる小学生がかわいかったのを覚えている。

② 当時の人気番組フジテレビ「タモリのスーパーボキャブラ天国」への出演。

大橋先生指揮のフルオーケストラで谷村新司の「昴」を演奏。「さらば昴よ」が「皿がシンバルよ」に聞こえるというネタ。最後の「さらば昴よ」のフレーズに合わせて芸人が本物の大皿をシンバルに見立ててガシャーンと割るという映像を収録した。放送では司会のタモリさんから「明治大学の皆さん、よくこんなことやってくれたよ」「珍しく格式高い映像でしたねー」というコメントをいただいた。

そして私たちの集大成、第 72 回定期演奏会は 1995 年 12 月 26 日に昭和女子大学人見記念講堂で行った。指揮は田代詞生先生。曲はウェーバー：歌劇「魔弾の射手」序曲、チャイコフスキー：バレエ音楽「くるみ割り人形」より抜粋、ベルリオーズ：幻想交響曲。激動の 1 年を締めくくるにふさわしい大曲「幻想交響曲」で劇的に幕を閉じた。

私は、この第 72 回定期演奏会のパンフレットに特集「記念館への思い」と題して寄稿した。その結びに

『11 月 11 日、記念館の扉は閉じられた。もう永久に記念館の中に入ることはできない。しかし、記念館が私の心の中から消え去ることはない。』

と記している。

当時拾った瓦礫となった記念館の壁を今でも大切に持っている。あれから約 30 年の月日が流れたが「記念館への思い」、一緒に青春を謳歌した「仲間への思い」、そして「明オケへの思い」は今も変わらない。



73 代（1998 年卒）

野上 真史（幹事長）

私たちの代は、1994 年 4 月に入学、1998 年 3 月卒業した代です。

在学中に世間を騒がせたのは、やはり一番は 95 年の阪神大震災、そして 2 ヶ月後のオウム真理教による地下鉄サリン事件だったと思います。とくに地下鉄サリン事件は、営団地下鉄（現東京メトロ）丸ノ内線でも発生しており、突然身近で起きた事件に怖気を震った記憶があります。

大学にとって、そして明オケにとってもこの 1995 年は大きな変化のあった年で、明治大学記念館の取り壊しが始まったのがこの年でした。私たちの代は当時 D 年（この言い方、今でもしますか？）であり、まだ和泉校舎に通っていた私には、そこまでの負担があった記憶はありませんが、当時 E 年の先輩方は非常に大変な年だったのではと思います。7 月に行われた「記念館おわかれコンサート」、部室と楽器置き場の引っ越し、練習場所の手配と楽器運搬のルーティンの構築、と大変ご苦労された年だったのではないのでしょうか。

私たちが幹事を引き継いだ段階では、外部練習を経た演奏会を一度経験したあとでしたので、言ってみれば先輩たちが環境変化に対応したルールを敷いてくださった後だったと言って良いと思います。我々の代は前後と比べると人数も少ない代でしたので、2 年に 1 回の演奏旅行が無く、年 2 回の演奏会に全力を投入できたことも含めて、あくまで私個人の見解ですが、ある意味運が良かった代だと言って良いのかもしれない。とても充実したオケ活動ができたと思っています。

私たちの代の 6 月演奏会、12 月の第 73 回定期演奏会は以下のようなプログラムでした。

● 6 月演奏会

前プロ……ウォルトン：「アニヴァーサリー・ファンファーレ」～「戴冠式行進曲『宝珠と王杖』」
中プロ……コーブランド「アパラチアの春」組曲
メイン……チャイコフスキー：交響曲第 5 番

● 第 73 回定期演奏会

前プロ……バーンスタイン：「キャンディード」序曲
中プロ……バーンスタイン：「ウェスト・サイド・ストーリー」より《シンフォニックダンス》
メイン……マーラー：交響曲第 5 番

いずれの演奏会も、指揮は新通英洋先生にお願いしました。

新通先生は、我々の代以前にも明オケを指揮されたことがあったそうですが、その後に英国に留学され、帰国後に大橋先生のご紹介で、我々の代の指揮をしていただくことになりました。

選曲のことを同期に皆に尋ねたところ、どちらの演奏会でも、楽譜の手配は大変だった、という話がありました。どちらの演奏会も比較的新しい作曲家の作品を取り上げましたので、そういったこともあったのかなと思います。バーンスタインのシンフォニックダンスの楽譜は海外からの取り寄せで、船便で時間が掛かったとか、特にウォルトンの楽譜の手配は大変だったとか、そんな話が出てきました。

また、6 月のプログラムに対し「まとまりがない」というご批判があったようで、その反省として 12 月の定期演奏会は、プログラム単位で決めるという方針になったという話もありました。私自身は恥ずかしながらも覚えていませんでしたが、当時のことを思い返すと、マーラーの交響曲の名盤と言えばバーンスタインの録音が有名でしたので、「テーマはバーンスタインだね」などと仲間と語り合っていたことを思い出しました。

私個人のことを言うと、幹部学年の段階でいわゆる中低弦3パートで同学年は私一人しかおらず、一人しかいないので当然チェロパートのパートリーダーであり、中低弦セクションリーダーでもありました。こんな状態でよく上記のようなプログラムができたなと思いますが、これは偏に前後の代の先輩後輩に助けていただいたおかげでした。特にひとつ下の代のチェロパートの皆さんには完全におんぶにだっこ状態でしたので、本当に感謝しています。とても充実した楽しいオケ活動ができたことが、今でもチェロを続けている要因なんだろうと思います。

100年続いた明オケが、今後も現役の皆さんが愉しく活動ができる場であり続けることを願っております。



74 代（1999 年卒）

遠藤 智史（幹事長）・菅野 安澄（ライブラリアン）・篠田 昌克（録音）

「定期演奏会成功までの経緯」 第74代幹事長 遠藤智史

第74回定期演奏会は結果として、R. シュトラウス「英雄の生涯」、チャイコフスキー「白鳥の湖」、ブラームス「悲劇的序曲」の3曲になったが、これに決まるのは様々な紆余曲折を経てのことだった。シューマン3番をメイン曲とした6月演奏会がうまくいき（自分達としてはかなり良かったんじゃない？という感想）、その勢いのまま演奏旅行も大盛況且つ旅行も楽しんで成功裡に終わる。さらにその年に立ち上げたSayNoYesYes 吹奏楽チームのコンクール出場がとても盛り上がり、意外と点も伸びて銀賞取れたのは出来すぎくらいであった。

時を戻して、演奏旅行の前あたりから定期はどうするかということを考えはじめたが、大曲をやって乗り番を増やしたいという金管セクションと、初心者が多いこともあって現実的にできる曲の中でそれでもなんとか挑戦したい弦楽器セクション、どうしてもこれはやりたいという曲を推してきた木管セクション、新しい歴史を作りたい且つコンサートマスターの寺田の演奏技術をどうにかして活かしたい幹事長、と全く纏まる気配がなかった。互いの利害がぶつかりすぎて本当に一触即発の状態、選曲会議外の団員方には心配をおかけしたと思う。

どうにかして英雄の生涯に決まったのだが、団員総会で前プロ中プロも見てもないとメインがこれで良いと言えない、という意見が多く、一度否決されてしまう。それでもめげずに冒頭の3曲に決めて再度の団員総会でなんとか承認、となったのが前述のコンクール直前くらいではなかったか。

トレーナーの先生方も、これまでやったことのないレベルの演奏会だったので「できるわけないだろ」「Vn ソロはどうするんだ」などのネガティブワードが続出。通常なら夏合宿で初合わせになるのだが、それでは心配というか曲変更になる場合は早い方が良からうということで、ホルンパートは夏合宿前に生田で大橋先生のパート練習までやった。金管セクション練習もやったかな。

そういったいつもの年とは違う準備を早めからしていったことで、当初ネガティブだった先生方もどんどんポジティブに変わってきて、寒くなる頃には団員も先生方もこれはイケる！という思いになってきた。

そして当日、メインの「英雄の生涯」は冒頭から全パートが全開で行き、寺田の Vn ソロは静かなところの携帯音さえ無ければ完璧、戦場では金管セクションが吠えまくり、冒頭のメロディに Tutti で戻るところは感動的だった（まだ終わってない）。業績では木管金管の各ソリストが美しい調べを奏で、最後は寺田の Vn ソロと高橋の Hr ソロで有終の美を飾った。



最初の方に書いた「新しい歴史を作りたい且つコンサートマスターの寺田の演奏技術をどうにかして活かしたい幹事長」というのは私なのだが、結果としてどちらも達成できたのではないと思う。R. シュトラウスの交響詩の大曲は今でこそ明オケが何年かに一度やるような曲になったが、あの頃は記載した通りまだかなりの抵抗があった。それでもみんなの強い意志でやり遂げることができて、明オケ発展に寄与できたのではないと思う。

コンサートマスターの寺田は、あのソロがあったからというわけではないだろうが、経営学部卒業後に桐朋音大ディプロマコースへ進学後、チェコ共和国プラハ音楽院で学び、チェコ国内の西ボヘミア交響楽団でコンサートマスターをつとめた後帰国し、現在セントラル愛知交響楽団コンサートマスターとして活躍している。桐朋時代の演奏会に始まり、留学先のプラハまで会いに行ったり、東京でのソロリサイタルのお手伝いをしたり、とかなりの追っかけだったので、今の寺田の活躍は感慨深いものがある。

以上、つらつらと書いていったらかなりの長文になってしまった（当時、話が長いと言われ続けたが、今も文章が長かった）。残念ながら同期全員で集まることも無くなってしまったが、本寄稿が当時のことを思い出す機会の一助となり、各世代の方々に当時の様子を伝えることができたらと思う。



2001 年寺田がプラハ留学中の写真。

まだプラハに行ったばかりで、床屋でどう切ってくれというのをチェコ語で言えなかったためロン毛（笑）

「1997 年 福島演奏旅行の思い出」第 74 代ライブラリアン 菅野安澄

昔の記録では明オケの演奏旅行は昭和 7 年 9 月の信州地方での公演が最初といわれている。その後も実施しない年はあったようだがほぼ 2 年に 1 回の割合で、北海道、東北、信州などを中心に長い時は 2 週間にわたって各地を渡り歩いて明オケサウンドを地方の方々に届けていたようだ。当然私が C 年の夏も「8 月演奏会」と題して「6 月演奏会」のプログラムを富山・長野で演奏した。幸運にも私は乗り番人数の関係で演奏旅行に参加することができた。演奏旅行といっても演奏だけではなく、自由時間での善光寺参りなど、プチ旅行気分を楽しむこともできた。そして移動中のバスの車窓から見た雲一つない夏空の下に水平線の彼方まで広がる真っ青な日本海。生まれて初めて目にしたその光景は今でも私の脳裏に焼き付いている。そして当然 2 年後は、私達の代が企画立案から演奏会場のホールや宿の手配まで全てを決めなければならない。それを考えるとこの演奏旅行を企画してくださった先輩方には頭が下がる思いだった。

それから約半年が過ぎ、私達の代の演奏旅行のスタートは C 年の後期試験期間中だった。駿河台キャンパスで同期かつ私と同じ福島市出身の山岸に遭遇し、新御茶ノ水駅のミスドで昼食を共にした時、突然山岸が「演奏旅行、あの音楽堂はどうだろう？」と口にした。あの音楽堂～「福島市音楽堂」はサントリーホール完成前の 1984 年（昭和 59 年）に開館した。音響最優先のオーケストラ専用ホールとして設計され、音響の良さは世界トップクラスといわれていた。大ホールの満席時の残響は約 2.5 秒という通常の音楽ホールの約 2 倍、その残響の長さから一部では「銭湯の中で演奏しているようなホール」と揶揄されることもあったが、私も音楽堂の良さを知る一人として賛同した。しかしここで問題が生じる。それは「演奏者全員が宿泊できる宿が確保できるか否か」だった。私は音楽堂から距離も近い飯坂温泉で旅館を経営する叔父に相談してみた。すると普段は使用しない別館の客室も開け、100 人は宿泊できるよう全館貸し切りにしてくださるとのこと。これで最終日のレセプションも心おきなくできる。

福島に全館貸し切りの宿を押さえたことを次期幹事長候補の遠藤智史に報告したところ、彼も福島の郡山に親戚があるとのこと。更に私達の学年は、福島地区出身（私、山岸、遠藤隆之）、いわき地区出身（鍛冶）がいた。福島県関係者が 5 人いれば、現地での視察や打ち合わせが数日にまたがる場合でも宿泊できる拠点（宿）が確保できる。こうして演奏旅行は福島県で行うことになり、福島といわきの 2 公演に決定した。演奏旅行の具体的な日程や旅程を決めていく中で、次期幹事長の遠藤は

- 1 自主公演の為、金銭面の負担を軽くしたい。
- 2 演奏会だけでなく、移動中の観光も同じくらい楽しい旅行にしたい。
- 3 東京以外に在住する一人でも多くの方に、生の明オケサウンドを聴いて欲しい。

という 3 つの目標を立て、これらを柱に準備を進めることになった。

日程は 1997 年 8 月 21 日～8 月 24 日の 3 泊 4 日に決定。初日はいわき公演、2 日目は観光を兼ねた移動日、3 日目は福島公演&レセプション、最終日は帰京という旅程。曲目は前回の演奏旅行に習い、6 月演奏会のプログラムをそのまま演奏旅行に持っていくことになった。

そして、実際に福島に出向いての事前準備は D 年の夏休みから始まった。まず演奏会場の予約と、旅館の下見。福島市音楽堂は希望日を確実に押さえる為の情報を事前収集し、幹事長の遠藤智史と山岸に山岸家に前泊してもらった。そして翌日の早朝、音楽堂まで自転車を飛ばし、無事希望日を確保。その後私も合流し、3 名で飯坂温泉の叔父が経営する旅館にご挨拶にお伺いし、館内を見学させていただいた。またもう一つのいわき公演の平市民文化センターはいわき市出身の鍛冶の家を拠点として、いわき市民オーケストラに在籍されていた明オケ OB の渡部敏雄先輩にもご協力いただき演奏会場を予約した。

その次の課題は後援になっていただける企業とパンフレットに掲載する広告をどうするかだった。そんな時、偶然目にした校友会会報で福島支部の役員に懐かしい御名前を発見した。父の上司の羽田孝夫さんだ。福島民報新聞社の専務取締役を経て、福島テレビの役員をなさっているとのこと。私も物心ついた頃から（山口）百恵ちゃん、と呼んで可愛がっていただいたので十分面識はある。そこで羽田さんに、福島で演奏旅行を行う為ご協力をお願いしたい旨を電話でお伝えし、改めて翌年に直接ご挨拶に伺うということになった。

こうして下準備が整い、役員総動員で本格的に動き出したのは E 年の 6 月演奏会前からだ。難航する 12 月の定期演奏会の選曲と並行し（遠藤執筆寄稿文を参照）、週末は泊りがけで福島まで行きホールや宿泊施設、校友会との打ち合わせを行った。

中でも校友会役員の羽田さんとの面会は平日になる為、大学の講義は自主休講にし、幹事長と一緒にフジテレビ系列局の福島テレビを訪問した。その努力が実を結び、校友会の協力は勿論、なんと地元の新聞社やテレビ局（何と番組内で宣伝もしてくださるそう）など地元メディアの後援まで手配してくださるという。そして数日後に最後の打ち合わせに伺った時。前回訪問時の和やかな雰囲気は全く感じられず。羽田さんは「さあ、本日はどんなふうに話を展開してくれるのかな？」とビジネスオーラ全開。しかし、さすが「説教リーダー」という異名を持つ幹事長。動じずに巧みなプレゼンで、校友会にチケットの前売りや宣伝協力の依頼をし、見事交渉を成立させた。いわきについても、校友会いわき支部幹事長の金成定幸さんや明オケ OB の渡部敏雄先輩にもご協力いただき、いわき民報に取材してもらって新聞に載ったり、地元企業から広告費をいただいたり、いわき市民オーケストラのラジオ番組での宣伝をしていただいたり、とこちらも多大なご支援を得ながら準備が進められた。これで演奏旅行に向けて①の目標に近づいた。

また②の目標に向け、2 日目の移動日の観光ルート下見は、役員を福島といわきの二手にチームを分け、泊りがけで東京←→福島間を数回往復した。皆が旅行気分を味わえるコース選定の為に、万が一の天気を考慮し雨天時のコースまで考えるという力の入れ様。

その努力が実ったのか、それとも我々の日頃の行いが良かったのか？何と演奏旅行移動日の天気は快晴。この日はいわき公演終演後に宿泊した郡山を出発し、観光を楽しみながら飯坂温泉に向かうという、丸一日福島県を満喫できる日だ。途中の猪苗代湖ではボートに乗る者、野口英世記念館見学や地ビールを味わう者など、皆それぞれの福島を見つけて楽しんだ。そしてバスは磐梯朝日国立公園エリアに入り、作家の井上靖氏が「吾妻八景」と命名した絶景を車窓から楽しみ、浄土平では登山道を上り吾妻山の噴火口を見学するなど都内では味わえない自然を体験。そして現在は SNS で「日本のアリゾナ」と称賛され日本離れた景色が話題になっている磐梯吾妻スカイラインを通して、飯坂温泉方面へ。玄関先に「歓迎 明治大学交響楽団御一行様」と大きな看板をかけた旅館（ホテル芙蓉荘）に無事到着した。



館主の叔父が歓迎の挨拶の締めで「100%温泉です！」と笑いを取った後は、夕食まで自由時間。温泉街を散策しながら外湯巡りをする者、慣れない山道を登り自然と戯れた疲れを癒す為に昼寝をする者、客室の窓の外から聞こえる蝉の大群の鳴き声に対抗し、日頃溜まった思いを大声でぶつける者（笑）等、地方ならではの夏の夕暮れのゆったりした時間を満喫して過ごした。

ここで時系列が前後するが集客の為に奔走した話も書いておきたい。新聞社や地元のタウン誌の編集部を巡り、演奏会の記事の掲載をお願いし、校友会や楽器店にも前売りチケットの販売を委託した。それとは別に一人でも多くの方に我々の演奏を聴いて欲しい思いで、福島地区は地域のジュニアオーケストラ、そして部活動にオーケストラがある全ての小中高の顧問の先生に招待券を進呈した。いわき地区も同じくホール近隣の吹奏楽部のある中学高校全てを訪問し、招待券を進呈した。とある中学校では吹奏楽部の顧問の先生が山岸の中学生時代の恩師であったことが分かったり、音楽室にお邪魔して練習中の生徒の前で宣伝させてもらったりと、様々な形でコミュニケーションを取らせてもらった。

また、福島市の福島高校（男子校）は定演が間近に迫っている関係で、直接音楽室を訪ね、メインの新世界の Tutti を見学させてもらった。練習が一段落したタイミングで顧問の先生から紹介を受け、訪問した役員全員が各自の自己紹介とご挨拶を兼ね、演奏旅行の宣伝を行った。が、遠藤洋一は…。「招待券を 100 枚お持ちしたので彼女がいない人は勿論、彼女がいる人は彼女と一緒に聴きに来てください。100 人で聴きに来てください。」このスピーチが功を奏したのか客席には部活にオケがない女子高校生の制服姿もあった（笑）。上記の結果、いわき公演も福島公演も校友会経由での前売り券、更に当日券も順調に売れ、全座席数に対し 7 割以上の方が来場してくださった。これは結果として③の目標も達成できたことになる。

更にアンコールの「ラデツキー行進曲」では、指揮の小林幸人先生による客席に向かったのパフォーマンスのお陰で、客席から手拍子が出るほどの盛り上がりを見せ、ステージと客席が一体となり演奏旅行最後の公演は大成功に終わった。終演後のロビーでは「お正月みたい（ニューイヤークンサート）で楽しかった！」と嬉しそうに話している声も聞こえた。父の話では、校友会の方々も終始笑顔で、羽田さんはホールの外に出てから校友会の方々に「さあ、これから我々も大宴会だ！」と上機嫌でお帰りになられたそうである。

そして旅館に戻り浴衣に着替え、一人ずつお膳が用意された大広間にて豪華なレセプション「大宴会」が始まった。OB も加わり、気分はもう完全に温泉旅行。お決まりの 3 拍子と「せーの！」の掛け声で大騒ぎをしてしまい（この時、我々の怪しい歌声や雄叫びを聞いた女将さんや仲居さん達は、もしもの時の為に大広間の外で待機していてくださった）、ご近所から通報され、警察が旅館に駆けつけるというハプニングもあった（汗）。またこぼれ話だが、旅館で結構な骨董品を破損してしまったようだ、と両親から聞かされた。この件について叔父からは何も言われなかったのが、当時の私は、恐らく壺か絵皿だろうと考えていた。しかし、今回の寄稿を執筆するにあたり初めて知ったことだが、それは旅館にあった大黒様の置物で、大黒様と酒を酌み交わしている時に大黒様に大変失礼な事をしてしまったそうである。父に話したら「あ〜あの大黒様ね。大黒様と酒が飲めるなんて貴重な経験じゃない。若者と飲めて大黒様も嬉しかったと思うよ。」と笑っていた。

このようなドタバタもあったが、最終的に私達の代の演奏旅行の最終決算報告は校友会のサポートや地元メディアでの宣伝の成果が出たのか、前売券、当日券の売上、広告収入などで黒字となり、結果大成功に終わった。そして、この演奏旅行の大成功で勢いに乗った私達は次の宿敵である 12 月の定期演奏会に向け、明オケ 100 年の歴史に伝説の 1 ページを残すことになる「英雄の生涯」という大曲に向けて戦いを挑むのである。

あれから約 30 年経つが、私は今でも都内でオーケストラ活動を続けている。昨年高校時代の旧友に誘われ地元福島での練習で帰省した際に、「小学生の時に明治大の演奏会のチケットを貰って聴きに行ったら、とても上手でした！」という言葉をかけられた。年月を経た今でも、当時の明オケの演奏を覚えてくださっている方がいた、という事実。これは当時我々が演奏旅行の準備に費やした苦労は決して無駄ではなかったことの証でもある。私は、74 代はチャレンジ精神旺盛で、各々が自身の良い持ち味を各方面で発揮する能力を兼ね備えたメンバーが集結した「奇跡の世代」だと思っている。その 74 代の一員として福島演奏旅行の運営に携わることができたことは、自分史の中にも刻まれ生涯忘れることはないだろう。

現在明オケでは演奏旅行は実施していないようだ。将来もし演奏旅行が復活する機会が訪れた際、この長文の寄稿が次の 100 年の世代に少しでも役立つことができれば幸いである。

「明オケの思い出・雑感」第 74 代録音 篠田昌克

私たち 74 代は、オーケストラの練習に最も苦勞した年代の一つでしょう。

かつて、明治大学駿河台キャンパスには明治大学記念館という建物があり、私たち明治大学交響楽団（以下、「明オケ」と言う。）は、ここで数多のクラシック音楽を練習したり演奏会を開いて披露したりしていました。私が入学した頃はこの記念館の五階に団の部室と倉庫があり、練習の度に二階のステージまでティンパニなどの大きな楽器を二人がかりで降ろし、練習が終わるとまた二人がかりで五階の倉庫へと昇って運びました。もちろん、当時の記念館にエレベーターなどというものはありません、【階段】を使ってです。

演奏会の形態はだいたい決まっていて、前プロ（10 分前後の序曲がほとんど）、中プロ（20 分から長くても 30 分程度の組曲だったり抜粋ものだったり）、メイン（30 分から長いもので 1 時間前後）の三曲構成。練習はというと、前プロと中プロを練習する通称【前中】の日とメインの日に分かれていました。バストロンボーン奏者だった私は、一年生ながら前プロの歌劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」序曲を任せられました（「乗り番」と言います）。1995 年当時団員数は百名を超え、一部のパートでは入団したての 6 月演奏会には乗ることができず（「降り番」と言います）、ましてや大所帯のトロンボーンで入団したての一年生が乗り番を得られるというのはここ数年にない過分の待遇と言われたものでした。 閑話休題（それはさておき）、一生懸命ティンパニを中プロ乗り番の先輩とステージまで運び、前プロの練習をこなし、中プロの練習へと移行すると、前プロの私は家路に就くことができるのでしょうか？もちろんできません。中プロの練習を聴きながらその場に待機し、終了するのを待ちます。そして、ティンパニを同じ先輩と五階へと運ぶのです。

そんな記念館が取り壊されるという、なんとも衝撃的な情報が飛び込んできました。

それまで、練習は記念館に集まりさえすれば成り立ったのですが、練習場所が失われるというのはオーケストラにとっては生命線です。人が集まっても、練習場所がなくては練習ができません。

6 月演奏会本番と 12 月の定期演奏会、それぞれの GP（「ゲーペー」又は「ゲネプロ」と読み、「ゲネラルプローベ」の略で、本番直前に本番どおりに通しで行うリハーサルのこと）だけは記念館を使わず、公共施設の多目的ホールを使用して練習していました。私たちはこれを『外部練』と呼んでいました。いつもの記念館ではない場所での練習、メイン乗り番の大先輩に会える、本番直前の緊張感、そんな新鮮さを味わえる外部練はとても素敵なものに感じられました。それが、まずは団室と楽器倉庫の移動を命じられ、記念館ステージは使用できなくなり、練習は外部練を強いられるようになりました。練習の度に練習可能なホールとレンタカーのトラックを手配し、倉庫からトラックへと運んで『積み込み』、練習後は駿河台に戻って楽器を積み下ろすようになりました。先輩たちはコンダクターやトレーナーの先生たちの接待で練習場近くの居酒屋で飲んだくれる一方、私たち下々の一年生は駿河台に帰り『積み下ろし』をせねばならず、すべてが終わった後で旧記念館裏の錦華公園で一息つくというのが定番でした。私たちが二年になると、このルーチンも【そういうもんだ】と思うようになり、さほど苦とも思わなくなっていました（少なくとも私は）。このときのトラックを運転していたのが『備品』という役職の人たちで、この頃から備品の人たちに『運搬』という裏の役職がついてくるようになりました。

さて、問題は金銭面です。毎回の練習場確保のためのホール使用料に加え、トラックのレンタカー使用料は明オケの財政を圧迫しました。私たちのひと世代上、私たちの世代、そしてその後の数世代の会計（役職の一つ、団の財政を管理する）を任せられた人たちはさぞ頭を悩ましたことでしょう。 それでも私たちの一つ上の 73 代は、12 月定期でマーラーの交響曲第五番をやりきりました。これは「来年オレたちもでかいことをやってやるぞ」と、私たち 74 代を奮い立たせたものです。

そして私たちが三年になった春、ある事件が起きました。

一人の二年生が入団しました。パートは【ハープ】。

団としては前代未聞の楽器に私たちは狂喜しました。ハープと言えばアマチュアオーケストラではプロのエキストラをお願いするのが定石で、アマチュアのハープ奏者を抱える団体など極一部、今でこそあるかもしれませんが、当時はそんなアマオケはなかったのではないのでしょうか。そのハープ奏者が団員になったのです。私たちの夢は一気に広がりました。このことが、12 月定期でリヒャルトシュトラウスの「英雄の生涯」を演じるきっかけの一つになったのかもしれません。

しかし、その楽器の特性から、私たちは少しだけ悩まされることになりました。それは楽器の【移動手段】です。

練習の度に大きめのハッチバック車をレンタルし、後部座席をフルフラットにし、毛布を敷いてハープを乗せ、団員の家から練習場まで往復する必要がありました。特に合宿ともなれば、合宿場までの長距離を運転しなければなりません。しかし、この言うなれば手間を、私たちは何とも思いませんでした。必要経費どころか、同じ団員のためと金銭面のことは何も言わず、むしろ運搬を担ったドライバーに感謝したものでした。

かくして、私たちの「英雄の生涯」は 12 月定期演奏会で演じられ、自画自賛ではありますが大成功を取めたのです。現在は 10 号館に広い練習場が整えられ、団の部室も、楽器倉庫も、同じ階にあります。外部練の回数は格段に減っていると思います。今現在も明オケが存続している、決して恩を売っているわけではありませんが、あの頃、頑張ってよかったなあと思います。

「日本オペレッタ協会 20 周年記念公演」第 74 代幹事長 遠藤智史

もう 1 点私たちの代で書かなければいけないことがありました。
トレーナーの榊原先生が当時お仕事されていた日本オペレッタ協会の公演にお誘いいただいて、1997 年 5 月 16 日から 18 日に協会 20 周年記念公演ローベルト・シュトルツ「春のパレード」の軍楽隊メンバーとして舞台に立たせていただきました。歌手もオケも当然プロの方、軍楽隊も重要なソロのあった 1st トランペットは藝大院の方でしたが、それ以外のパート（ピッコロ、クラリネット、トランペット、トロンボーン、チューバ、パーカッション）は全て明オケメンバーで担当することになりました。
大塚の稽古場にもお邪魔させていただき練習して、衣装合わせして、舞台に出るので化粧までして、とこれまで経験のなかった舞台芸術の世界に出演者として入るという得難い経験をさせていただきました。
公演は大成功。舞台から見た光景は素敵なものでした。打ち上げは当時新宿にあったドイツビール屋のホフブロイハウス。アインプロジェクト！！と何回乾杯したことでしょう。なおこの公演のオケには榊原先生だけでなく、大橋先生も乗り番で、たくさん飲みに来て行ってもらいました。そしてこの時の飲み会で吹奏楽作ろうという話が出て SayNoYesYes 吹奏楽チームができて大橋先生に指揮してもらうことになるのだから、飲み会もいろいろなことがありますね（笑）。
それから幾年、2017 年でしたが、ネットでその公演の「春のパレード」の音源 CD が出ているのをたまたま見つけ、即買いしてしまいました。先頃、完全に忘れていた「春のパレード」のメロディを久しぶりに聴いて当時のことを思い出しました。つまり、明オケ軍楽隊の演奏は音源が残っているのです。
私たちが E 年の時の思い出はたくさんありますが、これもそのうちの 1 つとして記録させていただきます。



春のパレードの演奏会 CD と軍楽隊衣装

75 代（2000 年卒）

新堂 浩一郎（幹事長）

明治大学交響楽団の第 75 回記念定期演奏会が、東京オペラシティコンサートホールタケミツメモリアルにほぼ満員の聴衆を集め 12 月 12 日（土）午後 6 時 30 分から盛大に開催されました。（中略）内装はすべて白木の木材で構築され、流行のジュークボックススタイル。舞台の背後にはオルガンが配されるという、まさにクラシックの音楽会を十分満喫できる雰囲気を持ったホールです。入場者も大変多く、左右のバルコニー席に空席が目立つ程度でほぼ満席の 1600 名が入ったのではないかと思います。OB も約 90 名位と最近にない集まりでした。
これは、1999 年 1 月に発刊された明治大学交響楽団 OB 会ニュースの一節です。

今回は明オケ 100 周年にあたり 75 代を代表し私見も多く含めつつ振り返ってみます。
1997 年 9 月にオープンしたオペラシティコンサートホールで定期演奏会を催すことができたのは 75 代にとって忘れられない最高の経験であり今でも自慢できる思い出の 1 つです。
指揮者本名徹次氏、Rシュトラウス「死と変容」、ブルックナー「交響曲第 3 番ワーグナー」など超大曲、オペラシティといろいろなことを顧みずチャレンジをした 75 周年記念定期演奏会。弦楽器は、コンミス野田さん、2ndVn 種田さん、Viola 小野寺さんと女性 3 名がトップランナーを務めてくれたのも今は多々あるでしょうが当時としては珍しかったと思います。
※ちなみにそれから 1 年後、同期数名の卒業旅行で訪れたウィーンの街中で本名徹次氏と再開するハプニング、これは本当にご縁を感じる出来事でした。

私たち 75 代は、変化の多い、歴史の転換期にいました。
入学当初、お茶の水の記念館は取り壊しの真っ最中、先輩方から何う記念館の姿、OBOG の思い出がどんどん壊されていく様子を記憶しています…。明大通りからの入り口はベニヤ板で覆われ狭い通路を行ったり来たり、まだ学生運動の名残、独特な看板やヘルメットなども僅かながらあることを記憶。一方で 1998 年 11 月にリバティタワーの竣工記念イベントが行われたところが 3 年生、劇的に変化するお茶の水界限、一気に転換していく様子を間近で感じる事ができたのも我々世代でよかったと思える出来事です。



記念館とリバティタワー

幾つかのできごとを通して 75 代を振り返ります。

24 時間テレビ出演

コントラバス OB の斎藤さんにお声掛け頂いたことからスタートした 24 時間テレビでの生演奏、竹芝ニューピアホールで久石譲氏と TOKIO、障がい者の皆さんと共に演奏する企画でした。本番はもちろんですが、そこに至る練習を夏の暑い最中複数回実施したのを覚えています。24 時間テレビの日曜日夕方フィナーレに近い時間が出番だったこと考えると、当時の 24 時間テレビでも目玉企画だったのかな、と推測します。

大黒事件

1997 年の福島演奏旅行でのできごと、全体コンパ？後の部屋飲みで事件発生。
和室に鎮座する大黒様が目に入る→大黒様を囲むように飲み始める※もうここからおかしい→大黒様に酒を飲ませ始める→大黒様を冷蔵庫に入れて冷やす→冷蔵庫明けて御開帳するの繰返し、その悪ふざけが過ぎた結果、大黒様をぱっかーんと割ってしまう事件が勃発、庶務のお姉さまがたにひどく怒られ、先輩方には大変なご迷惑をお掛けしたんだと大人になった今更ながら反省の日々です。後日談ですが 75 代同期の佐藤浩くんの第一子誕生祝いは、おめでとうの文言入り大黒様を（悪ふざけで）贈呈しました。



佐藤家に贈られた大黒様

Tutti 前後の行動

これは、前後複数の年代に共通するのですが、外部練全盛期だったため、毎回 2T トラックで楽器を運ぶことを繰り返していました。

夕方に、記念館に集まり積み込みした後、下宿組を中心としてよく 2T トラックの荷台に楽器と共に「積み込まれ」真っ暗な中 20 分～30 分程度の移動をしていましたね 電車賃が浮くから、という理由だったかは忘れましたがなんとも言えない「不安と一体感」が生まれたような気がします 今はコンプラ的にアウトなことも「当時は」許されていた？

Tutti 後は積み下ろし、積み下ろしが終わると終電近くまで錦華公園にて浮いた電車賃を投入、龍龍軒と缶ビール、桃屋のやわらぎが定番でした この時代は、消費税 5% がスタートしたころ、懐厳しかったせいか、龍龍軒を食べることができる人とビールだけの人がいた気がします。

ハープ奏者岩間由香子さんのこと

寄稿文の最後に必ず書きたかったこと、岩間さんのことです。
ハープ奏者として、外務として、明るいキャラクターを持ち合わせる彼女は同期はもちろん先輩後輩にも人気がありました 外部練への運搬のためお邪魔した彼女の賃貸にハープが鎮座している様子に、驚愕した記憶も鮮明に残っています。

その岩間さんですが、2021 年 3 月 17 日亡くなられています。ご病気で 5 年くらい闘ったとのこと。私自身は同郷名古屋出身であり結婚式にも来てもらったご縁もあり本当に残念でなりません。

最後に

大変個人的なことですが、私の誕生日は 5 月 5 日、毎年新歓合宿の全体コンパの日です。
1 年生のとき参加した私は、初日の縦割りコンパから驚愕の日々が始まりました。
当時 3 日間続く縦割り、セクション別、全体だったと思いますが 1 日たりとも「忘れられることなく」ハーーーーピーバーーーーースデーーーーーと「お祝い」頂く儀式が続きました。
今は社会人既に 25 年になりますが、土日祝が勤務の仕事に就いており 5 月 5 日は必ず仕事です ただ、5 月 5 日になると、必ず私の頭の中は、ハーーーーピーが駆け巡るのです。
きっとこれは、ずっと記憶し続けるのでしょう。
2022 年年末の定期演奏会では、久々に同期や先輩後輩に会うことができました。
1 人でも多くの同期がこの寄稿文を読んで懐かしみ、また会いましょう！と再開できるきっかけになればと思います。明オケのメンバーでよかった、その仲間と知り合えてよかった、どんな文章にしようか、考える中でそんなことを改めて感じる日々でした。

COLUMN 「75 代の思い出」 平成 12 年卒 Vn 新堂 浩一郎

- ・ **第一印象**
コンマス大塚さんがカッコよかった！先輩方がとても大人に見えたなー、と。 入団したとき、記念館が確か取壊し中だった気がします。
- ・ **指揮者**
本名徹次さん、75 周年でブルックナーを振って頂きました。本名先生とは、卒業旅行へ同期（井原、秋山、〇〇、新堂）で行ったウィーンで再会した思い出。あと下振り来て頂いた横島先生、お住まいがサンパークってマンションだけで盛り上がり飲んでた。サンパークにとっても敏感だった笑
- ・ **演奏会・演奏旅行**
やはりオペラシティでやったのはよき思い出。演奏旅行では、同期夜な夜な大黒の置物を前に酒を飲み、冷蔵庫入れたり酒飲ましたり悪ふざけが過ぎ割ってしまった…。この一件を機に、同期佐藤浩の第一子誕生祝いは大黒置物（おめでとうの文言彫り入り）を皆で進呈しました。
- ・ **演奏会以外の活動思い出**
卒団した先輩が日テレにおられ（斉藤さん）お声かけ頂き 24 時間テレビの営業やりました。みんなテレビ映る！ってワクワクしてたかな。障がいの方たちと確か TOKIO との演奏。他にもファッションショーの裏で演奏する営業やった記憶あり、練習後の錦花公園飲み & 龍龍軒のラーメンはお決まりでした（もうやらないのかな？）。いつのまにか龍龍もなくなってしまいましたね。今は、許されないでしょうが。 楽器運ぶトラックの荷台によく乗ってましたね。今考えると怖いですが。
- ・ **飲み会の思い出**
高弦は大人しいメンバー多かったからかセクションコンパは苦勞したな。私がコンマス（酒）で向かいに盟友岩城に座ってもらい凄い記憶。今はどうなんでしょう？ オケ内のオフィシャル飲みでは、ないですがすずのや？での殺し合いは、何回かやりました。頼末、武井、岩城、富永とか。ひたすら飲む、飲ませ合う、つまみそこそこに殺した人（生き残った人）が勝ち。今考えるとヒドイ。2 階にあっ和式トイレに頭突っ込んでたやついたなあ。
- ・ **面白いやつ、変わったやつ**
ウチの代はコントラバスが濃かった、富永、武藤、武井、竹下のカルテット笑、富永武藤のアウトローな感じと真逆の竹下、みんなのアイドル（おもちゃ）武井の構図。

76 代（2001 年卒）

海野 亘（幹事長）

私たちの代が大学在学中の時勢といえば、バブル崩壊に続き、アジア通貨危機を発端とした金融危機により北海道拓殖銀行、山一証券、日本長期信用銀行など金融機関の破綻が相次ぎ、就職超氷河期と言われていた。就職を控える我々大学生にとっては大きな不安を抱く一方で、インターネットや携帯電話が一般家庭にも普及し始めて情報が溢れだし、間もなく迎える新世紀への期待に胸を膨らませる時代でもあった。

そんな時代を背景とした私の大学生活の中心となったのは、言わずもがな明オケでのサークル活動である。付属高校から明治大学に進学した私は、吹奏楽部の先輩方が多く明オケに入団していたこともあり、迷わず（実際には高校時代サックス奏者であり、新たな楽器を一から始めることに躊躇はしたのだが）明オケへの入団を決意した。

入団当初、新歓合宿や 6 月演を経て、常軌を逸した（褒め言葉）飲み会や演奏会に向ける情熱を感じたことは鮮烈な記憶であるが、なかでも強烈な印象に残ったのが C 年弦楽器初心者の身でありながら演奏旅行への参加させてもらったことである。

福島への演奏旅行は、地方での演奏会の成功は勿論のこと、演奏会の合間の観光や宿泊施設での部屋飲みが、私にとって忘れられない思い出となっている。当時 E 年の先輩に誘われ、日本酒「磯自慢」を振舞っていただきながら先輩方の語り合う姿を目にし、自分たちの代でも演奏旅行を実現させようと決意したのを、今でも鮮明に思い起こすことができる。

当時の明オケでは 2 年に 1 度、演奏旅行を実施していたが、私たちの代でも演奏旅行を実施するかどうかについては議論があった。学生にとって演奏旅行を行う金銭的負担は大きく、また、地方でのプロ公演や地方大学でのオーケストラサークルも活発であり、伝統ある明オケと言えど地方での需要があるかは疑問視されていた。それでも演奏旅行を実現させたいと決心させたのは、C 年時に参加した演奏旅行の楽しかった思い出であり、当時の役員候補のメンバーからも概ね賛同をもらって演奏旅行実施に向けて準備していくこととなった。

演奏旅行の実施に向け動き出したのは D 年に上がってから間もなく。候補地として音楽活動が盛んであり、開催時期に夏休みである中高大学生の集客が見込めそうな地域を挙げ、明オケの合宿でも馴染みのある長野県に決定した。早速、広報活動を行うべく、校友会の方に連絡を取り、演奏旅行実施の旨を伝え、チケット販売のお願いをした。また、地元中高生への PR をすべく、地元教育委員会への後援依頼にも出向き、初めて役所とのやり取りをし、下見を行い準備を重ねていった。

そして迎えた演奏旅行初日。早朝に 10 号館から長野県民文化会館へ向けて出発する。昼過ぎにホールに到着しリハーサルを開始。曲目は 6 月演と同じく「ニュルンベルクのマイスタージンガー」「眠りの森の美女」「シューベルト交響曲第 8 番」であり、指揮も 6 月演に引き続き河地良智先生に振っていただく。

演奏会の開始時間も迫り、舞台袖で待機しつつ、ふと客席を見ると、お客さんが全く入っていない。「――、開場してるよね…？」と青ざめる。確かに、校友会の方と連絡を取った折にも、チケット販売状況が芳しくない旨を伝えられていたが、ここまでとは予想していなかった。準備の甘さが招いた結果である。舞台袖で河地先生に集客ができていないことをお詫びした際に、先生からいただいた言葉は今でも鮮明に耳に残っている。「私だって演奏者より少ない観客の中、公演をしたことは何度もある。聴きに来てくれた方々に良い演奏を届けようではないか。」と仰っていただいたのだ。我々団員もその言葉に奮い立たされ、100 人未満の観客ではあったが、精一杯の演奏を行った。続く 3 日目の松本公演も集客状況は芳しくなく、200 人程度しか観客を集められなかったが、開き直って良い演奏ができたと思っている。

演奏会として成功したとは言い難い内容であったが、2 日目に行った老人ホームでの慰問演奏では良い思い出も残っている。地元との交流を行いたいと思い企画したもので、木管・金管・弦楽アンサンブルを行ったのであるが、入居者の方々からとても温かい歓迎を受けた。特に、1 曲終わるごとに涙ながらに「良かったよ～」と言って拍手をしてくれたおばあちゃんの笑顔が印象に残っている。

振り返ってみれば、「あの時もっとこうしていれば良かった」と悔いもある演奏旅行であったが、同期とともに精一杯の努力をして作り上げた企画であった。嵐の中、一緒に下見に行ったり、気の遣い過ぎでホテル到着と同時にベッドに倒れ伏していった仲間たち、そしてこの演奏旅行に参加してくれた後輩たちには改めて感謝を申し上げたい。

演奏旅行は我々の代で最後となってしまったと聞く。演奏旅行という伝統を残すことに対して良い影響を与えられなかったことは残念であるが、演奏旅行に代わる新たな取り組みも行われているようだ。次の時代へかって明オケの良き伝統と気質が受け継がれていくことであろう。

1999 年 演奏旅行 行程表

8 月 20 日

明治大学 10 号館 ― 長野県民文化会館（長野公演）― シャレードイン志賀

8 月 21 日

シャレードイン志賀 ― 松本城 ― 城山老人保健施設（慰問演奏）― 諏訪レイクサイドホテル

8 月 22 日

諏訪レイクサイドホテル ― 松本ハーモニーホール（松本公演）― 精進マウントホテル（レセプション）

8 月 23 日

精進マウントホテル ― 勝沼ワイナリー ― 明治大学 10 号館

77 代（2002 年卒）

児玉 恵純（幹事長）

77 期は 1998 年入団ー 2002 年卒団。この世代の前後は「新世紀 明オケ」の境界にあるといえます。時代背景をざっとおさらいすると、同期の多くにとって、中学／高校時代のちょうど真ん中辺りに、日本の特異点のひとつ 1995 年（阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、Windows95 発売、エヴァンゲリオン放映開始、攻殻機動隊 GHOST IN THE SHELL 公開）が位置します。98 年の入団時には既にインターネットや電子メールは普及しつつあり（Yahoo! JAPAN のサービス開始 1996 年）、PHS・携帯電話を持つことも大分普通になっていました（日大付属高校における調査で、98 年当時の高 3 女子の携帯電話保持率 88%）。しかし、YouTube も SNS も各種サブスクリプションサービスも無い時代。Amazon ジャパンのサービス開始が 2000 年。そして、9.11 米国同時多発テロの余韻の中、「超・就職氷河期」の 2002 年に卒団を迎えます。

時流なのかキャラクターなのかは定かならず、ですが、直近の先輩世代と比較すると 77 期は個人主義的な傾向というか、やや斜に構えたようなところがあったかもしれません。かといって万事が淡泊というわけでもありませんで、ちょっと押せば内なる拘りやマニアックさ、頑固さが漏れ出てくる面もありました。

そんな「内なるもの」が溢れ出たのが 12 月定期だったのではないかな。第 77 回定期演奏会の曲目は、モーツァルト「魔笛」序曲、リスト「前奏曲」、ブルックナー交響曲第 6 番イ長調。ここには我々の「コンサバチャレンジ」とでも言うべき、地味な挑戦がありました。

選曲会議（インペク、セクション／パートリーダー、コンミスが集まっての合議制でした）にあたって、音楽面の責任者たるインペクが拘ったのは「プログラムには可能な限りテーマ性／一貫性を持たせる」「演奏の質を犠牲にするような選曲はしない」という方針です。

前者は「プログラムの統一感がなさ過ぎる」とトレーナーの先生方から常々言われていたもの。後者については、選んだ曲が簡単だということではなく、オーディションなし＆初心者・経験者の混成楽団において演奏の質を問うならば、現実問題として選べない曲があるという下世話な話。当時の弦楽器セクションは大学で楽器をはじめた人も含めて全乗りに近い状態。一方で管打楽器の枠は一定確保せねばならない…という乗り番に関する制約があり、方針との整合を取るのとはなかなか骨が折れる作業でした。

斯くてひり出されたブルックナー第 6 交響曲は、無名ではありませんが、かといって取り上げられる機会が多くない超名曲のひとつ。記事執筆時点で言えば、過去に明オケで取り上げられたのはこの時だけではないかと思います。（誰に頼まれたわけでもない）方針と種々の制約の中でも尚「独自性を出して歴史に名を刻みたい」という野心をトレードオフにしないのが、77 期の内なる拘り。

ブル 6 を中心に据え、予算面から著作権保護期間外のものに絞り、独壊物でまとめて…とやって決めたプログラムだったわけですが、管打楽器の乗り番は決して多いとは言えないラインナップです。結果として卒団する F 年の多くが乗れない…という事態を招き、それはもう揉めました。先輩方には申し訳なかったと今でも思いますが、出した結論を最後まで曲げなかったのもまた 77 期らしさだったかもしれません。

最後に、10 号館のデカイガラス割っちゃってごめんね。



77 期の阿吽 往時のインペク様とコンミス様

付記：10 号館ガラス大破事件 捕物控

ある日、歴史ある山の上ホテル、の裏口を望む 10 号館のテラスにて、誰かが持ってきたサッカーボールを数人で蹴っていました。ふとクロスが上がったところでボレーシュート一閃。見事にふかした球はガラスへ一直線（思わず韻を踏む）。決めたのは私、77 期幹事長・児玉です。

一緒にボールを蹴っていたメンバーが蜘蛛の子を散らすように逃げる中（君たちヒドいよ・笑）、私は大学の学生課に自首してあえなく御用。リバティタワーへ向かう背中が涙を誘った、とは目撃した同期の談。

学生課では、入学式・卒業式での演奏打ち合わせでよく顔を合わせていた担当者が苦笑しつつも対応して下さって、弁償やペナルティなどは寛容にも発生しませんでした。金欠学生だった私はホッと胸を撫でおろしたのです。ありがとう明治大学。

10 号館の地下階まで飛散したガラスは、みんなで掃除しました（いまは笑い話とはいえ、怪我人が出ていたらと思うとゾッとする）。その後向かったニュー浅（当時神保町にあった、明オケ御用達の大衆居酒屋「ニュー浅草」）が大荒れに荒れたのは論を待たない…。



明治大学交響楽団第 77 回定期演奏会 ◆'00. 12. 16 ●Photo: スペースフォト
■指揮: 小田野宏之 ●W・A・モーツァルト／歌劇「魔笛」序曲 ●F・リスト／交響詩「前奏曲」 ●A・ブルックナー／交響曲第 6 番イ長調
●於: 新宮文化センター大ホール

78 代（2003 年卒）

坂口 良介（幹事長）

私たちの幹部学年は 2001 年、21 世紀に入ったところ。新世紀にふさわしい明オケとしたいと思い、運営に取り組んでいました。

社会情勢としては同時多発テロ、就職氷河期、デフレ等、社会的にも不安定な時期に入りつつあるという時代でした。また、先輩達の就職活動の厳しさを目の当たりにし、将来への不安を覚えるという状況でした。

当時明オケ内において最大の課題は、いつの時代でもあったのかもしれませんが、財政状況の厳しさです。原因は未納金。団費や演奏会・合宿の出資金の回収が思うように進んでおらず、未納金がかなりの額に達していたと記憶しています。

このような状態もあり、2 年に 1 度行っていた演奏旅行は取りやめにせざるを得なくなっていました。演奏旅行については、実施するかしないかでかなり揉めたのですが賛否が二分した状態では実施は難しいという判断に至りました。

当時幹事長の私としては苦渋の決断ではあったのですが、今思えば仕方がないのかなと思っています。そのような意味では私たちの学年・世代は「我慢の年」であったのかもしれません。演奏旅行を取りやめにする代わりに夏をどうするかという議論にもなり、合宿をもう 1 日延長する、チャリティコンサートをやるなど議論がありました。

ここでもなかなか議論はまとまらず、オーケストラ全体で実施することは断念し、初心者の多かった弦楽セクションはセクション練習に、木管や金管の管楽セクションは地域の敬老会や老人施設での慰問演奏を実施しました。

さらに 12 月の定期演奏会の指揮者をめぐっても、費用や練習日程の問題もあり外部から指揮者を招聘するのが難しくなり、最終的にトレーナーである榊原先生にお願いすることになりました。明オケのトレーナーが定期演奏会の指揮者を務めるのは知り得る限りでは前例がなく、周囲から疑問の声もありましたが、明オケを知り尽くした「我らが榊原先生」のご尽力もあり、演奏会では声楽の関真理子先生もお呼びすることができ、費用面、内容面でも満足のいく演奏会ができました。榊原先生には本当に感謝です。

明オケが 100 周年を迎え、ここまで継続していることは本当に素晴らしいと思います。

近年は学生の経済状況も厳しく、お金のかかるオーケストラの活動を行うこともさらに大変な時代になっているかと思います。現役学生の皆様におかれましてもクラウドファンディング等様々な方法で外部から費用を得ていると伺っております。

引き続き頑張って頂き、これからも明オケが明オケであり続けて欲しいなと思います。

100 周年おめでとうございます。

79 代（2004 年卒）

藤井 信也（コンサートマスター）・松永 英則（内務）

※当代幹事長は事情により執筆できないため（文末参照）、代理でコンサートマスター藤井が書かせていただきます。

我々第 79 代を一言で形容するなら、「多様性」ではないでしょうか。

- ・団友として初のコンマス（団員規約変更）
- ・コンパマスターも団友
- ・金管セクリは初の女性
- ・同学年にチューバ二人在籍
- ・男性の庶務

などなど。初心者の活躍も顕著で、初心者のパーリーが複数名いました。

この、時代を先取りしたような我々の代は今も仲良し。卒団してから何度も集まっています。

＜2002 年 6 月演＞ 2002/6/1 Sat. 指揮：上野 正博 ティアラこうとう

シベリウス 交響詩「フィンランディア」

ボロディン 歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の踊り」

ブラームス 交響曲第 2 番 ニ長調

＜第 79 回定期演奏会＞ 2002/12/22 Sun. 指揮：岡田 司 昭和女子大学人見記念講堂

スメタナ 連作交響詩「わが祖国」より「モルダウ」

ハチャトゥリアン 組曲「仮面舞踏会」

チャイコフスキー 交響曲第 5 番 ホ短調

ストラヴィンスキー 火の鳥より「子守歌」「終曲」（アンコール）

Staff & Members

部 長	向 殿 政 男	平 林 剛	広報	清 水 弥 生
永久指揮者	尾 原 勝 吉	打楽器トレーナー 定 成 誠一郎		水 我 久美子
桂冠指揮者	W.D.ハウシルト	セッションリーダー 藤井信也(高弦)		宮 下 幸 子
幹事長	関 口 陽 介	岩本 見(中低)	ライブラリアン	坂 本 喬
コンサートマスター	藤 井 信 也	保永昌彦(木管)		永 嶋 淳 史
インスペクター	黒 田 和 永	淵上陽子(金管)	議長	保 永 昌 彦
弦楽器トレーナー	角 田 博 之	松 永 英 則	OB会	清 水 桃 子
	宮 里 親 弘	小 林 亮		春 元 保 乃
	永 野 雄 三	谷 村 淳	備品・運搬	谷 村 淳
	升 田 俊 樹	元 山 清 美		藤 井 信 也
	池 松 宏	池 畑 直 子		松 永 英 則
管楽器トレーナー	井 上 俊 次	本 間 香 織		吉 村 卓 也
	小 林 美 香	矢 島 佐知子	和泉支部長	福 田 嘉 裕
	野 田 祐 介	吉 村 卓 也	生田支部長	田 朋 彦
	和久井 仁	白 石 祐 子	書記	水 上 智映子
	大 橋 晃 一	田 原 洋 子	録音・録画	中 田 雄 一
	榊 原 徹	八木下 孝 雄		

第 79 回定期演奏会パンフレットより

楽しい思い出は沢山ありますが、その中でも以下の二つのことはとても思い出深い出来事です。

テレビ番組「やしがにのウィンク」への出演

フジテレビで当時放送していた、内村光良らが出演するバラエティ番組。

インペク：黒田和永の指揮の下、熱のこもったフィンランディアを演奏する明治大学交響楽団。

するとカメラは次第にシンバル奏者に寄っていき、音量も絞られていく。同時に西田敏行の「もしもピアノが弾けたなら」が流れはじめ、最後は、「もしピアノが弾けたらこんなシンバルなんてやってねーよ」と言わんばかりに、ヤル気なさそーな大塚君（第 80 代 Perc.）のシンバルが叩かれる…。

頑張って演奏したのに、ギャラは実費分だった気がします…。

※西田敏行さんは、この原稿を書き上げた 2024/10/17 にお亡くなりになりました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

福島県富岡町への依頼演奏

前泊組は電車、当日組は貸切バスで、依頼演奏に行きました。「依頼」とは言え、こちらが楽しませてもらいました！富岡町は、例年ワセオケにお願いしていたようですが、このときはなぜか明オケに依頼が来ました。

指揮は、「ありえなくね？」が口癖の、坂口先輩（第 78 代幹事長）にお願いしました。

それにしても、震災前に我々はここに行っていたんだなあとと思うと感慨深くなります。



平成14年度 富岡町ふれあいジョイントコンサート・プログラム	
●オープニングコメント 1. 主催者挨拶 富岡町町長 遠藤 勝也 2. 観覧上の注意	
♪第1部 時間:13:10~13:50 司会 吉田 孝子	
出 演	予 備 曲 目
富岡第二中学校 (合唱部)	はじまり
富岡第一中学校 (合唱部)	サンキョ
富岡第二小学校 (合唱部)	風になりたい
富岡第一小学校 (合唱部)	おさんぽ ぽいぽい
富岡第一小学校 (合唱部)	白い鳥
富岡第一小学校 (合唱部)	満月の不眠症ポロロッカ
富岡第一小学校 (合唱部)	WAになっておどろろ
休 憩 (10分)	
♪第2部 時間:14:00~14:40	
出 演	曲 目
富岡第一小学校 (音楽部)	3つの子どもの歌 「FROM FOR CHILDREN」
富岡第二中学校 (音楽部)	シンブル・シンフォニー<第4楽章>
富岡第二小学校 (音楽部)	ウィリアムズバーグ序曲
富岡第一中学校 (音楽部)	「作曲家の海の交響組曲」より 第3楽章 INTERMEZZO 第4楽章 DANCE
休 憩 (10分)	
♪第3部 時間:14:50~15:35	
出 演	曲 目
明治大学交響楽団	アイネ・クライネ・ナハトムジーク モルダウ 校庭舞踏会 チャイコフスキー
終 演	

ここで、藤井信也君と交代して、チューバパートの松永英則が当代幹事長で同じくチューバパートの関口陽介君について、ご紹介いたします。

彼の周りには自然と仲間が集まってくる。彼との学生時代の日々を思い出すと、そんな光景が目には浮かびます。冗談が大好きで一緒にいるだけで楽しく、隙あれば駄洒落を繰り出し、好きなことにはとことんまで追求する。そんな彼は非常に魅力的で、皆が彼を幹事長として盛り立てたのでしょう。

そんな彼は、普通の大学生が当然のように選択するサラリーマンというレールに乗らず、初志貫徹、時計職人を目指し、渡欧したのです。

それは、大きな衝撃でした。僕には、それを見守るしかなく、彼が成功するのか、はたまたどうにかなってしまうのか、遠く日本で、彼の身を案じるのみでした。

その彼は現在、精密機械の本場スイスで、数少ない日本人独立時計職人として、生活しています。彼の時計は、世界中の時計道楽の心をつかんで離さない、素晴らしい魅力があります。もう、すでに数年先まで予約されているそうです。（プリムヴェール、是非、覚えておいてください！）

神保町のニュー浅草や生田の坂を一緒に登っていた彼が、まさかスイスで時計職人になるとは！

関口君と同じパートで内務・運搬の松永英則でした。幻想交響曲、楽しかったよ！



F 年歓送合宿



D 年 6 月演奏会

80 代（2005 年卒）

倉吉 俊一郎（幹事長）

「まとまりがなかった 80 期」

80 期幹事長を務めておりました、Vn 倉吉と申します。

今回、当時の明オケを振り返ってとのことでスペースをいただいたので、当時を懐かしく思い返しながら書いてみたいと思います。

学生時代、我々の代を振り返ると『まとまりがなかったよな』という印象が思い返されます。

前後の代を思い出すと、我々の代と比較して各々が責任感をしっかり持っているように見え、一つの区切りの年である第 80 回定期演奏会の幹事学年として、周囲の世代からすれば『大丈夫か?』と心配されるような問題学年だったと思います。

実際、当時夏に行われていた引継合宿前に、当初のインスペクター候補者が様々な事情もあり退団し、幹事長候補者がスライドでインスペクターになるも二部在籍ということもあり連絡が付きにくい形。

元々、弦楽器は男性が和泉、女性が生田に固まっており、木管は男性がほとんどおらず、金管も低学年時に学年の中心として活躍されていた方がフェードアウトしてしまうということもあり、学年全体で一枚岩になるというよりも、小さなグループが乱立している状態でまとまりがつきにくい下地がありました。

第 80 回定期演奏会のメインは、偶然にも第 100 回記念定期演奏会と同じ『ラフマニノフ交響曲第二番』。

今でも通勤の合間に時折思い出したように『ラフ 2』を聞くのですが、第三楽章の美しいメロディを聞くと今でも、選曲会議で 7 時間も 8 時間もかかったこと、同期のつながりを深めようとみどりの日に飲み会をしたら飲み方が分からず半数以上が倒れたこと、合宿で二回も救急車を呼んだこと、ここには書けないあんなことなど苦い思い出が走馬灯のように思い返されます。

そんな 80 期がセクション・パート関係なくまとまりを見せてきたのは、F 年になってからではないでしょうか。

就活が終わって 6 月演や最後の定期演奏会の練習などで顔を合わせると、演奏会に乗っている同期も少なくなり、自然と交流が生まれ、少しずつ相互理解がされてきたように思えます。

2 月の歓送合宿の際は、先乗りでモンゴルのゲルを模した宿泊地に泊まったり、合宿とは別に同期で山中湖や箱根に旅行したりしました。

卒業後も半年に一回程度、有志を中心に飲み会が現在も開催され、現役時代は一度も話したのを見たことがない組み合わせで山登りに行った、旅行に行ったなどの話を聞き、全員ではないにしろ一部メンバーを中心に卒業して 20 年近く経った今でも交流が続いているのは、現役当時まとまりがなかった反動かと思っています。

卒業して 20 年。

音練があった 11 号館はなくなり、毎日のように通ったニュー浅もなくなり、生田にはエスカレーターが設置され、錦華公園も新しくなりました。

1962 年に竣工された明オケの拠点 10 号館は、明治大学が保有する建物の中でも最も古い建物の一つ。

10 号館が見られるのもそう長いことではないかもしれません。

御茶ノ水近郊にお越しの際は、ぜひ皆さんの記憶の中と変わらない 10 号館を見に来てください。

母校の職員の一人として、OBOG の方々のお帰りと何より現役生の活躍を見るのを楽しみにしています。

81 代（2006 年卒）

西村 謙一（幹事長）

はじめに

81 期は 2004 年が幹事学年でした。2004 年はアテネ五輪があり、世の中では『冬のソナタ』が流行っていました。映画では『世界の中心で愛を叫ぶ』が封切られました。

この文章を書いているのが 2024 年ですので、ちょうど 20 年が経過したことになります。幹事をする、所謂 E 年が 20 歳前後ですので、我々はその頃の倍生きたことになるわけです。ちなみに 2004 年は facebook が開設された年であり、つまりあの頃は SNS というモノが無かったわけでした、月並みな言い方ではありますが過ぎ去った日々の速さを感じ、感慨深いものがあります。

20 年も経過してしまうと、あまりにもその記憶は眩しすぎる青春の記憶であり、事実今回この 100 年史への寄稿のお話をいただいた時、正直「何したっけ?」と思う有様でした。（ここでは書けないような馬鹿をした記憶は鮮明にあるのですが・・・）

そこでまずは 81 期の幹部メンバーを決めた会議から振り返り、順番に一年間をなぞっていこうと思います。

春の幹部選出

81 期は個性的なメンバーが、これでもかと集まった代でした。ハッキリと主張するメンバーが多く、自然とリーダーが選ばれていきました。パートリーダー、セクションリーダー、外務、コンサートミストレス、インスペクター等々、順調に決まっていきました。ところが肝心の幹事長（つまり私）が「賛成」、「反対」同数で最後まで決まらなかったのです。

まあ、確かにちょっと頼りないところはあったと思いますし、正直品行方正でもなかったのも、ある程度は覚悟していたわけですが、正直ここまでハッキリと NO と言われたのはショックでした。多くの仲間が骨を折ってくれ、最後は反対派の推す坪井君（Cb 内務）が譲ってくれる形で、何とか幹事長に就任することができましたが、20 歳そこそこの自分には忘れられない経験となりました。

なお、この時反対したメンバーは、その後もわだかまりを持つことなく、共に 1 年間を走り抜けてくれました。言うことは言うが、やることもやる。それが 81 期の良さだったと思います。

6 月定期演奏会

メインはドボルザークの交響曲第 7 番。一部のメンバーと「ところでなんでこの曲になったんだっけ?」となりましたが、「パートや難易度、編成の都合だった」、「前年のドボ 8 の CD に付いてて、何となく候補に出したら何となく残って、決戦投票で選ばれちゃった」と、このあたりが真実のようです。

このようなことを勘案していただくと、前中のマイスタージンガーとペールギュントも各パートリーダーの苦労の痕跡が残る選曲であることを感じていただけるのではないのでしょうか。改めて学生オーケストラの面白さを感じます。

さて、オーケストラには練習場が不可欠なわけですが、我々世代の練習場と言えば神田駿河台の 10 号館でした。この当時の 10 号館は冷暖房も無く、冬は息が白くなるほど寒く、夏は汗が滴るほど暑かったです。おまけに小川町のサークル棟が無くなった影響から、他サークルが移転してきたことで益々環境は悪化。弦楽器はマンドリン部と管楽器はボクシング部と壮絶な縄張り争いをしていた記憶があります。

また記憶が確かであれば、10 号館ラウンジが練習場に改修されたのもこの頃ではなかったでしょうか。あの練習場が果たして良かったどうかは別として、昭和感満載の 10 号館が徐々に平成的な、画一的なキャンパスに移り行く過渡期だったのでしょうか。

決して快適とは言えない施設でしたが、「毎日のように 10 号館に行って、そうしたら必ず誰かがいて、そして飲みに行けた」（同期コメント）というコメントの通り、10 号館は学生時代の多感な我々の大切な居場所だったのだと思います。

夏合宿の思い出

明オケの夏休みと言えば夏合宿です。真っ先に思い出されるのは悲惨だった夏合宿の引継ぎミーティング（今は何と呼ぶのでしょうか？）。

82 期幹事長の犬野君（Tub）に焼酎にすじこを入れて飲ませるなど、今のご時世ならコンプライアンス的に完全にアウトなことばかりしていました。幹事長の私がこんな具合ですので、特にこの夏は多くの被害者が出て、内務の坪井君と、「俺たち退学かなあ・・・」と震えていたことを覚えています。何事もなく合宿が終えられたので良かったものの、学生の方々は決してマネをしないように。

12 月定期演奏会

御多分に漏れず、紛糾したのは選曲会議でした。管楽器が推すマーラーの交響曲第 1 番と弦楽器が推すブラームスの交響曲第 1 番で激突。10 号館が閉まる時間（当時 10 時半が閉門時間でした）になっても決まらず、全員で錦華公園に移動。そこで喧々譁々の議論の末、マーラーに決まりました。

今回の執筆のために当時のことを振り返ってもらいましたが、当時ブラームスを推していたメンバーも「決まった後、『マーラーの 1 番って 81 期らしい曲になったよね』って話になった」と語ってくれました。繰り返しますが、かなり個性の強いメンバーが多かったので、何かを決めたり話し合ったりするのは本当に大変なイベントでしたが、決まってしまうばサッパリ前に進む人たちでした。言い換えればとても責任感が強い人たちがパートリーダーを務めてくれていたのだと思います。改めて感謝したいと思います。

私の感想で恐縮なのですが、当日は「これで最後なんだな」という感傷的に浸る余裕はありませんでした。それはとても緊張していたからです。ご存知の通りマーラー交響曲第 1 番のトランペットは、最初舞台裏（バンダ）から演奏が始まります。C 年からずっと一緒だった小川君（インスペクター）、島村さん（旧姓 パートリーダー）と 3 人で始めるトランペットのファンファーレは明オケ生活の集大成であり、感動的な思い出です。今でも目を閉じると臉に蘇ります。

さて、私にはもう一つマーラーについて密かな想いがありますので、その話を付け加えたいと思います。あれは C 年だったか、それとも D 年だったか定かではありませんが、後にインスペクターになる小川君と所謂「吉田邸」【注】で、坂口さん（78 期幹事長）から借りたマーラー交響曲第 1 番を聴き感激。酩酊して意識が薄れる中で、「俺たちの学年でこれをやろう！」と誓いました。もちろん我々だけの気持ちで決まったわけではないのですが、あの狭い部屋で語り合った二人の若者の夢が 81 期のメンバーで実現できたことは、大切な青春の思い出です。

【注】別名ビバリーヒルズ。生田にあった吉田君（Tb パートリーダー）の家。数々の伝説と事件の舞台となった。81 期金管の聖地。

最後に

2 年前、第 99 回の定期演奏会がすみだトリフォニーホールで開催されました。曲目は 81 期と同じ、マーラーの交響曲第 1 番。当時近くの職場に勤務していた私は気持ちを抑えきれず、職場の仲間と共に聴きに行きました。

実に 18 年ぶりの明オケ！しかもマーラー！トランペットの音色を嘯みしめるように聴きました。演奏は素晴らしく、自分たちの時よりも上手でしたが、私には隣で小川君、島村さんが奏でていた音が蘇り、「あの時、自分もここにいたんだなあ」と本当に胸が熱くなりました。帰りの居酒屋で「西村さん泣いてましたよね？」と部下にからかわれる始末。オジサンになり涙腺が弱くなったのでしょうか。

あの頃から 20 年が経ち、多くの人が楽器を置いてしまったのではないのでしょうか。少なくとも自分はその一人です。明オケで過ごした日々は輝いていた青春の日々であり、もう戻らない日々でもあります。慌ただしい毎日の中で、少しずつ記憶も失われてしまうのかもしれませんが。

今回このような機会をいただき、かつての仲間とも連絡を取る機会となりましたし、改めて思い出す機会ともなりました。そしてそこには一生懸命オーケストラに向き合い、青春を駆け抜けた時代が確かにありました。

最後になりますが、100 年史編纂のため歴代の幹事長に連絡を取り、まとめていただいた事務局のみなさんと、今回の寄稿に協力してくれた同期、それから今回連絡を取ることができなかった同期のみんなに感謝し、81 期を締めさせていただきます。ありがとうございました。

82 代（2007 年卒）

大野 皓市（幹事長）・小山田 智紀（インスペクター）

6 月演奏会

2005 年 6 月 11 日（土）

パルテノン多摩 指揮：上野 正博

交響詩「前奏曲」/ リスト

交響詩「死の舞踏」/ サン＝サーンス

交響曲第 7 番 イ長調 / ベートーヴェン



前年 6 月 1 日のホール抽選ではことごとく外れ、抽選会終了後の空きを探したところ、パルテノン多摩が空いているのが見つかり「6 月じゃない演」は無事回避された。

多摩市ということで、「地方公演扱いになるのでは？」という声も聞かれたが、当時生田に住んでいた私からすればむしろ近く、ホール自体の評価も高いことから決定に至った。

プログラムは近年の明オケの中でも珍しく、ベートーヴェンの交響曲第 7 番を取り上げることができ、人数が少ない学年ならではの独自性を出すことに成功した。

合宿のこと

歓送合宿：那須大島フォーラム

新歓合宿：苗場三國屋旅館

引継合宿：ジャパン志賀



歓送合宿では、初仕切りの緊張からかビールの発注ミス（大瓶ではなく中瓶を用意）でドリンクが枯渇する危機を迎えるもなんとか回避。

新歓合宿では勧誘に力を入れた結果、多くの新入生を迎え、コンパとは別にお酒に頼らない平和的なレクリエーションを実施した。

その反動からか引継合宿ではセクリーレースや運搬担当がハコブンジャーショーを披露するなど、まあ、平たく言うとはっちゃけた。



イベントのこと

【東京湾納涼船】

2 年時にフルート某団員の発案により始まった東京湾納涼船。

毎年乗船していたが、どうやら明オケの固定イベント化したとのこと。近年では納涼船でアルバイトしていた団員がいたとの話も…。東京湾よりも深い感慨を感じる。



【和泉祭・生明祭】

生田支部に倣って、復活して間もない明大祭@和泉で、前年に引き続き今川焼き屋を開店した。機材の運搬には某団員の両親の力を借り、期間中も町田の「マルヤ製菓」さんに粉・具材を仕入れるべく足繁く通い、活況のうちに幕を閉じた。黒字決算になったと記憶しているが、何に使ったかは、よく覚えていない（おそらく打ち上げ代に消えていったと思われる）。



第 82 回定期演奏会

2005 年 12 月 24 日（土）

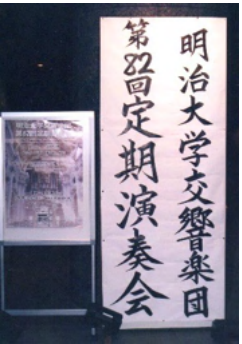
すみだトリフォニーホール

指揮：小倉 輝彰

大学祝典序曲 / ブラームス

交響詩「魔法使いの弟子」/ デュカス

交響曲第 4 番 変ホ長調「ロマンティック」/ ブルックナー



6 月演から一転してすみだトリフォニーホールで 24 日土曜日という絶好の日程を押さえることができた我々が、定期演奏会のメイン曲として選んだ曲はブルックナーの交響曲第 4 番であった。

我々の学年は現役ながら OB オケに多数エキストラ出演しており、その縁から指揮は当時 OB オケを指揮していた小倉先生に依頼し、現役と OB の橋渡しになることを（勝手に）狙っていた。

現在の明オケでは 4 年生の出番は無いようだが、当時は 4 年生と OB・OG を借り出しさらにエキストラまで呼んでいた。その当時から現在までお世話になっている先輩もあり、深い結びつきには感謝してもしきれない。



【編集後記】

今回の企画に際し 20 年前の記憶に不安を覚えていましたが、同期と共に当時のパンフレットや写真を見返すと、あの頃の思い出が鮮明に甦り、当時の絆の深さを改めて感じました。

文責：大 野（幹事長）

小山田（インスペクター）

83 代（2008 年卒）

国府 享（幹事長）

今回 100 周年ということで私たちの代のことを寄稿することになりましたが、思い返してみると私の代は皆がきちんと仕事をしてくれて、幹事長である私はほとんど実務をやっておらず、すごく楽をさせてもらったというのが第一の印象です。

校舎の違う生田校舎（理系）の方や、団友（他大から参加）の方も多く在籍していましたが、文句も言わず幹部学年として参加してくれました。みんな本当にありがとう…。

上記のことから幹事長の実務的な仕事はほとんどなく、明オケの象徴として朝から 10 号館に赴き、ろくに授業も出ず楽器を吹き、練習後は団員と居酒屋へ（当時は香港食市場とさくら水産がメイン）というろくでもない生活を送っていたことを覚えております。

入団当初はまだ 10 号館内の廊下でバリバリ吹いても何も言われない時代で、パート練習も廊下で行っていた時もありましたが、私が幹部学年くらいの時から近隣企業（山の上ホテル？）の苦情や他サークルの苦情なども相まって大学からの通達で音出し禁止になってしまいました…。

音出しできていたころも、近所の写真サークルが廊下に大音量でスピーカーを鳴らす行為や、抗議の意味をもった写真のようなものを壁に貼るなど言葉なき嫌がらせを何度かされていて、サークル間で結構ピリピリしていた記憶もあります。

当時はふざけんな！と思っていましたが、今思うと確かにうるさいので当然ですね…。

飲みでの思い出といえば、話せるレベルでセンセーショナルなのは、今は亡き駿河台下のさくら水産で瓶ビール 100 本（大瓶）チャレンジをやり、見事飲み切ったことでしょうか…。

私の代というより、先輩や後輩含めても 10～20 名いたので他の代の寄稿にも書かれるかもしれませんが、お通し抜き、タバコ NG、食事 NG という過酷な縛りの中、ひたすら飲ませあうという地獄の飲み会でした。私自身 3 回くらいはリバースしながらも見事達成し、瓶ビール×100 というレシートを見事ゲットしました。コピー機で拡大したものを誇らしげに部室の玄関ドアに貼っていた記憶があります。

そんなこんなで私の代の 6 月演奏会はチャイコフスキーの 5 番をメインプログラムに、12 月の演奏会は幻想交響曲をメインプログラムに演奏しました。

特に 12 月の演奏会はクリスマスの日に丸かぶりしたのと、人気漫画「のだめカンタービレ」のドラマの最終回だったりもしたので、こんな日に本当にお客さんくるのか？と心配をしていましたが、開場前からかなりのお客様が来てくださり、待機列の整理をしながら、この 1 年間本当によかったなあ…としみじみ感じておりました。

最後になりますが、100 年という長い歴史を迎え、本当におめでたいという気持ちと共に、ここまで続いてこられたのは各代の方々が明オケを本当に愛していたからこそだと思います。これからも末永く続いてほしいですが、あまり気負わずにその時の現役生が良いと思う明オケを、音楽を楽しみながら築いていただければよいと思います。



83 代 E 年の時の 6 月演の写真 練馬文化センター 大ホールにて

84 代（2009 年卒）

内野 幸宏（幹事長）

第 84 代は、2005 年に入団し、2007 年のチャイ 6 「悲愴」で幹部を卒業しました。

思い返してみると、新しいことが好きな代だったと思います。中には現在まで続いているものもあり、明オケの文化に少し貢献できたかなと嬉しく思います。

思い出深いものを挙げていくと・・・

ホームカミングデーで他団体と合奏

明オケを主体に、ピアノサークル KLAVIER を巻き込んで、ラフマニノフの「ピアノ協奏曲第 2 番」を演奏しました。これまで明オケ外のサークルと一緒に演奏した経験はなく、練習や運営は苦勞しましたが、明大生同士、音楽を通じて心を通わせる特別な瞬間を創り出しました。

トランペットコンサートの復活

かつて一度だけ開催されたトランペットコンサートを、2007 年から復活させました。当時は復活というつもりはなく、トロンボーンコンサートに対抗する思いで企画しましたが、トレーナー平林先生から OB/OG のみなさんにも声掛けしてもらい、結果的にたくさんの世代を巻き込んで開催できました。OB/OG の協力を得てスタートしたこのイベントは、今では毎年恒例となり、2025 年で 20 回目になります。

校歌を正式編曲

当時は、式典用の校歌の正式な譜面がなく、手書きの譜面だったり、パートの中でも様々なパターンが混在していたり、ごまかしながら演奏していました。

そこで、今後のことを考え、正式な編曲を作成してライブラリに残すことに決めました。アレンジャーとして売れっ子の大橋先生に交渉して、編曲をお願いしました。編曲の意義を大学当局に訴えて承認をとりつけ、先生への依頼料を大学に負担してもらいました。

この結果、フルオケ版の譜面や、アカデミーコモン用の小編成版、混声合唱共演版、弦楽版など複数の編曲が完成し、大きな演奏効果と練習の効率化をもたらすことができました。

ちなみに、編曲の遊び心として、コール「美しき天然」のメロディーをどこかに仕込むことを先生にお願いしました。その結果、弦楽版の一部にメロディーが仕込まれています。気づいた方はいるでしょうか。

セイノーユースオーケストラ設立

卒業後の 2009 年に発足した「セイノーユースオーケストラ」は、私たち 84 代目を中心になって立ち上げた団体です。若いメンバーが参画しながら現在も活動は続き、今年で第 15 回の演奏会を開催します。

しかも、このオーケストラは音楽だけではなく、出会いの場にもなっていて、結婚するカップルが続出。音楽をきっかけに新しい人生が始まるなんて、素敵ですよ。

おまけ写真①



6 月演のバルテノン多摩にて。
Fg パートが壁面に登って怒られたりしました。ごめんなさい若気の至りです。

おまけ写真②



世界一短いレシートを作ろう！というテーマで、注文は瓶ビールだけ、つまみゼロ、女人禁制の「漢飲み」。
終宴後は死人だらけでした。若気というか狂気です。

加藤 慶昭 (コンバマスター)

85 代（2010 年卒）

100 周年を迎えるような由緒あるサークルに所属できた事、非常に嬉しく、また感慨深く思います。
まず最初に、我々の 85 代の特徴としては、「ゴーイングマイウェイ」なメンバーが大多数を占める集まりだったということが挙げられます。個々の能力は高いのにまとまりの無い代だったので幹事長やコンマスは大変だったのではないのでしょうか？

そのような代だったこともあり、引っ張ってくれる先輩と、しっかりした後輩に支えられ何とか団の運営をやり遂げることができました。諸先輩・後輩には感謝しかありません。
せっかくなので我々の代に起こった事件や思い出をいくつか書き出していきますが、我々の代の特性上取り留めのない文章になることはご了承ください。

我々の代で 1 番のピンチを迎えたのは 12 月の定期演奏会でした。指揮をしていただく予定であった岡田司先生が、本番の 5 日前に体調を崩され指揮者の変更が余儀なくされました。この時は急遽、岡田先生の師である手塚幸紀先生に前プロとメインを、トレーナーである榊原徹先生に中プロを指揮していただき演奏会を開催することができました。手塚先生は普段学生オケを振ることはないそうで、トレーナーの先生方から「貴重な時間だ」と口酸っぱく言われ、リハーサルでは半数以上の先生が駆けつけてくれたのを覚えています。また榊原先生には緊急時における運営面についてのアドバイスを多く頂戴し、ステマネの内野先輩を交えてよく話し合ったと聞いています。このように、前例がなく時間も無い中でなんとかやり遂げることができたのはやはり周りの皆様のお力添えのおかげだと痛感します。

演奏会に関することとしては楽器運搬でもトラブルが発生しました。
トラブルの内容は割愛しますが、トラブルが発生すると必ず次の懇親会で「八海山」（破壊さん）の一升瓶が登場し懇親会が荒れるという事があり頭を悩ませていました。
懇親会の話で言うと、我々が設営した先輩の歓送合宿の際には計画段階で夜のうちに終われず朝日を拝むことになってしまうことが確実だったので、苦渋の選択で「拾いビール」の禁止等を行いなんとか AM 4 時頃に終了した記憶があるような無いような、、、

最後に、私は生田キャンパスの学生でしたので明オケ生田支部の事も書いていきたいと思います。生田にも部室や練習室があり環境としては良いのですが、とにかくにも御茶ノ水まで遠く、1 時間程かかるので、講義が終わってすぐに向かわないと合奏に間に合わないのが大変でした。逆に和泉や御茶ノ水キャンパスの方は「生田練」があると辛かったのではないのでしょうか？和泉や御茶ノ水の団員が生田坂を必死で登っているのを見るのが秘かな楽しみでした。

最近、生田に行った時に放置自転車が撤去され綺麗になった景色や、また当時通った店や場所が無くなっていることに衝撃を受けました。卒業から 15 年様々なことが時代とともに変わっているのを実感します。今回、100 周年を迎えた明治大学交響楽団も様々な変化をしてきた事で今があるのではないかと感じます。我々の思い出が詰まった「明オケ」がこの先 100 年・200 年続きますよう祈念いたします。
この度は誠にありがとうございました。



86 代（2011 年卒）

金井 桂祐（幹事長）

明治大学交響楽団が 100 周年を迎えられたことを心からお祝いいたします。諸先輩方から引き継いだバトンを我々 86 期がしっかりと受け取り、後輩へと受け渡すことができた結果として 100 年という長い歴史を紡いで来ることができたのだと考えれば、とても嬉しく思います。

さて、今回は 86 期の運営を少し真面目に振り返ってみたいと思います。考えてみると我々の世代あたりからサークル規模が大きくなり、運営としての変化や転機のきっかけとなるようなものがあつたのではと感じます。その中でも印象に残るものをいくつか振り返っていきます。

ほてる木の芽坂

86 期が幹部学年となり最初の合宿運営となる歓送合宿。収容キャパの問題から新たに新潟県湯沢町のほてる木の芽坂を使用することになりました。施設自体は良いものでしたが、いくつかの懸念点がありました。まず、ロビーに池があること。次に、屋上に露天風呂があること。そして、合宿当日に一般客が宿泊しているということです。これらの問題のおおよそは練習ではなく夜のコンパへの不安に帰結します。卒業を控えた先輩方が池に飛び込まないか、酔っ払って露天風呂に入り雪景色にダイブをしないか、そしてなにより一般客と共存できるかなど、合宿幹部を中心に不安は募る一方でした。

しかし、そこはさすが明オケ生。きちんと節度を守り、池に飛び込む者も雪だるまになる者も出ませんでした。先輩方や悪ノリもとい適切なご指導をいただくトレーナーの先生方を 86 期一同がしっかりサポートし、無事合宿を運営することができました。最大の不安であつた一般客の方々も、我々がトイレを新聞で敷き詰めたり部屋をビニールシートで覆い尽くしたりする姿を、興味深くかつ暖かな目線で見守っていただきました。なお、この際に老夫婦から「入口に明治のオーケストラの学生さんが来ていると書いてあつたけど、皆さんは今何をされてるんですか？」と問われ、答えに窮したことが筆者の記憶に残っています。

この施設はその後、我々 86 期が卒業する際の歓送合宿でも使用され、主に夜のコンパにて生み出される数々の奇行の舞台となりました。生クリームを体にぬりたくりながら、灯油ポンプを梅酒の紙パックに突っ込んで飲みだす金管セクリ佐藤君とコンマス両角君。愛され木管セクリ夏目君が夜食用に用意したどん兵衛から天ぷらを盗み出し、雪の上に乗せ「後乗せー♪サクサクー♪」と歌いながら彼に食べさせようとする合宿外務渡部君。最初はコップ半分のビールも飲めなかった運搬頭のペロこと中里君は、三拍子を振られるまでに成長すると同時に、参加合宿における死人部屋皆勤賞の誉れも獲得しました。改めて文章化すると何故こんなことをしていたのかという至極当然の疑問が出てくるものの、この時代は深夜と飲酒のハイテンションで心の底から面白かったのです。大学生活は本当に素晴らしいものですね。お付き合いいただいた後輩学年には改めて謝罪させていただきます。



新入団員の受け入れについて

サークルの規模が大きくなると想定以上の人員が入団を希望するパートが出てくるのは避けられません。これに対し、募集人数に上限を設けオーディション等で選抜すべきではという議論が持ち上がりました。「オーケストラの乗り番にも限りがあり、より良い演奏を目指すためには選抜が必要では？」という意見、「学生サークルである以上、4 年間続ける保証はなく人数制限は将来の運営リスクになるのでは？」という懸念、また「演奏だけでない様々な活動が明オケにはあり、それが大学生活の一部だと考えるとオーディション自体が明オケにそぐわないのでは？」という声もあつたと記憶しています。

結論として我々 86 期ではオーディションは実施しませんでした。来る者は拒まず、全てを受け入れ、全員で明オケとしての多様な活動を作り上げることとしました。この判断が正解だったのかは今でもわかりませんが、少なくとも、誰かの意見に流されず学生である自分達自身で結論を出し活動の方向性を定めたことは、学生自治の大学サークルの運営としては良かったのではないかと思います。

さて、ここまで少し真面目な話も書いてきましたが我々 86 期は総じて仲の良い代だったと思います。演奏活動以外の場面でも、富士急への学年旅行の開催（インカレテニサー女子グループとの邂逅による一波乱もありましたね）、東日本大震災の影響で中止となつた卒業式の日に行つた千鳥ヶ淵での写真撮影などの様々な思い出。また、卒業後にも旅行、家族も含めた BBQ や鍋パなど大小様々なコミュニティで多くの交流が続いてきました。コロナ禍以降、そういった機会が少し減ってしまいましたが、今回の 100 周年の寄稿を機にまた同期での集まりを増やし、10 年後も語り合えるような思い出を作っていきたいですね。



87 代（2012 年卒）

山本 宜弘（幹事長）

明治大学交響楽団 100 周年おめでとうございます。100 年史作成にあたり、87 代の一員として寄稿させていただきます。わたしたちの代は、2008 年 4 月に入団し、2012 年 3 月に卒団しました。平成生まれの者が沢山いるこの代は、いわゆる「ゆとり世代」真っ只中の人間たち。入学早々の自己紹介では、平成生まれを主張する度に驚かれ、トロンボーントレーナーの榊原徹先生からは、新歓合宿の際ベルリンの壁崩壊の話をしていただいたことが大変印象に残っています。

わたしたちの代は、演奏技術向上のため真面目でストイックに練習に取り組んだと思います。木管、金管メンバーの人数が多く経験豊富な者も沢山おりましたが、弦メンバーは経験豊富な者もいましたが初心者も複数名おりました。（Vn においては 1/3 が初心者でした）それ故、各弦セクリーや各パーリーが指導者となり、弦メンバーの初心者を中心とした基礎練習会を自主的に定期開催しました。毎日 10 号館に通い詰めるなど熱心に練習を行い、技術的なレベルの底上げをしました。また、合宿で伝統の縦割りコンパを廃止し、代わりに練習を行いました。選曲会議では上記懸念事項を考慮しましたが、選曲は難航することが多く、弦メンバーの伸び代に期待！となった曲もありました。特に第 87 回定期演奏会のマーラー作曲交響曲第 1 番は、かなりチャレンジングな選曲となりました。第三楽章のコントラバスソロを弾いた大川由貴乃さんは大学からコントラバスを始め、猛練習の末、当日は素晴らしい演奏に会場が温かい拍手に包まれました。わたしたちも彼女のいままでの努力の過程と素晴らしい演奏に感動を分かち合った思い出があります。そのあとの新宿サンパーク、忍者屋敷での打ち上げは、笑いあり涙ありの一生の思い出に残る飲み会になったことは言うまでもありません。

その他に、わたしたちの代は、依頼演も多かったように思います。コヤマドライビングスクールという一大自動車教習所チェーンの各校舎でのアンサンブルコンサート、日本テレビ系列にて放送された 24 時間テレビへの出演が主に他代と大きく違った活動でした。（この依頼演活動の多さもあって、第 87 回定期演奏会ですみだトリフォニー大ホールは 1,800 人以上の超満員となりました！）特に 24 時間テレビは、齋藤政憲先輩が日本テレビでプロデューサーをされておりその紹介で出演が決まりました。「障害を乗り越え TOKIO と 241 人感動の大コンサート」という企画で、フルオケでの出演でした。8 月末の放送に向け、7 月から練習がスタートし、TOKIO と一緒に練習をしたこともありました。指揮は、久石譲氏というビックネーム。演奏は無事成功し、良き思い出となりました。（演奏している映像は、某世界的動画共有サービスにて閲覧可能です。「24 時間テレビ オーケストラ」と検索してみてください）



24 時間テレビ出演者・スタッフを交えた集合写真

振り返ると真面目で仲の良い代だったのではなかったでしょうか。（この仲の良さの証明といえるのは、明オケ同士の成婚者はわたしを含め、7 組！これはなかなか多いのではないかと考えております笑）そして、先輩方が作ってくださった安定的なオケ運営を引き継ぎ、次代へしっかりと引き渡せたのではないかと思います。沢山の素晴らしい先輩方、頼もしい後輩の方々の努力により 100 周年を迎えられ、歴史の重みを感じると共に、わたしたちの代もこの素晴らしい歴史の一員となれたことを大変嬉しく思います。激しく変化するこの時代に文化活動を続けていくということは様々な面で苦労が絶えないことと思います。これからの 100 年に向けて、さらなる発展が続くことを心より願っております。

6 月演奏会

2010 年 6 月 26 日（土） 武蔵野市民文化会館大ホール
指揮：松沼 俊彦
ボロディン 歌劇《イーゴリ公》序曲
リムスキー＝コルサコフ スペイン奇想曲 op.34
グラズノフ 交響曲第 5 番変ロ長調 op.5

第 87 回定期演奏会

2010 年 12 月 23 日（木・祝） すみだトリフォニー大ホール
指揮：宮松 重紀
ドヴォルザーク 序曲「謝肉祭」作品 92
チャイコフスキー バレエ音楽「くるみ割り人形」作品 71 より
マーラー 交響曲第 1 番ニ長調「巨人」



明治大学交響楽団 第87回定期演奏会
2010年12月23日 於：すみだトリフォニー 大ホール 撮影：スタジオ・スペース・フォト

88 代（2013 年卒）

堀 創介（幹事長）

2011 年 3 月 11 日。弦楽コンサートのスタッフとして練馬文化センターに向かっている大江戸線車内で大きく揺れた。東日本大震災だ。約 2.2 万人の死者を出した大災害。緊急地震速報の嫌な和音、脳裏に焼きつく津波の映像、無駄に明るい AC の CM、身体に残る地震・余震の感覚。昨日のここのように覚えている。

我々の世代はここから始まった。（代替わり時に管楽器セクリが 2 名とも辞めるという珍事件もあったがそれは触れないで…）。逆境からのスタートだったが、2019 年末からパンデミックとなった新型コロナとは異なり、「人と手を取り合って力を合わせて乗り越えよう」「自粛をせず、こういう時にこそ音楽活動しよう」というムードであったため、活動することに異議は唱えられなかったのが幸いだ。

震災を受けた代なので、当時のことを少し書き留めておく。あの日、弦コンを聴きに行くために 10 号館にいた幹部もいたが、古い建物故かなり揺れたらしい。幸い壊れた楽器こそ無かったものの、部室も楽器庫も散乱していた覚えがある。弦コンについてはステリハ終わりの時間だったため開催も危ぶまれたが、ホールからは公演はできるとのことでそのまま実施。当時は電話も通じずメールもずっと遅延。スマホも LINE も無かったため全く情勢がわからない中での開催であった。関係者や身内がホールへたどり着けず集客が全く見込めなくなってしまったため、チラシを持ち練馬駅前の帰宅困難者たちに「演奏会に来ませんか!？」と声をかけて回った。「ふざけるな」と言い返されたりもしたが、「きっと帰れないし」と聞きに来てくださる方もいた。結局来場者は十数名だったが、「こんな時だからこそ音楽を聞けてよかった」と温かい声をかけて頂いたのを覚えている。その日は各々ちゃんと打ち上げをして朝を迎えた。翌日から世界が一変したのはいうまでも無い。

翌週に金打セクコンを控えていたので、震災翌日が GP 予定だったがもちろん中止。代替の計画をセクリの田中万智子（Trb）が必死に立てるが、情勢が次々と代わり、すぐ練り直し。とにかく慌ただしかった。（計画停電で電車が止まる。大学も閉鎖。3 月末まではサークル活動自粛。外は放射能で危険？これはもちろんデマ）。当時グループ通話も Web 会議もできないのでとにかく御茶ノ水に辿り着き話し合うことが必要だった。結局、演奏会に向けて必要な楽器を 10 号館から全部出し、オリンピックセンターの部屋が空いていたのでそこをずっと借りて、なんとか練習をし、演奏会実施に至る。今思うと、本当に頑張ったなあ、マチコ。

明オケとしてはしばらく開催する演奏会は震災の募金を募り、日本赤十字社の支援金へ送っていた。トロンボーントレーナーの榊原先生が支援活動を進めてくださり、トロンボーンパートのメンバー中心に東北へ出向いての支援活動や（榊原先生の[ブログ](#)より）、世界中のトロンボーン奏者による日本への想いとして演奏された『A Song for Japan』に[めいとうろ](#)でも参画をした。

行事は卒業式が中止、入学式も中止。そもそも学校自体が 5 月から始まることとなり、新歓活動もイレギュラーに。当然新歓合宿も中止だ。「C 年が一人も入らないかもしれない」という危機感を覚え、HP の掲載や明大付属や団員の出身高校などに呼びかけ、見学や新歓演奏会の開催を告知しなんとか新歓活動を行なった。新学期が始まるとようやく自粛ムードも収まり、日常が戻ってきた。のちに残る明オケ的な打撃は、神保町行きつけの居酒屋「香港食市場」の紹興酒が全部割れて、店員さんも帰国しすぐに店が潰れてしまったことくらいかもしれない。冗談のようだが、それくらい割り切って前を向いていかないと、当時学生で力もなかった自分たちにはどうにもしようがなかった。数日後には「今月末のコンパはやるの？やるよね？」と会話していたし、ホルントレーナーの大橋先生も「東北の酒を買って支援をするんだ!」と意気込んで居酒屋を先導してくれていた。

震災で大変だったのは周りの大学も同様だった。自分たちの 1 つ上の代から始まった東京六大学オーケストラ連盟（東大、慶應、明治、法政。立教・早稲田は不在）は第 2 回目の演奏会となり、初のオールオーケストラの演奏会の開催となった。正式な役職ではないが「六連係」というのができたのもここから。各大学のメンバーと毎週会議をし、毎度飲み会をしながら（明オケの自己紹介文化は非常に役に立った）、震災対応はもちろん、オケ運営のノウハウを聞いては明オケに活かせないか、と考えを巡らせていた。個人的には明オケの同期と同じくらい、他大学の同期とも絆が深く、この時代を乗り越えた同志であるという想いが強い。

あの震災から世の中は大きく変わったが、同時に情報化社会へ目まぐるしく時代が代わるという転換期でもあった。連絡手段はガラケーが主であったが、就活にはスマホが必須となり皆が iPhone を買い、前略プロフィールやモバゲーから、mixi・Twitter・Facebook・Instagram へ SNS が代わり、震災を機に 2011 年 6 月にリリースした LINE がコミュニケーション方法の主流と変化。明オケ内の連絡も「矢印メール*」や「らくらく連絡網」がそろそろ最後となる時代だ。引き継ぎ資料の USB メモリも Google Drive や Sky Drive（現 OneDrive）とストレージに変化していった。

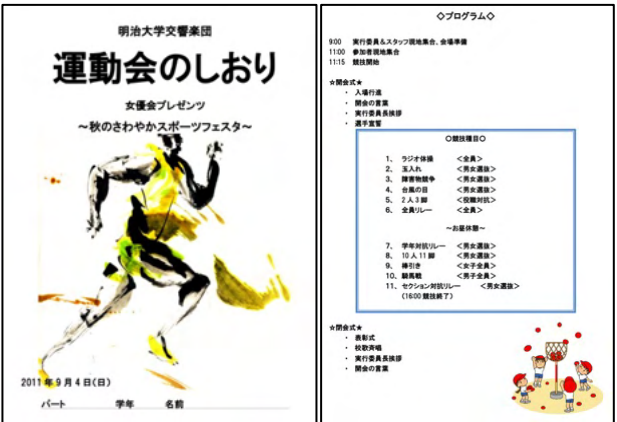
明オケも SNS での情報発信を開始しようと、自分の代で X（旧 Twitter）公式アカウントと YouTube アカウントを作り、広報や活動報告、演奏会動画のアップを続けた。演奏会アンケートで「何を見て演奏会を知りましたか？」の項目で「SNS で見た」という人が増え始めたのもこの頃だ。# 春から明治 というハッシュタグを使えばサークルを探している新入生たちにも宣伝ができ、「YouTube を見てトランペットアンサンブルができると知り、明オケに入団を決めました」という後輩もいたし、ちょうど良いタイミングで始められた。現在はセクションやパートでもアカウントを作っている。引き続き大いに活用して行って欲しいと思う。

そんな時代の転換期にありつつ、あえてアナログなことをすることにも楽しみを見出していた。音楽以外の活動としては花見や納涼船、花火大会の他、明オケ甲子園（榊原先生もピッチャーで参加）、明オケワールドカップといった運動イベントは前からあったが、我々の代では初の「明オケ運動会」を開催した。「音練に籠ってばかりの明オケなんてつまらない！運動しよう!」と同期随一の変わり者だった馬場翔太郎（Perc）が発案。「運動会をやりたいんです」と関東中の運動場に電話をして探し回り、唯一空いていた成田市陸上競技場で開催。（成田が遠すぎて誰も来ないだろうからと、バスを御茶ノ水からチャーターしてしまった。後で会計に怒られたが…）。全員までとはいかないが 3 学年で 40 名以上が参加し、始めて「ああ、大学生らしいこ

とをしている!」「コンパ以外にも楽しいことあるじゃないか」と感動したのを覚えている。「飲み会は苦手…」という人も参加できるイベントとして確立され、2024 年の今でも続いているというのは本当に嬉しいことである。“セクリレース”や“飲みリンピック”とはまた違ったアルコール無しでの運動の楽しさを明オケが見つけたのであった。（打ち上げの飲み会は疲労も相まって荒れまくったのはいうまでもない…）



チームは人数を合わせるために高弦、木管、金管、中低打の 4 チーム。騎馬戦も人数合わせがあり、高弦 & 金管チームで勝利。ホルンの名手の後輩及川くんこの笑顔。



競技はラジオ体操、玉入れ、障害物競走、台風の目、2 人 3 脚、全員リレー、学年対抗リレー、10 人 11 脚、棒引き、騎馬戦、セクション対抗リレー と盛りだくさん。道具はレンタル or 自作。

新歓合宿が震災で中止となったが、ジャパン志賀からは震災によるキャンセルが相次ぎ財政状況が厳しいので、「夏の合宿を 1 日増やして欲しい」と申し出があった。ジャ志賀を助けるためなら仕方がないと 1 日増やしたが、一番困ったのはコンパが 1 回増えること。その当時は「合宿の目的は飲みか？練習か？」の議論があり意見がぶつかり合っていた。結局、4 泊 5 日となった合宿は「新歓 & 引継」というコンセプトとなり、コンパは「新歓セクションコンパ」→「縦割りコンパ」→「引継セクションコンパ」→「全体コンパ」という 4 夜連続飲み会の過酷な合宿となった。

個人的には上の代でもしばらく実施のなかった「縦割りコンパ」を復活したかったのでここには拘った（どちらかというと文化を絶やさないために）。日頃のコンパとは違った仕切りにすべく、あえてセクリやパーリーは外し部屋頭を決め、ドラフト会議をしメンバーと先生を決める。後輩や先生たちが退屈しないような企画も事前に用意し、協力し合い盛り上げなければいけない。酒ばかり飲んで騒いでいるように見えて、イベント運営自体は結構真剣に取り組んでいたのではないだろうか。引き継ぎ合宿も各役職で芸があったし、セクリレースも衣装と出し物が基本。SD* も何かコンセプトが無いとダメだったし、その点ではただの飲みサーではなかったんじゃないかと思う。飲み会が激しい一方で、介抱の体制は救急外来並み。リアル死者を出さないように庶務がデス・ノート* に泥酔者の死因を書き、付きっきりで看病。合宿幹部は夜中常に死人部屋や館内を見回り泥酔者・徘徊者・イチャついている者がいないか監視。冬は酔っ払って外に出て凍死しないように鍵を閉めセキュリティも万全に。救急車を呼ぶと幹事長が退学、と言われていたのでセーブも大事であった。深夜までコンパを続け、朝は幹事長伝統のラジオ体操をやり、朝コマをこなす。皆よく体力が続いたものだ。（自分は朝コマは二日酔いで毎度サボってましたごめんなさい）

「震災」というワードが大きく影響した代だが、音楽ももちろん一生懸命やり、ショスタコーヴィチの 5 番をやり引退。あっという間に幹部の 1 年が終わった。結構な困難を乗り越えたはずの学年であるが、学年としての結束や仲の良さは実はあまりない。歓送合宿の参加者は少なく、学年コンパはなんと D 年の 9 月にやったきり、一度もやってない…。みんな、またいつか集まろうぜ！！

* 矢印メール：メールの冒頭に「幹事長→セクリ→パーリー→パート員」と宛先を書き、届けて欲しい階層まで行き届くように指示するメール。パートリーダーが怠けて転送を忘れているとパート員への連絡が滞ってしまうことがある。

* デス・ノート：2003~2006 年に少年ジャンプに掲載された漫画『DEATH NOTE』（デスノート）に出てくる、名前を書いた人間を死なせる死神のノート。合宿で死人部屋に入ったら死因をメモしておき翌朝自分で読み直し深く反省をする。

* SD：スペシャルドリンクの略。役職の引継時や、歓送で追い出す時に送る酒。度数の濃い酒になることが多い。当時流行ったのは鬼殺し、スピリタス、など。御徒町の吉池に買いに行く。人気な人ほど SD が数十本になることが多く、飲み干すまでの間ずっと三拍子* を歌い続ける。コンパ会場にあるビールは「拾いビール」という。稀に SF（スペシャルフード）もあり、ゴーゴーカーレーのルールはそれにあたる。あまりに本数が多く明け方になっても全体コンパが終わらないため「SD 申請」が事前に必要となり本数制限がされるようになる。

* 三拍子：日本初の三拍子である「美しき天然」の A メロに合わせて瓶ビールを一気飲みする。本来は演歌だが、深夜のコンパでずっと歌い続けるのが退屈になり、この頃はメジャー調が主流でテンポも速い。コンパでは瓶ビールの底 2 cm くらいにビールを残す「三拍子用瓶ビール」のストックを作らないと追いつかないので自己紹介の側、周りは常に飲み続けることが必要である。



珍しく大橋先生がお立ち台で自己紹介。「判定は？」の宴会芸も教えてくれる。

89 代（2014 年卒）

大竹 諒（幹事長）

日本武道館での入学式で明治大学校歌の演奏を聞きながら、この広い会場で演奏するのはどれだけ気持ちがいいものかと考えていた。

友人たちと様々なサークルの新歓コンパに顔を出し、馬鹿騒ぎをして翌日は自主休校を繰り返しているうちに、自然と 1 人で明オケの入団手続きをしたのはその時考えたことのせいだったかもしれない。

そんな形で始めたサークル活動で、最後は幹事長を務めたのは何の因果だったのだろうか。

楽しくも辛く、時には同期にも後輩たちにも厳しく叱責をされ、それでも最後までやり切ったあの 4 年間は自分にとって大切な時間であり、忘れがたい経験であった。

明オケでの思い出を書くにあたり、やはり酒のエピソードは切り離すことができない。

合宿でのコンパ、深夜の先生飲み、日々の練習後の飲み会など、今思えばその気力も金もどこから湧いてきたのだろうかと思議になるくらいにいつも近くに酒はあり、その暴力に魅了されていた。

駿河台下の香港酒場やさくら水産、忍者屋敷をはじめとした様々な居酒屋、合宿場のビールケースをひっくり返しただけのお立ち台の上、由比ヶ浜での夏のビール合宿など思い起こされる様々な話を全て書くにはこの紙面は狭すぎるほどだ。

流行病や時代の流れもあり、今となっては消えゆく文化であろうが、私の記憶の中ではいつまでも大切なものとして残っていくことだろう。

私が所属していたトロンボーンパートは明オケの中でもかなりのレガシーが残っているチームで、榊原徹というこの文化の生き字引であり、素晴らしい先生とともに過ごすことの多い最高のパートであった。

生徒への指導はもちろん、護国寺の教会でのトロンボーンコンサートや父母を集めた保護者会の企画など、様々な面に気を配っていただき、そのおかげもあり素晴らしい明オケライフを送ることができたと思う。

野暮天で気が利かない私はいつもご迷惑ばかりおかけしてしたが、先生が卒業の際に残してくださった色紙のメッセージは今も胸に残っている。

いつでも迎えてくださると書いていただいたのに、仕事にかまけて参加できておらず申し訳ございません。折を見て改めてご挨拶に伺います。

さて、我々はベルリオーズの幻想交響曲をメインとして定期演奏会を行った代であった。

選曲会議ではラフマニノフの 2 番とマーラーの 5 番というまさしく弦と管の主張のぶつかり合いの折衷案として選ばれた曲ではあったが、なるべくしてなったと言ってもいいほど皆が熱中した曲になったのではないかと思う。

美しい旋律に恋焦がれながら、断頭台で首が落ちる音で冷静になり、サバトの中で華々しいフィナーレを迎えるあの曲は、複雑な人間関係と非常に魅力的な酒と音楽とでカオスじみていたあの 3 年間を象徴するもののように感じていた。

もしこれを読まれる後輩諸氏が幻想交響曲を演奏することを考えてるのであれば、舞台裏でのカリオンはお勧めしないが。

何はともあれ素晴らしい演奏会であり、素晴らしい学生生活を過ごすことができたと思う。

いい団体だった。

末筆にはなりますが、この素晴らしい営みが 100 年を迎えたことを過去の諸先輩方に感謝し、これからこの営みに参加する方々にとって素晴らしい明オケライフが続いていくことを祈りつつ、お祝いの言葉とさせていただきます。

90 代（2015 年卒）

峰岸 孝紘（幹事長）

私たち 90 期は東日本大震災直後の 2011 年に入学しました。震災の影響もあり入学式は中止、授業が始まったのも 5 月となる異例のスタートでした。そんな中でも 50 人弱が入団し退団者も少なくいられたのは、新歓合宿で振るい落とされる人がいなかったのも理由の一つかもしれません…。

私たちが在籍していた期間には中野キャンパスが新設されました。初の中野支部長が誕生し、完成したばかりのキャンパスで新歓活動をしたことをよく覚えています。

10 号館の廊下での音出しが禁止になったのもこの年でした。（※当時は廊下での練習が黙認されていました……。）駿河台で練習していた E 年は楽器庫にこもっての練習を強いられるようになりました。

私たちの活動で特徴的だったのは定期演奏会とは別に外部と共演した依頼演奏会です。2013 年 5 月には東京六大学混声合唱連盟から依頼を受け、混声合唱組曲『水脈速み』を演奏いたしました。他の団体や合唱との共演機会はその後の音楽人生でも非常に貴重な経験となりました。

もう一つ、貴重な経験と言えば STARTO ENTERTAINMENT (旧ジャニーズ事務所) 所属のアイドルグループ、Hey!Say!JUMP との共演です。明オケ OB より依頼をいただき、当時の新曲であった『AinoArika』の [ミュージックビデオ](#) に出演いたしました（パフォーマンスの合間に私たちの演奏風景がしっかり映っています！）。Hey!Say!JUMP と同じ舞台上に立った学生は日本でも我々ぐらいしかいないのではないのでしょうか！？

私たちが幹部学年として最後に臨んだのは第 90 回の節目となる定期演奏会でした。指揮者に山下一史氏をお招きし、会場にはすみだトリフォニーホールを押さえるなど、学生生活の集大成として総力を尽くした演奏会となりました。前プロの『祝典序曲』ではバンドとしての演奏者を指定の倍の数にして、更にチューバも加えた豪華な編成で華々しく幕を開け、中プロの『カルメン』では各曲のソリストたちが大活躍し、メインでは難易度の高い『ラフマニノフ / 交響曲第 2 番』で 1,400 名近くの観客を前に明オケでの学生生活を感動的に締めくくりました。

・・・という文章を、今当時のメンバーでお酒を飲みながら書いています。

他にも思い出は沢山ありますが、ここには綺麗な内容だけ書いて終わらせていただきます。

「それではこれで締めさせていただきますと思います。せーのっ……！！」



91 代（2016 年卒）

櫻井 友也（幹事長）

演奏の指導や飲み会などトレーナーの先生方や OB・OG 含めた先輩方には本当にお世話になった。我ら 91 期の至らぬ運営にも着いてきてくれた後輩達にも感謝している。そして多くの時間を一緒に過ごした同期達とは、ここでは書ききれないほど沢山の思い出がある。拙者は本当に良い出会いに恵まれたと思う。

明オケでの日々を振り返ると、様々なことを思い出す。定期演奏会・明大祭に向けた練習、崩れ落ちそうな 10 号館、寝ても覚めても繰り返される飲み会など。いとをかしき日々であった。

～ 中略（全く関係ない内容記載のため編集委員会にて編集）～

最後に改めて、100 周年を迎えるまでの歴史に敬意を表するとともに、今後のますますの繁栄を祈っている。100 年後にまた会おう。さらばだあっ！！



92 代（2017 年卒）

高橋 遼（幹事長）

私が入団したころの明オケは、各学年 50 人程度の在籍があり、4 年生まで含めると総勢 200 人前後が所属する学内有数のマンモスサークルでした。なにかを具体的に調べたわけではありませんが、我々が小・中学生のころに視聴したドラマ「のだめカンタービレ」の影響でオケ人気が高かった…と勝手に思っています。なににせよ、学内外の多くの大学生たちが、思い思いの形で大学生活を楽しむ一つの場所が、明オケだったと覚えています。

さて、在籍当時の思い出ですが、楽器の練習をする、ボックスでスマブラをする、酒を飲む、（元気があれば）講義に出る…。人それぞれではありますが、おおよそこのような生活をしていたと思います（生田勢の生態については知りません）。和泉の音練で好きなだけ練習をし、ボックスに戻って歓談。ボックスにはトランプ、ジェンガなどがありましたが、人気アクティビティは「Nintendo64 のスマブラ」でした。在籍当方で既に発売から 10 年以上が経っているゲームでしたが、その引力たるや凄まじく、多くの学生がスマブラに熱中し、数多の「落単」が発生しました。そして夜になれば界限へ繰り出して飲酒しながら楽器の話 +etc。次の日には大学生の責務として講義に出なければなりません、目を覚ませば京王線橋本駅のベンチ、もしくは誰かの家。そして自主休講。学費を払っている各自の両親祖父母のことを思えば親不孝そのものでしたが、あの経験があったからこそ、それぞれの人生が豊かになっています。たぶん。

演奏においては、幹事学年時にメイン：マーラー 5 番、中：レ・プレリュード、前：動物の謝肉祭を演奏しました。選曲会議ではブラームス、チャイコフスキー、ベートーヴェン等々の交響曲が候補に上がっていましたが、2 年次に上がったころから Trp 植野くんや Hr 千葉くんを筆頭にマーラーキャンペーンがされており、無謀ながらマーラーの 5 番を主軸とした曲目に決まりました。本番に向けてでは、色々なことがありました。色々なことがありすぎたので詳細は省きますが、それぞれが切磋琢磨をし、トレーナーの先生方や先輩後輩の皆さまにご助力いただけたことで、すみだトリフォニーホールで情熱あふれる良き演奏を行うことができました。また、特に書いておきたいこととして、卒業年次の金管コンサートで Hr 大橋先生に「Oh-o!Meiji! 〜明オケ金打のためのラブソディー〜」を新しく作曲書き下ろししていただきました。夜な夜な大橋先生と一緒にお酒を飲まさせていただく際に、Trb 榊原先生の後押しを受けながら我々金打メンバーから熱いオファー（?）を出し続けた結果、大橋先生にご快諾（?）いただきました。本曲には明治大学校歌メロディのほか、明オケ伝統の「1,2,3」が盛り込まれています。卒業生の皆さま、ぜひ金管コンサートに足を運んでいただき、一緒にご唱和ください。せーのっ！

最後に。92 代それぞれは大学を卒業したり、1-2 年遅れて卒業したり、やむを得ない事情で中退したり、卒業後にモザンビークへ行ったり、それぞれがそれぞれの人生を歩んでいると思います。会えなくなってしまう人もいますが、たまには集まれば…と考えています。大学時代を思い出して罵詈雑言の嵐でも構いませんので、また一緒にお酒を飲みましょう。亜門くんのビールカウントがあと 9976 回残ってますから。

93 代（2018 年卒）

小松崎 陸（幹事長）

100 周年史編纂にご尽力いただいた先輩方や現役の方々、誠にありがとうございます。寄稿文執筆にあたり同期に呼びかけたところ、多くの協力者と数えきれないほどのエピソードが集まれば良かったのですが、今回はひとまず親愛なる同期を思い出しながら、脚色を少々交えて私の主観多めに綴ろうと思います。

C ～ D 年

入団して間もない頃、部屋の外まで響く先輩方の雄叫びに怯えながら初めて和泉 BOX を訪れたことを鮮明に覚えています。先輩方を熱狂させていたのは、言うまでもなくスマブラなのですが、我々も魅了されるのに時間はかかりませんでした。一人、また一人と大きな犠牲を払いながらも「小ジャンプ」や「着地キャンセル」を習得していきました。この頃には伝統になっていた明大祭での今川焼き作りも放棄してスマブラに明け暮れたこともありましたね。多くの漫画を寄付したりベンチを増設したり大半の時間を BOX で過ごしたと言っても過言ではありません。

部内演の打ち上げをきっかけに毎月学年コンパを開催するようになり、語り合ったり誕生月の人を祝ったりしていました。あまりコンパが好きではないだろう人も参加してくれたのが嬉しかったです。

飲み会といえば、明大前のサンダーバードにもよく通い（卒業後 2 回名前が変わっています）、店に入ると注文前でも飲みものが出てきました。

D 年になると役職会議も始まり、色々とありつつも運営の体制が整い始めていきました。朝が弱い人のためにモーニングコールをしたのも良い思い出です。

E ～ F 年

D 年の後半から手探りながらも本格的に自分たちの運営が始まり、役員会も行うようになりました。朝一番の役員会のためにモーニングコールをしたにも関わらず寝坊した人がいたことは非常に残念でした。

学年コンパが行われなくなっていったのもこの頃だったように思います。色々ありつつも 1 年間を終え、卒業の頃に同期の LINE を振り返ると、アルバムに写真が 1 枚しかなかったことには驚きました。

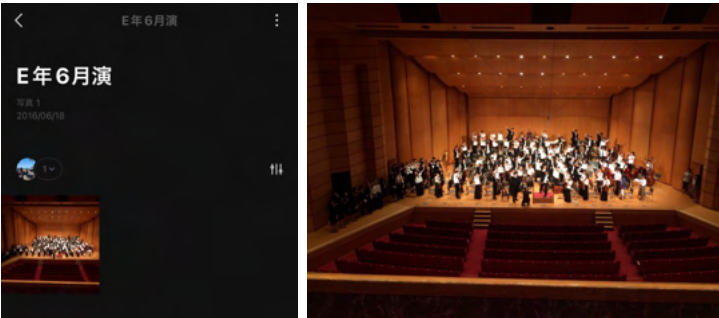
明オケ OB である本間さんのご紹介で、ドラマ「僕、運命の人です。」に出演オファーをいただき、貴重な経験もさせていただきました。

幹事長という立場ながら選曲会議には参加していなかったのですが、我々の代では人数的にできる曲が限られていたと伺っております。そんな中でも『英雄の生涯』を選曲してくれたこと、やりがいのあるプログラムを組んでくれたこと、普段はクールなコンマスの彼が演奏後に想いが溢れていたことは一生の思い出です。

他にも、BBQ にビールサーバーをレンタルしたこと、お酒の飲み方を教えてくれた先輩やクレイジーファイブと呼ばれる先輩がいたこと、大学に長く通った同期がたくさんいたこと、ここには書ききれない多くの思い出があります。定期的にとはいかずとも今でも酒を酌み交わし、会えば思い出を語れる仲間に出会えたことは我々の財産です。

100 年という節目を迎えるまで伝統を紡がれた先輩方に感謝し、そのピースを担えたことを光栄にしております。

現役の皆様の繁栄を祈りつつ、お祝いの言葉とさせていただきます。



E 年時グループ LINE の唯一の写真

94 代（2019 年卒）

前川 倫輝（幹事長）・前田 果歩（内務）・神尾 晃二郎（インスペクター）

94 代は、歴史的な財政難の状態で幹部学年を引き継ぎ、最初の行事である 2 月の引継合宿の期間を短縮して実施するなど、当初は緊縮財政での運営を余儀なくされました。それと同時に未納金制度のペナルティを強化するなど、財政の健全化に取り組み、6 月演奏会以降は、円滑に運営を進めることができました。

9 月の引継合宿では、定期演奏会指揮者の中田先生をお呼びして、数年ぶりに合宿での先生 tutti 練習を実現することができました。また、東京西部地区父母会主催でのアカデミーコモンのホールで依頼演奏会を開催した他、亀梨和也主演の日本テレビ系ドラマ「ボク、運命の人です。」の収録に参加するなど、多くの依頼演奏も行いました。

ここで 100 周年誌作成にあたって、94 代三役から一言ずつコメントをもらいました。



(94 代内務 前田果歩)

明治大学交響楽団創立 100 周年誠におめでとうございます。寄稿の依頼をいただき、当時の思い出話から膨らませようかと考えたのですが、正直なところあまり筆が進まず、幹事長に伝えられた締め切りの前日、明オケの同期たちと多少お酒を嗜んだ帰り道にこれを書いております。

具体的な思い出は字数の関係で割愛しますが、一言で 4 年間の明オケ生活での良かったことを表現するとするならば「一生の友人に出会えた」ことに尽きます。卒業してからかなりの年数が経ち、人生の境遇も変わった同期の友人たちと昔のように集まることができるのはとても貴重だとまさに今感じております。

このような駄文を読んでもくださる現役生の方がいらっしゃるのなら、明オケでの縁は大切にしてほしいということを末筆ながらお伝えさせていただきます。改めましてこの度は誠におめでとうございます。

(94 代インペク 神尾晃二郎)

6 月演の宮松先生はいつの間にかお酒をやめていて、tutti 後の飲み会 (@ ももや) ではオレンジジュースを一度に 2 杯注文されてお酒のように飲んでいらっしまった。今思うと不思議である。定期演奏会の中田先生は、9 月の合宿にお呼びすることが出来た。全体コンパではたくさん飲んでいただいた。

実は、幹部学年の一年間で個人的にとっても思い出があるのは、江東区の中学校への訪問演奏で、Hr 大橋先生が編曲された星野源「恋」を演奏して大ウケしたこと。

(94 代幹事長 前川倫輝)

冒頭にも書いたとおり、引継を行った当初は、危機的な財政状況であったこともあり、果たして 1 年間明オケを存続させることができるのか、自分たちの代で終わってしまうのではないかと苦悩しながら、日々を過ごしていました。明オケをどうやって立て直していくか、今の団員にとってより良い団にできるか、そして 100 周年に向けてどのようにバトンを渡していけるのか、と様々なことを幹部の皆で大学が閉まる時間まで議論していたことも、今となっては良き思い出です。

もう 1 点、当代のトランペットパート員として、私たちの代は長年明オケのトランペットパートをご指導くださった平林先生との最後の教え子となりました。既にご病気が進んでおり、平林先生と過ごすことができた時間は長くはなかったものの、とても濃い時間を過ごし、たくさんのことを学ばせていただき、本当に感謝しています。



我々の後もコロナ禍で明オケの活動が停止・制限されることも多かった中で、大変な苦労があったと思いますが、各代幹部の皆様のご尽力もあり、無事に 100 周年を迎えられたことは、大変嬉しく、微力ながらもその歴史の一端を担うことができ、光栄に思います。

末筆ながら、改めて今後の明オケの隆盛をご祈念申し上げ、結びの言葉とさせていただきます。

95 代（2020 年卒）

内山 漱一郎（幹事長）

「飲酒に関する報告書」私達の代が一番最初に、かつ一年を通して対応した案件です。

私達の代になるや否や学生支援部から呼び出しを受け、別室に通され言われた事は「明治大学交響楽団が飲酒している際の写真が見つかりました。聴きたいことがありますので日を改めて学生支援部長含めお話し合いをさせていただきます。」でした。

パートリーダー全員と部長の鈴木賢志教授、内務、幹事長で学生支援部長率いる学生支援部と机を挟んで対面で戦ったのは今となっては良い思い出となっています。

詳細は省きますが、最終的に活動休止などのお咎めは無しで報告書を提出するのみで事は取り、無事に次世代へとバトンを渡すことができました。

新歓合宿では全員お酒禁止（もちろん先生方は OK）、コンパマスターも名前を変更して明オケとして行う飲み会では例にないほど厳しく取り締まる次第となりました。当時の 95, 96, 97 代の皆さんにはかなりの我慢を強いることとなってしまう申し訳ない思いと共に、無理なお願いにも関わらず協力してくれたことに感謝の意をここに記させていただきます。

学生支援部と戦ったと前述しましたが相対したのはその時のみで、それ以降は学生支援部からの信用を取り戻すべく学生支援室に通い、様々な相談を持ち掛けるたびに真摯に対応してくださり、最終的には信頼を取り戻すことができたのではないかと思います。

私たちの代は中高から楽器を始めた人が多く、実力主義な代であったような印象です。学年を問わずに曲によって適切な人材を配置していました。

そんな代の 6 月演ではこれまでとテイストの違う音楽を作っていきたいとの思いで、新たに阿部未来先生に指揮者をお願いし、ドヴォ 7 という明オケらしからぬ曲を演奏しました。定期演奏会はハーブを堀野先生と成田先生、ピアノ・チェレスタを馬場さんをお願いした豪華な演奏会となりました。トレーナーの方々からはデカイ曲をやるのに固執していると言われました。そうは言ってもやりたい曲をやれる事が幸せな事だろうということでキャンディード・薔薇の騎士・革命という 3 曲を演奏し私たちの代は幕閉じとなりました。

以降の代で書かれているとは思いますが、コロナの影響を受けた後輩達は練習時間も少ない中本当に素晴らしい演奏をされていました。私達がコロナに影響されなかった最後の代だと思いますが、今になって好きなだけ活動できた当時の環境に感謝しております。

これからも明オケが末長く続いていくことを願い、締めとさせていただきます。



96 代（2021 年卒）

奥山 浩基（幹事長）・鈴木 優有（内務）・竹川 佑杜（インスペクター）

皆さん、こんにちは。96 代幹事長の奥山浩基です。

96 代の運営を振り返ると、楽しいことも一生懸命頑張ったことも困難だったこともいろいろなことがありましたが、私からは、印象に残る飲酒関連と財政面の話を振り返りたいと思います。

私が幹事長になる前、先代の幹事長内山さんの時代から、合宿などの公式行事においての禁酒がはじまりました。理由としては、アルコールが絡んだ事故が続いたこと、大学生の飲酒に寛容でなくなってきたご時世、大学からの厳しい目線など複数の要因がありました。やっぱりお酒と音楽が大好きな明オケ。そのうちの片割れを失ったことへの戸惑いは団全体に広がっていったのを今でも覚えています。

95 代の運営が終わった時、私たちの代はとある決断を迫られました。それは、飲酒関連の政策を引き継ぐか、破棄するかというもの。結果として引き継ぐことを選びましたが、納得する方法を模索する日々の連続となりました。最初は、打ち上げや合宿での全面禁酒を掲げましたが、96 代らしい政策ではなく、人々への強力な抑圧を強いるものとなってしまいました。それを受けて、どこまでを容認し、どこまでを制限するのかという折衷案を思案することとなり、引き継ぎ合宿や定期演奏会打ち上げでは、ある程度納得のいく解決策を出すことができたと思っています。

財政面では、私たちの代では、常に赤字とっていいくらいの自転車操業でした。そもそも保有している財源が少なかったことから、各行事の費用や、先生鍊での謝礼などをいかに捻出するかに正会計をはじめとする会計役職の方々と頭を抱える日々を送っていました。そのために力を入れたのは、未納金の回収でした。親宛てに手紙を送ったり、人伝えに催促したり、悲惨な現状を訴えたりと様々な方法を用いて、何とか大部分を回収することができました。それでも、なぜかギリギリの運営で、第 96 回定期演奏会の際にはホール代が払えず、E 年の役員たちから借りることにまでなっていました。本当に心配と迷惑をかけました。結果として、この財政難の原因は、詳しく書くことはできませんが、私たちの代で解決することができました。決着をつける際には、弁護士などを巻き込む、これからの人生で二度と経験することがないだろう明オケ史上稀にみる大事件が発生していたとだけ記させていただきます。

今、当時を振り返ると、私たちの代は明オケ存続の危機に立ち向かっていたんだなあと言張することなく感じます。無事に次代へと明オケを引き継げたことが本当にうれしい限りです。

駄文を連ねるばかりとなってしまいましたが、96 代三役の残り 2 人にバトンを託すこととしましょう。彼・彼女らなら上手につなげてくれると信じて擱筆いたします。

こんにちは。幹事長奥山よりご紹介にあずかりました、96 代インスペクター・Trb パートリーダーの竹川です。

私たちが E 年だった 2019 年を思い出すと、大きく 2 つ鮮明に覚えていることがあります。

まずは、今まで当たり前だと思っていた演奏会の開催が、不可抗力によってできなくなったということ。そして、6 月演奏会の反省をもとに、ラフマニノフの交響曲第 2 番に挑戦したこと。

2019 年といえば、元号が平成から令和に変わった年。世の中は、ラグビーのワールドカップ日本開催や、東京五輪に向け非常に活気のある年でした。しかし同年 10 月、台風 19 号が上陸。東日本を中心に大きな被害が発生し、10 月 12 日に予定していたトロンボーンコンサートは暴風雨のため中止せざるを得なくなり



ました。たまたま 2 週間後に会場が押さえられ、メンバーのスケジュールも調整でき、無事に延期開催をすることができましたが、お客さま含め百人単位の人を動かす重要な決断をすることは初めてで、はらわたがちぎれる思いでした。

さまざまな思いを胸に挑んだ演奏会当日。パートリーダー挨拶で言葉に詰まり、涙ぐむ姿をお見せしてしまいましたが、一つの会を成功させることの大変さ、そして今振り返ってみれば中止や延期が相次いだコロナ禍よりは対応が難しくなかったかもしれませんが、演奏会を開催できることは「当たり前」ではないのだと痛感しました。

2 つ目は、第 96 回定期演奏会でラフマニノフの交響曲第 2 番について。まず、今となっては懐かしい思い出ですが、選曲会議の時に揉めに揉めました（どの代も、そうかもしれませんが…）。演奏面でのハードルがかなり高いことは承知しておりましたが、3 楽章をはじめとした甘美なフレーズを、96 代の音で奏でたときにどんな化学反応が起きるのだろうと楽しみな面があり、絶対にやりたいと半ば押し切るような形で決めてしまいました。インスペクターとして全体の練習を見ていましたが、各セクションのテンポ感、グルーブ感を揃えるのが一番難しかったように思います。6 月演奏会のときは、まだオケ全体の気持ちや方向性、温度感が揃っていないようなイメージだったのに対し、定期演奏会の tutti では、空中分解しかけたこともありましたが、なんとか 12 月を迎えられました。当日の緊張感、最後まで団員の熱量は衰えることなく、割れんばかりの拍手を受けた時は、やっぱりラフマニノフをやって良かったと心から思いました。

そのあたりのことは、ずっきーのほうに細かく書けるとおもいますので、ここで筆を渡したいと思います。

最後に、96 代で内務を務めました鈴木より、既述のようなエピソードを経て「96 代の明オケとは？」という点について考察してみます。（竹川からのバトンはだいたい無視です、ごめんなさい笑）

「明オケは代によって本当にカラーが違うよね、今年は……」

指揮者やトレーナーの先生方がよく口にされるお言葉です。

私たち 96 代は、1 年間の全行事を、それまでの形態で実施することができたコロナ前最後の代です。そういう意味では、100 年続く明オケの転換点として些か注目される代なのかな？と思いますが、3 年間学年内において大きな問題は特になく、強いて挙げるとしたら役職会議（D 年時）と定期演奏会選曲（E 年時）というどの代でもあり得るタイミングで、ごくごく平凡な代でした。加えて、私は高弦セクリも兼務していたのですが、楽器の実力も上下の代のように目を見張るものがあつたわけではなく、こちらに至って平凡でした。

しかし、私は凡な 96 代にも取り柄があると自負しています。それは、1 人 1 人の明オケへの熱量の高さと団員を第一に考え行動する姿勢です。明オケでは E 年になると全員何らかの役職につきますが、大小問わず全員がコミットしていたように思います。幹事長が記した合宿での飲酒の指針も、インペクが記した定期演奏会の選曲も、自分たちの損得ではなく団員が満足できるか、その 1 点についてどこまでも話し合えるような代でした。合宿のコンパ後のブルーシート拭きを合宿役員じゃない数名が「やるよー！」と自ら手を挙げて手伝ってくれる、そんな代でした。

特に各事務役職は仕事のレベルが高く役職間の連携も完璧で、内務としてとても頼りになる存在でした。9月の引継合宿では、合宿初日の台風直撃に伴い行程を大幅に変更することになったのですが、事前の台風マニュアルの準備、諸所に対する前夜〜当日の迅速かつ柔軟な対応まで、役員一丸となって共闘したのを覚えています。演奏会においても、例年メイン降りは使用済み楽器の運搬に回っていたのですが、客席で本番を聴けるようにしてあげたいという思いから、運搬の行程や団員配置について試行錯誤しました。

演奏面では、定期演奏会の際、曲の難易度が高かったこともあり全乗りの弦メンバーに対して週7日練習を入れた時期もありました。そんな中でも縦横の繋がりや関係性の構築、練習に来るきっかけになればと練習後の飲み会は欠かさなかったです。この年はVnが少なくラフ2に24人で挑みましたが(もちろん選曲会議では大反対しましたw)、それも今では良い思い出です(笑)

そろそろ冒頭の句に戻りますが、定期演奏会の指揮者・中田延亮先生は「例年スロースタートな印象だが、今年は初回練習からずっと高い集中力で練習に臨んでいて、本番でしっかりベストな演奏をした、まさに大器晩成型だね」「総力戦という印象」と仰っていました。要するに、96代の明オケは、勢いや行動力というより、「心配事を1つ1つ潰してみんなで一歩ずつ確実に歩みを進めていく」、誰も何も置いてけぼりにしないような、そんな組織だったのだと思います。6月演では散々だったにも関わらず集大成である定期演奏会を大成功という形で締めくくれたのは、個々の努力はもちろんのこと、日頃の私たちの熱意が各所へと紡がれていた結果である、そう信じております。

無論、私たちを明オケ愛に満ちた人間に育ててくださった先輩方、ついてきてくれた後輩諸君には感謝できません。

コロナ禍にあったF年の1年間は、後輩たちの努力も虚しくほぼ全ての行事が中止、実施できた行事も例年通りとはいかず、またプライベートでも卒業旅行など大学4年生らしいこともできず、日々とても歯痒い思いでした。そんな中で、式典演奏も中止となってしまった卒業式後に演奏会を企画しました。大学からの規制もあった中で賛同し協力してくれた98代をはじめとした後輩諸君に改めて感謝します。最後にみんなと演奏できて心から嬉しかったです。

最後に96代の近況ですが、楽器を続けている人や結婚した人、地方や海外で生活している人など様々で、年に1-2回集まれる人で同期会を開催しています。明オケ100周年以降もそういった小さな明オケの輪が各所で継続していくことを切に願っております。



山田 亮介 (幹事長)

97 代 (2022 年卒)

97代の運営は新型コロナウイルスの存在なしには語れない1年間でした。2019年12月、第96回定期演奏会を終え、いよいよ自分たちの運営代になると意気込み、新年を迎えました。この頃はまだコロナの面影もなく、例年通りのスタートを切りました。

新体制最初の行事である歓送合宿を終え、各セクションコンサートに向けて日々の練習に励んでいました。1週間後に木管セクションコンサートを控えた2月28日、事は大きく動き始めました。大学からのサークル活動自粛要請を受け、全てのセクションコンサートを中止する判断を下しました。こんなにも心苦しい決断を下したのは初めてでした。もちろん、卒業式・入学式も中止となり、今後どうなってしまうのだろうと不安を抱えながら、新年度が始まりました。新歓もできず、大学にも行けない状況で団員を集めるために、SNSでの活動に力を入れることにしました。Instagramで公式アカウントを新設したり、公式LINEで質問募集をしたり、さらには「明オケこぼなし」という明オケを紹介する記事の連載を始めました。例年通りの人数とはいかないものの、ZOOMで行われた新入生説明会に多くの新入生が参加してくれたことを覚えています。

その後、緊急事態宣言の発令を受け、6月演奏会も中止となってしまいました。活動ができない期間、幹事長として1番の仕事は感染防止対策マニュアルの作成でした。トレーナーの先生方にも協力していただき、プロのオーケストラで使われているマニュアルを元に、明オケ独自のものを作成しました。学生支援事務から「こんなにちゃんとしたマニュアルを作っているサークルはない」と言われるほど超大作でしたが、唯一事務室から指摘を受けた項目がありました。それが「練習後は速やかに帰宅し、飲み会等は原則行わないこととする」という1文でした。原則という文言を入れたのは、明オケから飲み会を失いたくなかったからです。私たちの最後の足掻きでした。最終的には原則は削除し、対面での飲み会は一切できない状態で活動を再開することになりました。

活動を再開してから一筋縄にはいきませんでした。検温やソーシャルディスタンスの徹底に加えて、大学の施設に団友が入れなくなってしまったため、外部練習が主となりました。そのため出資金も高騰することが予想されましたが、OB・OGの方々立ち上げてくださったクラウドファンディングに助けられ、資金面での苦悩はとても軽減されました。定期演奏会のプログラムも例年通りとはいかず、メイン曲をドヴォルザークの交響曲第8番にし、前中の代わりに中止となった各セクションコンサートのメイン曲をやることとなりました。金管セクションのOh-Meijiで1、2、3！を叫べなかったことは悔やまれましたが、コロナ禍での定期演奏会を成功させることができました。同期の中では、6月演奏会でやる予定だったシベリウスの交響曲第2番をどこかでやりたいねと飲み会のたびに話しています。いつかあの日のリベンジを果たせるように、今後も音楽を続けていきたいと思います。

最後になりますが、明オケ97年目にして訪れたコロナという危機を乗り越えて、現在明オケが100周年を迎えられたことを大変嬉しく思います。明オケのさらなる活躍を願っています。



98 代（2023 年卒）伊藤 美月（幹事長）・岩谷 修二（内務）・菊地 厚志（正インスペクター）・飯田 大翔（副インスペクター）

98 代です。
訳ありで三役と言いながらも 4 人いますが、明オケでのイベントをそれぞれで語ってみました。

「明治大学創立 140 周年記念式典」
絶賛コロナ禍で練習時間もかなり限られてる中、なかなか難しいご要望にお応えするため、頭を悩ませました。そういえば、弦楽 ver. 校歌を作って演奏したり、映像の尺に合わせるために前代未聞の爆速校歌も披露しました…日本三大校歌に数えられる明大校歌の勇ましいイメージからはちょっとかけ離れましたが、あれはあれで面白かったです（笑）
とにかく練習できなかったので、バタバタしてた思い出しかありませんが、滅多にない大学の大イベントで演奏できたという貴重な経験でした。
菊地厚志

2020 年～新型コロナウイルスの感染拡大およびその防止を目的として、多くのイベントが中止、規模の縮小を余儀なくされました。もちろん私たちの定期演奏会も例外ではありません。

コロナ流行中に E 年となり、先の見えない不安と団を継続させなければいけない責任の中、演奏会開催のために大学とバトルもしました。
なんとか有観客で開催できた第 98 回定期演奏会、お客様に音楽を届けられる幸せを感じ、そして何より明オケの仲間と一緒に音楽ができる幸せを感じました。演奏会開催にあたり三役をはじめ同期のみんな、先輩方、トレーナーの先生方、本当に本当に助けていただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。
当時はコロナのせいで散々な思いをした気になっていましたが、明オケ中心での大学生活はかけがえのない日々でした。
伊藤美月

前の年に完全な形で演奏会ができなかったということもあって、気合い入れてスタートしたんですね。これはもはや決まり文句になってるけど、あの頃はコロナの流行があんなに長く続くななんて誰も思っていなかったの。
いざ練習が始まったら、すぐに緊急事態宣言。が終わったと思ったらまた感染拡大からの活動禁止。練習できても 20 時までだし、休み前のことを思い出すだけで終わっちゃうよ！という具合でした。
そんな中で定期演奏会はよくまとまったなと思っていて、これはマジでみんなのおかげです！
ドタバタだったけど楽しかったね！
飯田大翔

明オケといえば飲み会、飲み会といえば合宿、おそらく各代の誰もが思い出に残す代表行事！コロナの煽りで開催できない代でした。
旅行会社と打ち合わせしても「でも開催できるかわからないから…」と流れて流れて気づいたら 1 年たっていました。かなしい。
当時のことを思い出していたら合宿くらいの規模で飲み会したくなりました。誰か主催してくれませんか？
岩谷修二

99 代（2024 年卒）山路 武瑠（幹事長）・小川 健太（練習場外務）

99 代とコロナ
私たち 99 代の大学生活は、コロナウイルスと切っても切り離せない関係でした。入学当初から様々な活動が制限され、多くの演奏会や行事が直前で泣く泣く中止をせざるを得ない時期を経験し、幹部学年になった後も、自分たちでさえ初めて経験する行事の運営に取り組むというような様々な困難を迎えることになりました。しかし、そのような状況だったからこそ、「明オケを一から建て直したい」という意識を運営代全員が共有することができ、一人一人が『自主性』を持って運営に取り組むことができたのかもしれない。
そのため、私たちは、コロナ禍という大きな障壁を乗り越えながら、99 年間紡がれてきた明オケの歴史を確かに次の世代へと託していくことができたのでしょう。

合宿について
私たちにとって最初の合宿は、現役として参加する最後の合宿でもありました。自分たちが経験のしたことのない行事に引き続き資料のみを頼りに挑戦することは、簡単なことではありませんでした。自分たちの経験・情報が足りない箇所は積極的に旅行会社様や先輩を頼りながらも、コロナ禍以降入学した全団員にとって初めての合宿を、全員にとって楽しい思い出とできるよう運営役員が団結して運営に取り組みました。コロナ禍によって例年とは異なる対応を求められる箇所も多く、その制約の中でいかに楽しい合宿を実現するか運営内で非常に多くの議論を重ねました。合宿が始まった後も絶えず修正を重ねながら運営の改善に努めたことにより、楽しく快適に練習・交流のできる環境を整え、団内の絆がより深まった忘れたくても忘れない合宿を実現することができました。



練習について

99 代の練習活動はコロナウイルスの蔓延による制限の下でどのように練習機会を確保するかが課題でした。当時は前年までの活動制限は無くなったものの、音楽練習室の使用時間制限、外部練習施設の人数制限、歓送合宿・新歓合宿の中止等により練習活動に対する制限は根強く残っていました。しかし、前年までの長期間にわたる活動制限の影響もあり明オケ全体の演奏技術はかなり落ち込んでいたため、より多くの練習機会の確保が必要でした。そのため、練習活動に関わる音楽役職・事務役職で協力し、各セクションの練習スケジュールの調整、外部練習回数の増加等を行い、限られた時間の中でも効率的な練習を行えるように工夫をしました。ただでさえ、一部の演奏会に関しては幹部代ですら初めて行うものであり、手探りでの運営となる部分は多くありましたが、幹部代だけでなく全団員の理解と協力もあり、日々の練習活動を行うことが出来ました。

演奏会について

99 代の演奏会運営はとにかく困難の連続でした。前年までの活動制限の影響によって 3 月のセクションコンサート、6 月演奏会、部内演奏会等、多くの演奏会が幹部代ですら未経験という状態であり、運営にあたっては多くの課題がありました。もちろん、諸先輩方に残していただいた大変素晴らしい引継ぎ資料はありましたが、ただでさえ演奏会運営は難しいものであるのに加えて、やはり実際に演奏会を経験していないことにより当日の裏方の詳細な動きや各役職の仕事のスケジュール感の把握等が出来なかったこと、コロナ対策の関係で追加の業務が発生したことにより、例年以上の仕事量と対応力が求められました。このような中で運営だったので大変なことも多くありましたが、演奏会を重ねるごとに、それまでの 2 年間で失われた時間を取り戻すかのように幹部同士、そして先輩・後輩問わず全団員が絆を深めていきました。今では一つ一つの演奏会が忘れられない貴重な思い出となりました。



100 代（2025 年卒・学生 4 年） 潮田 駿（幹事長）・鯨岡 美音（内務）・妹尾 匠真（インスペクター）

第 100 代幹事長を務めました、潮田駿と申します。

2023 年、明治大学交響楽団は創立 100 周年を迎えました。この記念すべき年に、明オケの一員として、100 代の一員として、第 100 代幹事長として活動できたことを、心から誇りに思います。運営代でちょうど 100 周年を迎えた私の代では、例年通りの演奏会やイベントに加えて、コロナ禍で途絶えていた行事の復活、100 周年行事の企画・開催など、非常に充実した運営代でした。

まず、コロナ禍で途絶えていた活動の復活についてお話しさせていただきます。

合宿中や演奏会後のレセプションの復活、運動会の復活、東京六大学オーケストラ連盟の復活など、コロナ禍で途絶えていた活動が復活しました（なんとかコロナ前の明オケに「形だけでも」行事を戻しました）。これらの行事は、自分たちが体験した記憶はもちろん無く、そして引継ぎ資料も少なく、手探りでの実施でしたが、100 代の同期をはじめとして団員みんなの献身的な協力により、なんとか復活という形まで持っていくことができました。

特に、合宿のレセプションでは、お菓子やソフトドリンク・お酒の数量、レセプション中のゲーム企画など、決めることがたくさんありました。「今の明オケってどれくらいのお菓子やお酒を用意すれば良いんだろう、」「お酒がまだ飲めない未成年も楽しめるようなレセプションにしたいな、」という話を、第 100 代セレモニーマスターの岡田雄太 (CI) とたくさん話し合いました。結果として、コロナ禍後の「新しい明オケ」の時代に合ったレセプションの方針を新しく作る事ができたと思います。



合宿においては、内務 (CI 鯨岡美音)・合宿外務 (Ob 高橋奈津子)・合宿庶務頭 (Va 河合智紀) の 3 人 (+ 庶務のみんな) の表には見えぬ多大な努力により、大きな事件もなく 3 回の合宿運営を終えることができました。ここで、合宿準備に命を捧げた内務にインタビューしてみました！！

【合宿について】

第 100 代内務を務めました、鯨岡美音と申します。

合宿、それは明オケの中でも屈指の名 (迷?) イベント。 思い返せば執行代であった約 1 年は、常に合宿に追われていたような気がします。ひとつの合宿が終わるとどうなりますか？ 合宿が始まるんです。代替わり後の歓送合宿から新歓、引継と 2-3 ヶ月のペースで合宿を行うのでそう感じるのも無理はないな、と思います。

夏休みの宿題は最後にやるタイプだった私でしたが、さすがに合宿準備は時間をかけて丁寧に行いました。作業の細かさに半泣き状態でパソコンとにらめっこした日もあります。己の怠惰で明オケを終わらせるわけには！と自身を鼓舞した日も懐かしい。

毎回の合宿終わりに「こんなん二度とやるか……」と息絶え絶えになっておりました。ですが、団員たちが楽しんでいたり、合宿を通して仲が深まったりしているのを見ると自然と次も頑張ろうと思えてくるのです。合宿は忌々しい存在ではありましたが、間違いなく、私にとっては原動力となるイベントでした。

次に 100 周年記念行事について、お話しさせていただきます。

私たちは、2021 年に大学へ入学して明オケに入団しました。それが「たまたま」100 代という記念すべき年の代でした。コロナ禍での入学・入団でしたが、幸いにも 100 代は当初 73 人のメンバーが入団しました。人数が多い分（?）、役職決めもスムーズに決まり、みんなの得意分野に見合った役職決めができました。

役職決めが終わった直後、D 年の 4 月ごろには早速「第 100 回記念定期演奏会で何をするか」という話し合いが行われました（詳しい話は「特集：第 100 回記念定期演奏会」でまとめてます）。C 年時はコロナ禍で十分な活動ができなかったのも、その当時の私は明オケについて知らないことばかりでした。そんな中で、「100 周年のこの年に何をするのか」をととても悩んだ記憶があります。杉山さんや本間さんをはじめ、たくさんの OB・OG の皆さんにも相談し、明オケトレーナーの先生の方々のアドバイスも頂戴しました。特に Trb 榎原先生は、対面でも LINE 上でも、セイノーユースの練習の際にも、色々な場面でご相談する機会を作っていただきました。本当にありがとうございました。三役（幹事長・内務・インスペクター）だけでなく、セクションリーダーやパートリーダーも交えて話し合い、無事に「第 100 回記念定期演奏会で何をするか」がまとまりました。ここで、2023 年 6 月演奏会、第 100 回記念定期演奏会において、中心となって練習を進めてくれたインスペクターにインタビューしました！！

【練習について】

第 100 代インスペクターを務めました、妹尾匠真と申します。

私の心に常にあったのは、「100 周年」という言葉に囚われすぎず、全員が心から楽しんで音楽をすること。そして、長い歴史の中のどの代よりも全員が楽しんで音楽ができたとき、これまでにない「100 周年」に相応しい音楽ができるものと信じていました。

私たちの代はとにかく“互いに言葉を尽くした”代だと思っています。リーダーだけではなく、全ての演者が気になったことをすぐに発信できる空気が浸透していました。日に日に全員の技術力が上がるだけではなく、音楽の方向性まで揃っていくあの感覚は、まさに“音”を“楽”しむ「音楽」でした。

特に 12 月の第 100 回記念定期演奏会のラフマニノフ交響曲 2 番はこれ以上ない最高の出来になりましたし、私にとってかけがえの無い「音楽」になったことは忘れがたい思い出です。

そのほかの広報周りの整備を行いました。2020 年代は大学オーケストラの創立 100 周年が相次いでいましたので、ワセオケや法政オケの 100 周年行事を参考にしました。

まずは、100 周年ロゴを作成しました。個人のスキルを気軽に売り買いできるスキルマーケットの「ココナラ」というサービスを利用し、ロゴを外注しました。2 パターンのロゴを作成していただき、100 代でアンケート形式で選びました。選ばれたのは右のイラストでした。100 の数字をモチーフに、0 の部分で「人との繋がり」を表現したロゴマークです。0の中には、当団のご卒団生の皆様に作っていただいた公式ロゴマークにも使っております「鐘」を入れてもらいました。



ちなみに、左のイラストは廃案となったロゴです。

次に、[ホームページ](#)のリニューアル（「明オケブログ」という団員の声がすぐに聞けるような新しいページも作成）、ならびに、[100 周年特設ページ](#)の作成をしました。意外にも、多くの方にホームページをご覧いただいているようでした。ホームページのリニューアルに合わせて、[明オケ YouTube](#) も本格的に動かし始めました。

広報頭の安藤玲（Va）をはじめとした広報メンバー、ウェブマスターの栗栖優来（Trp）の努力もあり、第 100 回記念定期演奏会では満席に近いお客様にお越しいただけました。同時に、すみだトリフォニーホールホワイエでは、クリアファイルやステッカーの明オケグッズの販売をしました。デザインは全て 100 代の松橋月奈（Vc）の作成です。私は開演前に販売状況が気になり、グッズ売り場へ見に行きました。OB・OG だけでなく、一般のお客様やトレーナーの先生方も、行列に並んで買ってくださった光景を見ることができました。その時私は、「明オケは本当に色々な方々に応援され、支えられているんだ」と改めて感じた瞬間でもあり、その時の感動は今でも覚えています。

第 100 回記念定期演奏会が終わった翌月、明治大学から「[学生部長賞](#)」が受賞されることが決まりました。「100 年間にわたる大学への多大な貢献」が受賞理由でした。この表彰状を受け取ることができたのは、今までの明オケを築き上げてくださった OB・OG の皆様、歴代トレーナーの皆様、そのほか支えてくださっている関係者の皆様のおかげであると思っています。第 100 代幹事長として 1 年間務めた今、心から実感しています。

創立 100 周年というのはただの「通過点」です。明治大学交響楽団がさらに 150 年、200 年へと永遠に続くことを心から祈り、100 代の学年報告とさせていただきます。



101 代（2026 年卒・学生3 年）

原野 桂樹（幹事長）

執筆中の現在、私たちは幹部学年であり、第 101 回定期演奏会に向けて練習真っ只中です。まだ思い出が深く色づいてはいませんが、これを読んでくださる方に今現在進行形の明オケのことを知っていただけたらいいなと思いながら、今年 1 年のことを綴っていこうと思います。

ブルシ忘れ事件

代替わりが行われて最初の行事は 2 月の歓送合宿だったのですが、101 期始動早々、事件を起こしてしまいました。明オケにとって楽器の次に大切なブルーシートを持っていくのを忘れてしまったのです、。初めて自分たちが運営する合宿でたでさえパンクしそうだった上に大事な忘れ物をしてしまい、幸先悪いスタートとなってしまいました。初日のレクの時間は学年のレクだったのですが、E 年のレクは余っているゴミ袋を切り開いてみんなで簡易ブルーシートを作りました（笑）。将来明オケで久々に集まった時にこの話は笑い話として話題に上がるのかな？と思っています。

日韓合同演奏会

101 代の最も思い出深いこととして、このことは残しておきたいと思います。2024 年 8 月 6 日に池袋グローバルリングシアターという屋外ステージで韓国のアマチュアオーケストラと合同演奏会を開催しました。真っ新な状態から企画に携わり、コミュニケーションに苦しみ、本番まではかなりドキドキでした。参加した団員からも楽しかったという声が多く聞こえ、やりがいがありました。明オケが海外との交流ができたというのは 101 年目という新たな節目において大きなことだったと思います。



最後に

今回、100 周年記念オーケストラなどを通じて、現役生は今まで関わる事が少なかった先輩方と直接話す機会が多く、噂話として聞いていたあんなことやこんなことの真偽や、昔の行事の話、トレーナーとの関わりなど、明オケの一員としてより明オケのこと知れた代であると思います。この 100 年史を手にするときには第 101 回定期演奏会は終演しているかと思いますが、その演奏がこれから先何十年、何百年と明オケの歴史が紡がれることを予期させるようなものにするために、残り短い期間団員一同練習に励みます。

102 代（2027 年卒・学生2 年）

山室 亮太郎（幹事長）

私たち 102 代（2023 年度入学）は現在いわゆる D 年の代であり、私たち同期全員でなにかまとまって運営するといったことはまだない。しかしながら、今年の夏に行われた部内演奏会では 102 代が中心となって作られた有志オケが複数あったり、運動会の運営にも携わったりするなど非常に行事に積極的に参加するなど、盛り上がるのが好きな代なのではないかと思う。

そんな私たち 102 代はこれからの明オケの方向性を決定づける上で非常に重要な役割を担っていると言っても過言ではないだろう。それはすなわち、新型コロナウイルスの流行による活動制限が緩和されたことにより一年次からほとんど全ての行事に参加することができ、また 100 周年記念行事を通じて様々な OB との交流することができた唯一の代である私たちに、今まで紡がれてきた明オケの伝統の行く末がかかっているということである。

実際私たちの代でもセレモニーの雰囲気はセクションによってまちまちであり、昨今の多様性の時代の象徴であるように思う。そうした時流を踏まえ、令和の時代に即した形へとこの伝統を変えていくことで、明オケの 101 年間の歴史を次代に継承していくというのが来年の運営を担う人間としてやらなければならないことである。

現在（2024 年 10 月）来年の各セクションコンサート、6 月演に向けた選曲会議が行われたり、役職の引き継ぎが行われていたりするなど、代替わりまでそう遠くないことを実感させられる時期となっているが、私たちらしく楽しく盛り上がる明オケを作り上げられるように努めていきたい。



2024 年新歓合宿にて

各セクション・パートコンサート紹介

弦楽コンサート

遠藤 千絵（旧姓：高橋）(Vn 第74代)

明治大学交響楽団 100 周年記念誌の刊行にあたり、弦楽セクションコンサートのはじまりについて記憶していることを表します。

74 代の私たちが D 年になって 6 月演奏会の練習をしていた頃、同期の弦楽パートの中から「弦メインの小編成曲もやりたい」「古典派の曲やりたい」という意見が出てきました。当時の明オケは、大人数の管楽器の乗り番を確保するために近代以降などの編成の大きな楽曲が選ばれがちだったのです。弦合奏出身の同期も多かったことから、このままでは不満が募って退部者も出かねない状況になるのではと、和泉部室であってもないこーでもないと話をしていた記憶があります。

そんな中、木管や金管打楽器ではセクションコンサートを開催しているのに弦楽では実施していなかったこと、弦楽セクションコンサートが実現できれば、今抱えている不満も解消できるのではないかと意見が持ち上がり、話はトントン進んで行きました。私たちの代は、ソロ演奏もこなし各所で弦楽四重奏の営業活動も行う演者たちに恵まれていました。演奏面以外でも、会計、庶務、運搬、広報などのメンバーが揃っていたことも力になりました。

初めてのコンサートに向けての練習は、曲ごとのリーダーが中心になって進めていきました。初心者で入団する団員もいたので、コンマス寺田君やパートリーダー岡本君によるレッスンも行われるようになり、演奏面でもコミュニケーション面でも団結力が増したように思います。

私個人の思い出も少し。「調和の靈感 第 10 番」では第 2 バイオリン独奏を担当することになり、大変なプレッシャーを感じたことをよく覚えています。初めての経験で、上手なメンバーの足を引っ張ることの不安でいっぱいでした。ただ、曲を初めて聞いた時から大好きになったこと、独奏に選んでもらったことを光栄に思う気持ちも不安と同じくらいありました。「ホルベルク組曲」は、高校時代に芸大指揮科受験を控えた高 3 の先輩の練習ために上手な弦部員が合奏していた曲でした。高 1 初心者だった私は、音楽室の外で個人練しながら憧れの気持ちで聴いていました。それを大学生になって自分も演奏できることが嬉しかったのでした。

1997 年 3 月 3 日、府中の森芸術劇場ウィーンホールにて、記念すべき第 1 回弦楽コンサート開催。

「四季」では、現セントラル愛知交響楽団のコンサートマスターを務める寺田君が美しいソロを奏でつつの弾き振りを披露。メインの「ホルベルク組曲」では、チェロの野上先輩が指揮を引き受けてくださり、弦楽セクションみんなで作り上げるコンサートを実現することができました。

そんな弦楽コンサートが、数十年経った今でも引き継がれ開催されていることを知った時は本当にうれしく思いました。あの時の私たちが、今でもそこにいます。これまで弦楽コンサートに関わってくれた全ての方に御礼申し上げます。



第 1 回弦楽コンサート

木管セクションコンサート

中沢 勝義 (Cl 第73代)

私の現役当時（1994年4月～1998年3月）、管楽器はものすごい人数が明オケに在籍していました。明オケには入団にオーディションもなく、明治大学以外の大学生も団友として所属することができるウェルカムなオケだったからかもしれません。私の所属していたクラリネットパートも多いときにはE年以下だけでも10人以上いる状態でした。それはもうオケの中に吹奏楽団ができてしまうくらいの状況でした（実際、私の一つ下の後輩たちが“Say No Yes Yes 吹奏楽団”を立ち上げています）。そんな状況ですから、D年になっても演奏会で乗り番がないとか、短大（当時はあった）の子は乗り番の機会なく卒団、みたいなことも起こってしまう状況でした。音楽が好きで楽器を続けているのに、ステージに上がることがない（もしくは著しく少ない）まま卒団してしまうのはあまりにも忍びない。そんな思いから、乗り番の機会に恵まれない団員にもステージで演奏する機会とお客様から拍手をいただく経験を！というようなことから木管コンサートがスタートしたものと認識しています。もちろん木管全体のアンサンブル技術の向上や親睦を深めるような目的もあったと思います。

木管コンサートには私自身、1995年3月の第5回から1998年3月の第8回までの4回出演しました。その中でも印象に残っているのは1996年3月の第6回演奏会と1998年3月の第8回演奏会です。

木管コンサートは毎年3月に行われており、そのときのD年が運営を取り仕切っていました。その直前12月の定期演奏会でE年が運営を終え、年明けからD年が団の運営を担当し、この木管コンサートは新木管セクションリーダーの最初の大仕事ということになります。私は木管セクションリーダーでしたので、前もって前年に予約していたルーテル市ヶ谷で開催する第6回木管コンサートにむけて準備に勤しんでいました。初めて経験する自主公演で右も左もわからず、トレーナーの先生方（N響所属でいらしたOb 茂木大輔先生、Fl 細川順三先生、Fg 井上俊次先生、のちには群響のCl 野田祐介先生）と連絡を取り、練習予定や練習会場を調整することも初めてでとても大変だったと記憶しています（当時はメールも携帯電話もあまり普及しておらず家電でのやり取りでした！）。でも準備するのに苦労が大きかったからこそ、演奏会の成功は喜びもひとしおでした。ルーテル市ヶ谷のステージでセクションリーダーとして最後に挨拶したときの、ステージから見た客席の雰囲気は、いまだに記憶に焼き付いています。

D年のときの木管コンサートも運営として大変印象深いのですが、それにもましてF年のときの木管コンサートも私の中で忘れられない思い出です。先述の通り木管コンサートは毎年3月に開催されるため、F年にとっては卒業間近の明オケ生活最後のステージとなります。1998年3月の第8回演奏会では、大好きなブラームスのセレナード第1番の九重奏版（fl, 2cl, fg, hr, vn, va, vc, cb）を卒団するF年中心メンバーで演奏しました。演奏会のトリも務めさせていただき、終楽章の最後の音がホールに消えていくとともに明オケの青春が一区切りしたような淡い感情があふれたことを、四半世紀経った今でも昨日のここのように覚えています。ちなみにこのときは時間の関係で6楽章あるうちの3つの楽章しか演奏できませんでした。全楽章ともいい曲なのでそれが演奏できなかったことだけが心残りで、社会人になってから自分が中心となって気の合う明オケの現役やOBに声をかけ、自主公演で全楽章演奏を実現させました。それが実現できたのも、この木管コンサートの運営経験があったからだと確信しています。

もともと中高時代クラリネットアンサンブルの盛んな学校だったので、アンサンブル自体大好きだったこともあり、私の木管コンサートにかかる情熱はオケの演奏会に勝るとも劣らないものでした。情熱をかけた分だけ、いまでもキラキラした素敵な思い出として私の心の中に生き生きと残っています。

金管打楽器セクションコンサート

遠藤 智史 (Hr 第74代)

当時を知る金管セクショントレーナーの榊原徹先生にお聞きしたところ、金管コンサートは小編成でのアンサンブルを強化することで個人技術のレベルアップを目指すことや、オーケストラでのパート間連携強化のため、1989年2月23日木曜日に同仁キリスト教会にて、1988年12月に第65回定期演奏会でプロコフィエフ作曲交響曲第7番「青春」を演奏した学年を中心として第1回のコンサートを開催（なんとその日は昭和天皇大喪の礼の前日）。コンサート前日には藝大の練習室をお借りしてGPを行ったということである。そのようなご時世の中のため開催にあたっては相当なご苦労があったものと推察される。

この原稿を記載している74代遠藤が入団後に出演したのは1996年3月の第7回が初めてである。その頃には金管セクションの団員は非常に多くなっており、演奏会の乗り番がない団員（特にC年やF年）の演奏機会創出という意味合いも強くなっていた。金管コンサートは定例行事化し、コンサートの準備も体系化されており、特にF年の卒団生の最後の演奏として、卒団のお祝いコンサートという印象が強かったような記憶がある。ホルンパートとしては、難病により早逝した当時F年の吉野元章先輩を首席として演奏したホルン八重奏ローエングリンファンタジーが記憶に残っている。我々が幹部学年のころより、金管セクショントレーナーで現在は作・編曲家の大橋先生の編曲による曲を演奏するようになったと記憶している。記憶の一番初めは、ワーグナー作曲の指輪より神々の黄昏を金管十二重奏に編曲したものだと思う。ところが途中まではできていたのだがこれがなかなか完成せず、完成版が届いたのは金管コンサート当日の朝（笑）。リハで急いで合わせて本番を迎えたのはいい思い出。

打楽器のことで記憶に強いのは、第10回だったと思うが、来場者アンケートで最も印象に残った楽曲を投票してもらった中で、打楽器セクションの曲が1位を取ったことだった。レセプションで打楽器トレーナーの定成先生が「来年からは打楽器・金管コンサートに名前を変えよう」と氣勢を上げていたのが印象深い。

金管・打楽器コンサート創成期から私が卒業年くらいの話しに終始してしまったが、上記に記載したトレーナーの先生だけでなく、多くのトレーナーの先生方に長年お世話になり、明オケ金管・打楽器セクションの向上に大変貢献していただいたと思う。この場を借りて深謝申し上げたい。



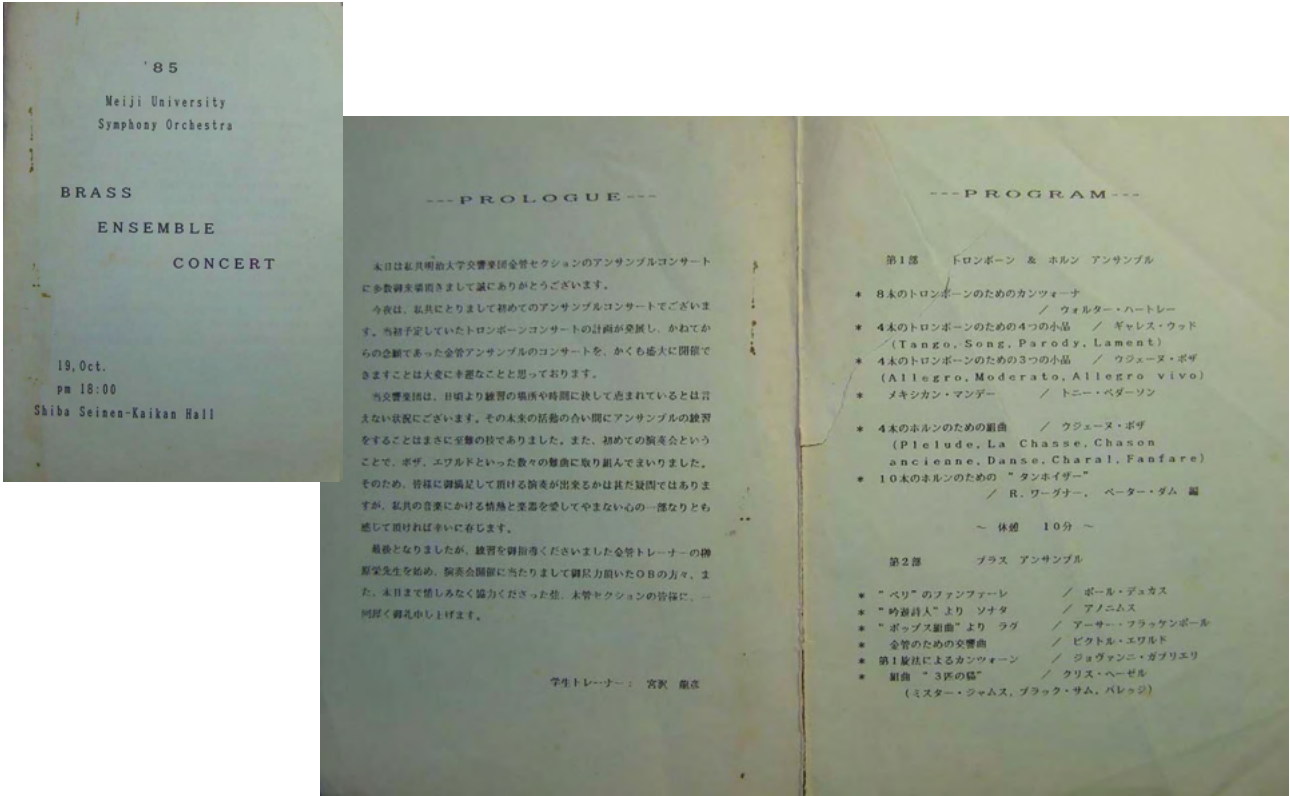
第1回金管打楽器セクションコンサート

後日、さらに新たな情報が70代長嶺先輩より得られたので追記する。1989年の金管コンサートが初回と思っていたが、遡ること数年の85年に実は単発の金管コンサートが開催されていたことが62代宮沢先輩からお聞きして判明した。当時は前述の榊原徹先生の前任のこれまた榊原栄先生の時代となる。1985年10月19日に芝青年会館ホールで開催された。ホルンもトロンボーンもボザのアンサンブルをやったり、ラ・ペリのファンファーレ、エバルドの金管五重奏曲、ガブリエリの第一旋法によるカンツォン、ヘーゼルの3匹の猫など、今でも取り上げられる名曲が選曲された。

そもそも榊原徹先生が明オケのトレーナーになったのは、榊原栄先生が当時新日フィルのトロンボーン奏者としてや、明オケ以外の他大（上智オケなど）の学生指導で多忙になりすぎ、実質的に明オケになかなか指導に来られなくなってしまったため、弟子であり高校の後輩である榊原徹先生に声をかけたということからであった。また当時明オケに榊原徹先生の高校の後輩や中学同級生がいたことも縁であった。1986年夏の岩井海岸における引継ぎ合宿では両榊原先生が相まみえ、「明オケをよろしくな」という引継ぎをされたとのこと。1986年以降は榊原栄先生が指導されていた上智オケと榊原徹先生に変わった明オケ金管セクションのジョイントコンサートをやっていたということなのだが、アンサンブルコンサートに慣れてない明オケは上智オケには残念ながら力及ばず、という状態だったそう。それをなんとかしたいという榊原徹先生の思いが1989年の第1回コンサートに繋がり、現在までの金管コンサートになっているということだった。紐解くといろいろな歴史が詰まっており、これらを記録に残せたのは非常に意義深いことであった。

余談であるが、榊原栄先生はアバラ先生（高校生時代からのあだ名。背が高く肋骨が透けて見えるような姿から名づけられたとのこと）と呼ばれていた。榊原徹先生は、大柄なアバラ先生と比べると小さいということから小さいアバラ＝コバラ先生となったとのこと。私も学生時代も今もコバラ先生と呼んでいたが由来については今回しっかり記録できて良かった。

なお榊原栄先生は2024年春御年100歳でお亡くなりになった。金管コンサートの下地を作ってくださった先生に合掌。



幻の第1回金管セクションコンサート

ホルンコンサート

山下 侑華 (Hr 第100代)

2023年11月1日（水）、明オケ史上初となるホルンコンサートが開催されました。

トランペットやトロンボーンのようにホルンパートも演奏会をやってみたいという学生の思いと、オーケストラの要であるホルンはパートでのアンサンブルが大切だという井川先生の意向が合致し、急遽開催することが決定しました。

初めての試みということで、編成や会場など、全てのことを0から決めていかなければならないにも関わらず、演奏会まで準備できる期間はたったの4ヶ月しかありませんでした。そのため、最初は本当にできるのかという気持ちもありました。

しかし、最初に演奏会の提案をしてくれた当時の2年生を中心に、なんとか形にしようと協力し合いながら準備を進めていくうちに、次第に演奏会への楽しみが増していきました。また、井川先生にも多大なお力添えをいただき、最終的には、ホルンパートらしい自由で温かい演奏会になったのではないかと思います。

そして、第1回から丸1年経った2024年11月1日（金）、今年もやりたいという現2年生の強い思いから、2回目となるホルンコンサートが開催されました。昨年より人数も増えてより賑やかになり、メイン曲「ラインの黄金」ではワーグナーチューバにも挑戦しました。2023年の第1回と変わらず、1人1人がホルンパートみんなでの演奏を楽しみ、そしてその雰囲気をお客様に伝えられたことを嬉しく思っています。

ホルンコンサートを始めた時から、この演奏会を毎年の恒例行事にはしたくないと思っています。それは、「このメンバーで、この曲をやりたいからやる」という思いがあってこそ、みんなが納得のいく素敵な演奏会を創り上げることができると考えているからです。この当初の思いを忘れずに、今後もホルンパートのみんなが活動を楽しんでくれることを願っています。



トランペットコンサート

小林 憲生 (Tp 第74代)

トランペットコンサートは私がF年の時に始まりましたが、途中途絶え、そして復活したこともあり、若い世代への確認を行いました。また、平林先生と明オケとの出会いについても知りたく、結果として68代から94代の26年の世代を超えた方々からエピソードや思い出をいただきました。あらためて皆様に御礼申し上げます。以下はその内容をまとめたものです。まずはトラコンからお伝えします。

トランペットコンサートの始まりと復活

トランペットコンサートは、1998年に75代井原が平林先生へ相談したことがきっかけで始まりました。当時、各パートのコンサートはトロンボーンコンサートのみでしたが、井原がそのトロンボーンコンサート直後に、「トロンボーンと同じようにトランペットコンサートをしたい。先輩たちの活躍の場を卒業前に作りたい。」と平林先生に相談しました。これがトランペットコンサートの始まりです。

初回のトランペットコンサート（トラコン）は1999年2月にティアラこうとうの小ホールにて開催。メインプログラムはワーグナーの「エルザの大聖堂」。バストランペットは、井原と平林先生が有楽町のドイツ料理屋で借用した楽器です。壁にかけてある楽器を料理屋店主と掛け合って借用したものでした。アンコールでは、74代の山岸、弘和、私が「トランペット吹きの休日」を演奏しました。初回のトラコンは大変でしたが何とか成功しました。ですが、その準備や演奏の大変さなどから、2回目はすぐには実現しませんでした。

復活したのは10年後の2008年、84代内野がトラコンを復活させました。内野は「当時は復活という概念はなく、単純にトロンボーンコンサートはやってるのにトランペットはなんで単独でコンサートないんだ！って思って企画したのですが、平林先生からあとで聞くと、過去に一回あったと聞いたので意図して復活させようとしたわけではなかったのです！ノリで開催したら結果的に復活だったという感じです！それが今でも続いているので、本当に毎年タスキを繋げてくれているみなさんに感謝しかないです！」と振り返っています。

その後を引き継いだのが85代 栗林さんです。「トランペットコンサートについては、復活トラコンが楽しかったので、次期パートリーダーだった私が継続します！とレセプションで宣言したのを覚えています。ただ、当時はトランペットだけの曲が少なく探すのに苦労しました。平林先生に編曲して頂いた曲が多数ありました。先生編曲の曲で「君を乗せて」は病床でアレンジしたと聞いて驚いた記憶があります！」とありました。内野や栗林、そして現在は堀などがOB・OGを巻き込みトラコンを盛り上げています。(写真：2015年の第10回トラコンに多数のOBが参加。)

次回トラコンは記念すべき第20回です。すでに親子ほど離れた年代が集まりトラコンを行っています。今後もさらに世代も広げ多くの方が参加し、現トランペットトレーナー林先生のご指導の下、盛大なトランペットコンサートにしていきたいと思います！



平林先生との思い出

平林先生と明オケとの出会いからお伝えします。69代 大西さんに多大なご尽力をいただき、多数の情報を整理いただきました。改めて御礼申し上げます。1992年、それまで金管トレーナーはトロンボーンの榊原先生、ホルンの大橋先生の二人でしたが、69代 白石さんが両先生にトランペットパートのトレーナーについて相談し、平林先生を紹介いただきました。68代 井村さんからは「それまでHr大橋先生、Tb榊原先生のお二人で、初めてのTpの先生で嬉しかったのを覚えています。ワーグナーのトリスタンとイゾルデの愛の死で、パート練だかで欠席者の代わりに3rdを力強く吹いて下さって、とても吹きやすかったのを覚えています。」といただきました。また、第19回トラコンの練習後の懇親会にて大西さんから、第69回の12月定期演奏会での「マラ1」が平林先生の初レッスンとありました。その場で話していた94代の前川からは、後任の林先生もその25年後の第94回の「マラ1」が初レッスンであることが分かり、本当に運命的なものを感じましたね。

私が学生時代の1998年、その当時のOB、学生、新入生一同が平林先生宅を訪問し、水餃子パーティーを行っていただきました。平林先生が本当にたくさんの水餃子を作ってくくださったのに、私たちがあつという間に食べ尽くしてしまいました。若者の食べる量はすさまじかったです。今思えば、大学生があんなにたくさん押しかけて大変失礼でした。宴会の場には奥さまも同席され、馴れ初めなどを伺い、ご夫婦でとてもあたたかい雰囲気で、心が温まりました。訪問の際に、山岸、弘和と池袋のディズニーストアで一番大きなくまのプーさんのぬいぐるみを購入しプレゼントしたのですが、十数年後のトラコンの練習の際にそのプーさんは今でも大切に飾ってあるとおっしゃっていただき、うれしくなりました。

今回、平林先生のエピソードで大変驚いたのは、晩年のレッスン時の話です。2018年頃には、平林先生の体調は思わしくなく、レッスンに来ていただけるのか毎回わからない状態でした。和泉校舎でのレッスンの際には、その途中でボンベの酸素がなくなり、予備ボンベへの切替え作業を行う際に息を切らし、休んで呆然としている中で一息つき何とかボンベ交換ができたことがあったようです。この休んで呆然としている時間が10分間もあり、94代の前川と石田はレッスン中にアイコンタクトしながら救急車を呼ぶべきかとハラハラしていたそうです。また、2018年の6月演奏会のレッスンでは、平林先生がいらっしゃらない前提でしたが、GWの新歓合宿で、平林先生は「終活として体調が良い時に楽しむために来るのだ」とおっしゃりながら、丁寧にそして楽しく前向きにレッスンして下さったとのことです。(写真：楽しそうな平林先生。2018年新歓合宿より。)

平林先生は何といってもその人柄です。これは誰もが共通して「平林先生は本当に優しい。優しいお兄さん。レッスン時も、傷つけるようなことは言わず、やんわりした言葉を使い、丁寧に説明しながらレッスンしていただいた」とありました。栗林さんからは、「平林先生は「いずれみんなもOBOGになるから」と常々仰られており、当時現役生の自分から見てもOBOGさんが参加してくれると本当に嬉しそうでした。私がOGとして参加したトラコンで、練習室に入ってきた先生が集まったOBOGを見て涙した姿は忘れられないです。本当に優しく、現役生のみならず、明オケトランペットに関わった人に温かく接してくださる方でした。」と。そして井村さんからは「体を悪くされる前だったと思いますが、久々にトランペットコンサートを聴きに行ったら私の名前も覚えていてくださって、大変嬉しかったです。」とありました。本当にすべての人に優しく、温かくしてくださる方でした。本当にありがとうございました。

様々なことを書き連ねた文章となりましたが、ここには記載できなかったトラコンの歴史や平林先生との様々なエピソードや思い出がまだまだ多数あります。この内容は改めて整理し、平林先生の奥さまへお届けしたいと考えています。



トロンボーンコンサート

長嶺 賢自 (Trb 第 70 代)

トロンボーンコンサートが始まったのは、1993 年 10 月の第 1 回演奏会を同仁キリスト教会で開催したところからです。それ以前は金管セクションのアンサンブルコンサートは毎年開催されるようになっていましたが、パート単位で演奏会を開催する発想はありませんでした。当時の明オケとしての状況は徐々に団員数が増えてきた時期で、トロンボーンパートも同様にメンバーが増える傾向にあり、年 2 回の演奏会（6 月演奏会と、12 月の定期演奏会）の曲目で前プロ・中プロ・メインで全てトロンボーンの出番がある曲を選曲したとしても、全員には乗り番が回らない状況となっていました。また、乗り番があったとしてもトロンボーンの出番が少なかったりするのでトレーナーのコバラ先生（榊原先生）にアンサンブルに取組むことで技術も向上するし勉強にもなるから、と薦められたことがきっかけでした。

以上は始まった理由の概要ですが、内情はもう少し泥臭いです。これは団員数が増えてきた状況から考えなくてはならないのですが、当時 2 つの考えがあって、団員数が増え過ぎると大変なのでコンパを強化するという考えと、お酒と演奏技術や個々人の音楽に対する思いは関係無いので入団したい人に無理強いしない、という考えです。私自身は後者の思いがありました。この時期は同じ様に考える団員が増えつつあると感じていました。私の 2 年上の学年は厳し過ぎて団員数が少なかったので、1 年上の時は少し控えめにした為に団員数が多くなったと聞いたことがあります。その様な状況に対して、ほらみろ、甘やかすからだよ、という言葉聞いたこともあります。今思い返しますと、昭和から平成に移る過渡期において、オーケストラとしても変わりつつある時期だったと思います。その様な状況の中で、私が E 年になる前にパートリーダーに選出してもらった時に、トロンボーンは既に 2 年～4 年で 15 名在籍となるが、新入生をどうするのかの話となりました。私は、もっと入団してもらって 20 名以上のパートにする！と宣言し、そうになったらバイオリンの席に進出する、そして、トロンボーンパートだけで演奏会を開く、との 3 つの約束をしてしまいました。その時は、そんなことは実現出来ないと思っていましたが、4 月になると 6 名の新入生が入団し本当に 20 名を超えてしまい、勢いに任せて 6 月演奏会のステリハの後のタイミングを見計らってバイオリンの席に進出することも達成してしまい（写真参照）残るは演奏会だけとなったのです。



今でこそ、いろいろなパートがアンサンブルコンサートを開催していますが、当時は言葉では簡単に言えたものの、単一パートで演奏会をやるとなると本当にそんなことが出来るのか、失敗するのではないかと不安しか無くて、尻込みしていました。しかし、コバラ先生に励まされて、今なら絶対に出来る、皆が 2 曲ずつ乗る様にして、トリオやカルテット等の小編成の曲や、10 重奏以上の大編成の曲も取り入れてプログラムを組んで、足りない分は他のパートに助けてもらえば良い、と。先生自身もソロ曲で出る、と言って頂いた事が最後の決め手となり、開催することに決まりました。次に問題となったのは開催時期ですが、春は金管コンサートがあるので秋が良い、夏合宿で練習が出来るし、12 月の定期演奏会の本格的な練習となる前

の 10 月下旬はどうか、とパートの皆からも先生からも言ってもらえました。しかし、個人的には幹事学年で忙しい上にジュネス・オーケストラにも乗っていて 10 月末にその本番も控えていた為、準備が出来ないと話したところ、皆で準備すれば良いので大丈夫と言って頂きました。その時期は D 年メンバーは翌年の幹事学年に向けて役割が決まっているので、その予行演習も兼ねて色々な役割を持ってもらい、C 年メンバーにも補佐に入ってもらって皆で分担する、という具合に助け合いながら、準備を進めることが出来たのでした。その体制の作り方は今でも受け継がれているので、その時にその様に指導して頂いた先生と、助けて頂いたパートの皆には本当に感謝しております。また、弦楽四重奏と木管五重奏で 1 曲ずつプログラムに入ってもらうことで助けて頂き、ありがたかったです。今当時のメンバーを見返しますと各パートのトップ達、錚々たるメンバーに演奏して頂きました。彼等にしてみれば、営業に出る機会も多く、その中の得意な一曲を披露することは問題無く出来ることだったかもしれません。もしかすると、後々の流れとして弦楽、木管セクションのアンサンブルコンサートや他のパートの単一の演奏会が相次いで開催されていくきっかけになったのでは、と言えるかもしれません。

練習を進めていく上での問題もありました。全員が前向きに考えてもらっている訳ではなくて、オケのパート譜に比べると練習しなくてはならない量が格段に増えるし技術的にも難しい、どうして突然こんな事をしなくてはならないのか、との意見を言われたこともありましたが、先生にレッスンして頂く時にあからさまにやる気がないメンバーもいたりする等、皆で演奏会を作り上げていく事の難しさを実感したのでした。

結果的には、粘り強く指導して頂いたコバラ先生の熱意をもって皆の協力が得られて、他のパートの団員にも助けられて何とか第 1 回目の演奏会を開催することが出来ました。翌年には第 2 回演奏会を開催できたものの、常に多くの団員が入団するとも限らず波がある為に、メンバーが少ない年もあって開催が苦しい年もありました。その時に既に OB となっていた私に、隔年開催でもいいですか？とわざわざ了解を得ようとする後輩もいました。その時は、もちろん問題無いよと答えましたが、思い付きで無理に開催してしまった事で後輩達を苦しめる様な事になってしまい申し訳ないな、と思ったのです。当初は開催しない年が 2 回ほどありましたが、年代によってチューバパートと合同で開催したり、OB メンバーも協力して乗り番に加わる様になったりして、演奏会を継続的に開催できるようになりました。そして 2024 年 10 月 19 日には 30 回目の節目のトロンボーンコンサートがおこなわれました。私は今回久しぶりに同人キリスト教会に訪れてこの演奏会を聴衆として堪能しました。演奏会を始めた当初よりもはるかに技術レベルが上がり、この同人キリスト教会の礼拝堂全体をきれいに響かせるハーモニーを奏でられるようになったのだと思い、胸が熱くなりました。そして 30 年以上にわたり毎回ご指導を続けて頂いているコバラ先生に感謝の意味を込めて初



回のパートのメンバーから花束を贈りました。今までトロンボーンコンサートでは花束贈呈を舞台上ではやっていなかったのですが、私がコバラ先生にプレゼンターで贈呈させて頂きましたが、いいサプライズになり、また 30 回の節目の良い記念になりました。

花束を渡した時に先生から「あなた達がいたからこの演奏会が続いているのだよ」と言って頂いて、あの時負けずに頑張ってやり遂げて本当に良かった、と本心で思える様になりました。

打楽器コンサート

中谷 惇之介 (Perc 第100代)

トランペットコンサートやトロンボーンコンサートなど特に金管楽器によるパートアンサンブルコンサートが活発な明オケであるが、一度打楽器もパートコンサートを行ったことがある。2013年1月12日、小松川さくらホールにて「明治大学交響楽団 打楽器コンサート」は開催された。3人編成の曲から9重奏の大編成の曲、メインには打楽器トレーナー、定成誠一郎先生編曲の「オペラ『カルメン』より」を定成先生の指揮のもと12人の編成で演奏した。鍵盤楽器が美しいメロディを奏でる曲や音程によるメロディのない太鼓のみのアンサンブルの曲など様々な形の打楽器アンサンブルを届けた演奏会となった。普段使うことのない楽器や足で地面を踏むなどの原始的な音によりつくられる音楽は、観客にとっても奏者にとっても普段のオーケストラでは味わえない貴重な経験となったであろう。

そして2025年2月21日、国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 小ホールにて2回目の「明治大学交響楽団 打楽器コンサート」が開催された。私としても貴重な経験となった。



クラリネットコンサート

新海 美和 (旧姓：田中) (Cl 第74代)

私たち第74代(1995年4月～1999年3月)のクラリネットパートは、途中入退ありましたが、常に6人は在籍する、吹奏楽部並みの人数の学年でした。当時は、誰でもウェルカム！ 実は、私も明治大学以外の大学からの入団で、4年間、明オケの団員として分け隔てなく楽しく過ごさせていただいた「団友」の一人です。

D～F年の先輩方だけで人数が十分足りており(しかも相当な腕前の方ばかり!!)、C年時は6月演奏会・定期演奏会ともに乗り番なく過ごしていたので、普段の練習といえば、音の響く記念館の廊下で、他のパートも巻き込んで数人集まって、昔懐かしの吹奏楽部コンクールの曲などを吹いていました。周りの先輩方には、さぞうるさく暑苦しい存在だったことでしょう。

そんな私たちのエネルギーを発散できる場が、12月の定期演奏会を終えた後に開催される、木管コンサート及びクラリネットコンサートでした。

クラリネットコンサート(以下クラコン)とは、正式には、「インターカレッジクラリネットコンサート」と称し、複数の大学のクラリネットパートが集って開催されたコンサートです。就職活動を終えた各大学のF年が仕切っていました。

当時は、お茶の水管弦楽団・学習院輔仁会音楽部管弦楽団・立教大学交響楽団・明オケの合同で行われていました。後に、明治学院大学管弦楽団・法政大学交響楽団なども加わったと聞いています。

各大学混じってアンサンブルを組んだり、大編成やコントラバスクラなどの特殊管を経験できたりと、さまざまな刺激を受けたコンサートでした。

ある時、明オケ男子団員が、練習のためお茶の水女子大のキャンパスに立ち入った時に、警備員に止められ、お茶管の団員に迎えに来てもらったことや、打ち上げで「明オケのワルツが見たい!」と言われ、「ワルツ?!」なにそれ?と思ったら、「美しき天然」の三拍子のことだった!などのエピソードがあります。また、クラコンが縁でSayNoに乗ってくれた法政大学生が、打ち上げでこの三拍子の洗礼を受けたこともあるそうです。学習院のメンバー同士(後に1人は某大手楽器メーカーのクラリネット技術者になった)が結婚し、その結婚式に呼ばれるなど、クラコンを越えた親交も生まれたという話も聞きました。

こうして振り返ってみると、クラコンは、他大学との交流の場として、また、乗り番の機会を増やし技術を磨く場として、とても意義があり、楽しい場でありました。

今回、本文を書くにあたり、クラコンがいつどのような経緯で始まったのか、いつまで続いたのか、調べました。Facebookに、「明治大学交響楽団クラリネットパート」というグループがあり、そこで問い合わせたところ、数名の先輩や後輩達からいただいた情報で、2015年2月に開催された、第30回が最後だったことを知りました。その翌年から、就職活動解禁の時期に変動があり、4年生による仕切りが難しくなったことが、開催されなくなった大きな要因の一つだったようです。

残念ながらクラコンがどのように始まったのかまでは辿れませんでした、少なくとも30年は開催された、歴史のあるクラリネットコンサート。今現在、他のパートコンサートが各種催されている中で、クラコンもいつか復活することがあるかもしれませんね。その時はぜひ、聴きに伺いたいと思います。

もしクラコンの歴史、特に第1回開催の時期や経緯をご存知の方がいらっしゃいましたら、Facebookの「クラリネットパートグループ」を見つけて、書き込んでいただけたら、また世代を超えた交流も楽しめるので嬉しいのです。

派生楽団紹介

明治大学OB 交響楽団

明治大学交響楽団（明オケ）の活動拠点であった記念館講堂（御茶ノ水駿河台）は、昭和３年（1928年）に建設され、現在の明治大学リバティタワーに建て替えられるまで、明治大学の象徴として親しまれていました。この記念館講堂が取り壊されることが決まった際、当時の在校生およびOB・OGが一丸となり、記念館を惜しむ気持ちを込めて「明治大学記念館お別れコンサート」を開催しました。このコンサートをきっかけに「明治大学OB交響楽団」が設立されました。

毎年５月に定期演奏会を開催していましたが、新型コロナウイルスの影響で令和２年（2020年）から演奏会の開催を一時停止することとなりました。

令和７年(2025年)、100代(2025年卒)のOB・OGを中心とした新体制で活動を再開する運びとなり、新たなスタートを切りました。

尾原記念合奏団

明治大学交響楽団の創立者であり、N響の前身・新交響楽団創設メンバーでもある尾原勝吉氏のお名前を団の冠に戴き、尾原先生の薫陶を受けた明オケのOB・OGが中心となり活動を始めた合奏団です。現在は一般の市民オケとして、20代～80代と幅広い世代が「楽しくなければ音楽ではない！」を合言葉に合奏を楽しんでいます。活動は、年２回の定期演奏会と九段下の生涯学習館のサロンコンサートを毎年行っています。

Say No Yes Yes 吹奏楽チーム

Say No Yes Yes 吹奏楽チームは1997年に私（74代Trb 遠藤洋一）が明オケE年の時に明オケ同期を中心に立ち上げた東京都の一般吹奏楽団体です。主な活動は、年１回のコンクール出場、約10年に１度の演奏会開催です。なんと今年で28年を迎えました。コンクール実績は、代表金１回、ダメ金３回、銀賞17回、銅賞１回、失格１回、スキップ５回（コロナ３回）と失格含む全ての賞をコンプリートしました。毎年、明オケ現役にも参加して頂き明オケに迷惑？貢献！している団体です♪これからも明オケに貢献できる団体でいたいと思っています。

Say No Yes Yes Youth Orchestra

Say No Yes Yes Youth Orchestra（通称：セイノーユース）は、明治大学交響楽団の卒業生が中心となり2009年に設立されたオーケストラです。

メンバーは明治大学の卒業生だけではなく、他大学出身者も多く在籍。現役の大学１年生から30代までの世代で構成されており、明治大学交響楽団のOB団体の中では比較的若い世代の団体となっております。

また当団は、「社会貢献・楽しさの追求・チャレンジ」の３つを目標に掲げています。社会貢献としては、福島県南相馬市にて災害ボランティア活動への参加、老人ホームを訪ねての慰問演奏などを行ってきました。楽しさの追求は、本団体の設立経緯が「学生自体の熱い体験を再度体験したい」から始まっています。もちろん学生時代のほぼ毎日仲間と過ごすような濃密な時間はかけがえないものですが、その時の想いを練習やイベントで得るべく活動しております。チャレンジとしては、アマチュアでは珍しい「古典」を中心としたプログラムやソリストを迎えての協奏曲などに挑戦しています。これからも、皆様に愛されるオーケストラを目指して活動していますのでぜひ応援、ご来場よろしく願いいたします。

プロとして活躍の OB 紹介



ホルン

吉野 元章

明治大学交響楽団第 71 代 OB。
明治大学文学部中退。東京音楽大学卒。英国王室音楽院 PGDip 修了。2005 年から 2009 年まで兵庫県立芸術文化センター管弦楽団に在籍。フリーランスとして NHK 交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団等の国内主要オーケストラに出演。その他、尾原合奏団等の明治大学 OB 楽団の客演ソリストや室内楽等で活躍。ホルンを松崎裕、大橋晃一、M・トンブソン、R・ワトキンス、A・クラークの各氏に師事。2017 年 6 月 15 日特定疾患（国指定の難病）によりご逝去。



ヴァイオリン

寺田 史人

明治大学交響楽団第 74 代 OB。
明治大学経営学部卒業後、桐朋学園大学音楽学部ディプロマコース、チェコ共和国ブラハ音楽院にて研鑽を積む。カルロヴィ・ヴァリ交響楽団第一ヴァイオリン奏者、西チェコ交響楽団コンサートマスターを経て、現在セントラル愛知交響楽団コンサートマスター。
寺田弦楽四重奏団主宰、プジャールテルカルテット、UNION 無頼派メンバー（コンサートマスター）。
名古屋芸術大学非常勤講師、金城学院大学非常勤講師、ヤマハミュージックジャパン講師、名古屋外国語大学フィルハーモニー管弦楽団音楽監督。
第 16 回ぐんま新人演奏会出演、草津夏季国際アカデミー（派遣員として）、ロシア音楽祭、アジアユースオーケストラ、パシフィックミュージックフェスティバルに参加。
ソリストとして西チェコ交響楽団とは数多くの公演で様々な協奏曲などを共演。
他にカルロヴィ・ヴァリ交響楽団、セントラル愛知交響楽団とも共演。
クナイプミュージックフェスティバル（ドイツ）に招かれて出演。
他楽団への客演や、コンクールの審査員、市民オーケストラの指導なども務める。第 12 回名古屋音楽ベンクラブ賞受賞（寺田弦楽四重奏団として）。
これまでに、寺田尹久子、小谷公子、辰巳明子、山口裕之、F・カリマン、M・ヴォルフ、J・フォルティン、J・ターリッヒ、室内楽を M・ランガー、O・バルツァー各氏に師事。



読売日本交響楽団 事業課

大久保 広晴

明治大学交響楽団第 74 代 OB（Vc パート）。
明治大学政治経済学部卒業。1999 年から 2010 年まで東京都武蔵野市の（公財）武蔵野文化事業団の公演事業課において、クラシック音楽を中心に市民バレエや伝統芸能など、多くのプロデュースを手がける。2010 年 8 月から（公財）読売日本交響楽団の事業制作部・広報担当を務め、現在は事業課長。主催する演奏会をはじめ、地方自治体などからの依頼公演の企画・制作などを行っている。神戸大学発達科学部（アートマネジメント）非常勤講師、トリトン・アーツ・ネットワーク（第一生命ホール）評価委員会メンバー、小金井市芸術文化振興計画策定委員などを務めた。



オーボエ
ラスト 恵子 (旧姓：池田)

明治大学交響楽団第 75 代 OG。
茨城県立水戸第一高等学校卒業、明治大学商学部商学科卒業 商学士号取得、東京音楽大学音楽学科器楽科オーボエ専攻卒業 音楽学士号取得、モントリオール大学音楽学部卒業 Diplôme d'études supérieures spécialisées Répertoire d'orchestre 取得、モントリオール大学院音楽学部 Musique-interprétation option voix et instruments 卒業 オーボエソロにて修士号取得。これまで東京音楽大学付属高校ティーチングアシスタント、多摩ユースオーケストラ、オーボエトレーナーなどを務める。2007 年 東京・春・音楽祭、オペラの森“タンホイザー”出演。2008 年サイトウ・キネン・オーケストラ、オーケストラプログラム A 出演。2009 年 サイトウ・キネン・オーケストラ、オーケストラプログラム B 出演。2010 年 東京・春・音楽祭、オペラの森“カルミナブラーナ”出演。オーボエを佐々木 亜京美、宮本 文昭、Lise Beauchamp の各氏に、イングリッシュホルンとオーボエダモーレを浜 道晃、和久井 仁氏に師事。バロックオーボエを Karim Nasur、渡辺 佳代子氏に師事。室内楽を故 内山 洋、霧生 吉秀、中野 真理、水野 信行、安原 理喜の各氏に師事。ピアノを、小林 キン、中村 真由美、浅野 義雄の各氏に師事。2024 年よりドイツ在住。



ヴァイオリン
兒玉 京子

明治大学交響楽団第 95 代 OG。
明治大学商学部卒業後、桐朋オーケストラ・アカデミー、兵庫芸術文化センター管弦楽団を経て 2024 年 5 月より大阪フィルハーモニー交響楽団に在籍。



ヴィオラ
横畠 俊介

明治大学交響楽団第 83 代 OB。
東京音楽大学音楽学部器楽専攻（ヴィオラ）卒業。
2019 年より THE ORCHESTRA JAPAN に在籍し、Disney on CLASSIC の日本全国ツアーに参加。
MITTENWALD レーベルよりリリースされている CD『日本のクラリネット五重奏曲 第 1 集～三木鶏郎のクラシック音楽～』『日本の女性作曲家の歩み 第 2 集～室内楽編～』『草川信 室内楽全集～特別編～』の録音に、印田千裕弦楽四重奏団のメンバーとして参加。



ピアノ
馬場 翔太郎

明治大学交響楽団第 88 代 OB。
明治大学交響楽団には 2009 年～2012 年度まで打楽器パート員として在籍。
順天堂大学医学部卒業後、武蔵野音楽大学入学。同大学音楽学部ヴィルトゥオーソ学科を首席で卒業。 同大学大学院ピアノコラボレティヴアーツコース修了。伴奏ピアニスト、オーケストラピアニストとして活動。
イルミナートフィルハーモニーオーケストラ鍵盤楽器奏者。練馬区演奏家協会会員。

COLUMN「繰り返される緊急事態宣言」 令和 5 年卒 Trp 金澤 亜衣子

98 代は、新型コロナウイルス感染症の影響が続く中で代替わりを迎えました。代替わりして初めて運営をする演奏会にあたる、2021 年 3 月のセクションコンサートをコロナ感染状況にかかわらず実施する方向で準備を進めていました。しかし、当時は明治大学が設定していた「明治大学活動制限指針レベル」が高い状態が長く続いており、課外活動が大学より認められない状況が続いていました。そのため、セクションコンサートは結果として中止となってしまいました。そんな中で、新歓活動も不安だらけでした。しかし、60 人近くの新入生（100 代）が入団し、明オケの人数も 200 人近い団員数となりました。4 月は比較的制限が緩和されていたことから、2021 年 6 月演奏会に向けて、練習を行っていましたが、ゴールデンウィーク以降に再び緊急事態宣言が発令されたことを受け、6 月演奏会の開催は難しくなりました。ですが、前年に続いての中止は避けたいという強い思いから、9 月に「6 月演奏会振替公演」という形での開催を予定していました。7 月上旬には一時的に緊急事態宣言が解除されていたものの、7 月中旬から再び発令され、宣言が 9 月中旬まで続いたため、残念ながら振替公演も中止せざるを得ない状況となりました。

また、6 月演奏会だけでなく、部内演奏会、納涼船、運動会、そして合宿といったすべての行事が中止となりました。特に、合宿に関しては、運営代として一度は実施したいと願っていたため、開催できなかったことは非常に残念でした。ここでようやく、9 月下旬に緊急事態宣言が解除されてから本格的に幹部代としての活動が始まり、第 98 回定期演奏会に向けた準備と練習を開始しました。

そして、トロンボーンコンサートは 10 月下旬に開催することが決定しており、9 月下旬から 1 ヶ月間で実施に向けて取り組みました。トランペットコンサートは 10 月上旬の開催を予定していましたが、準備期間の短さを考慮し、頑張って会場を確保した上で 11 月上旬に延期して実施しました。練習期間が短かったため、例年のトラコンと比べて完成度の面で不安な時もありましたが、無観客ではありましたが無事開催することができ、「コロナ禍のトランペットコンサート」として記憶に残る演奏会となりました。

たくさんのイベントが中止になり、明オケとしての活動が他の代と比べて叶わなかった代ではありますが、その中で第 98 回定期演奏会を無事に開催できたことは、本当に嬉しかったです。明治大学交響楽団に所属している現役学生は、ぜひ色々なイベントに積極的に参加してほしいです。

百年のあゆみ

明治大学交響楽団活動史

平成 5 年 12 月 10 日	第 70 回記念定期演奏会 (会場) Bunkamura オーチャードホール (指揮) 福田一雄 (曲目) ・サン＝サーンス作曲「死の舞踏」 ・チャイコフスキー作曲バレエ音楽「眠りの森の美女」 ・ブルックナー作曲交響曲第 4 番「ロマンティック」
6 年 6 月 5 日	6 月演奏会 (会場) 北とぴあ さくらホール (指揮) 鎌田由紀夫 (メゾ・ソプラノ) 杉山喜志子 (曲目) ・フンパーディング作曲歌劇「ヘンゼルとグレーテル」序曲 ・ビゼー作曲歌劇「カルメン」より第 1・2 組曲 ・ブラームス作曲交響曲第 1 番
6 年 12 月 26 日	第 71 回定期演奏会 (会場) 昭和女子大学人見記念講堂 (指揮) 鎌田由紀夫 (ピアノ) 東誠三 (曲目) ・モーツァルト作曲歌劇「魔笛」序曲 ・ダンディ作曲フランス山人の主題による交響曲 ・チャイコフスキー作曲交響曲第 1 番「冬の日の幻想」
7 年 7 月 2 日	明治大学記念館おわかれコンサート (会場) 明治大学記念館講堂 (指揮) 堀越隆一・杉山茂 (メゾ・ソプラノ) 西明美 (ヴァイオリン) 杉山茂 (曲目) ・スッペ作曲喜歌劇「詩人と農夫」序曲 ・ベートーヴェン作曲ヴァイオリンと管弦楽のためのロマンス ・ビゼー作曲歌劇「カルメン」より抜粋 ・ベートーヴェン作曲交響曲第 5 番「運命」
7 年 6 月 16 日	6 月演奏会 (会場) 新宿文化センター 大ホール (指揮) 小林幸人 (曲目) ・ワーグナー作曲楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より第 1 幕への前奏曲 ・シューベルト作曲交響曲第 8 番「未完成」 ・ブラームス作曲交響曲第 4 番
7 年 12 月 26 日	第 72 回定期演奏会 (会場) 昭和女子大学人見記念講堂 (指揮) 田代詞生 (曲目) ・ウェーバー作曲歌劇「魔弾の射手」序曲 ・チャイコフスキー作曲バレエ音楽「くるみ割り人形」より抜粋 ・ベルリオーズ作曲幻想交響曲
8 年 6 月 8 日	6 月演奏会 (会場) 練馬文化センター 大ホール (指揮) 新通英洋 (曲目) ・ウォルトン作曲戴冠式行進曲「宝玉と王の杖」 ・コーブランド作曲バレエ組曲「アパラチアの春」 ・チャイコフスキー作曲交響曲第 5 番
8 年 12 月 21 日	第 73 回定期演奏会 (会場) 昭和女子大学人見記念講堂 (指揮) 新通英洋 (曲目) ・バーンスタイン作曲キャンディード序曲 ・バーンスタイン作曲「ウェストサイドストーリー」より「シンフォニックダンス」 ・マーラー作曲交響曲第 5 番

平成 9 年 6 月 21 日	6 月演奏会 (会場) 練馬文化センター 大ホール (こぶしホール) (指揮) 小林幸人 (曲目) ・ ロッシーニ作曲歌劇「ウィリアム・テル」序曲 ・ メンデルスゾーン作曲劇音楽「真夏の夜の夢」より抜粋 ・ シューマン作曲交響曲第 3 番「ライン」
9 年 12 月 26 日	第 74 回定期演奏会 (会場) 昭和女子大学人見記念講堂 (指揮) 田代詞生 (曲目) ・ ブラームス作曲悲劇的序曲 ・ チャイコフスキー作曲バレエ音楽「白鳥の湖」より抜粋 ・ シュトラウス作曲交響詩「英雄の生涯」
10 年 6 月 20 日	6 月演奏会 (会場) 新宿文化センター 大ホール (指揮) 本名徹次 (曲目) ・ シュトラウス作曲喜歌劇「こうもり」序曲 ・ ビゼー作曲歌劇「カルメン」より抜粋 ・ シベリウス作曲交響曲第 1 番
10 年 12 月 12 日	第 75 回定期演奏会 (会場) 東京オペラシティ コンサートホール (指揮) 本名徹次 (曲目) ・ ワーグナー作曲歌劇「リエンツィ」序曲 ・ シュトラウス作曲交響詩「死と変容」 ・ ブルックナー作曲交響曲第 3 番「ワーグナー」
11 年 6 月 26 日	6 月演奏会 (会場) 新宿文化センター 大ホール (指揮) 河地良智 (曲目) ・ ワーグナー作曲楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より第 1 幕への前奏曲 ・ チャイコフスキー作曲バレエ組曲「眠りの森の美女」 ・ シューベルト作曲交響曲第 8 (9) 番「ザ・グレート」
11 年 12 月 19 日	第 76 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 小田野宏之 (ヴァイオリン) 三浦章宏 (曲目) ・ デュカス作曲交響詩「魔法使いの弟子」 ・ シベリウス作曲バイオリン協奏曲 ・ マーラー作曲交響曲第 1 番
12 年 6 月 24 日	6 月演奏会 (会場) 新宿文化センター 大ホール (指揮) 上野正博 (曲目) ・ ブラームス作曲大学祝典序曲 ・ グリーグ作曲「ペールギュント」第 1・2 組曲 ・ チャイコフスキー作曲交響曲第 4 番
12 年 12 月 16 日	第 77 回定期演奏会 (会場) 新宿文化センター 大ホール (指揮) 小田野宏之 (曲目) ・ モーツァルト作曲歌劇「魔笛」序曲 ・ リスト作曲交響詩「レ・プレリュード」 ・ ブルックナー作曲交響曲第 6 番
13 年 6 月 16 日	6 月演奏会 (会場) 練馬文化センター 大ホール (指揮) 上野正博 (曲目) ・ チャイコフスキー作曲スラブ行進曲 ・ チャイコフスキー作曲幻想序曲「ロメオとジュリエット」 ・ ドヴォルザーク作曲交響曲第 9 番「新世界より」

平成 13 年 12 月 16 日	第 78 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 榊原徹 (曲目) ・ ヴェルディ作曲歌劇「運命の力」序曲 ・ シュトラウス作曲喜歌劇「こうもり」より抜粋 ・ ベルリオーズ作曲幻想交響曲
14 年 6 月 1 日	6 月演奏会 (会場) ティアラこうとう 大ホール (指揮) 上野正博 (曲目) ・ シベリウス作曲交響詩「フィンランディア」 ・ ボロディン作曲歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の踊り」 ・ ブラームス作曲交響曲第 2 番
14 年 12 月 22 日	第 79 回定期演奏会 (会場) 昭和女子大学人見記念講堂 (指揮) 岡田司 (曲目) ・ スメタナ作曲連作交響詩「我が祖国」より「モルダウ」 ・ ハチャトゥリアン作曲組曲「仮面舞踏会」 ・ チャイコフスキー作曲交響曲第 5 番
15 年 6 月 14 日	6 月演奏会 (会場) 新宿文化センター 大ホール (指揮) 押川邦正 (曲目) ・ バルトーク作曲ハンガリアンスケッチ ・ プロコフィエフ作曲シンデレラ組曲第 1 番 ・ ドヴォルザーク作曲交響曲第 8 番
15 年 12 月 27 日	第 80 回記念定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 岡田司 (曲目) ・ ヴェルディ作曲歌劇「シチリア島の夕べの祈り」序曲 ・ ビゼー作曲歌劇「アルルの女」より抜粋 ・ ラフマニノフ作曲交響曲第 2 番
16 年 6 月 20 日	6 月演奏会 (会場) めぐろパーシモンホール 大ホール (指揮) 上野正博 (曲目) ・ ワーグナー作曲楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より第 1 幕への前奏曲 ・ グリーグ作曲「ペールギュント」第 1・2 組曲 ・ ドヴォルザーク作曲交響曲第 7 番
16 年 12 月 25 日	第 81 回定期演奏会 (会場) 昭和女子大学人見記念講堂 (指揮) 岡田司 (曲目) ・ ロッシーニ作曲歌劇「セヴィリヤの理髪師」序曲 ・ ムソルグスキー作曲交響詩「禿山の一夜」 ・ マーラー作曲交響曲第 1 番「巨人」
17 年 6 月 11 日	6 月演奏会 (会場) パルテノン多摩 大ホール (指揮) 上野正博 (曲目) ・ リスト作曲交響詩「前奏曲」 ・ サン＝サーンス作曲交響詩「死の舞踏」 ・ ベートーヴェン作曲交響曲第 7 番
17 年 12 月 24 日	第 82 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 小倉輝彰 (曲目) ・ ブラームス作曲大学祝典序曲 ・ デュカス作曲交響詩「魔法使いの弟子」 ・ ブルックナー作曲交響曲第 4 番「ロマンティック」

平成 18 年 6 月 24 日	6 月演奏会 (会場) 練馬文化センター 大ホール (指揮) 上野正博 (曲目) ・チャイコフスキー作曲歌劇「エフゲニー・オネーギン」よりポロネーズ ・チャイコフスキー作曲バレエ音楽「白鳥の湖」組曲より抜粋 ・チャイコフスキー作曲交響曲第 5 番
18 年 12 月 25 日	第 83 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 岡田司 (曲目) ・サン＝サーンス作曲歌劇「サムソンとデリラ」より「バッカナール」 ・ファリャ作曲バレエ音楽「三角帽子」第 2 組曲 ・ベルリオーズ作曲幻想交響曲
19 年 6 月 16 日	6 月演奏会 (会場) パルテノン多摩 大ホール (指揮) 岡田司 (曲目) ・ワーグナー作曲歌劇「リエンツィ」序曲 ・ボロディン作曲歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の踊り」 ・ドヴォルザーク作曲交響曲第 8 番
19 年 12 月 25 日	第 84 回定期演奏会 (会場) 昭和女子大学人見記念講堂 (指揮) 岡田司 (曲目) ・シャブリエ作曲狂詩曲「スペイン」 ・コダーイ作曲ハンガリー民謡「孔雀」による変奏曲 ・チャイコフスキー作曲交響曲第 6 番「悲愴」
20 年 6 月 14 日	6 月演奏会 (会場) 武蔵野市民文化会館 大ホール (指揮) 鈴木竜哉 (曲目) ・ムソルグスキー作曲交響詩「禿山の一夜」 ・チャイコフスキー作曲幻想序曲「ロメオとジュリエット」 ・シベリウス作曲交響曲第 1 番
20 年 12 月 25 日	第 85 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 手塚幸紀・榊原徹 (曲目) ・ブラームス作曲悲劇的序曲 ・コーブランド作曲バレエ組曲「ビリー・ザ・キッド」組曲 ・ブラームス作曲交響曲第 2 番
21 年 6 月 13 日	6 月演奏会 (会場) 練馬文化センター 大ホール (指揮) 宮松重紀 (曲目) ・ヴェルディ作曲歌劇「運命の力」序曲 ・チャイコフスキー作曲バレエ組曲「眠れる森の美女」 ・チャイコフスキー作曲交響曲第 4 番
21 年 12 月 25 日	第 86 回定期演奏会 (会場) 新宿文化センター 大ホール (指揮) 増田宏昭 (曲目) ・ワーグナー作曲歌劇「タンホイザー」序曲 ・ドヴォルザーク作曲交響詩「真昼の魔女」 ・ブラームス作曲交響曲第 4 番
22 年 6 月 26 日	6 月演奏会 (会場) 武蔵野市民文化会館 大ホール (指揮) 松沼俊彦 (曲目) ・ボロディン作曲歌劇「イーゴリ公」序曲 ・リムスキー＝コルサコフ作曲スペイン奇想曲 ・グラズノフ作曲交響曲第 5 番

平成 22 年 12 月 23 日	第 87 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 宮松重紀 (曲目) ・ドヴォルザーク作曲序曲「謝肉祭」 ・チャイコフスキー作曲バレエ組曲「くるみ割り人形」 ・マーラー作曲交響曲第 1 番「巨人」
23 年 6 月 25 日	6 月演奏会 (会場) 武蔵野市民文化会館 大ホール (指揮) 野津如弘 (曲目) ・チャイコフスキー作曲荘厳序曲「1812 年」 ・グリーグ作曲組曲「ペールギュント」第 1・2 組曲 ・チャイコフスキー作曲交響曲第 2 番
23 年 12 月 26 日	第 88 回定期演奏会 (会場) 練馬文化センター 大ホール (指揮) 宮松重紀 (曲目) ・デュカス作曲交響詩「魔法使いの弟子」 ・ファリャ作曲バレエ音楽「三角帽子」より抜粋 ・ショスタコーヴィチ作曲交響曲第 5 番「革命」
24 年 6 月 23 日	6 月演奏会 (会場) ティアラこうとう 大ホール (指揮) 増田宏昭 (曲目) ・ボロディン作曲歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の踊り」 ・ドリーブ作曲バレエ音楽「コッペリア」より抜粋 ・プロコフィエフ作曲交響曲第 5 番
24 年 12 月 27 日	第 89 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 大勝秀也 (曲目) ・フンパーディンク作曲歌劇「ヘンゼルとグレーテル」前奏曲 ・ハチャトゥリアン作曲バレエ音楽「スパルタクス」より抜粋 ・ベルリオーズ作曲幻想交響曲
25 年 6 月 22 日	6 月演奏会 (会場) 練馬文化センター 大ホール (指揮) 宮松重紀 (曲目) ・ムソルグスキー / 交響詩「禿山の一夜」 ・プロコフィエフ / 組曲「ロメオとジュリエット」より抜粋 ・チャイコフスキー / 交響曲第 4 番
25 年 12 月 25 日	第 90 回記念定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 山下一史 (曲目) ・ショスタコーヴィチ作曲祝典序曲 ・ビゼー作曲歌劇「カルメン」より抜粋 ・ラフマニノフ作曲交響曲第 2 番
26 年 6 月 14 日	6 月演奏会 (会場) 大田区民ホール・アプリコ 大ホール (指揮) 宮松重紀 (曲目) ・ワーグナー作曲楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より第 1 幕への前奏曲 ・チャイコフスキー作曲バレエ組曲「眠れる森の美女」 ・ベートーヴェン作曲交響曲第 5 番「運命」
26 年 12 月 20 日	第 91 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 中田延亮 (曲目) ・ブラームス作曲大学祝典序曲 ・チャイコフスキー作曲バレエ音楽「くるみ割り人形」より抜粋 ・ブルックナー作曲交響曲第 4 番「ロマンティック」

平成 27 年 6 月 20 日	6 月演奏会 (会場) 品川区立総合区民会館きゅりあん 大ホール (指揮) 宮松重紀 (曲目)・ウォルトン作曲「スピットファイア」 ・バーンスタイン作曲「ウェストサイドストーリー」より「シンフォニックダンス」 ・シベリウス作曲交響曲第 2 番
27 年 12 月 25 日	第 92 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 大勝秀也 (曲目)・ドヴォルザーク作曲序曲「謝肉祭」 ・リスト作曲交響詩「レ・プレリュード」 ・マーラー作曲交響曲第 5 番
28 年 6 月 18 日	6 月演奏会 (会場) 江戸川区総合文化センター 大ホール (指揮) 宮松重紀 (曲目)・ワーグナー作曲歌劇「リエンツィ」序曲 ・リムスキー＝コルサコフ作曲スペイン奇想曲 ・チャイコフスキー作曲交響曲第 6 番「悲愴」
28 年 12 月 26 日	第 93 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 中田延亮 (曲目)・ヴェルディ作曲歌劇「運命の力」序曲 ・チャイコフスキー作曲幻想序曲「ロメオとジュリエット」 ・シュトラウス作曲交響詩「英雄の生涯」
29 年 6 月 17 日	6 月演奏会 (会場) 江戸川区総合文化センター 大ホール (指揮) 宮松重紀 (曲目)・ベルリオーズ作曲序曲「ローマの謝肉祭」 ・エルガー作曲エニグマ変奏曲 ・プロコフィエフ作曲交響曲第 7 番「青春」
29 年 12 月 25 日	第 94 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 中田延亮 (曲目)・ブラームス作曲悲劇的序曲 ・シューマン作曲序曲「スケルツォと終曲」 ・マーラー作曲交響曲第 1 番「巨人」
30 年 6 月 16 日	6 月演奏会 (会場) 江戸川区総合文化センター 大ホール (指揮) 阿部未来 (曲目)・サン＝サーンス作曲歌劇「サムソンとデリラ」より「バッカナール」 ・チャイコフスキー作曲イタリア奇想曲 ・ドヴォルザーク作曲交響曲第 7 番
30 年 12 月 25 日	第 95 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 中田延亮 (曲目)・バーンスタイン作曲キャンディード序曲 ・シュトラウス作曲歌劇「ばらの騎士」組曲 ・ショスタコーヴィチ作曲響曲第 5 番「革命」
令和元年 6 月 15 日	6 月演奏会 (会場) サンパール荒川 大ホール (指揮) 阿部未来 (曲目)・シュトラウス作曲喜歌劇「こうもり」序曲 ・ドヴォルザーク作曲交響詩「野鳩」 ・ブラームス作曲交響曲第 2 番

令和元年 12 月 24 日	第 96 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 中田延亮 (曲目)・グラズノフ作曲祝典序曲 ・チャイコフスキー作曲荘厳序曲「1812 年」 ・ラフマニノフ作曲交響曲第 2 番
	6 月演奏会 ※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、中止となりました。
2 年 12 月 25 日	第 97 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 和田一樹 (曲目)・グリエール作曲バレエ組曲「青銅の騎士」より ・芥川也寸志作曲弦楽のための三楽章 ・大橋晃作曲 Oh-o!Meiji ～明オケ金打のためのラプソディー～ ・ドヴォルザーク作曲交響曲第 8 番
	6 月演奏会 ※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、中止となりました。
3 年 12 月 24 日	第 98 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 和田一樹 (曲目)・チャイコフスキー作曲スラヴ行進曲 ・チャイコフスキー作曲バレエ組曲「眠れる森の美女」 ・チャイコフスキー作曲交響曲第 5 番
4 年 6 月 18 日	6 月演奏会 (会場) サンパール荒川 大ホール (指揮) 阿部未来 (曲目)・シベリウス作曲交響詩「フィンランディア」 ・チャイコフスキー作曲幻想序曲「ロメオとジュリエット」 ・ブラームス作曲交響曲第 1 番
4 年 12 月 28 日	第 99 回定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 和田一樹 (曲目)・スッペ作曲喜歌劇「軽騎兵」序曲 ・ボロディン作曲歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の踊り」 ・マーラー作曲交響曲第 1 番「巨人」
5 年 6 月 24 日	6 月演奏会 (会場) 江戸川区総合文化センター 大ホール (指揮) 松川智哉 (曲目)・ヴェルディ作曲歌劇「運命の力」序曲 ・ムソルグスキー作曲交響詩「はげ山の一夜」 ・チャイコフスキー作曲交響曲第 4 番
5 年 12 月 28 日	第 100 回記念定期演奏会 (会場) すみだトリフォニーホール 大ホール (指揮) 中田延亮 (曲目)・ショスタコーヴィチ作曲祝典序曲 ・チャイコフスキー作曲バレエ組曲「白鳥の湖」より抜粋 ・ラフマニノフ作曲交響曲第 2 番

令和 6 年 1 月 21 日 全明治大学交響楽団 100 周年祝賀演奏会
(会場) 明治大学アカデミーホール
(指揮) 杉山茂
(曲目) ・ワーグナー作曲楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より第 1 幕への前奏曲
・チャイコフスキー作曲スラヴ行進曲
・シベリウス作曲交響詩「フィンランディア」
・ベートーヴェン作曲交響曲第 5 番「運命」
・明治大学校歌
・シュトラウス作曲ラデツキー行進曲

6 年 8 月 17 日 創立 100 周年記念演奏会
(会場) ミューザ川崎 シンフォニーホール
(指揮) ジャン＝フランソワ・ヴェルディエ
(ピアノ) 黒木雪音
(曲目) ・シュトラウス作曲交響詩「ドン・ファン」
・ガーシュウィン作曲ラプソディー・イン・ブルー
・ドビュッシー作曲「海」管弦楽のための 3 つの交響的素描
・ストラヴィンスキー作曲組曲「火の鳥」(1919 年版)
・ラヴェル作曲ボレロ

〔備 考〕 下記の活動については省略しました。
* 明治大学入学式典、卒業式典、その他大学式典関係への列席
* 明治大学各学園祭への参加
* 各セクション・パートによる演奏会等
* 東京六大学オーケストラ連盟合同演奏会への参加
* 合宿や各種レクリエーション

【お願い】 不備などありましたら、下記のアドレスへご連絡ください。
meioke.100th.commemorative@gmail.com (編纂委員会)

COLUMN「100 周年で第 100 回定期演奏会の謎」平成 11 年卒 Hr 遠藤 智史

そういえばふと気がついたのですが、明オケは 100 周年でちょうど第 100 回定期演奏会でしたが、戦争などで毎年定期演奏会ができたわけではないでしょうし、そんな綺麗に行くことあるのかなと思って家にある明治大学交響楽団 70 年史を調べてみました（箱根駅伝は 2023 年に 99 回大会だけど 100 周年は超えていた、というところからの気付き）。

戦中は昭和 18 年まで定期演奏会をやっていて、19 年と 20 年は記録なし、戦後は 21 年から再開したが 24 年と 25 年は定期演奏会は記録なしで、やはり中断の期間がありました。創立の大正期も第 1 回定期演奏会実施直後に関東大震災があり、大正 13 年は定期演奏会が開催できておりません。また昭和の戦前は年に 2 回開催という年もありました。昭和 26 年以降は今と同じく年 1 回の演奏会となって、結果として 100 周年に第 100 回定期演奏会という奇跡的に綺麗に並んだ数字になったようです。

昭和 18 年は 11 月に学徒出陣があり、そこでも明オケは行進曲を演奏していたという記録が 70 年史にもありますが、その 2 ヶ月前に戦中最後の定期演奏会を開催。どのような気持ちで演奏したのか、想像するだけでも当時の先輩方のご苦労が偲ばれます。

なお昭和 24 年と 25 年について、なぜ定期演奏会が開催されなかったのかはやはり 70 年史にそれらしい記載がありました。昭和 22 年ごろからタンゴバンドが人気になり、交響楽団内にタンゴバンドを編成したところこれの出演依頼が相次ぎクラシック派と軽音派の対立があったこと、昭和 23 年の定期演奏会が大赤字でしばらく定期演奏会ができなかったこと、さらに Wikipedia にも昭和 24 年に明治大学交響楽団内に後にグリークラブとなる混声合唱団（交響楽団合唱部）が設立され 26 年に合唱団として独立という記載があり、この頃はタンゴバンドと同じく、組織を刷新していく中でなんらかの混乱が生じていたこと、などがあり定期演奏会という形では演奏会が開催できなかったのではないかと推察しました。

コロナ禍の時には、昭和 25 年以来に定期演奏会が開催できない危機に見舞われましたが（実際に 6 月演奏会は開催できなかった）、当時の学生たちの強い意志によってなんとか定期演奏会を開催して 100 回まで繋げてくれました。こちらも称賛に値することですので後世にも伝えていきたいと思います。

よもやま話「臼木麻弥先生との思い出」

明治大学交響楽団は、多くのトレーナーの先生方にお世話になっております。私はヴィオラパートリーダー、弦楽セクションリーダーの役職を持ち、その立場からヴィオラの臼木麻弥先生には、人一倍お世話になりました。100 年史の発行にあたり、感謝の気持ちとともに、思い出を書き残しておきたいと思いました。

明オケに限らず、学生オーケストラにおいては、時に学生が主体性を失い、トレーナーに依存的になってしまうことがあると聞きます。また、厳しすぎる指導に対して学生が怖がって離れてしまう場合もあるようです。しかし明オケと臼木先生との関係は、適切な距離感が保たれていたように感じます。例えば、演奏会の選曲について候補曲を持っていくと、決して否定や押しつけはせず、実現可能性についてアドバイスを下さいました。学生のレベルを見て実現が難しそうなプログラムに対しては「やっても良いけど弾けないよ」などと、やんわりと判断を下していました。私の記憶では、マーラーの「交響曲第 5 番」や R. シュトラウスの「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯」などが候補からカットされたように思います。その結果、私の代の 6 月演奏会はプロコフィエフの「交響曲第 5 番」が、第 89 回定期演奏会はベルリオーズの「幻想交響曲」が選ばれました。

臼木先生のご指導は、緻密で論理的です。音程、左手の技術、右手の技術、他パートとのアンサンブルに至るまで、鋭い観察眼で明確に分析し、指導してくださいます。しかし、単に理屈だけでは終わらず、「この音に心を込めて」「この音で景色を眺めましょう」「この音で音楽に幕を下ろしましょう」「曲の中で一番納得した音色で」といった詩的な語彙も交えながら、音楽のイメージを膨らませてくださいました。先生のレッスンを受けた後には、技術と心が一致した演奏ができるような気がしました。

臼木先生は演奏技術だけでなく、楽器そのものの理解や造詣も非常に深く、明オケの学生に対して良い楽器を数多く紹介してくださいました。先生は「お願いだから自分一人で買ってこないで。絶対に悪いようにはしないから、私に相談して欲しい。」とおっしゃり、学生が楽器の購入を検討する際に、手助けをしてくださいました。その背景には「知識や経験の少ない学生が一人で楽器店に行くと、高額な割に品質に見合わない楽器を売りつけられてしまうことがある。つまり“カモ”にされてしまう可能性がある。」と率直に語っていました。私自身も先生のご紹介で、素晴らしい製作者の楽器に出会うことができました。

思い出は音楽の場面にとどまりません。合宿では、ある晴れた朝に先生の部屋に紅茶を持参すると、扉の向こうからホフマイスターのヴィオラ協奏曲が聞こえてきて、さわやかな天気に応ずるかのような演奏に、私は扉をノックせずしばらく聴き入っていたことがあります。また、宴会が大変盛り上がった翌朝には、二日酔いで少々辛そうな先生の姿を拝見したこともあり、親しみを感じました。学生が大騒ぎする宴会にも熱心にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。ヴィオラパートのメンバーでディズニーランドに出かけたこともあります。その中で、臼木先生が誰よりも楽しんでいた姿が印象的でした。先生はくまのプーさんが大好きで、ご自宅のレッスン室にはぬいぐるみがたくさん飾られているのです。

臼木先生には、「明オケで、音楽の楽しさと達成感を知って欲しい」という理念があるのではないかと思います。どんなに拙い演奏を持って行っても、どこか良い部分を見つけて褒めてくださり、それでいて重要なポイントは妥協せずに根気よく指導して下さったためです。しかしアマチュアに対して温かく、優しい指導をなさる一方で、「プロを目指す生徒には優しくしても仕方ない」とご自身で語っていました。明オケの学生は、先生の優しいながらも本格的な指導を享受し、音楽を人生の糧とすることができたのではないかと思います。

現在も臼木先生は東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の首席奏者として、精力的に活動されています。一生徒として、健康を第一に、これからも元気に活動を続けていただきたいと、心から願っております。ちなみに、私にワインの美味しさを教えてくださったのも臼木先生でした。特に白ワインの辛口がお好きで、合宿には白ワインが必携でした。先生のご自宅にヴィオラパート皆で伺って、旦那様である林智之先生（元 NHK 交響楽団）の手料理をご馳走になったことも、大切な思い出です。

石畑 綜一（Va 平成 26 年卒）

記録／資料

歴代理事長／総長／学長／部長

周 年	年 度	理 事 長	総 長	学 長	部 長
70	H5	岡 村 了 一	宮 崎 繁 樹	岡野 加穂留	上 田 泰
71	H6	岡 村 了 一	宮 崎 繁 樹	岡野 加穂留	上 田 泰
72	H7	岡 村 了 一	宮 崎 繁 樹	岡野 加穂留	上 田 泰
73	H8	岡 村 了 一	栗 田 健	戸 沢 充 則	上 田 泰
74	H9	岡 村 了 一	栗 田 健	戸 沢 充 則	向 殿 政 男
75	H10	岡 村 了 一	栗 田 健	戸 沢 充 則	向 殿 政 男
76	H11	岡 村 了 一	栗 田 健	戸 沢 充 則	向 殿 政 男
77	H12	岡 村 了 一	栗 田 健	山 田 雄 一	向 殿 政 男
78	H13	岡 村 了 一	栗 田 健	山 田 雄 一	向 殿 政 男
79	H14	岡 村 了 一	栗 田 健	山 田 雄 一	向 殿 政 男
80	H15	岡 村 了 一	栗 田 健	山 田 雄 一	向 殿 政 男
81	H16	長 吉 泉	納 谷 廣 美	納 谷 廣 美	向 殿 政 男
82	H17	長 吉 泉		納 谷 廣 美	向 殿 政 男
83	H18	長 吉 泉		納 谷 廣 美	向 殿 政 男
84	H19	長 吉 泉		納 谷 廣 美	向 殿 政 男
85	H20	長 堀 守 弘		納 谷 廣 美	向 殿 政 男
86	H21	長 堀 守 弘		納 谷 廣 美	向 殿 政 男
87	H22	長 堀 守 弘		納 谷 廣 美	向 殿 政 男
88	H23	長 堀 守 弘		納 谷 廣 美	向 殿 政 男
89	H24	日 高 憲 三		福 宮 賢 一	向 殿 政 男
90	H25	日 高 憲 三		福 宮 賢 一	鈴 木 賢 志
91	H26	日 高 憲 三		福 宮 賢 一	鈴 木 賢 志
92	H27	日 高 憲 三		福 宮 賢 一	鈴 木 賢 志
93	H28	柳 谷 孝		土屋 恵一郎	鈴 木 賢 志
94	H29	柳 谷 孝		土屋 恵一郎	鈴 木 賢 志
95	H30	柳 谷 孝		土屋 恵一郎	鈴 木 賢 志
96	H31/R1	柳 谷 孝		土屋 恵一郎	鈴 木 賢 志
97	R2	柳 谷 孝		大六野 耕作	鈴 木 賢 志
98	R3	柳 谷 孝		大六野 耕作	鈴 木 賢 志
99	R4	柳 谷 孝		大六野 耕作	鈴 木 賢 志
100	R5	柳 谷 孝		大六野 耕作	鈴 木 賢 志

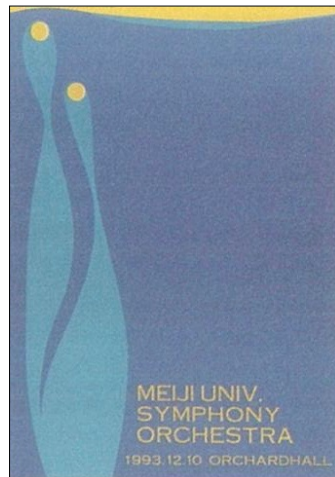
歴代幹事長／コンサートマスター

周 年	年 度	幹 事 長	コ ン サ ー ト マ ス タ ー
70	H5	長 嶺 賢 自	水 野 敏 行
71	H6	内 木 英 史	稲 沢 卓
72	H7	白 木 信 一 郎	三 上 泰 史
73	H8	野 上 真 史	大 塚 優
74	H9	遠 藤 智 史	寺 田 史 人
75	H10	新 堂 浩 一 郎	野 田 有 里
76	H11	海 野 亘	根 上 竜 也
77	H12	児 玉 恵 純	李 雅 善
78	H13	坂 口 良 介	吉 田 奈 穂
79	H14	関 口 陽 介	藤 井 信 也
80	H15	倉 吉 俊 一 郎	中 田 和 徳
81	H16	西 村 謙 一	久 保 あ き つ
82	H17	大 野 皓 市	内 田 友 視
83	H18	国 府 享	小 嶋 智 仁
84	H19	内 野 幸 宏	久 篠 孝 介
85	H20	桑 村 学 拓	鈴 木 貴 穂
86	H21	金 井 桂 祐	両 角 遼
87	H22	山 本 宜 弘	日 比 野 由 希
88	H23	堀 創 介	土 屋 裕 大
89	H24	大 竹 諒	石 井 駿 児
90	H25	峰 岸 孝 紘	永 沼 裕 崇
91	H26	櫻 井 友 也	萱 野 由 梨
92	H27	高 橋 遼	庭 屋 太 輔
93	H28	小 松 崎 陸	森 田 俊 一
94	H29	前 川 倫 輝	細 川 裕 輝
95	H30	内 山 漱 一 郎	兒 玉 京 子
96	H31/R1	奥 山 浩 基	高 橋 拓 羽
97	R2	山 田 亮 介	平 井 菜 々 子
98	R3	伊 藤 美 月	茂 木 勇 弥 村 下 琴 音
99	R4	山 路 武 瑠	吉 田 樹
100	R5	潮 田 駿	安 達 由 愛 生

定期演奏会記録

回 数	公 演 日	会 場	指 揮
70	平成5年12月10日	オーチャードホール	福 田 一 雄
71	12月26日	人見記念講堂	鎌 田 由 紀 夫
72	12月26日	人見記念講堂	田 代 詞 生
73	12月21日	人見記念講堂	新 通 英 洋
74	12月26日	人見記念講堂	田 代 詞 生
75	12月12日	東京オペラシティ	本 名 徹 次
76	12月19日	すみだトリフォニーホール	小 田 野 宏 之
77	12月16日	新宿文化センター	小 田 野 宏 之
78	12月16日	すみだトリフォニーホール	榊 原 徹
79	12月22日	人見記念講堂	岡 田 司
80	12月27日	すみだトリフォニーホール	岡 田 司
81	12月25日	人見記念講堂	岡 田 司
82	12月24日	すみだトリフォニーホール	小 倉 輝 彰
83	12月25日	すみだトリフォニーホール	岡 田 司
84	12月25日	人見記念講堂	岡 田 司
85	12月25日	すみだトリフォニーホール	岡 田 司
86	12月25日	新宿文化センター	増 田 宏 昭
87	12月23日	すみだトリフォニーホール	宮 松 重 紀
88	12月26日	練馬文化センター	宮 松 重 紀
89	12月27日	すみだトリフォニーホール	大 勝 秀 也
90	12月25日	すみだトリフォニーホール	山 下 一 史
91	12月20日	すみだトリフォニーホール	中 田 延 亮
92	12月25日	すみだトリフォニーホール	大 勝 秀 也
93	12月26日	すみだトリフォニーホール	中 田 延 亮
94	12月25日	すみだトリフォニーホール	中 田 延 亮
95	12月25日	すみだトリフォニーホール	中 田 延 亮
96	令和元年12月24日	すみだトリフォニーホール	中 田 延 亮
97	12月25日	すみだトリフォニーホール	和 田 一 樹
98	12月24日	すみだトリフォニーホール	和 田 一 樹
99	12月28日	すみだトリフォニーホール	和 田 一 樹
100	12月28日	すみだトリフォニーホール	中 田 延 亮

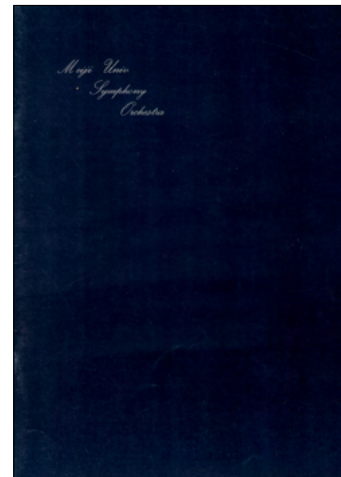
プログラムに見る百周年



H5；第70回記念定期演奏会



H6；第71回定期演奏会



H7；第72回定期演奏会



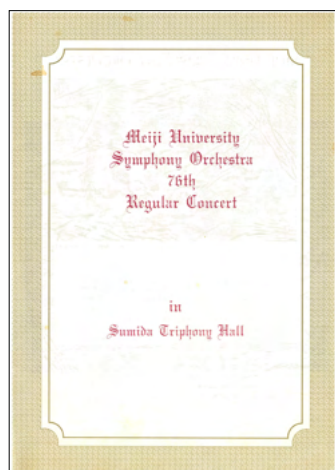
H8；第73回定期演奏会



H9；第74回定期演奏会



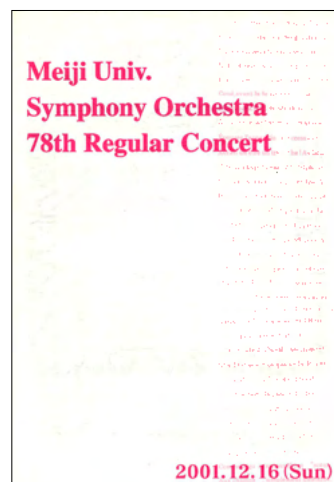
H10；第75回定期演奏会



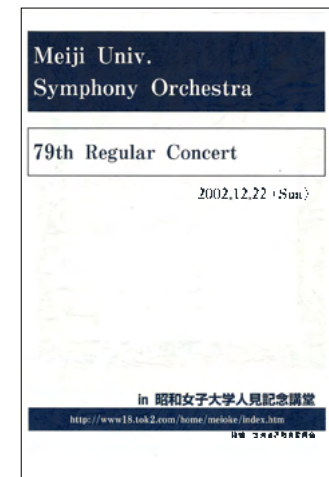
H11；第76回定期演奏会



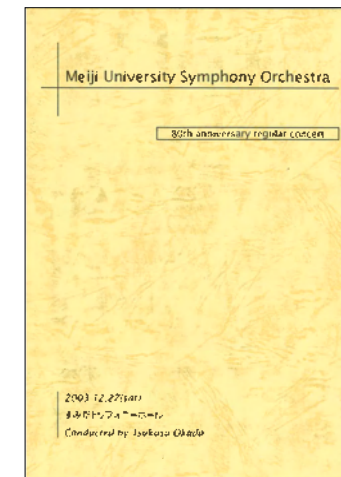
H12；第77回定期演奏会



H13；第78回定期演奏会



H14；第79回定期演奏会



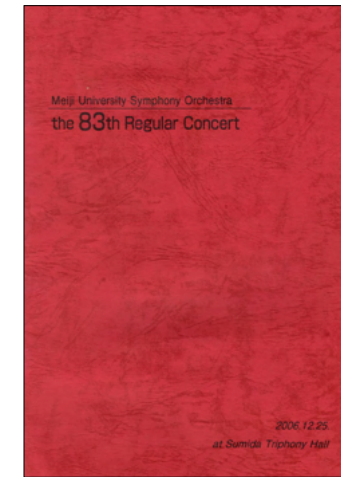
H15；第80回記念定期演奏会



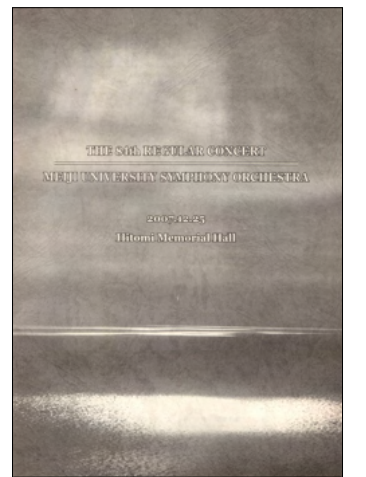
H16；第81回定期演奏会



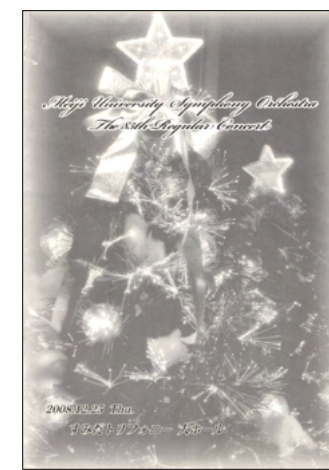
H17；第82回定期演奏会



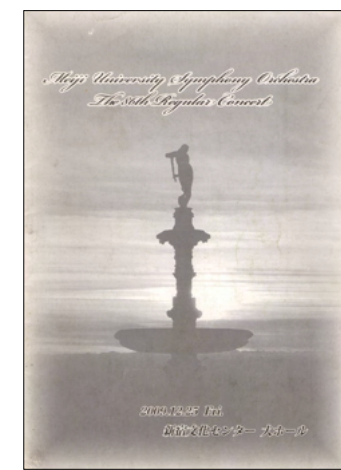
H18；第83回定期演奏会



H19；第84回定期演奏会



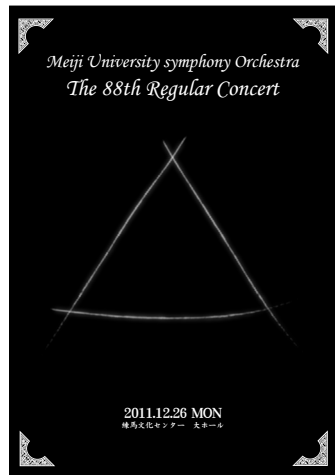
H20；第85回定期演奏会



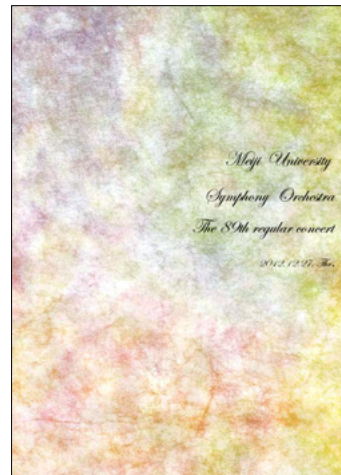
H21；第86回定期演奏会



H22；第87回定期演奏会



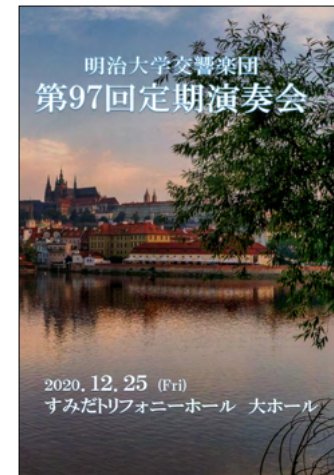
H23；第 88 回定期演奏会



H24；第 89 回定期演奏会



H25；第 90 回記念定期演奏会



R2；第 97 回定期演奏会



R3；第 98 回定期演奏会



R4；第 99 回定期演奏会



H26；第 91 回定期演奏会



H27；第 92 回定期演奏会



H28；第 93 回定期演奏会



R5；第 100 回記念定期演奏会



R6；全明大 100 周年祝賀演奏会



R6；創立 100 周年記念演奏会



H29；第 94 回定期演奏会



H30；第 95 回定期演奏会



R1；第 96 回定期演奏会

演奏旅行記

1997年度 福島演奏旅行



▲浄土平（吾妻小富士）にて

学生100人がクラシックを熱演
 明大交響楽団が公演
 明治大学交響楽団の福島公演は二十三日、福島市の市音楽堂で開かれた。写真Ⅱ。

福島民報社などの後援。同楽団は二年に一度、演奏旅行を実施し、全国を回っている。本県での演奏会は三十年ぶり。福島公演に先立ち、二十一日にはいわき市でも公演した。

本県出身者を含む約百人の学生がシューマンの「交響曲第三番ライン」ほか、ロッシニの歌劇「ウィリアム・テル」序曲などを演奏した。



◀福島民報（福島民報社）
 1997年8月27日（水）より

幹事長 遠藤 智史

明治大学交響楽団は大正12年に創部し、昭和7年の信州演奏旅行より、近年ではおよそ2年に1度の演奏旅行を行っており、これまで九州から北海道まで日本全国を回ってきた。その目的は、当団は年2回演奏会を行っているがいずれも会場が東京のため、より多くの人たちに我々の活動を知ってもらいたいということだ。今年は8月21日から24日まで福島県で演奏旅行を行い、21日にいわき市市民会館、23日に福島市音楽堂でシューマン作曲交響曲第3番などを演奏した。

私達の学年が3年生になる年が前回の演奏旅行から2年目にあたっていたが、自主公演ということもあり経済的負担が大きくなっていたので、演奏旅行自体できるかどうか不安視されていた。それでも1年生の夏に参加した長野・富山演奏旅行がとても思い出深いものだったので、実現できるよう早くから準備をはじめた。準備をするにあたり、演奏旅行をより充実させるために私の中でいくつか目標をたてた。それは次の3つだった。

- ①たくさんの人に聴いてもらいたい。
 - ②演奏会だけでなく、移動中の観光も同じくらい楽しいものにしたい。
 - ③金銭面での負担を軽くしたい。
- このように目標をたてたのはそれぞれ理由がある。①については、地盤のない地方公演ではなかなかお客

様に聴きにきてもらえない実情があるが、東京以外の地方の人にも私達の活動を知ってもらいたいと思った。②については、せっかく地方に行くのだから、演奏会だけでなくその土地でしかつくれない思い出を皆につくってもらいたかった。③については、自主公演なので参加費用がかかるので、前売りチケットなどで収入を増やせば皆参加しやすいだろうと思ったからだ。

演奏旅行を実現しこれらの目標を達成するには、明治大学校友会の力を借りることが必要不可欠だと私は思った。私達の学年にはいわき市出身（鍛冶）と福島市出身（遠藤隆之・菅野・山岸）の者がいて、しかも校友会に知り合いがいるというので、校友会の協力を得やすいだろうと思い福島県で演奏旅行を行うことにした。実際、校友会にはチケットの前売りや宣伝活動の面でとてもよく協力して頂いた。こうして様々な準備をし、遂に当日を迎えた。

初日のいわき市では前売り券が500枚ほど売れ、さらに当日券もかなり売れて、全部で700人ほど聴きにきてくれた。どのくらいお客様が入るかとても心配だったが、とりあえずいわき市は会場の60%以上入ったので安心した。新聞社に行ったり学校をまわったりしたかがあったと思い本当にうれしかった。団員も6月演奏会と同じプログラムではあったが、初めての土地でいつもの緊張感を保ちながら演奏できたのではないだろうか。2日目は移動日で観光をしながら宿泊地の飯坂温泉へ行くのだが、目標のとおりこれにはとても力を入れた。コース選びは福島県出身者によく話を聞いて慎重に行い、晴れたときと雨のときではコースを変えることにした。下見もしっかりやり、皆が楽しめるようなコースを選んだ。当日はととても良い天気になり、文句なく晴れコースになった。それぞれの観光地で地ビールを飲んだりボートに乗ったり博物館に入ってみたり山歩きをしたりと皆とても楽しそうに観光していた。ただ少し強行軍だったのか前日飲みすぎのせいか、バスの中では寝ている人が多かったのが残念だ。というのも磐梯レクラインや磐梯吾妻スカイラインの車窓の風景はとても良いものだったからだ。それでも普段の活動では絶対にできない体験ができ、やって良かったなあとと思った。飯坂温泉では外湯めぐりをした。鯖湖湯（飯坂で一番大きい外湯）以外の温泉は私が今まで入った温泉の中で一番熱かった。楽しかった一日がようやく終わった。3日目の福島市でも前売り券当日券ともによく売れて650人ほど聴きにきてくれた。ここもいわき市と同じようにたくさんお客様が入ってくれてよかった。演奏も最終公演ということもあり熱が入っていて、アンコールでは手拍子が出るほどだった。宿に帰りレセプション（打ち上げ）をやった。あまり大騒ぎをしすぎて近所から苦情が出たり置き物を割ってしまったが、宿の方が対処して下さったのでとても楽しい夜を過ごすことができた。私は準備で忙しかったこの一年間を思い出し、今こうして無事に日程を終えることができて感無量というかやってよかったなあと本当に充実した気持ちで一杯だった。

はじめにも書いたように今年は演奏旅行ができるかどうかわからなかった。それでも私は演奏旅行をどうしても何があってもやりたかった。それはなぜか。私は2年前の演奏旅行に参加できたが、各パートの都合で参加できなかった同輩がたくさんいたからだ。彼らに演奏旅行の楽しさを実際に知って欲しかった。それと、先輩方が長年引きついできたこの行事を私達の代で止めたくなかったのだ。演奏旅行に参加した後輩達がまた何年か後にやるという良いサイクルができていたので、これを切りたくなかったのだ。実際に今の1年生達は2年後の演奏旅行に向けてすでに動き始めているようだ。こうしてこれからもずっとこの行事を続けていってほしいと思う。

最後に御礼を。本当は一人一人のお名前を書きたいところですが、そうすると何ページあっても足りなくなる位多くの人にお世話になりました。

皆様のご協力があったからこそこんなに楽しかった演奏旅行になりました。本当にありがとうございました。

演奏旅行旅程表

8月21日	明治大学記念館—いわき駅前—いわき市平市民会館（いわき公演）—スターホテル郡山宿泊
8月22日	スターホテル郡山— ・晴れるとき —猪苗代湖（野口英世記念館 猪苗代地ビール館 世界のガラス館etc）—五色沼—浄土平（吾妻小富士） ホテル芙蓉荘宿泊（飯坂温泉） ・雨のとき —あぶくま洞—猪苗代湖—ホテル芙蓉荘宿泊
8月23日	ホテル芙蓉荘—福島駅前—福島市音楽堂（福島公演）—ホテル芙蓉荘（レセプション）宿泊
8月24日	ホテル芙蓉荘—明治大学記念館

※第74回定期演奏会パンフレット内の記事より抜粋。

作曲家／演奏曲分析

明治大学交響楽団 100 周年にあたり、これまでの定期演奏会のデータを集計・分析することにより“明オケの傾向”を考察してみました。

※なお、過去の演奏会記録でも例えばシューベルト作曲交響曲 8 番「未完成」・ベートーヴェン作曲交響曲第 5 番「運命」・他、のように他とされてしまった曲もあるため、厳密には全ての曲を対象にできているわけではないこと、現在のように 6 月演奏会が準定期演奏会のように開催されるようになったのは昭和 47 年以降のため定期演奏会以外の演奏会は集計に入れてないこと、についてはご了承ください。

作曲家

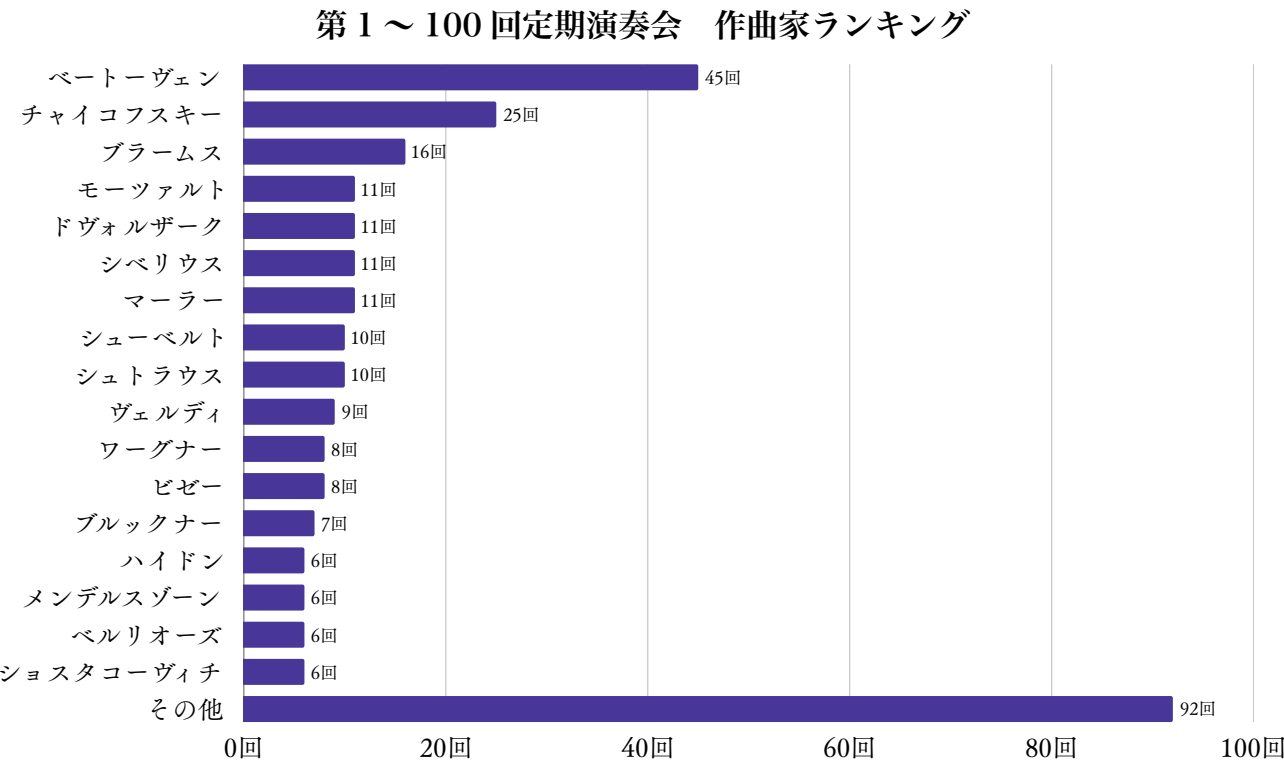
明治大学交響楽団はこれまで 100 回の定期演奏会で数多くの曲を演奏してまいりました。ではどの作曲家の曲を取り上げているのか、の上位をあげてみました。

1 位はやはりベートーヴェンで 45 曲。交響曲は 2 番と 4 番以外の曲は全て実績がありました。それ以外にもエグモント序曲が 9 回、ピアノ協奏曲第 5 番が 4 回など、数多く取り上げられていました。

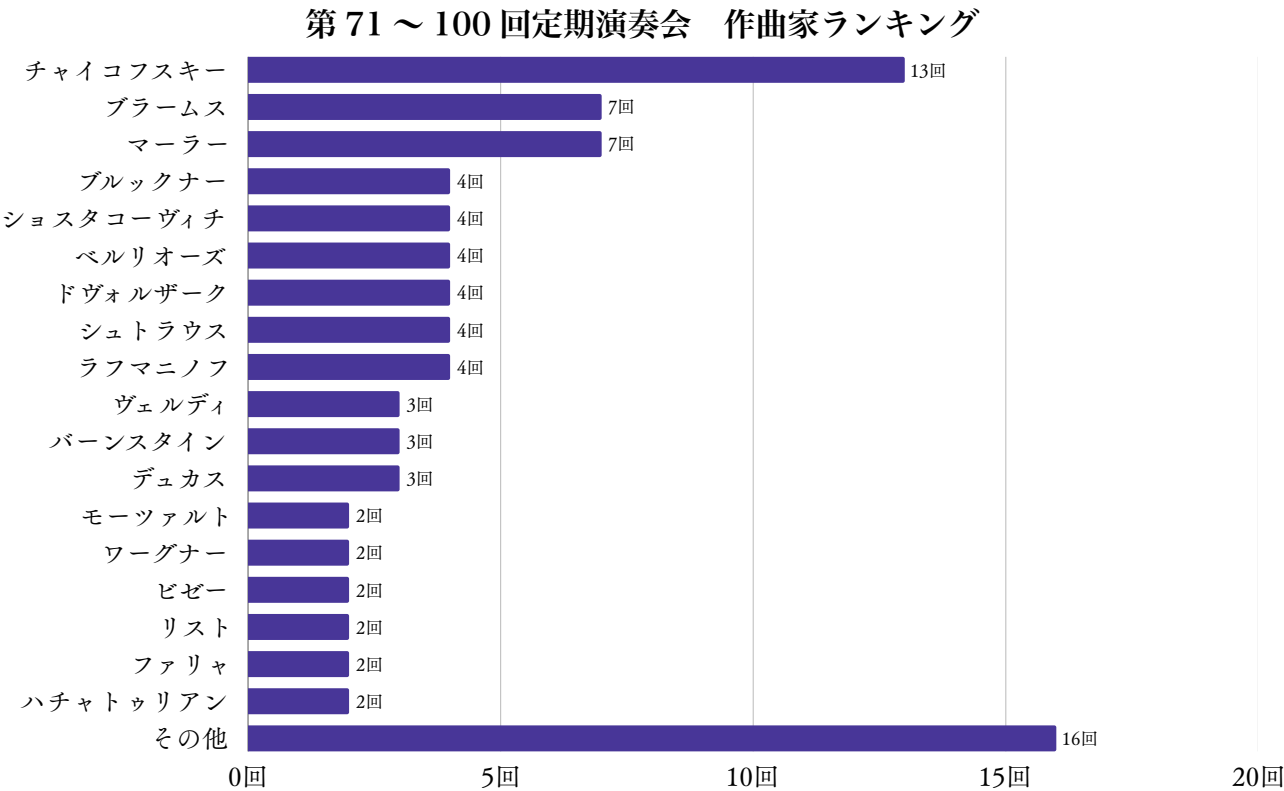
2 位はチャイコフスキーで 25 曲。交響曲 5 番が 5 回、6 番 4 回、1 番 1 回で、まだ 2 番、3 番、4 番は定期では取り上げていませんでした（6 月演では 2 番 4 番は実績あり）。それ以外もバレエ音楽くるみ割り人形 3 回、バレエ音楽白鳥の湖 3 回、スラブ行進曲 3 回、などこちらも数々の曲を取り上げられていました。

3 位はブラームスで 16 曲。交響曲は全て実績ありで 4 番 4 回、2 番 3 回、1 番と 3 番 1 回でした。それ以外も悲劇的序曲 5 回、大学祝典序曲 2 回、となっています。

4 位以降はグラフのとおりですが、やはり著名な作曲家ばかりですね。

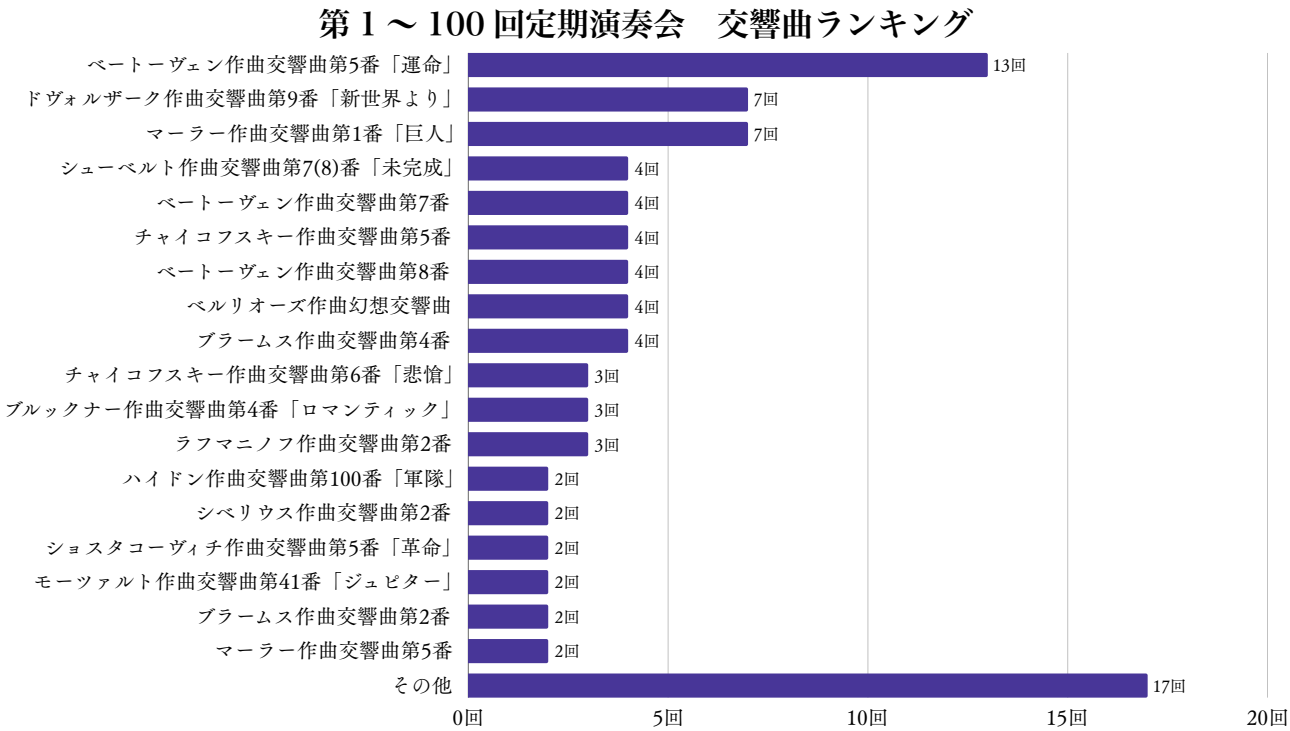


さて、これまで定期演奏会 100 回分のデータを見てまいりましたが、今度はこの 30 年の傾向について見ていきたいと思います。まずここで大きな驚きとともに気が付くことが、ベートーヴェンがいない、ということ。1 回実績のその他にも入っておりません。この 30 年明オケは定期演奏会でベートーヴェンを取り上げていないということになります（6 月演では実績あり）。明オケが定期演奏会で最後にベートーヴェンを取り上げたのは昭和 62 年第 64 回の第九までさかのぼる必要があります。それ以外にも J. シュトラウス二世やハイドンも消え、モーツァルトも激減、代わりに R. シュトラウスやバーンスタイン、デュカスなど 19 世紀後半から 20 世紀の作曲家を取り上げることが増え、18 世紀の作曲家が少なくなっているという傾向が見られます。団員の増加により大曲を選ぶ必要性が高まり、トロンボーンやチューバのない曲を選びにくい、ということかと考察します。チャイコフスキーやブラームス（の序曲）、マーラーはそれらをバランスよく兼ね備えていることから選ばれやすいのだろうと推察されます。4 位タイのブルックナー、ショスタコーヴィチ、ベルリオーズ、ドヴォルザーク、R. シュトラウス、ラフマニノフも同じような傾向が伺えます。

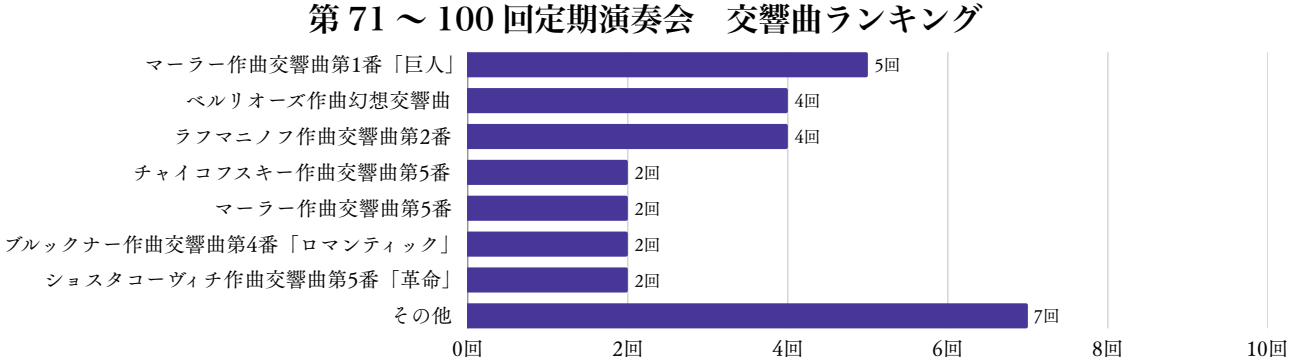


交響曲

次に定期演奏会でよく取り上げられている交響曲、いわゆるメイン曲になりますが、こちらも分析していきます。100年の歴史の中ではベートーヴェン作曲交響曲第5番「運命」が第1位となりました。やはりという感じがしますが、昭和3年第5回定期で初めて演奏され、昭和42年第44回で8回目に取り上げられて以降は長く定期では演奏されていません（6月演では実績あり）。第2位はドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」とマーラー作曲交響曲第1番「巨人」になりました。「新世界より」は昭和9年第12回が初回で、昭和43年第45回が7回目でその後長く取り上げられていないようです（こちらも6月演では実績あり）。一方「巨人」は昭和58年第60回が初回で、第99回が7回目となり、特に近年よく取り上げられる傾向にあります。以降名曲が並んでいます、7位タイのベートーヴェン作曲交響曲第8番や、13位タイのハイドン作曲交響曲第100番「軍隊」など、一般の演奏会でもそれほど取り上げられない曲がランキング上位に入っているのが興味深いです。



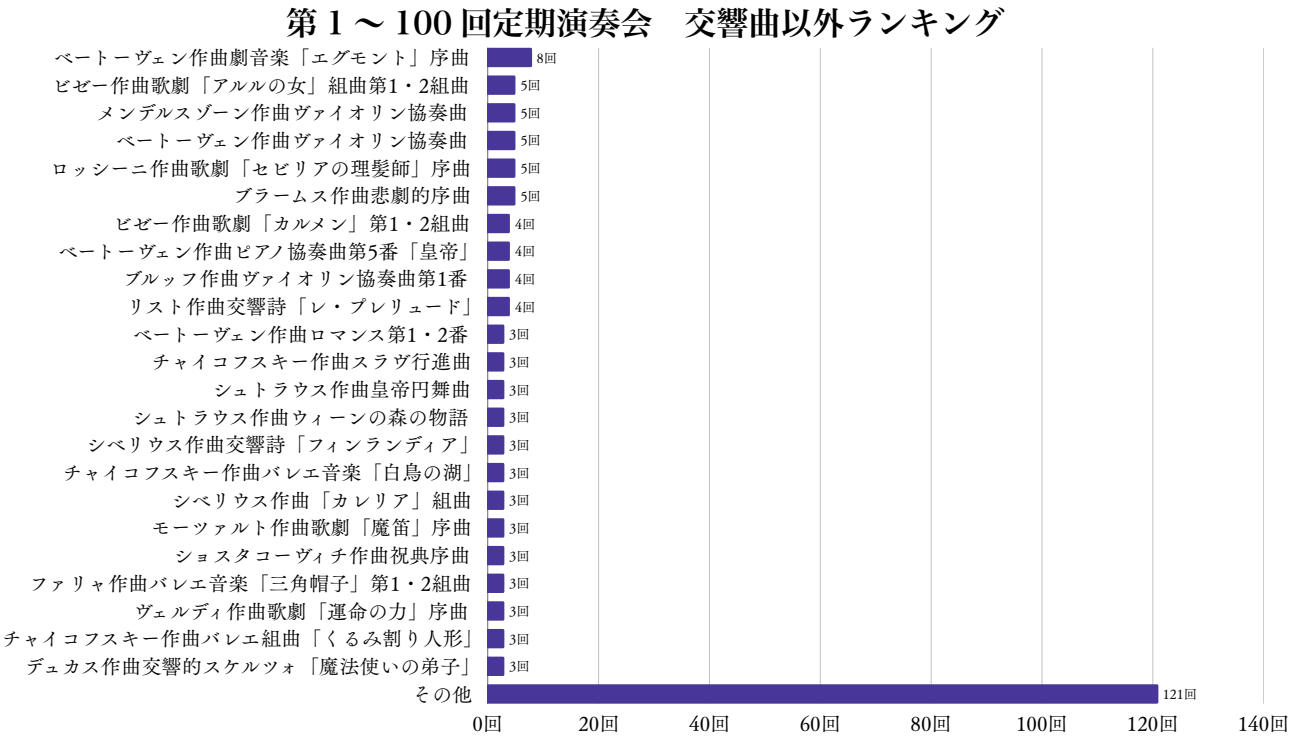
さて、ではこの30年ではどうなのかを同じく見ていきます。第1位はマーラー1番「巨人」。先ほどの100年のランキングでも2位でしたが、この30年で5回も演奏しているということで最近の明オケに大人気ですね。2位タイはベルリオーズ幻想交響曲とラフマニノフ2番となりました。この2曲はどちらもこの30年で初めて選ばれた曲になります。幻想は平成7年第72回が初回で平成24年第89回が4回目、ラフ2は平成15年第80回が初回で令和5年第100回が4回目でした。以降チャイ5・マラ5・ブル4・タコ5が4位タイとなりますが、この30年で複数回演奏されている曲が約77%となり、この30年は数年前に演奏された曲が再び演奏される傾向が強いです。さて1回だけ演奏されてその後取り上げられてない曲がその他に入った7曲の中にいくつかありまして、平成6年第71回チャイコフスキー1番「冬の日の幻想」、平成10年第75回ブルックナー3番「ワグナー」、平成12年第77回ブルックナー6番、など割とマニアックな選曲で興味深いです。なぜこの曲が選ばれたのかは各代寄稿に記載がありますのでご覧いただければと思います。



その他の管弦楽曲

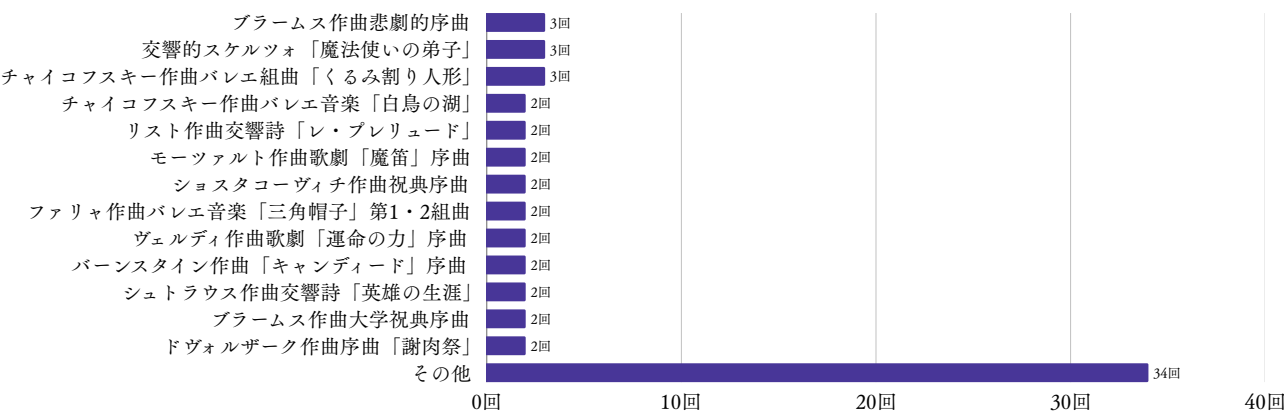
続いては交響曲以外の管弦楽曲を見ていきます。主に前プロ・中プロの曲になりますが、一部メイン曲も含まれています。100回も定期演奏会をしているので、さすがにこれは多岐に亘りすぎていて様々な曲が出てきました。

1位はベートーヴェン作曲エグモント序曲。こちらもやはりという感じがしますね。昭和4年第6回が初回で、昭和54年第56回が8回目でしたので、しばらく定期演奏会では取り上げられていないようです。そして2位タイが5曲。ビゼー作曲アルルの女組曲・メンデルスゾーン作曲Vn協奏曲・ベートーヴェン作曲Vn協奏曲・ロッシェニ作曲セビリアの理髪師・ブラームス作曲悲劇的序曲となります。かつては徳永二男氏のような著名なソリストを招聘して数多くの協奏曲が定期で演奏されていましたが、それもある協奏曲が2曲入りました。近年は管楽器の乗り番を考慮して協奏曲が選ばれにくくなっているため、今後はなかなか協奏曲が出てこないかもしれません。協奏曲を演奏したのは平成11年第76回のシベリウス作曲Vn協奏曲が最後となっています。アルル・セビリア・悲劇的はさすがの名曲ですのでこちらは過去から近年まで満遍なく選ばれていてランク入りとなりました。以降数々の名曲が出ていますが数が多すぎるため解説は2位タイまでとさせていただきます。



ではこの 30 年ではどうなったかですが、1 位タイはブラームス作曲悲劇的・デュカス作曲魔法使いの弟子・チャイコフスキー作曲くるみ割り人形でした。悲劇的は 100 年のランキングでも上位に入っていましたが、近年でも根強い人気となっています。魔法弟子は平成 11 年第 76 回が初回で、この 30 年で初めて出てきた曲となります。くるみ割り人形はクリスマスの曲なのでもっとあるかなと思いましたが意外と少なかったです。6 月演で取り上げられることもあるのでこんなものでしょうか。そして 4 位タイが 10 曲。この中で特筆したいのは R. シュトラウス作曲英雄の生涯です。平成 9 年第 74 回コンマスの寺田史人を擁して初回演奏、平成 28 年第 93 回こちらもコンマスの森田俊一を擁して 2 回目の演奏でした。どちらも学生コンマスがソリストを務めての演奏であり、よくぞあの難曲のソロをやり遂げたと思います。それ以降の 1 曲だけの曲では現金管トレーナーの大橋晃一作曲の Oh-o!Meiji ～明オケ金打のためのラブソディー～が令和 2 年第 97 回のコロナ禍のオンライン配信の定期で演奏されたり、スッペ作曲軽騎兵が学徒出陣直前の昭和 18 年第 24 回以来実に 79 年ぶりに令和 4 年第 99 回で演奏されたりと様々ありますが、ここまでにさせていただきます。

第 71 ～ 100 回定期演奏会 交響曲以外ランキング



まとめ

この 100 年の定期全と 30 年の定期で作曲家・交響曲・その他の管弦楽曲でデータを修正・分析してみました。ある程度予想はできていましたが、やはり過去に取り上げられていた曲と近年では傾向が変わっている様子が伺えました。今後もどちらかという大曲が選ばれる傾向は変わらないのかなと思いますが、学生の皆様には新たな挑戦を続けてもらいたいものです。どんな曲を選んだとしてもどの時代も根底にあるのは、学生が自身の学年でやりたい曲は何かを真剣に考え、真摯に練習に取り組み、わずか 1 度の本番に青春をぶつけてきた、ということだと思いますので、毎年歴史を繋いできた全ての明オケ OBOG・現役学生の皆様へ賛辞を贈りつつこの項を終わりといたします。



よもやま話「第 100 回記念定期演奏会を終えて」

2023 年 12 月 28 日。記念すべき第 100 回定期演奏会。この歴史ある節目の舞台に立てたことを、心から光栄に思います。定期演奏会本番前の明オケブログ (<https://meioke.com/category/blog/>) にも書いたように「とにかく楽しんで、最後まで演奏しきり、次の代にしっかりバトンタッチしたい」という想いを胸に私は舞台に立ちました。その想いは、無事に果たすことができたのではないかと感じています。当日は「やり切った!」という達成感でいっぱいでしたが、改めて演奏会の映像を見直しながら、この文章を書いている今、当時とは少し違った感情が心に浮かんできました。

それは、時間を忘れ、音楽に浸ることができた時間はどれだけ特別で尊いものだったか。そして、100 年前の音楽が、100 年後のコンサートホールで演奏され、会場に集った多くの人々と共有された瞬間の尊さ。この春から社会人として新たな生活を始めた今だからこそ、仲間とひとつの空間に集まり、音楽に没頭したあのひとときは、何ものにも代えがたい宝物だと改めて噛みしめています。

これからも、音楽は私の側にあり続けるでしょう。そして皆さんにとっても、音楽が豊かな時間でありますように。100 年続いてきた明治大学交響楽団がこれからも末長く愛され、更なる発展を遂げるようエールを送ります。

馬場園 みゆ (Perc 令和 7 年卒)

寄付

明治大学交響楽団へのご支援のお願い

日頃より明治大学交響楽団へ多くのご厚情を賜り、誠にありがとうございます。

2023 年で明治大学交響楽団は創立 100 周年を迎え、さらに次の 150 年・200 年に向けてオーケストラの歴史を継続できるよう真摯に様々な活動に取り組んでおります。しかし、この 100 年史でも座談会や各代寄稿から様子が伺えたのではないかとと思いますが、学生の費用負担は年々大きくなり、全ての費用を学生のみで負担することが厳しくなっている状況です。

週に数回ある全体合奏・セクション練習・パート練習については、明治大学の他サークルとの調整もあるため、全て大学内の音楽練習室を使えるわけではなく、一部は外部施設での練習となります。また、大型楽器や打楽器はトラックでの運搬も必要です。その他、楽団所有楽器のメンテナンスや新しい楽器の購入の費用も必要な場合があり、各代で会計担当が工夫しながら、なんとか活動を繋いでおります。

そこで明治大学交響楽団が今後も歴史を末永く繋ぎ、新たな挑戦を続けるために OBOG の皆様のご協力が大変大きな力となります。大変厚かましいお願いとは存じますが、明治大学交響楽団の活動にご支援賜りますようお願い申し上げます。

明治大学交響楽団
第 100 代幹事長 潮田駿

寄付金募集要項

当団への寄付金は、明治大学未来サポーター募金の中の「課外活動サポート資金」(<https://www.meiji.ac.jp/bokin/supporter/outline.html#title2-26-1>) にて受け付けております。募金申込ページ (<https://fundexapp.jp/meiji/exp/explanation.htm>) にて寄付する部に「交響楽団」を選択してご寄付いただけますようお願いします。

名称	目的
交響楽団	通常活動費用（団所有楽器のメンテナンス・新たな楽器の購入・外部練習会場費、楽器運搬費用）の調達

※ ご寄付は「お申し込み上のご注意」より、千円以上・千円単位でお願いしております。その他、申込方法や注意事項については[募金申込ページ](https://fundexapp.jp/meiji/exp/explanation.htm) (<https://fundexapp.jp/meiji/exp/explanation.htm>) をご参照ください。

※ 寄付金に対する税制上の優遇措置については[こちら](https://www.meiji.ac.jp/bokin/tax/exemption.html) (<https://www.meiji.ac.jp/bokin/tax/exemption.html>) をご参照ください。

※ 寄付者顕彰制度については[こちら](https://www.meiji.ac.jp/bokin/praise_donation.html) (https://www.meiji.ac.jp/bokin/praise_donation.html) をご参照ください。当団でも演奏会パンフレットにてご芳名を掲載させていただく予定です。



明治大学未来サポーター募金 募金申込ページ

【お問い合わせ先】
ご寄付に関してご相談等ありましたら、下記お問い合わせ先までご連絡ください。
明治大学 大学支援事務室（募金）
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1 大学会館 3 階
e-mail bokin@mics.meiji.ac.jp
TEL 03-3296-4057・4059

明治大学交響楽団 100 年史を読んで下さった皆様、内容いかがでしたでしょうか。

杉山先輩から「遠藤くん、やってもらえないか」、とお声がけ頂いたのが 2023 年の春ごろだったと思いますのであれからもう 2 年も経ってしまいました。これは完全に言い訳ですが、本来もっと早く 2024 年 12 月（第 101 回定期の前まで）に皆さんに公開の予定をしていました。ところが実際にはなかなか原稿が集まらない（これを書いている 2025 年 4 月 29 日時点でもまだ全部集まってない泣）。一部出来上がってみるともう少し追記したいとか修正したい、が山ほど出てきてしまいます。調べれば調べるほど新しい情報が出てきたり、思い出したりすることもあり、なかなか終わりが見えない時もありました。やはり歴史をまとめるというのは大変なことなんだと改めて認識した次第です。しかし今回編集委員会の委員長を拝命したおかげで、これまで交流のなかった先輩や後輩、現役生と本当にたくさんコミュニケーションが取れました。明治大学の底力や明オケの絆を再認識でき、これまで知らなかった数多くの明オケの歴史を記録に残せたことは大変意義のある活動だったと思っています。

今回は 70 年史が発刊されてから 100 周年までの 30 年にフォーカスを当てて取り組みました。これは個人的な意見なので今後編纂される方が良く考えていただければと思いますが、今後は四半世紀の 25 年ごとに編纂していくのが良いのではないかと思います。5 年や 10 年ごとでは編纂は楽になるけど期間が短くて時代の移ろいが見えにくい。15 年では切りが悪い。20 年は良いと思ったけれど 150 周年が飛ばされてしまう。ということで 25 年ごとに歴史を編纂するのが良さそうな気がしました。

そんなこんなでいろいろなことがありましたが、おかげ様をもちまして漸く発刊の目処が立ちました。たくさんの OBOG 諸氏、現役の皆様、明治大学職員の皆様には大変お世話になりました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。昭和 100 年の昭和の日に、明治大学交響楽団の永続的な発展を確信して。

編纂委員会 委員長 遠藤 智史（第 74 代幹事長）

このたび、明治大学交響楽団 100 年史を無事に編纂・発刊することができました。予想をはるかに超える大きな作業でしたが、こうして皆様にお届けできることを、心より嬉しく思っております。

本誌の編纂にあたっては、多くの OB・OG の皆様をはじめ、トレーナーの先生方、大学関係者の皆様など、実に多くの方々のご協力をいただきました。お忙しい中、貴重な資料や思い出、そしてあたたかいお言葉を寄せてくださったことに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、発刊までに予定よりも時間を要してしまったことにつきまして、深くお詫び申し上げます。一つひとつの出来事や思いを丁寧にすくい上げながら構成する中で、あらためて「明オケ」という存在が、OB・OG の皆様・現役生にとってかけがえのない青春の 1 ページを構成する要素であることを、改めて実感いたしました。

これから先、明治大学交響楽団が 150 年・200 年とその歩みを進めていく中で、この 100 年史が OB・OG の想いを伝える一助となれば幸いです。そして、これからの明オケを担う後輩たちの励みとなることを、心より願っております。

最後に、編集に携わった全ての方々に、深く感謝申し上げます。

編纂委員会 編集長 潮田 駿（第 100 代幹事長）



明治大学交響楽団

100年史

編纂委員会 委員長
遠藤 智史（74代・1999年卒）

編纂委員会 編集長
潮田 駿（100代・2025年卒）

編集協力
金澤 亜衣子（98代・2023年卒）
上田 彩乃（100代・2025年卒）
岡田 雄太（100代・2025年卒）
河合 智紀（100代・2025年卒）
水留 玲音（100代・2025年卒）
関原 颯太（101代・2026年卒）
原野 桂樹（101代・2026年卒）
遠藤 史織（103代・2028年卒）

情報協力
本間 次郎（40代・1965年卒）
杉山 茂（45代・1970年卒）
兵藤 透（52代・1977年卒）
宮沢 龍彦（62代・1987年卒）
長嶺 賢自（70代・1995年卒）
浅里 純也（71代・1996年卒）
本田 哲也（71代・1996年卒）
白木 信一郎（72代・1997年卒）
中台 一博（72代・1997年卒）
遠藤 洋一（74代・1999年卒）
鍛冶 晶子（74代・1999年卒）
菅野 安澄（74代・1999年卒）
新堂 浩一郎（75代・2000年卒）
熊谷 那実子（79代・2004年卒）
林田 真理子（79代・2004年卒）
藤井 信也（79代・2004年卒）
堀 創介（88代・2013年卒）
石畑 綜一（89代・2014年卒）
金札 瞳（93代・2018年卒）
榊原 徹（金管トレーナー）

その他多数のOB・OGより資料提供あり

表紙デザイン
松橋 月奈（100代・2025年卒）

発 刊：明治大学交響楽団100年史編集委員会
【お問い合わせ】meioke.100th.commemorative@gmail.com
*追記・訂正等のご希望がありましたら、
こちらのメールアドレスへお問い合わせください。

本書の内容を無断で複写・複製・転載することを禁じます。
©明治大学交響楽団創立100周年を祝う会

明
辛

治
蠹

大
滌

学
園

